言語情報学研究報告 3

コーパス言語学における構文分析

目　次

	学長挨拶	池端　雪浦	3
	言語運用を基盤とする言語情報学拠点	川口　裕司	5
	まえがき	敦賀　陽一郎	9
1.	**中国語**		
	使役動詞“使”がとる主語の認知論的解釈	三宅　登之	11
	現代北京語の動詞分類と“把”と“在”の共起関係について	須藤　秀樹	29
	“EVENT 1 +弄得+EVENT 2 ”における“弄”のプロファイル機能	山根　史子	45
	“被”と自然受身文に関する一考察	伊藤　大輔	65
2.	**マレーシア語**		
	マレーシア語の COD 構文	正保　勇	79
	マレーシア語の状態詞に関する諸問題	鵜沢　洋志	111
	Pivot Verbs in Malay: A Corpus-Based Study	野元　裕樹	131
3.	**英語**		
	不変化詞（前置詞・副詞）によるメタファー表現の考察 ―子供のコーパスに基づく認知言語学的視点からの考察―	石井　康毅	157
	初期近代英語における命令的仮定法 ―Shakespeareの場合―	浅井　千紗子	179
4.	**ロシア語**		
	「нельзя не＋動詞不定詞」という構文における動詞について ―既存コーパスからのデータに基づいた再解釈―	阿出川　修嘉	199
	ロシア語男性名詞複数主格・対格形のヴァリアントに関するコーパス研究 ―ウプサラコーパスをデータとして―	秋山　真一	219
	ロシア語の pora と共起する動詞不定形の体について ―コーパスを用いた数量的考察―	小川　暁道	237
5.	**フランス語**		
	フランス語における構文の種類とその頻度	小藤　紘稔	249
6.	**スペイン語**		
	より効率的な言語研究を目的としたスペイン語コーパス開発	結城　健太郎，木越　勉，須藤　武文	271
索引			287
資料	2003 年度言語学班コーパス言語学プロジェクト一覧		291
	講演会（2003～2004 年度）		292
	研究会（2002 年度第 1 回～2004 年度第 4 回）		292
	出版物		301

著者名をクリックすると各項目へ移動します。

目次ページに戻る。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

学長挨拶

池端　雪浦
（東京外国語大学学長）

2002 年度から開始された文部科学省の「21 世紀 COE プログラム」は，我が国の大学に，世界最高水準の研究教育拠点（Center of Excellence）を学問分野毎に形成し，研究水準のいっそうの向上と世界をリードする創造的な人材の育成をめざしています。本学は，「人文科学」と「学際・複合・新領域」の 2 つの学問分野にそれぞれ 1 件の申請を行い，人文科学では「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」，学際・複合・新領域では「史資料ハブ地域文化研究拠点」が採択されるというすばらしい結果をえました。本学大学院地域文化研究科の，個性ある研究教育のポテンシャリティが高く評価されたことを嬉しく思います。これら二つの拠点は，言語研究と地域文化研究における世界的な教育研究拠点を目指そうとする本学の将来構想の主要な推進力・両輪であると考えられています。拠点活動の開始から 1 年半を経過し，それぞれの拠点の活動は，すでに大きな成果と波及効果を生みだしつつあります。

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は，「TUFS 言語モジュール」と呼ばれるインターネットを活用した 17 言語の多言語ウェブ教材を開発していますが，これは情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を統合させた「言語情報学」という新しい学問領域からの研究であり，拠点形成の中心的な学術的成果です。この拠点を全学的見地から支援するために，学長直属の「21 世紀 COE プログラム運営室」を設置しています。この運営室は，学長，副学長，研究科長，拠点リーダーをはじめ，大学院を支える学部ならびにアジア・アフリカ言語文化研究所の長，さらに事務局長以下事務局幹部から構成され，部局横断でかつ事務局・教員が文字通り一体となった組織です。運営室は，拠点の支援のために学内諸組織間の連携体制を構築するとともに，総計 300 平米におよぶスペースの提供や在外調査研究旅費などの学内予算措置をはじめとする支援を行っています。

今後もさらに推進メンバーの方々が精力的にプロジェクトに取り組み，大きな研究成果をあげ，言語情報学拠点から次世代のわが国の言語研究と外国語教育を担う人材が多数輩出されることを願ってやみません。21 世紀 COE プログラムの成功のために，本学の叡智を結集し，大学全体として協力してゆく所存です。

2004 年 6 月 10 日

目次ページに戻る。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

言語運用を基盤とする言語情報学拠点

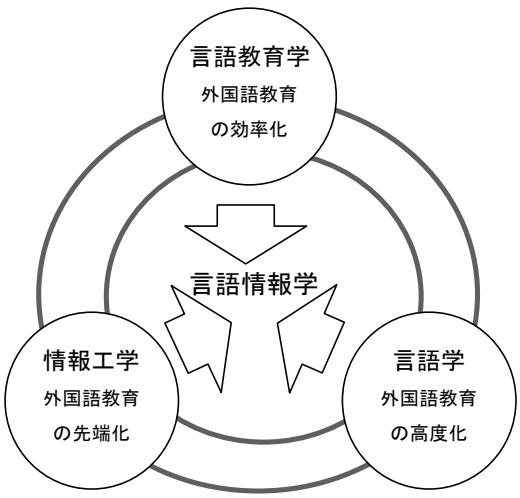
Center of Usage-Based Linguistic Informatics (UBLI)

川口　裕司
（COE 拠点リーダー）

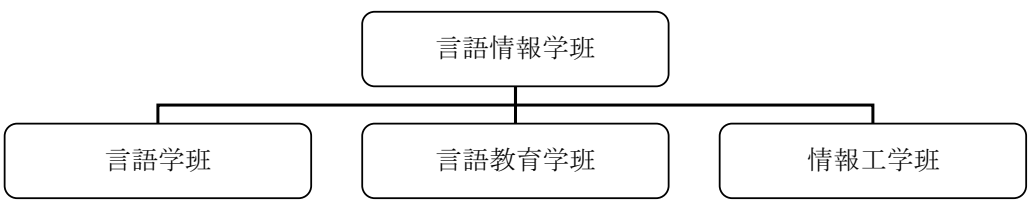
言語情報学

情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を有機的に統合し，「言語情報学」という新たな学問分野の世界的な研究拠点を創成することが，このプロジェクトの目的です。ボーダレスな多言語時代に入った現在，言語教育においても情報技術に裏づけされた多言語 e-learning システムを構築し，高度で効率的な教育を行なうことが望まれます。

この COE 計画では, 4 つの研究班が組織され，各班は緊密な連携をとりつつ研究が進められています。



研究組織



言語情報学班は言語情報学の研究全体を統括し, COE 計画において中心的な役割を担う研究班です。この班のもとに言語学班, 言語教育学班, 情報工学班の 3 つの班が形成され, 個々の専門分野における研究のほかに，言語情報学的研究を推進するための基礎研究を行なっています。

研究組織の全体を統括するのは，21 世紀 COE の事業進担当者のうちの 7 名からなる統

括班で，年次計画の遂行に関わる重要な意思決定は統括班会議でなされます。さらに各班の連携がより緊密になるように，連絡班も設置されています。連絡班の会議も頻繁に開かれ，プロジェクトの進捗がお互いに報告されます。

統括班：　在間　進，高垣　敏博，敦賀　陽一郎，芝野　耕司，峰岸　真琴，宇佐美　まゆみ，川口　裕司

連絡班：　浦田　和幸，黒澤　直俊，海野　多枝，吉冨　朝子，佐野　洋，林　俊成

冒頭にも述べたように，この COE 計画によって創成される新たな学問分野である言語情報学は，情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を統合した学問分野です。言語情報学の最も目にみえる成果は, 17 の言語を対象とするインターネット上の言語学習システム,「TUFS 言語モジュール」です。

TUFS 言語モジュール(TUFS Language Modules)

http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html

TUFS 言語モジュールは 2003 年 4 月 25 日に内部公開が始まり，字句の修正や誤植の訂正が行なわれました。まず最初に外部公開されたのは, IPA（International Phonetic Alphabet, 国際音声字母）モジュールです。続いて公開されたのが発音モジュールで，2003 年 9 月に一挙に，ドイツ語，フランス語，スペイン語，ポルトガル語，ロシア語，中国語，朝鮮語，モンゴル語，フィリピノ語，ベトナム語，日本語の 11 言語が公開されました。

そして 2003 年 12 月 12 日に，後で述べます国際会議の開催に合わせて，会話モジュールが 17 の全ての言語で公開されました。

目次ページに戻る。

TUFS 言語モジュールの17言語

英語 ドイツ語 フランス語 スペイン語 ポルトガル語 ロシア語	 アラビア語，トルコ語	中国語 朝鮮語 モンゴル語 インドネシア語 フィリピノ語 ラオス語 カンボジア語 ベトナム語 日本語

モジュールと通言語的発想

TUFS 言語モジュールは今までにない新しいタイプのウェブ教材です。その名のとおり，「モジュール的発想」に基づいて作られています。TUFS 言語モジュールでは，言語学習は発音，会話，文法，語彙の４つのモジュールに分解され，それぞれのモジュールはある程度まで互いに独立しながら，全体として一つのまとまりをもった言語学習教材を構成すると考えます。もちろん言語学習が一つの統合された一体性のある営みであることは言うまでもありません。しかしモジュール化によって，「どのモジュールからでも」自由に好きなところから言語学習を始めることができることは，少なくともデメリットではありません。それどころか改訂や修正が容易なことはモジュール教材のメリットと言えるでしょう。

ところで TUFS 言語モジュールにより，より自由な学習設計が可能になるわけですが，学習の達成度や到達度を知るには，やはり何らかの統一的な物差しが必要になります。この COE 計画では，さらに一歩進んで，TUFS 言語モジュールを用いた，東京外国語大学独自の言語能力記述モデルを追求し，将来的に一つの統一的モデルを提案する予定です。17 の言語にわたって，ある程度まで共通に言語能力を記述することが可能になれば，中等・高等教育における言語教育に一時代を画することになるでしょう。ヨーロッパやアメリカではこれまで多言語に共通の言語能力記述の研究が地道に行なわれてきているだけに，日本でも同様の取組みに，今，着手することは大変重要だと思います。

多言語による双方向モジュール

一つの同じ教材をいろいろな言語で学ぶことができたらどうでしょうか。それを実現し

ようというのが TUFS 言語モジュールの多言語版です。今のところ，英語とモンゴル語と中国語（繁体字）のわかる人が，日本語の発音モジュールと会話モジュールを学習できるようになっています。今後もさらにモジュールの多言語化を推し進めていきます。

インターネット上の素材は取りかえがとても簡単です。TUFS 言語モジュールも同じです。まず言語素材が作成され，次にそれがウェブ化されます。そして実際に教材が使用され，評価が戻ってくると，もとの言語素材に修正や改訂が加えられ，新たなモジュール教材として生まれかわります。

第 1 回言語情報学国際会議

21 世紀 COE が採択されるとすぐに，国際会議の準備が進められました。2002 年末に会議の輪郭を決定しました。こうして 2003 年 12 月 13･14 日の両日に，東京外国語大学で第１回言語情報学国際会議(The First International Conference On Linguistic Informatics)が開催されました。

従来から言語理論とコンピュータ科学が言語教育や言語習得に影響を与えてきたことは周知のことです。しかしながら，これら三つの研究領域の統合と協働は必ずしも行われてきていません。この COE 計画が目指すのはそれらの学問領域の有機的な統合です。

言語情報学の創成により，従来の言語学と応用言語学の成果は情報工学の基盤の上に統合されます。この国際会議では言語情報学という新しい統合的学問領域の現状を認識し，将来の可能性を考えます。会議は三つのセッションからなります。

１．コンピュータ言語学・・・・コンピュータ科学と言語学の協働の可能性
２．コーパス言語学・・・・・・コーパス言語学の現状
３．応用言語学・・・・・・・・第二言語習得と言語理論との関連性

会議には海外や国内の研究機関より多数の研究者をお招きし，2 日間で延べ 300 名の出席者があり，活発な議論が交わされました。本学からも教員と大学院生が複数の報告を行いました。言語情報学という統合的学問分野は，コンピュータ言語学，文献学，方言学，コーパス言語学，語用論，応用言語学，e-learning などの多岐にわたる研究分野と関連します。そのため会議の参加者がそれぞれの報告や議論の内容を理解できるように，事前に予稿集を出版して会議に臨みました。この会議報告集を通して，言語情報学の裾野の広さを認識するとともに，その現状と課題が明らかになることと思います。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

まえがき

敦賀　陽一郎
（東京外国語大学教授）

本報告集『コーパス言語学における構文分析』は東京外国語大学大学院 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の言語学班によるもので『言語情報学研究報告』の 3 冊目を構成する。6 言語，16 研究者のコーパス言語学研究をまとめたものである。内容は，構文，アスペクト，態，法，格，前置詞，語順，コーパス開発，と多岐にわたっているが，全て文構成の中心である動詞を中心とした述辞（predicate）に直結した研究であるといえる。以下に内容を概観をしてみよう。

先ず，中国語研究として四論文がある。三宅登之は使役動詞「使」の主語のプロトタイプが節であることを，頻度を一つの重要な根拠として認知言語学的観点から分析をしている。須藤秀樹は「V 在 L」（V：動詞，L：場所の名詞句）の形を取る動詞で，「在」の前置が出来ないものと，「在」の前置が可能でかつ「把」構文に変換可能なものとを区別し，前者を変化が前提となった結果相，後者を動作が前提となった結果相としている。山根史子は代動詞とされる「弄」を分析し，動詞の代行よりも原因の Event と結果の Event を繋ぐ機能語的な働きを重視している。伊藤大輔は前置詞「被」を伴う「被動文」と「自然受身文」とを比較し，前者の感情的色彩を話者の視点・立場という観点から説明している。

次に，マレーシア語についての三論文として，正保勇の「COD 構文」研究，鵜沢洋志の「状態詞」分析，野元裕樹の「pivot 動詞」分析がある。第一論文のテーマは生成文法で「難易構文」（tough construction）といわれるもので，コーパスの実例をも含めて多様な事例を分析している。第二論文は名詞と動詞の両者を修飾する「状態詞」を，動詞の前後での違い，「接置詞」の有無による違いなどにより分析したもので，品詞分類にも関係している。第三論文は主語が動詞の左右に現れうる「pivot 動詞」を「重さ」と「話題性」の両者を中心に据えて綿密に分析している。

英語の二論文としては，石井康毅の「不変化詞」分析を子供の言語習得の資料によって行ったものと，浅井千紗子の Shakespeare 戯曲を資料とする「命令的仮定法研究」がある。前者は物理空間を表す前置詞表現を広義の「メタファー」を鍵として分析している。後者は命令的仮定法の使用文脈を丹念に調査し，とりわけ勧告を表す動詞とともに多用されることを示している。

ロシア語分析の三論文は一つが格形，二つが体に関するものである。 阿出川修嘉は「нельзя не + 動詞不定詞」を分析し，思考・感情を表す動詞が出てきやすく，「到達，態

度表明」の動詞では完了体,「状態，思考表明」の動詞では不完了体であるとしている。秋山真一は「男性名詞複数主格・対格形のゆれ」の頻度数計算を工夫して傾向を分析しようとしている。小川暁道は名詞“pora”と共起する動詞不定形の体を分析し新聞・雑誌と文学作品での頻度の違いを指摘し（前者では完了体が 74.2%, 後者では不完了体が 73.3%），先行研究を修正している。

フランス語分析の小藤紘稔はフランス語の動詞構文型一般の頻度と動詞“toucher”の直接目的構文と間接目的構文（*à*-N）の頻度を調べ他動性分析のための基礎調査を進めている。

スペイン語の結城健太郎，木越勉，須藤武文は「スペイン語コーパス開発」によりスペイン語研究のためのコーパス処理ツールの開発を目指しており，データに形態素情報を加え，分析ミスの修正システムを設計し，例文検索の省力化を提示している。

以上，文構成の中核に関係した種々の言語構造が明らかになる。言語により利用しうるコーパスの規模も種類も異なっているし，問題の設定，分析の到達度にも様々なものがあるがそれぞれ豊かな可能性を秘めていることが通読により分かる。今後は共通テーマをより限定し，対象言語数を増やし，研究発表をより定期化出来れば理想的であろう。コーパスの多くの実例の調査により明らかになるのは言語の動的共時態だけではない。無限の多様性を提示するコーパスを整理しまとめ上げるために更なる理論面の整備の必要性が明らかになるというのは実例に接する者の実感である。実際の文脈の多様性は諸要素の予測しがたい線状的結合の可能性にヒントを与えてくれる。これは単純な人工的作例（つまり，母語話者の人工的文脈作成）によっては得られないものなのではなかろうか。

最後になるが，本報告集の査読は浦田和幸，黒澤直俊，三宅登之，正保勇，宗宮喜代子，中澤英彦，敦賀陽一郎があたり，編集は浦田，黒澤，敦賀が担当した。

2004 年 4 月 29 日，府中にて

目次ページに戻る。

１．中国語

目次ページに戻る。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

使役動詞“使”がとる主語の認知論的解釈

三宅　登之
（東京外国語大学外国語学部助教授）

1.はじめに

現代中国語において，使役構文を構成する使役動詞には代表的なものとして“叫”“让”“使”がある。これらは教育の場でも次のようにセットで提示されることが少なくない。

(1)[1]

名詞$_1$	让・叫・使	名詞$_2$	動詞句
①	让 / 叫	你	久等了。
②　他	叫 / 让	我	上街去买东西。
③　他的话	使	人	感到意外。

(2)[2]

使役の表現“让”ràng“叫”jiào“使”shǐ

我让服务员给您送去。

妈妈叫我去买东西。

这件事使我很高兴。

(3)[3]

使役表現……兼語文の一種。3の動詞$_1$の位置に“叫，让，使”のいずれかを用いる。「～に（を）……させる」

医生叫我爸爸戒烟。

对不起，让你久等了。

这个消息使大家非常高兴。

無論，これらのテキストが“叫”“让”“使”はまったく性質の同じ互換性のある動詞だと述べているのではない。これらの間には文法や文体の面で様々な相違点が存在するのだが，にもかかわらずこれらが教育の初級段階において，いわばセットで提示されている点

1 『改訂版　中国の雨』中川正之・徐一平，白帝社，1996年，87頁。
2 『ニーハオ，美知子！』相原茂・梁月軍・陳浩，郁文堂，1998年，83頁。
3 『中国語初級テキスト　北京の風[改定版]』木村英樹・小野秀樹・陳蓉，白帝社，2000年，116頁。

に着目したい。

さて，このような使役構文の提示のパターンは，次のように公式化することができる。

(4)　X＋{叫 / 让 / 使}＋Y＋V：「XがYをVさせる」

“X”は使役者（causer），“Y”は被使役者（causee），“V”は使役の結果を表す。統語的にはどの使役動詞を用いた使役構文もこのフレームで表せるので，そこにはかなりの共通点があるような印象を与えがちだが，この３つの使役構文の中で，“使”を用いた使役構文（以下，“使”使役構文と呼ぶ）は，まったく性質の異なったもので，教育の場において，上記のように“使”も一緒に提示するのは非常に問題が大きい。小稿では“使”使役構文のこの三者中での特異性を，その主語に立つ成分の分析を通じて示したい。

2.使役動詞間の相違

小稿は“使”使役構文の主語の性質を検討するものであるが，比較対照の見地から，まずセットで提示されることの多い“叫”を用いた使役構文について考えてみる。以下のようなものが典型的な“叫”を用いた使役構文である[4]。

(5)我叫他打扫屋子。
(6)妈妈叫我早点儿回家。
(7)司机叫我在这儿等他。
(8)医生叫我做深呼吸。
(9)老师叫我们写一篇作文。
(10)王兰叫我把这封信交给你。
(11)谁叫你干的?

このように，“叫”を用いた使役構文“X＋叫＋Y＋V”においては，その主語“X”は人を表す名詞句が主である。意味的には，“X”は，他者“Y”に対して，行為“V”を行うように強く働きかける，使役者（causer）である。これは一般の使役という事象に対する我々の理解とほぼ合致するのではないかと思われる。

これに対して，“使”使役構文の例を様々な工具書などから拾ってみると，その例文には明らかに異なった傾向が見られる。一般に“使”使役構文の典型と考えられる例文とは以下のようなものである。

(12)他的话使我吃了一惊。
(13)这件事使我感到意外。
(14)这个消息使大家非常高兴。
(15)母亲的到来使他高兴得跳了起来。

[4] 以下の例は中国で発行されている文法書や工具書などから引用した。

(16)这次到各地参观、访问，使我更进一步了解了中国。

“使”使役構文“Ｘ＋使＋Ｙ＋Ｖ”の“Ｘ”に，“叫”の場合のような，人を表す名詞句が来る例は，工具書などではごくわずかしか見つからない。“Ｘ”には人以外の事物や出来事が来る例が圧倒的に多いのである。

そこで，実際の言語事実においては，“使”使役構文はどのような形で用いられているのか，“Ｘ”に立つ成分はどのようなものが多いのかを，小稿では現代中国語のコーパスに基づいて調査し，以下にその結果を述べる。この調査の結果から，中国語の“使”使役構文とはどのような事態を述べようとする構文なのかという実際の姿が見えてくるはずである。

3.調査するコーパスについて

今回の調査では，特にコーパスの文体の差異に留意し，以下の３種のコーパスを調査対象として用いた。

[1]口語：『当代北京口语语料』北京语言学院语言教学研究所，1993 年

北京を６つの地区に分け，それぞれの地区から，職業・年齢・民族の異なる計 374 人の人を抽出し，６つの話題についてインタビューを行い，その自由回答の発言をそのまま忠実に記録したものである。言い間違いなどもそのまま記録した，自然発話のコーパスである。テキストファイルにして合計およそ 170 万字の分量である。

[2]小説：北方系作家の作品コーパス

文学作品のコーパスとして，インターネット上に公開されている北方系作家の作品を収集し，テキストファイル化後，コーパスとして利用した。合計およそ 180 万字である。

[3]新聞：『北京日报』『北京晚报』2000 年 CD-ROM

報道文体の題材として『北京日报』『北京晚报』の CD-ROM を利用し，うち『北京日报』の 2000 年 1 月分の全記事をテキストファイル化した。合計およそ 170 万字の分量である。

以上のように，分量（およそ 170 万～180 万字），時代（1980 年代～2000 年），地域（北京）の３点ともほぼ共通で，唯一文体のみが異なるコーパスにおける“使”使役構文の出現数を調査すると，

(17)

ジャンル	[1]口語	[2]小説	[3]新聞
“使”使役構文数	93	698	921

のように，“使”使役構文は主に書面語において用いられるという構文の文体的特徴が実証された。

さて，小稿ではさらに“使”使役構文“Ｘ＋使＋Ｙ＋Ｖ”の“Ｘ”に何が立つかを調査するに際して，上記[2]の北方系作家の作品コーパスを調査対象とした。

このコーパスは以下の作家とその作品群からなる[5]。

陈建功：『找乐』（找），『辘轳把儿胡同九号』（九）

邓友梅：『话说陶然亭』，『寻访“画儿韩”』，『那五』，『烟壶』，『我们的军长』

刘恒：『黑的血』（黑），『贫嘴张大民的幸福生活』，『狗日的粮食』，『白涡』（白）

刘绍棠：『蒲柳人家』（蒲），『二度梅』，『渔火』，『鱼菱风景』

王朔：『枉然不供』，『许爷』（许），『动物凶猛』（动），『浮出海面』（浮），『过把瘾就死』（过），『空中小姐』（空），『顽主』，『橡皮人』，『我是“狼”』，『给我顶住』（顶），『人莫予毒』（人），『懵然无知』，『你不是一个俗人』，『文学与人生』，『刘慧芳』，『痴人』，『无人喝采』，『谁比谁傻多少』，『修改后发表』，『一半是火焰一半是海水』（一），『玩的就是心跳』（玩），『我是你爸爸』（爸）

王小波：『2015』（二），『变形记』，『未来世界』（未），『歌仙』，『黄金时代』，『白银时代』，『战福』

これら６名の作家については，現代文学史の辞典やウェッブサイトで，その作品が北京語で執筆されているとみなして構わない作家であることを確認し，分析対象としての言語材料として選んだ。また，時代的にも現代の北京語コーパスを構築することを目指したため，老舎のような，無論北京語の使い手ではあるものの，時代的にやや遡る作家については，今回の調査の対象外とした。作品は“亦凡公益图书馆”（http://www.shuku.net/），“中国青少年新世纪读书网”（http://www.cnread.net/index.htm）の２つのウェッブサイトからダウンロード後，テキスト整形した。

4.例文の検討

さて実際の文学作品中の，“使”使役構文“Ｘ＋使＋Ｙ＋Ｖ”の“Ｘ”に位置する成分を検討してみる。

実際の検討に先立って，“使”使役構文の中からまず，次の２つのタイプのものを，小稿では検討対象から外すこととした。第一に，使役を表す動詞“使”ではあるが，様々な構造上の理由から，“Ｘ”がないものである。

(18)唯一使我开心的事是她亏了。（未）

例えばこのように“的”構造の内部に生起している場合には“Ｘ”が構造上そもそもないことがある。これらは今回の考察対象外である。第二に，“这”に代表されるような指示代詞が“Ｘ”に位置している場合である。

(19)在院门口，我碰见了许逊的妈妈，这使我很懊恼。（动）

5 （　）内は以下の例文での出典を示す略号である。

指示代詞は実際には統語的に先行する様々な他の成分の代替をしている。しかも中国語の“这”などは名詞性成分だけでなく動詞性成分も指示できるのは周知の事実である。“X”がどのような成分であるかを分析する今回の調査では，指示代詞ではその本来の成分を特定できないため，今回の考察対象外とした。

すると，コーパス内での“X”は次のような分布をなしているという結果が得られた。

(20)

“X”	構文出現数
[A]人を表す名詞句，人称代詞	５８
[B]人の特徴を表す名詞句	２７
[C]一般の名詞句	１７３
[D]動詞句，形容詞句	８７
[E]節（主語＋述語）	１９１

以下では(20)の分類に基づき，“X”に位置する成分について実例を検討してみる。

[A] “X”＝人を表す名詞句や人称代詞

上記のように使役動詞“叫”ではこのタイプが多いことが予測されるのであるが，“使”の場合は明らかに少ない。まず，次のような例を考えてみる。

(21)他想使自己更愤怒一些。（白）
(22)他竭力使自己相信这一点。（白）
(23)他尽量使自己的动作从容大方，（爸）

これらは表面的にはこの[A]類に該当するが，(21)では助動詞“想”，(22)(23)でも副詞“竭力”“尽量”のような語句が含まれている。これらの語句はその意味からして，使役の因果連鎖自体を推し進めようとする，結果段階を話し手が実現させる方向に働きかけているということを明示する語句である。換言すれば，これらの語句があるからこそ逆に“使”使役構文を成立させることが可能となっているとも考えられるので，典型的な[A]類とは考えないほうがよいと思われる。(但し(20)ではこれらもカウントしてある。)

(24)你已经使她非常困惑了。（爸）
(25)说实话，你使我非常不愉快。（人）
(26)你使我想起一个人。（玩）

これらの例が上記のような因果連鎖を推し進める働きを持つ語句を持たない，いわば無標の文と言えそうである。しかし実際にはこのような例はその数が少ない。

[B]人の特徴を表す名詞句

次は，人そのものではなく，人の表情・言動・態度など，その人の特徴を表す名詞句が“X”に位置している場合である。

(27)老人感激的面容使他欣慰。（白）
(28)那个警官的问话使我知道亚红没有暴露我们。（一）
(29)李慧泉的样子多少使老两口镇静了一些。（黑）

この[B]類，さらには上記の[A]類のうち無標の例は，その表す意味から考えると，“X”は“Y”に対して主体的に働きかけの行為を行っている動作主（agent）でないことは明らかである。[B]類のほうがより理解しやすいが，人の表情・言動・態度などが自ら“Y”に働きかけているのではない。事実としては逆に，“Y”がそのような人の表情・言動・態度などを見たり聞いたりして，“Y”に変化が起きているのである。無標の[A]類も同様で，たまたま(24)～(26)の“X”は“你”であるが，“Y”の「彼女」や「私」は，“你”の振る舞いを見るなりして知覚し，その結果“Y”に心理変化が起きているのである。すなわち，“Y”のほうから“X”を知覚し，その結果“Y”に心理活動が起こっており，これはTaylor2002：422が“Agent-like Stimulus”と呼ぶものに該当する。

(30)The noise startled me.

の“the noise”がそうである。また，Gu2002 の以下の指摘のように，このような文では動作主の動作に対する強い意志を表す連用修飾語を生起させることができないことも，“X”が動作主でないことの傍証となる。

(31)a. 小明使他放弃了原来的计划。
b. *小明坚决地使他放弃了原来的计划。

いずれにせよ，これらの類においては，“Y”が“X”を見るなり聞くなりして知覚するという広い意味での出来事が起こっているという点を確認しておきたい。

[C]一般の名詞句

次に“X”に（人以外の）一般の名詞句が置かれている例を見てみる。

(32)甭管为了什么吧，得承认那封信使他动了心，所以他没舍得烧掉它，把它锁在了抽斗里。（找）
(33)那些字使他心烦意乱。（白）
(34)看得出来，这游戏使他们很开心，很兴奋。（动）

(35)是的，完全正确，今天这顿酒使我想起了顶多已经忘却的往事。(爸)
(36)正午时分，警察在门边的小房间里煮切面，面汤的气味使人倍感亲切。(二)
(37)初夏里，F来找我舅舅时，穿着白底黑点的衬衣，黑色的背带裙子，用一条黑绸带打了一个领结，还拎了一个黑皮的小包，这些黑色使我舅舅能认出她来。(未)
(38)这种预感使他浑身发热，脉搏明显加快了。(白)
(39)我这一突然动作使他一惊，眨巴着眼看着我:(过)
(40)飞行生活除了有优厚的报酬外，还使她有一种自豪感；使她觉得对人人有用；使她觉得自己是国家在精神面貌和风范方面的一个代表。(空)
(41)妇女们为此还吵了起来，争论的结果使故事形成了有多少名妇女便有几个结尾的开放性结构。(许)
(42)这种遭遇使我考哲学执照的决心更加坚定了。(未)

これらの名詞句にはすべて何らかの出来事が起こったということが含意されている。(32)では“X”は手紙であるが，手紙を読んだからこそ彼は心を動かされたのであって，そこには「彼が手紙を読んだ」という出来事が存在している。(33)，(37)の「字」「黒色」は実際には“Y”がそれらを「見た」わけであるし，(35)では酒を「飲んだ」から昔の事を思い出したのである。(39)の「動作」，(40)の「生活」，(41)の「論争の結果」などは，その名詞句自体が何らかの行為を表すものである。ここにおいても，“X”は形式上は名詞句でも，何らかの広い意味での出来事が前提となっていることを確認しておきたい。
[D]動詞句，形容詞句
この類の“X”は形式からも述詞性成分だから，何らかの動作行為などが発生したことを表している。

(43)她的美丽仍旧使人动心，但已经失去了旺盛的魅力。(白)
(44)这家主人的勤谨和清洁使我很有好感。(动)
(45)她的力气可真大，她那一推使我一屁股坐回到床上。(动)
(46)我注意到米兰和高晋的歌唱不断相互注视，但我没有一点嫉妒和不快，同声歌唱使我们每个人眼中都充满深情。(动)
(47)爸爸的出差使我获得了短暂的自由和解放。(动)
(48)这些警察的不知疲倦使女人单身在这个城市的夜晚徘徊有了一种安全感。(爸)
(49)我不再回避她的视线，还和她说些家常琐事，接着，我想我对她笑一下，这一笑使她的脸孔立刻扭曲了、歪斜了，似笑非笑，似哭非哭。(顶)
(50)另外，我也希望不再见到你们，看到你们并不使我愉快，特别是想到你们是在盯我的梢儿。(人)
(51)和他二哥的见面更使我发窘，他二哥上中学时便是个体魄健壮的小伙子，非常喜欢摔足和投掷铅球，曾蝉联数届我们那个区中学生运动会铅球投掷冠军。(许)

動詞句が何らかの出来事を表しているのは自明である。例えば(45)では彼女が私を押したのであり，(47)では父親が出張したのである。形容詞句が表す意味を出来事と捉えるのは若干問題があるかもしれないが，小稿では例えば(43)では彼女が美しい状態であること，すなわち英語の be 動詞的な捉え方としての出来事と考える。

[E]節（主語＋述語）

最後に，主語と述語を伴った節が“X”に位置しているものである。

(52)两位老太太突然来访，使张春元好不奇怪。（九）
(53)他陪一些同事到自由市场，领头讨价还价，使大家买到一些便宜的海货。（白）
(54)他还戴了一个毛线织的护耳，那玩意儿勒在下巴上，使他整个人显得可怜巴巴的。（白）
(55)他不记得在哪儿见过她们，所有这些面孔叠在一起，使他分辨不清。（黑）
(56)他们追求她，而她既不拒绝也不给他们答案，使他们永远处在恐惧和倦怠之中。（黑）
(57)这个女人好抽烟，一口牙齿熏得乌黑，使她的花容月貌大为减色。（蒲）
(58) 街上正进行“学雷锋服务日”的活动，宣传车的大喇叭和少先队鼓号队造成的喧嚣隐隐地传进胡同里，使马林生的耳朵有一个街上很热闹的印象。（爸）
(59)儿子顺风打过来的球总是飞越他站立的位置，使他不得不后退仰身接球，他们已经从一开始站的家门口的位置快打出胡同了。（爸）
(60)酒色上了她的脸，使她看上去很有几分柔媚。（爸）
(61)我有一罐咖啡豆和一罐速溶咖啡，我常搞错，使咖啡味道一塌胡涂。（浮）
(62)“你老说这种话，”我伤心地说，“使我痛苦。”（浮）
(63)斜斜春雨浸润了泥土，洗净了楼房公园的灰尘，使城市焕然一新。（浮）
(64)家里一切依旧，那种熟悉的凌乱和随意就像我今早才离去，所有衣物用品都在老地方，使我感到一种松驰和舒适。（顶）
(65)在飞机上我得了晕动病，吐个没完，她们给我盖上毛毯，清理秽物，始终那么殷勤，都使我不好意思起来。（空）
(66)对其余四对夫妇的检查盘问也无收获，502房间一个粗鲁的汉子还用极为不堪的语言羞辱了分局长一顿，使分局长从那个房间出来后心情十分恶劣。（人）
(67)小姚阿姨见了我就用手指刮脸，使我很是难堪。（未）
(68)有关这头长发，需要补充说，前面虽然秃了，后面还很茂盛，使我舅舅像个前清的遗老，看上去别有风韵；等到剃光了，他变得朴实无华。（二）

“使”使役構文におけるこれらの“X”の分布から，この構文についての何がわかるであろうか。

5.節としての“X”のプロトタイプ性

結論から述べれば，小稿では，上記[E]類の「節」が，中国語の“使”使役構文の主語

のプロトタイプであると考える。その根拠を量の面と質の面の両面から述べる。

第一に，“使”使役構文の“X”の中では節が来るものが数量的に多いということである。これは今回のコーパスの調査結果から明らかである。(20)の表を見ればわかるように，“X”が節からなる例は 191 例あり，コーパス中の“使”使役構文の総数 536 例の約 36 パーセントを占める。“叫”との対比から多いのではないかと思われがちな人称代詞等の人を表す名詞句は，機械的にカウントしても 58 例で，しかもその内には，因果関係を補助する語句が文中に含まれていて対象外と考えられる例も少なくなく，残る無標の例はこれより更に少なくなることは，前述したとおりである。

第二に，このように節が“X”に立つタイプは，そもそも本来的に“使”使役構文の本質的な面を具現化しているという点において，構造自体が構文のプロトタイプ性を併せ持っていると言える点である。

節が“使”使役構文の“X”の位置に置かれるとは，例えば(52)の例を用いて示せば，

(69) 两位老太太突然来访， 使 张春元 好不奇怪。
X “使” Y V

のように，統語的に“使”の前の位置に，主語“两位老太太”と述語“突然来访”を備えた節形式が来るということである。ここで節中の主語を“S”，述語を“V_1”，“使”の後の“V”をそれと区別するため“V_2”とすると，このタイプは，

(70) 两位老太太 突然来访， 使 张春元 好不奇怪。
S V_1 “使” Y V_2

であるから，

(71) S＋V_1＋“使”＋Y＋V_2

と表示できる。この“S＋V_1”が節（clause）であるのと同様に，“Y＋V_2”も節を構成するので，(71)は，

(72) ［$clause_1$］＋“使”＋［$clause_2$］

となる。意味的には，節は一般に出来事（event）を表す。“$clause_1$”は「“S”が“V_1”した（なった）」という，“$clause_2$”は「“Y”が“V_2”した（なった）」ということである。よって(72)はとりもなおさず，

(73) ［$event_1$］CAUSE［$event_2$］

という事象構造を具現化したものに他ならない。この関係は次のように示すことができる。

(74)統語レベル：　S＋V_1＋“使”＋Y＋V_2　　（統語構造への写像）
⇅　　↑
［$clause_1$］＋“使”＋［$clause_2$］
⇅　　↓
意味レベル：　［$event_1$］CAUSE［$event_2$］　　（事象構造）

使役（causatives）とはそもそも，２つの出来事の因果連鎖（causal chain）を表す[6]。すなわち，原因となる出来事（causing event）が起こり，結果となる出来事（caused event）を引き起こすという事態である。このような使役的事態は，(73)のような事象構造で表示することができるが，この事象構造を，極めて忠実に統語構造に写像したものが(71)であり，これがすなわち“使”使役構文の本来的な姿であると考える。また，このプロセスは現実の世界で事態が発生する順にそのまま統合構造上で並べている点で，言語の持つ類像性（iconicity）という一面にも合致していると言える。簡潔に言えば，使役動詞“使”は，「“S”が“V_1”した（なった）」，その結果「“Y”が“V_2”した（なった）」という２つの出来事を因果連鎖上結びつける，いわば接続詞的な役割を果たしているのである。

“使”使役構文の主語の先頭部分に“因为”“由于”のような接続詞が生起し，誤用，あるいは非常に特殊な形式ととらえられ議論されてきた形も[7]，“使”使役構文が原因と結果を表す二つの節を結ぶ構文であり，“使”は接続詞的な働きをしていると考えれば，ごく自然な解釈を与えることができる。二つの節の間の因果関係を，後節先頭に接続詞“使”が置かれ表しているだけでなく，さらに前節の先頭にも“因为”“由于”のような接続詞が置かれ，因果関係を一層明示しているものと考えれば，これらは何ら特殊な現象ではない。

(75) 由于眼镜遮住了他的双眼，使他脸上最后的那点聪明神态消逝殆尽。(爸)
(76) 只因那天的牧师不许我领圣餐，使我觉得他很可恶。(浮)

6.構文カテゴリの拡張

さて，前記(20)のように小稿では“X”を５つに分類したが，ここで従来の一般的な考えかたから発想を逆転させてみよう。この構文は，“X”が[E]節の場合がプロトタイプで，[D]→[C]→[B]といくにつれその典型性は減少し，[A]の人を表す名詞句の場合は実は“使”

[6] 柴谷1982，賀2002，Singh1992等を参照。
[7]高1982，邢1979等を参照。

使役構文の中では最も周辺的なものであるとするプロトタイプ・カテゴリを形成すると考える。

(77)

プロトタイプ	[E]節＋“使”＋～	微微的凉风吹在身上，使我感到非常舒服。
		⇓
	[D]動詞句＋“使”＋～	接到他的来信，使我得到了安慰。
		⇓
	[C]名詞句＋“使”＋～	这个电影使我想起了童年时代的生活。
		⇓
	[B]名詞句(人の特徴)＋“使”～	他的话使我吃了一惊。
周辺		⇓
メンバー	[A]名詞句(人)＋“使”～	他使我感到失望。

[E]の，節が“X”に位置する例が，事象構造をそのまま忠実に統語構造に写像した，中国語の“使”使役構文という構文のカテゴリのプロトタイプである。これまでの説明で述べたように，意味的には残る[D]から[A]もその“X”は出来事を表すのであるが，[E]→[D]→[C]→[B]→[A]と進むに従って，その出来事すべてを統語構造に写像するのではなく，その中で認知的際立ち（prominence）のある成分のみが取り出され，他の成分は背景化されてそぎ落とされていく。例えば上記[C]の例“这个电影使我想起了童年时代的生活。”では，映画を見た結果，自分の子供時代の生活を思い出したのである。原因には「私が映画を見た」という出来事が隠れているのだが，中でも原因として最も直接的，決定的に関与する「映画」が前景化され，それが「私が映画を見た」という出来事全体を代表している。[A]の例“他使我感到失望。”では，彼が何かひどいことやみっともないことをして，その結果それを見た私が彼に失望した，というような事態が一例として想定できる。原因はあくまでも「彼がひどいことをした」という出来事そのものなのであるが，その中でも最も直接的，決定的に関与する「彼」が取り出され，それが裏にある出来事全体を代表しているのである。すなわち，話者の認知の焦点が当たった成分のみが言語形式化され，それが実際には出来事全体を指示している。これはメトニミー（換喩/metonymy）に動機付けられた構文の拡張であると考えられる。

7.理論的基盤について

さて，主語の[E]→[D]→[C]→[B]→[A]と進む拡張に，小稿では認知言語学的見地から解釈を加えるが，ここではまずここでの議論の前提となる理論的基盤について解説する。

メトニミーとは，「通常Xを指示する表現がXと密接に関係するYを指示するのに用い

られる」[8]現象で，これが単なる修辞的な現象ではなく，日常言語に偏在する人間の基本的な認知能力の現れである点は，様々な認知言語学の先行研究が指摘している通りである。ＸとＹの間の隣接性には主に以下のようなものがある[9]。

〈入れ物で中身を示す〉
(78)ナベが煮える。(←ナベの中身が)
(79)彼女は洋服ダンスを整理した。(←洋服ダンスの中の衣類を)
(80)黒板を消す。(←黒板に書かれた字を)
〈全体で部分を示す〉
(81)電球が切れる。(←電球のフィラメントが)
(82)メガネが曇った。(←メガネのレンズが)
(83)私はろうそくを吹き消した。(←ろうそくの炎を)
(84)自転車がパンクする。(←自転車のタイヤが)
〈製作者で産物を表す〉[10]
(85)最近また村上春樹を読み始めた。(←村上春樹の本を)
(86)私はＩＢＭを買った。(←ＩＢＭのパソコンを)
〈原因で結果を示す〉
(87)筆を取る。(←書き始める)
〈結果で原因を示す〉
(88)ユニフォームを脱ぐ。(←選手生活をやめる)
〈近隣物で主体を表す〉
(89)指揮者はそのクラリネットを笑った。(←クラリネット奏者を)
(90)カツ丼が食い逃げした。(←カツ丼を食べた客が)

これらにはまだ比較的文脈依存度の高い，語用論的要素の多い表現も少なくない。しかし中には，日常表現に浸透してもはや指摘されない限りメトニミー的表現だとは気づかないものもある。また実際にはＸとＹの近隣性には様々なものがあり，上記の分類にすべてが入るわけではない。実際，以下の例からわかるように，同一の事態を表すのに，同一の動詞が異なる目的語を選択する現象は幅広く見られるが，これにおいても，出来事の中のどの面に認知の焦点が当てられているかの違いに基づいて異なった目的語が選ばれているのであって，広い意味ではメトニミーの言語への反映であると解釈できる。これらでは同一の出来事のフレーム内の異なる局面を前景化しているのである[11]。

---

8 西村2002:286を参照。
9 瀬戸1997を参照。
10 「漱石はおもしろかったよ」と言えても，メアリーの作ったケーキを指して（TAYLOR1989:123）「？メアリーはおいしかったよ」と言えないのは，漱石が小説家で作品と容易に結びつくという百科事典的知識の支えがあることにほかならない。
11 例(93)～(95)は李1986:17より。

(91) a. I locked the door.
b. I locked the room.
(92) a. 水を沸かす。
b. 湯を沸かす。
c. 風呂を沸かす。
(93) a. 他在那儿膏车轴呢。
b. 他在那儿膏车呢。
(94) a. 他没扣扣子就出去了。
b. 他没扣衣服就出去了。
(95) a. 你给他削了苹果皮吧。
b. 你给他削个苹果吧。

以上のようなメトニミーの，その特に文法に関連する現象について，LANGACKER1984が提唱したのが「活性化領域」（active zone）という考え方である。

認知文法では，語句が直接指示するものを「プロファイル」（profile），また，あるもののうち，所与の関係に最も直接的，決定的に関与する部分のことを「活性化領域」（active zone）と呼ぶ。例えば次の例で考えてみる。

(96) a. I picked up the phone.
b. The phone rang.

“phone”はこのいずれにおいても「電話機」で，これがここでのプロファイルになる。ところが(96a)と(96b)では，電話機のどの部分が述語動詞が表すプロセスに関与するかという点において異なる。(96a)では「取り上げる」プロセスに最も直接的，決定的に関与するのは「受話器」で，(96b)では「鳴る」プロセスに最も直接的，決定的に関与するのは「ベル」である。「受話器」と「ベル」がそれぞれの文の活性化領域である。メトニミー現象は，このような活性化領域とプロファイルの乖離（active-zone/profile discrepancy）であると分析できる。（LANGACKER1984（LANGACKER1991：190−193））また例えば，

(97) She heard the piano.
(98) I finally blinked.

で，(97)ではプロファイルは「ピアノ」だが，実際に聞いたのは「ピアノの音」でこれが活性化領域，(98)ではプロファイルは「私」だが，まばたきしたのは「まぶた」であり，

これが活性化領域となるわけである[12]。

さて，以上の観点も取り入れてメトニミー現象を再解釈してみると，例えば

(78) ナベが煮える。

のような例では，認知的際立ちの高いもの（ナベ）がプロファイルとして言語化されるが，それが実際にはプロセス（煮える）に決定的に関与する活性化領域（ナベの中の料理）を指示している，このような現象をメトニミーと考えることができる。

8.メトニミーとしての主語“X”

さて，中国語の“使”使役構文の主語“X”は，どのように解釈することが可能だろうか。

プロファイルと活性化領域は，いずれも名詞性成分（モノ）でなければならないということはないはずである。ここでは，プロファイル＝名詞性成分，活性化領域＝出来事という関係を想定してみよう。換言すれば，言語形式としては名詞句だが，それは実際には動詞句的内容，出来事を指しているという現象である。

LANGACKER1984や篠原1992の挙げる例からこのような現象に該当するものを以下に挙げてみる。

(99) a. He began <u>dinner</u>.
　　b. He began eating dinner.
(100) a. The orchestra started <u>the next song</u>.
　　b. The orchestra started playing the next song.
(101) a. The author finished <u>a new book</u>.
　　b. The author finished writing a new book.
(102) a. Dad went back to <u>his paper</u>.
　　b. Dad went back to reading his paper.
(103) a. She tried <u>the little gold key</u> in the lock.
　　b. She tried to put the little gold key in the lock.
(104) a. <u>That book</u> is easy.
　　b. To read that book is easy.
(105) a. <u>Such a contract</u> is dangerous.
　　b. To make such a contract is dangerous.
(106) a. <u>Monopoly</u> is fun.

12 この活性化領域の現象を含め，その他の様々な現象を，より一般的な認知能力からラネカーが分析しているのが「参照点構造」（reference point construction）である。詳細はLANGACKER1993を参照。

b. To play Monopoly is fun.

これらの例でa. が表している事態は，実際にはb. で述べられていることである。よってa. の文の下線部の名詞句は，実際には動詞句で表されるようなプロセスを（メトニミー的に）指示していると言える。

実際，ラネカーは，LANGACKER1993において，「繰り上げ構文」を，出来事の参与者で出来事を表すメトニミーと見る分析を提案している。関連部分を次に引用する。

(107) In a sentence like (24)a, for instance, the “raised” nominal (Jones) stands metonymically for the clausal event (Jones sue us) that participates directly in the main-clause relationship (be unlikely).

(24)a.Jones would be unlikely to sue us. (LANGACKER2000：200)

また，日本語でも，

(108) 広島は楽しかったですね。

と言った場合，この文は語用論的な文脈依存度が高くなるが，「広島」とは固有名詞としての指示対象ではなく，例えば広島に旅行に行ったという出来事を指すのである。

さて，中国語の“使”使役構文の主語“X”もこのような理論的見地からの解釈が可能である。(77)の，“X”が名詞性成分である[C]類，[B]類，[A]類について確認してみよう。

[C]類：名詞句＋“使”＋～　の例
(109) 这出戏使观众非常感动。
(110) 严格的军训使同学们大大增强了纪律性。
(111) 一场大病使小王身体非常虚弱。
[B]類：名詞句(人の特徴)＋“使”～　の例
(112) 他的话使我感到很亲切。
(113) 她那认真的，善意的表情使我很感动。
(114) 村长的态度使村民们失望。
[A]類：名詞句(人)＋“使”～　の例
(115) 他使我感到失望。

[C]類は一般の名詞句の例である。(109)では“这出戏”で「芝居を見た」という出来事を，(110)では“严格的军训”で「厳しい軍事訓練を受けた」という出来事を，(111)では“一场大病”で「大病を患った」という出来事を，メトニミー的に指示している。[B]類では

認知的際立ちが人間に関連する事柄に移行している。(112)では“他的话”が「彼の話を聞いた」という出来事を，(113)では“她那认真的，善意的表情”で「彼女の表情を見た」という出来事を，(114)では“村长的态度”で「村長の態度を見た」(またはそのような態度を受けた）という出来事を，同様にメトニミー的に指示している。[A]類の，人称代名詞に代表されるような人を表す名詞句が“X”に来る例は前述のように少ない。(115)の“他”がこの文において具体的にどのような活性化領域を指すかは文脈によるので一義的には決定できないが，例えば「彼が何かひどい，あるいは無様なことをして，私がそれを見た，あるいはそのひどい仕打ちを受けた」というような出来事が想定できよう。

このような意味において，(77)の[E]類→[A]類の連続体は，構文自体は一貫した事象構造を表しており，事象構造を全体的に最も忠実に統語構造に写像した[E]類から始まって，[A]類にいけばいくほど，いわば認知的際立ちの高い部分だけが残されその他の部分は言語形式からそぎ落とされていき，最後には複雑な出来事に最も決定的に関与している「人」だけをプロファイルして主語として残し，それが活性化領域である出来事全体をメトニミー的に指示している形式になっているのである。

このような，使役構文の主語がたとえ単純な名詞句の場合も，それは動作主ではなく，ある種の出来事を表すという考えそのものは，中国での先行研究においても言及されている。例えば李1986:142は以下のように述べる。

(116)你使我很为难
这里的“你”是指人名施。可是如果我们仔细体会一下，便会觉得这里一定是“你”作了某件事情，因而“使我很为难”(比较：你这样作使我很为难)。从这里可以看出动词“使”造句的特点，它一般要求前边是表事件的词语。

“使”使役構文の主語が名詞句の場合に対する非常に鋭い指摘である。小稿は，このような先駆的な発想に対し，実際のコーパスから計量的な裏づけを，また認知言語学の理論から合理的かつ統一的な解釈を施したものである。

9.今後の課題

さて，二つの出来事の因果連鎖としての使役構文を構造化する際，前後の出来事をそのまま接続するのが“使”使役構文のプロトタイプで，そこから一部の文では前半の出来事が言語化される際いわば余分な部分がそぎ落とされて，その出来事に決定的に関与する参与者のみが言語形式化されることを述べた。

それでは前半の出来事の中でどのような参与者が使役構文の主語として言語形式化されうるのだろうか。いかなる参与者でも，同等に話者の活性化領域となる可能性があるのだろうか。GIVÓN1975:64に次のような関連の現象が示されている。

(117) a.The garden was so beautiful, that as a result Mary swooned.
b.?The garden caused Mary to swoon.
(118) a.Tom was so handsome, that as a result Mary swooned.
b.Tom caused Mary to swoon.

これは英語の例であるが，使役構文において，事態の参与者として，すべてのものが同様に活性化領域とはならないことがわかる。事態の参与者の中では人間が前景化されやすい傾向はあると思われるし，これは中国語の“使”使役構文の主語において[E]から[A]に行くに従って人間が選ばれる傾向があることと一致しているが，中国語の“使”使役構文においてどのような成分が前景化される可能性があるか，今後の検討課題としたい。

参考文献

范晓2000「论“致使”结构」,『语法研究和探索(十)』，135-151，商务印书馆.
高更生1982「“使”的三种用法」,『汉语语法问题试说』，297-307，山东教育出版社.
贺晓玲2002「两种表致使义句式的异同考察：“使”字句和“把”字句」, IACL-11 Conference.
李临定1986『现代汉语句型』，商务印书馆.
邢福义1979「论意会主语“使”字句」，邢福义1986『语法问题探讨集』，84-112，湖北教育出版社.
杨风清1982「谈谈使动句」,『语言文字学』第6期，57-62.
井上和子1989「使役は二つのEVENT間の関数か？」,『言語文化研究』第15号，66-78.
岩田憲幸1983「“使”，“令”と使役構文」,『中国語学』230号，44-51.
木村英樹2000「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」,『中国語学』247号，19-39.
輿水優1996「使」,『続中国語基本語ノート』，大修館書店.
西村義樹2002「換喩と文法現象」，西村義樹編『認知言語学Ⅰ：事象構造』，285-311，東京大学出版会.
瀬戸賢一1997『認識のレトリック』，海鳴社.
柴谷方良1982「ヴォイス：日本語・英語」,『講座日本語学10　外国語との対照Ⅰ』，明治書院.
篠原俊吾1992「行為と行為の対象の換喩的関係についての一考察」,『実践英文学』No. 41，97-112.
楊凱栄1989『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』，くろしお出版.
CROFT, W.1991: *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information.* University of Chicago Press, Chicago.
GIVÓN, T.1975: “Cause and Control: On the Semantics of Interpersonal Manipulation”, in: J.P.KIMBALL (ed.), *Syntax and Semantics.* Volume4, 59-89. Academic Press.
GU, Y. 2002: “On the event structure of the causative predicate shi in Mandarin Chinese”, The 11th

Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics.

Kemmer, S. and A. Verhagen 1994: “The grammar of causatives and the conceptual structure of events”, *Cognitive Linguistics.*Volume5-2: 115-156.

LANGACKER, R.W.1984: “Active Zones”, in LANGACKER, R.W.1991: *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar.* 189-201. Mouton de Gruyter.

LANGACKER, R.W.1993: “Reference-point constructions”, in LANGACKER, R.W.2000: *Grammar and Conceptualization*. 171-202. Mouton de Gruyter.

SINGH, M.1992: “An Event-Based Analysis of Causatives”, *CLS.*28:515-529

TAYLOR, J.R.1989: *Linguistic Categorization*, Clarendon.

TAYLOR, J.R.2002: *Cognitive Grammar*, Oxford University Press.

VENDLER, Z.1984: “Agency and Causation”, *Midwest Studies in Philosophy*.IX:371-384

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

現代北京語の動詞分類と“把”と“在”の共起関係について

須藤　秀樹
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

1. この研究の目的

1-1. 研究の内容

電子コーパスから得られた 8505 個の“在”を含む文のうち，“标语贴在墙上”[1]「スローガンが壁に貼られている」（王还 1957 の例文）のような動詞（V）の直後に“在”が置かれ，さらにその直後に場所を表す名詞句（L）が置かれるような“V 在 L”という形をとる 588 個の文に現れる 105 個の異なる動詞を対象として研究を進めた。

“在”という語が現れうる 4 つの環境とそれぞれの機能を確認した後，動詞を，“在”との共起関係により，Va1, Va2, Vb1, Vb2 の 4 つに分類した。V と“在 L”とが「原因」と「結果」の意味関係で結びついた“V 在 L”という形をとる動詞のうち，時間副詞“在”を前置させられない動詞を Va2，時間副詞“在”を前置可能で，かつ“把”構文に変換可能な動詞を Vb2 とした。この Va2，Vb2 は「結果相」という語彙的アスペクトをもち，本稿では，Va2 は「変化」が前提となった結果相を持ち，Vb2 は，動作が前提となった結果相を持つと主張する。

1-2. 使用したコーパス

今回使用したコーパスは，『当代北京口语语料』（以下『当代』）で，電子データ化されている 1816478 字のコーパスを用いた。このコーパスは，職業，年齢，性別など多様な北京語話者が自ら半生を独白するという形式のコーパスである。本稿では「,」，「。」，「?」で終わっているものを 1 つの文とし，コーパスから“在”を含む文を 8505 個を得た。

2. 先行研究と本稿の立場

現代中国語の文法研究において，“V 在 L”という形式は，「動態」義，「静態」義を表し，多義的であると言われる（李临定 1985，平井 1987，山口 1999）。例えば，

[1] 以下，例文中では“V 在 L”のように，動詞 V には波線を引き，場所を表す名詞（句）L には下線を引いて表すことにする。

(1) [a.] 一个下午，他都坐**在**板凳上帮我干活。(「静態」を表す: 李临定 1985 の例文)
「彼は午後ずっと腰掛けに座って私の仕事を手伝ってくれた。」
[b.] 他走到我面前，微微一笑，坐**在**沙发上。(「動態」を表す: 山口 1999 の例文)
「彼は私の目の前までやってくると，ニッコリ笑ってソファーに腰をおろした」
(2) [a.] 我走进会议室，看见她坐**在**沙发上。(「静態」を表す: 山口 1999 の例文)
「私が会議室に入ると，彼女がソファーに腰をおろしているのが目に入った」
[b.] 说完话，他便坐**在**(了)板凳上帮我干活。(「動態」を表す: 李临定 1985 の例文)
「彼は言い終わると腰掛けに腰をおろして私の仕事を手伝ってくれた。」

先行研究では，上の例文のように，同じ動詞が動態と静態の二つの意味を表せるのであるから，“V 在 L”構文それ自身にその要因が潜んでいると考え，「静態」,「動態」という意味の違いの要因を動詞ではなく，“V 在 L”という構造に求めるわけである。

「静態」義,「動態」義について，山口 1999 では，「ある場所において，動作が完了した後に残る，静的な「状態」を表す場合」を静態義とし，「ある場所における瞬間完了的な「動作」を表す場合」を動態義とする。これに対して，平井 1987 では，静態義とは「事物がある静止状態で L に位置している」ことを表し，動態義とは「動作の仕手或いは動作の受け手が動作の直接の結果 L に到達あるいは残存する」ことを表すと述べる。

しかし， 平井 1987 で指摘されているように，“V 在 L”という構造が「静態」とも「動態」とも考えられるのは，動詞の多義性に起因すると考えられる。例えば，

(3) 书扔**在**地上呢。「本は地面にほうってある。」(「静態」を表す: 平井 1987 の例文)
(4) 书扔**在**地上了。「本は地面に投げ捨てた。」(「動態」を表す:平井 1987 の例文)

本稿では，“V 在 L”という構造が「静態」とも「動態」とも解釈可能なのは，動詞の多義性に起因すると考える。王还 1957 では，“V 在 L”の構文的な意味を「動作の動作主あるいは動作の受け手がその動作の結果としてある地点に到達したことを表す（表示动作的施事或受事因动作的结果达到什么地点。)」と定義する。本稿では，この定義を承けて，「V の表す動作・行為が原因となり，その結果として，出来事の主体あるいは客体が, L に存在する」ものと考える。

3. “V 在 L”構造中の“在”の品詞分類について

山口 1999 では“V 在”を一つの動詞（複合動詞）とし，“V 在 L”を L を賓語とした動賓構造と考える。“V 在”を一つの動詞として考えるならば，次のような，V と“在”との間に名詞句がある形式との近似性は否定されなければならない。例えば，

(5)　(我)种了几棵菊花儿**在**院子里。(范继淹 1982 の例文)
　　「私は何株かの菊の花を庭に植えた。」
(6)　他写了个名字**在**黑板上。「彼は名前を黒板に書いた。」(范继淹 1982 の例文)

例文(5), (6)中の名詞句“菊花儿”「菊の花」と“名字”「名前」は，それぞれ前の動詞“种”「植える」と“写”「書く」に対しては動作の対象であり，また後の動詞“在”に対しては主語として二重の役割を担っている。これらはいわゆる連動文の中の特殊な構造である兼語文と考えられる。

V の直後に置かれる“在”の品詞については定説はない（LAMARRE 2003）のであるが，本稿では，兼語文との近似性を根拠に，“V 在 L”中の“在”を准動詞（co-verb）と考え，二つの動詞句が連続した構造（動詞連続構造）と考えることにする。

これは，孤立語の統語構造一般のモデルと合致する。峰岸 2003 では，中国語を含む孤立語の統語構造モデルとして，以下のような「孤立語の鎖状統語構造モデル」[2]を提示する。*Pred* は述語を表し，白円は補語[3]を表す。

図 1: 孤立語の鎖状統語構造モデル

峰岸 2003 によれば，動詞と賓語との格関係を前提としないことについて，以下のように述べる。

> 動詞と補語，統語上の支配・依存の関係ではなく，また特定の格関係に制約されるのでもなくて，相互に意味的な補完関係にある。

本稿では，“在”と動詞との位置関係から，当該動詞の分類を行うために，峰岸 2003 の動詞連続構造を中国語の基本的な統語構造として仮定する。こうすることにより，異なる機能を持つ“在”について複雑な品詞分類を回避して，問題となる動詞を記述することが可能になる。以下に挙げる「主動詞」,「介詞」,「時間副詞」,「准動詞」という術語は，“在”と動詞との位置関係とその機能を表す術語として用いることにする。

“在”が主動詞として文中に用いられれば，主語位置に現れる名詞句が“在”の直後の L に存在することを表す。例えば，

2　初出は MINEGISHI2001。
3　本稿で「賓語」とするものに相当する。

(7) “在” = 主動詞: (我)一直就**在**家里头。 「(私は) ずっと家の中にいた。」(『当代』)

“在”が介詞として文中に用いられれば, 動作・行為の行われる空間的・時間的な範囲を表す。例えば,

(8) “在” = 介詞:

[a.] 女排已经**在**世界上取得了前茅的成绩, …… (空間的な範囲を表す)

「女子バレーチームは世界ですでに上位の成績をおさめ……」(『当代』)

[b.] 我们就**在**七月二十二号开了一个班儿。(時間的な範囲を表す)

「我々は 7 月 22 日に集まりを開いた。」(『当代』)

“在”が時間副詞として文中に用いられれば, “在”の直後の動詞が表す動作が進行中であることを表す。例えば

(9) “在” = 時間副詞: 两个孩子都**在**学习。 「二人の子供はともに勉強中だ。」(『当代』)

“在”が准動詞として文中に用いられれば, V の表す動作・行為が原因となり, その結果として, 動作の動作主あるいは動作の対象が, L に存在することを表す。例えば,

(10) “在”= 准動詞: (孩子) 放**在**这个学校托儿所, 放**在**十中托儿所里。

「(子供を) この学校の託児所においた, 十中の託児所においた。」

本稿の目的は, 准動詞として用いられた“在”について, 構文同士の関係[4]を観察することにある。

(15) 構文 1: NP_1 + V + 在 + NP_2.

(16) 構文 2: NP_0 + 把 + NP_1 + V + 在 + NP_2.

構文 1 をとる動詞は動詞という大きな類の中でも数に制限がある。この環境に現れうる動詞は,一部の動詞に限られる。構文 1 に現れる動詞も構文 2 という環境に生起しうる動詞と生起できない動詞がある。

本稿ではこれら“在”の後置の可能・不可能, 構文 1 から構文 2 への変換の可能・不可能の違いをそれぞれの動詞に固有の語彙アスペクトに求め, “在”を後置可能な動詞の語彙アスペクトを結果相 (resultative) であることを証明する。

ここでいう「語彙アスペクト」とは, Comrie1976 が言うところの動詞の“inherent aspectual”,

---

4 ここで観察する構文 1, 構文 2 以外にも, “在”を介詞として用いた構文 0 を考えることができる。
構文 0: NP0 + 在 + NP1 + V1 + NP2.
この構文 0 には, 全ての動詞が生起することができるので, 研究の対象とはしない。

(11) Va1: 就**在**我报考这个之前我也不知道。
「試験の申込みをする前には, 私だって知らなかった。」

(12) Va2: ……**在**县医院里头啊, 有一个人死了,…… 「県の病院の中で, ひとり死んだ」

(13) Vb1: **在**学校工作二十一年。 「学校で 21 年間働いた。」

(14) Vb2: 我们**在**那里照了相, 留了影。 「我々はそこで, 写真を撮った, 記念撮影をした」

Dowty1972 の言うところの “verb aspect”, “aspectual properties of verbs”，と同じ意味で用いる。この用語のとおり，Dowty1972 では，アスペクト性が動詞に存在すると考えている。これに対して, Comrie1976 では，“… inherent aspectual (i.e. semantic aspectual) properties of various classes of lexical items, and see how these interact with other aspectual oppostions, either prohibiting certain combinations, or severely restricting their meaning.” と述べるとおり，いろいろな範疇の語に固有のアスペクト性があり，それらが相互に作用しあうと考えている。このように，アスペクト性の所在に関しては議論がある。本研究では文全体のアスペクト性は，語の固有アスペクト意味の相互作用の結果であると考える。そして文全体のアスペクト性を知るためには，まず動詞の語彙アスペクトを明確にしておくことが必要だと考える。研究の対象を構文 1，構文 2 における，動詞と“在”との共起関係に限定し，動詞アスペクトを記述していこうという試みである。ひとまず本稿では文のアスペクト性に関しては議論の対象外としたい。

4. “V 在 L”に生起可能な動詞とその語彙アスペクト

4-1. “V 在 L”に生起できない動詞類

動作・行為に関わる時間量を表す時量賓語“时量宾语”との共起関係から動詞を分類した研究に，马庆株 1981 がある。马庆株 1981 では，非持続性動詞 Va と持続性動詞 Vb という 2 つの動詞のタイプ提示する。まず非持続性動詞 Va と持続性動詞 Vb との対立を見ていく。马庆株 1981 では, Vb 動詞を時量賓語の表す意味などにより，さらに, Vb1，Vb21，Vb22 というように分類されるが，本稿では Vb 動詞という一つのタイプとして扱うことにする。

马庆株 1981 が指摘するように，動詞と“时量宾语”（= T）との関係では, Vb 動詞は，構文 A，B，C に等しく生起可能で，この点で，非持続性動詞 Va とは異なる。Va は T との関係で言えば，構文 C の形しか存在しない。例えば（以下は马庆株 1981 に挙げられている例文である），

(17) 構文 A

(a.) *死三天 (Va + T)

(b.) (这本书)看三天 (Vb + T) 「(この本は) 三日間読む。」

(18) 構文 B

(a.) *他死了三天 (Va 了 + T)

(b.) (这本书)看了三天 (Vb 了 + T)

「(この本は) 三日間読んだ。」

(19) 構文 C

(a.) 已经死了三天了 (Va 了 + T + 了) 「彼は死んで 3 日になる。」

(b.) 已经看了三天了 (Vb 了 + T + 了)

「この本は三日間読んだ。」(T = 動作が継続する時間量)

「この本は読んで三日になる」(T = 動作終結後の時間量)

特に，Vb 動詞が構文 C に現れる場合には，時量賓語の解釈は，「動作が継続する時間量」と「動作終結後の時間量」という二通りの解釈が存在する。これに対して，Va 動詞は，動詞の表す動作の継続する過程を持たないために，時量賓語は二義的に解釈されず，「動作終結後の時間量」しか表せないのである。

さらに Va 動詞が継続する過程を持たないことは，時間副詞“在”，アスペクト助詞“着”との関係でも非持続性動詞 Va と持続性動詞 Vb との対立は観察可能である。例えば，

(20) *他在死。「彼は死につつある。」（Chen 1978 の例文）（Va 動詞の例）
(21) 他在哭。「彼は泣いている。」（Chen 1978 の例文）（Vb 動詞の例）

(22) *他在客厅里死着呢。「彼は客間で死んでいる。」（Va 動詞の例）
(23) 他在客厅里哭着呢。「彼は客間で泣いている。」（Vb 動詞の例）

4-1-1. Va 動詞の場合

Va1 動詞とは，马庆株 1988 で挙げる「属性」を表す動詞である。例えば，

“保证”「保証する」，“感觉”「感じる」，“觉得”「～と思う」，“知道”「知っている」，“捉摸”「推測する」，“毕业”「卒業する」などといった「属性」を表す動詞を含む。

これらの動詞は，動詞が表す「属性」が獲得されたならば，その属性が失われることはなく，時間軸とは無関係な動詞群である。

これらの動詞に“在”を後置し，“Va1 在 L”の形を用いて，V の表す動作・行為が原因となり，その結果として，動作の動作主あるいは動作の対象が，L に存在することを表現できない。例えば，
(24) *我知道**在**医院里。「私が何かを知ることで病院に存在する」という意味で。

同様に，“保证”という動詞でも，

(25) 一天反正保证**在**水里泡俩小时，…
「一日に，それでも，水に 2 時間はつかっていたことを保証する」（『当代』）

のように，一見すると，“V 在 L”という形をとっているが，実際には，V と“在 L”との間に，例文(26)のように，名詞性成分を置くことができ，文の構造自体が異なる。例えば，

(26) 一天反正保证他**在**水里泡俩小时，…
「一日に，それでも，彼が水に 2 時間はつかっていたことを保証する」

これらの動詞は，本稿で扱う“V 在 L”とは構造的に異なる。一見“Va1 在 L”の形をしていても，その“在”は，介詞あるいは主動詞としての“在”としか理解されない。つまり“我知道**在**医院里。”では，“在”が准動詞として文中に用いられているのではない。

このように, V の表す動作・行為が原因となり，その結果として，動作の動作主あるいは動作の対象が, L に存在することを表現できない。

4-1-2. Vb1 動詞の場合

Vb1 動詞とは，“哭”「泣く」，“唱”「歌う」，“吃”「食べる」，“擦”「こする」，“捡”「ひろう」などのいわゆる動作動詞（action verb）である。多くの場合，これら Vb1 動詞も“Vb1 在 L”という構文 1 の形は作らない。例えば,

(27) *他哭**在**厨房里。
(28) *他唱歌唱**在**客厅里。
(29) *饺子吃**在**五道口食堂里。
(30) *字擦**在**黑板上。
(31) *稻穗捡**在**地里。

このように, Vb1 の表す動作・行為が原因となり，その結果として，動作の動作主あるいは動作の対象が, L に存在することを表現できないためであろう。

構文 1 に“把”を伴った構文 2 について考えてみると，Vb1 は比較的“把”を伴う文を構成することは容易である。例えば,
(32) 孟美女**把**长城哭倒了。「孟美女は長城を泣いて倒した。」（『现代』）
(33) 他**把** C 调唱成 E 调了。「彼は C 調を E 調で歌った。」（『汉语』）
(34) 奶奶**把**饺子吃了。「お祖母さんは餃子を食べた。」（『现代』）
(35) 他**把**黑板擦了。「彼は黒板を消した。」（『现代』）
(36) 老大爷**把**粪捡完了。「おじいさんは糞を拾い終えた。」（『汉语』）

しかし, Vb1 は，構文 1 に“把”を伴った構文 2 には成立しない。例えば,

(37) ***把**他哭**在**厨房里。
(38) ***把**他唱歌唱**在**客厅里。
(39) ***把**饺子吃**在**五道口食堂里。

(40) *把字擦在黑板上。
(41) *把稻穗捡在地里。

Vb1 動詞が構文 2 に成立しないのは, Vb1 の表す動作と L の表す場所とが, 原因と結果という関係で理解できないためである。

しかし, Vb1 動詞にも, 例外的に“Vb1 在 L”を成立させる動詞がある。これらの文では, Vb1 の表す動作と L の表す場所とが, 原因と結果という関係で理解されるわけではなく, 出来事の主体がどのような姿で L に存在するかを述べているのである。つまり「存在の様態」を表現する文と考えられる。例えば,

(42) 当时我们住在清华大学里边, …
「その頃, 私たちは清華大学の中に住んでいた」(『当代』)

周媛 2002 では, “生活”「暮らす」, “居住”「住む」, “寄居”「身を寄せる」, “生长”「成長する」, “住”「住む」という動詞について, その特徴を, その行為によって事物には明らかな移動や変化が起こらない出来事であるとし, 例文(43)と(44)は基本的に同じ意味を表すと指摘する。

(43) 住在北京。(V 在 L)「北京に住む」
(44) 在北京住。(在 LV)「同上」

本稿でこれらの動詞が例外と考えるのは, これらの動詞の場合には, “V 在 L”という形をとっていても, “在”の機能は准動詞ではなく, 介詞と理解できるからである。これらの例文では, “V 在 L”という形式をしていても, L は, V の表す動作の行われる空間的・時間的な範囲を表しているのであり, V の表す動作を通じて, ある事物を L に位置させることを表しているのではないのである。

非持続性動詞とは考えられない動詞のうちで, “V 在 L”の形をとる動詞には, 荒川 1985 で指摘されている“站”「立っている」, “蹲”「しゃがんでいる」, “躺”「横になる」, “跪”「ひざまずく」, “趴”「腹這いになる」のような状態を維持する動詞[5]がある。 例えば,

(45) 同学们站在那儿, … 「生徒たちはあそこに立っていた」

---

[5] 荒川 1985 では“站”類の動詞について次のように述べる。
中国語の“站”類の動詞は, 変化や過程よりも状態（“站”なら立ッテイルという状態）を表すのが基本的な意味である。

これらの動詞について，廬涛 1997 では“在 LV”の形でも，“V 在 L”の形であっても，命題的な意味は変わらないことを指摘している。

(46) 小李**在**沙发上坐着。「李くんはソファーに座っている。」
(47) 小李坐**在**沙发上。「同上」

このことは，次のような移動の様態を述べる動詞についても，同様の指摘が可能である。

(48) 游行的队伍走**在**大马路上。　「デモ隊は大通りを歩いている。」(『当代』)
(49) 我的大妹妹，跑**在**我前头了。就人家结婚，我还没结婚呢。
　　「年上の妹は私より先に，結婚した，私がまだ結婚していないのに。」(『当代』)

移動の様態を表す場合にも，存在の様態を表す場合と同様に，“在 LV”の形であっても，“V 在 L”の形であっても，命題的な意味は変わらない。例えば，

(50) 游行的队伍**在**大马路上走着。「デモ隊は大通りを歩いている。」
(51) 我的大妹妹**在**我前头跑着。「年上の妹は私の前を走っている。」

これらの動詞も，“V 在 L”という形をとっていても，“在”の機能を准動詞ではなく，介詞と理解できる。これらの例文では，“V 在 L”という形式をしていても，V の表す動作を通じて，ある事物を L に位置させることを表しているのではないのである。したがって，構文 1 に“把”を伴った形式である構文 2 を作ることはできない。

(52) *我**把**学生住**在**宿舍。「私は学生を寮に住まわせた。」
(53) *张老师**把**同学站**在**门口。「張先生は学生を入り口に立たせた。」

これらの動詞が構文 2 に成立しないのは，V の表す動作が，ある事物を L に位置させる原因とはなり得ないからである。

4-2. “V 在 L”に生起可能な動詞類

4-2-1. Va2 動詞の場合

Va2 動詞とは马庆株 1988，木村 1997 で“変化”動詞として挙げられている“死，断，丢”などの動詞である。Va2 動詞は，「変化」という語彙特徴を持つ。ここで言う「変化」とは，ある状態から別の状態への移行である。例えば，“死”という動詞は「生きている」状態から「生きていない」状態への移行を表しており，時間副詞“在”を前置することができず，アスペクト助詞“着”を後置できないことから，その移行は瞬間的に行われると

理解できる。

Va2 動詞は構文 1 に生起することが可能であるが，構文 2 に現れることはできない。

(54) 最后一家子都病**在**那儿了。「最後には，一家全員そこで病気になった。」(『当代』)
(55) 她死了死**在**人民医院了。「彼女は死んだ，人民病院で死んだ。」(『当代』)
(56) *我**把**父亲死**在**医院。「私は父を病院で死なせた。」

上で挙げた“站”などの動詞では，出来事の主体が L において動詞の表す動作を行っているのであり，その文中の“在”の機能は介詞的であり，出来事の主体に状態変化は起こらない。これに対して，Va2 が構文 1 中に生起する場合には，“在”の機能は，准動詞として理解可能である。上の例文(54)，(55)では，“病”，“死”という動詞の表す行為が原因となって出来事の主体が状態の変化を起こし，その状態変化の結果として，出来事の主体が L に存在することを意味しているのである。

Va2 動詞が構文 2 を形成できないのは，出来事の主体が動詞の表す行為の有責者ではないからだと考えられる。例えば，

(57) 我死了父亲。「私は父を亡くした。」
(58) 我丢了孩子。「私は子供を迷子にした。」

これらの例文が表す出来事の中で，文頭の名詞句は動作を行う動作主とは考えられず，またその出来事の原因となる有責者になっているわけでもない。したがって，これらの動詞に“把”を伴って文を作ることは一般に困難である。例えば，

(59) *我**把**父亲死了。「私は父を死なせた。」
(60) *我**把**孩子丢了。「私は子供を迷子にした。」

4-2-2. Vb2 動詞の場合

Vb2 動詞とは，“安”「取り付ける」，“安排”「(人員などを) 配置する」，“摆”「並べる」，“放”「置く」，“搁”「置く」，“挂”「掛ける」のように，動作のはたらきかけを受けてある物が他のものに付着することを表す。

荒川 1985，三宅 1994 に指摘されるように 中国語の動詞には，動作の過程の局面と動作完了後の結果状態の持続の局面とを一つの動詞の語彙的意味として持つ動詞がある。Vb2 動詞とは，そうした二局面動詞である。例えば，荒川 1985 では，“穿”に関して以下に二つの解釈が可能な二局面動詞であることを指摘する。

(61) 那件和服，她穿了半天。
「その和服を着るのに長い時間かかった。」（動作の過程の局面を表す解釈）
「その和服を長い時間着ていた。」（動作完了後の結果状態の持続の局面を表す解釈）

Vb2 が二つの局面を持つ動詞であることから，“在”が准動詞として文中に用いられ, V の表す動作が原因となり，その結果として，ある事物が L に存在することを表す“V 在 L”（構文 1）という形に生起可能であり，同様に, V の表す動作が原因となり，その結果として，ある事物（NP1）を L に存在させることを表す“NP0 把 NP1 V 在 L”という構文 2 に生起できるのである。

構文 1（NP1 V 在 L）の場合
(62) 你放**在**书包里。「あなたは，カバンの中に入れなさい。」（『当代』）
(63) 老陈留**在**地里看瓜。「陳さんは畑に残って瓜を見守る。」（『当代』）
(64) 我的练习本落**在**家里了。「私の練習帳を家に置き忘れた。」（『当代』）

構文 2（NP0 把 NP1 V 在 L）の場合
(65) 上楼以后**把**自行车儿放**在**底下。「階を上がった後，自転車を下に置いた。」（『当代』）
(66) 他就把她留**在**那儿了。「彼は彼女をそこに残した。」（『当代』）
(67) 她**把**书包落**在**飞机上啊。「私は飛行機に鞄を置き忘れた。」（『当代』）

5. 動詞の語彙アスペクトについて

以下の表は，本稿で『当代』を調査した結果である。Va1 は上で指摘したように，本稿で取り上げた“V 在 L”とは意味と構造が異なり，“V 在 L”の形をとる文の数も少ない。Va2 が現れる文の数は 30 で，動詞の種類も 10 個と少なく感じられるが，そもそも，この類に含まれる動詞の数が少ないのである。

下の表で特徴的なのは, Vb1 動詞が用いられる文の数は 272 と多いのだが，動詞の種類としては 22 個と非常に少ないということである。これは本稿で挙げた Vb1 には存在，移動の様態を表す動詞が含まれており，その数が限られていることを表している。これに比べると, Vb2 は現れる文の数は 271 であり, Vb1 と変わらないのだが，動詞の種類は 75 個と非常に豊富であることがわかる。

	文の数	動詞の異なり数
(Va1)	(15)	(8)
Va2	30	10
Vb1	272	22
Vb2	271	75

表 1: 動詞類型と文と動詞の数

ここでは，Vb2 動詞の語彙アスペクトについて検討していくことにする。本稿で取り出した Vb2 動詞は，马庆株 1981 が提示している“挂”類動詞と一致し，時量賓語 T は，“挂”類動詞と同様に，ある行為が原因となり，ある状態をつくる，その結果状態の持続時間を表すことができる。例えば，

(68) （那幅画）挂了半天了。「（その絵は）長い時間かかっている。」

この例文では，絵が“挂”「かける」という動作を通じて，どこかの場所で“挂”「かかっている」という状態になり，時量賓語は，その状態の持続時間について述べていると解釈できるのである。すなわち，結果局面の時間量を表していると解釈できる。これに対して，同じ Vb 動詞でも, Vb1 動詞は結果局面を持たないので，結果局面での持続時間量は表せないのである。

Vb2 動詞と同様に構文 1 に成立可能な動詞 Va2 は，ある状態から別の状態への変化を表し，その移行は瞬間的に行われることを前に述べた。時量賓語 T の解釈は，Vb2 と同様に，結果局面での持続時間量と解釈できる。例えば，

(69) 已经死了三天了 (Va 了 + T + 了) （例文(19)a を再掲）
「彼は死んで 3 日になる。」

また戴耀晶 1991，刘一之 1999，梁紅 1999 において指摘されているように，場所を表す名詞句 L を文頭に置く存現文において，“V 着”，“V 了”と交換を許す動詞群がある。この動詞群は，本稿で取り出した Vb2 動詞と一致する。この“了”と“着”の交代現象は, Vb2 動詞は動作の過程の局面と動作完了後の結果の局面とを表すことができる二局面動詞であることに起因する。例えば，

(70) 桌上放了一杯茶。「机にお茶が置かれた。」
(71) 桌上放着一杯茶。「机にお茶が置いてある。」

刘一之 1999 は，例文(70)では，言外に動作主がいることが感じられ，例文(71)ではもはや動作主の存在を感知できないと指摘する。

ここで，動態，静態という術語を導入し，それぞれ動作主が想定できる局面を動態，そうではない局面を静態と定義するならば，例文(70)と例文(71)は，それぞれ動態の出来事，静態の出来事と考えることができる。この二つの出来事のあいだには関連がある。動態の出来事は，静態の出来事より前に起こり，静態の出来事の「原因」となり，静態の出来事は，動態の出来事より後に起こり，動態の出来事の「結果」となる。言い換えれば，静態の出来事は動態の出来事の延長上にあり，動態の出来事の結果として存在する出来事として定義できる。こうした定義は Comrie1976 の次のような結果相の定義と合致する。

In the perfect of result, a present state is referred to as being the result of some past situation: (Comrie 1976)

上述のように Va2，Vb2 とも構文 1“NP1 V 在 L”という形式に生起して，V の表す動作・行為が原因となり，その結果として，出来事の主体が L に存在することを表しうる。このことから Va2，Vb2 は共通に「結果相」という語彙アスペクトを持つことが分かる。
構文 2“NP0 把 NP1 V 在 L”について見ると，Va2 は，この構文に生起不可能だが，Vb2 は可能である。こうした違いは，原因事象となる動詞の属性に起因する。本稿では，Va2 は「変化」が前提となった結果相を持ち，Vb2 は，動作が前提となった結果相を持つと考える。

本稿における考察は，なお未熟なアイディアの段階である。主張は十分な裏付けを持った「論」として完成したものではない。今後，諸賢によるご助言をいただければ幸いである。

例文出典文献

『当代』 北京语言文化大学语言教学研究所编 1997 『当代北京口语语料』北京语言文化大学出版社.
『现代』 林杏光等编 1994 『现代汉语动词大词典』北京语言学院出版社.
『汉语』 孟琮等编 1999 『汉语动词用法词典』 商务印书馆.

参考文献

CHEN CHUNG-YU 1978: Aspectual Features of the Verb and the Relative Positions of the Locatives, *Journal of Chinese Linguistics* 6.
COMRIE, B. 1976: *Aspect*. Cambridge University Press.
DOWTY, D.R. 1972 Studies in the logic of verb aspect and time reference in English. *Studies in*

Linguistics 1. Dept. of Linguistics, University of Texas at Austin.

JAMES H-Y. TAI 1975: On Two Functions of Place Adverbial in Mandarin Chinese, *Journal of Chinese Linguistics* 2-3.

JAMES H-Y. TAI 1985: Temporal Sequence and Chinese Word Order, In John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*, Amsterdam: John Benjamins.

MINEGISHI MAKOTO. 2001 Southeast Asian Languages: A Case for the Caseless?, *Working Papers of International Symposium on Non-nominative Subjects*.

YASUHIRO SHIRAI 1998: Where the Progressive and the Resultative Meet Imperfectve Aspect in Japanese, Chinese, Korean and English, *Studies in Language* 22:3.

荒川清秀 1985: 「“着”と動詞の類」,『中国語』NO.306.

平井和之 1987: 「静態動詞に関する幾つかの問題 —— 主に“V 在”形式との関連において——」,『中国語学』第 234 期.

伊原大策 1982: 「進行を表す「在」について」,『中国語学』229 号.

木村英樹 1997: 「“変化”和“动作”」, 余靄芹他編『橋本萬太郎紀念中国語学論集』, 内山書店.

LAMARRE CHRISTINE 2002: 「【V+在+場所詞】の構文的意味再考 河北冀州方言, 19 世紀末の北京語と現代標準語の相違を中心に」, 中国語東アジア研究会 青山学院大学 12 月 15 日 発表レジュメ.

LAMARRE CHRISTINE 2003: 「状態変化, 構文変化, そして言語干渉: 中国語の【V + 在 + 場所】構文のケース」,『開篇』Vol.22.

梁紅 1999: 「中国語の結果相（resultative）とパーフェクト（perfect） ——「互換可能」な“V 着”と“V 了”を中心に——」,『中国語学』246 号.

盧濤 1997: 「「在大阪住」と「住在大阪」」, 大河内康憲教授退官記念論文集刊行会『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』 東方書店.

峰岸真琴 1986: 「クメール語の動詞連続における/baan/の意義について」,『東京大学言語学演習 '86』, 東京大学文学部.

峰岸真琴 2002: 「形態類型論の形式モデル化」,『アジア・アフリカ言語文化研究』64 号.

峰岸真琴 2003: 「動詞連続の言語理論上の意義」, 中国語東アジア諸語研究会 青山学院大学 5 月 18 日 発表レジュメ.

三宅登之 1994: 「关于“着”表示的语法意义」,『県立新潟女子短期大学研究紀要』No. 31.

奥田靖雄 1978:「アスペクトの研究をめぐって （上）（下）」『教育国語』53/54.

讃井唯允 2000: 「“在等”“等着”“在等着” —— “在”と“着”の文法的意味と語用論」,『人文学報』第 311 号.

鈴木直治 1956: 「中国語における位置の指示と強調のムードとの関係について」,『中国語学』, 第 57 号.

周媛 2002: 「中国語の“V 在 L”構文について ―― “在 LV”構文との関連を中心に」, 日本中国語学会関東支部例会 お茶の水女子大学 4 月 20 日 発表レジュメ.
山口直人 1999: 「“V 在+L”構文の他動性について ――語彙概念構造の観点から――」, 『中国語学』第 246 期.

戴浩一著 黄河訳 1988: 「时间顺序和汉语的语序」, 『国外语言学』第 1 期.
戴耀晶 1991: 「现代汉语持续体“着”的语义分析」, 邵晶敏主編『九十年代的语法思考』, 北京语言学院出版社.
范继淹 1982: 「论介词短语“在+处所”」, 『语言研究』第 1 期.
方梅 2000: 「从 V“着”看汉语不完全体的功能特征」, 中国语文杂志社编 『语法研究和探索(九)』, 商务印书馆.
郭熙 1986 : 「“放到桌子上”“放在桌子上”“放桌子上”」, 『中国语文』第 1 期.
金立鑫 1993: 「“把 OV 在 L”的语义、句法、语用分析」, 『语言研究』第 5 期.
李临定 1985: 「动词的动态功能和静态功能」, 『汉语学习』第 1 期.
刘宁生 1985: 「论“着”及其相关的两个动态范畴」, 『语言研究』, 第 2 期.
刘宁生 1985: 「动词的语义范畴: “动作”与“状态”」, 『汉语学习』第 1 期.
刘一之 1999: 「北京口语中的“着”」 北京大学中文系《语言学论丛》编委会编『语言学论丛(第二十二辑)』, 商务印书馆.
马庆株 1981 「时量宾语和动词的类」, 《中国语文》第 2 期。
马庆株 1988 「自主动词和非自主动词」, 《中国语言学报》第 3 期。
王还 1957: 「说“在”」, 《中国语文》 2 月号.
王还 1980: 「再说说“在”」, 《语言教学与研究》 第 3 期.
徐丹 1992: 「汉语里的“在”与“着(著)”」
张[赤贞] 1997: 「论决定“在 L+VP”或“VP+在 L”的因素」, 『语言教学与研究』第 2 期.
赵金铭 1995: 「现代汉语补语位置上的“在”和“到”及其弱化形式“・de”」, 『中国语言学报』第 7 期.

付録

Va1

保证「保証する」，感觉「感じる」，觉得「～と思う」，知道「知っている」，见「見える」，捉摸「推測する」，毕业「卒業する」，活「生きる」

Va2

病「病気になる」，长「大きくなる」，臭「くさくなる」，发生「生ずる」，死「死ぬ」，瘫痪「麻痺状態になる」，晕「気が遠くなる」，成长「成長する」，生「生む」，生长「成長する」

Vb1

跑「走る」，走「歩く」，开「運転する」，跟「あとについて行く」，
蹲「しゃがむ」，跪「ひざまずく」，坐「座る」，趴「腹ばいになる」，站「立つ」，躺「寝そべる」
居住「住まう」，住「住む」，盘踞「巣くう」，聚会「集まる」，出生「生まれる」
流露「おのずから現れる」，生活「生活する」，流动「流動する」

爱「愛する」，打「打つ」，看「見る」，参加「参加する」，

Vb2

安「取り付ける」，安排「（人員などを）配置する」，摆「並べる」，放「置く」，搁「置く」，挂「掛ける」，关「閉じ込める」，横「横たえる」，寄托「託する」，建立「建設する」，聚「集める」，留「残しておく」，落「置き忘れる」，揉「もむ」，写「書く」，用「用いる」，粘「はる」，装「据え付ける」，摁「（指先で）押す」，偎「しがみつく」

绷「（針で）とめる」，踩「踏む」，处「おく」，凑「集める」，搭「ひっかける」，倒「逆さまにする」，掉「落とす」，吊「ぶら下げる」，堵「ふさぐ」，对「くっつける」，分「分ける」，分散「分け与える」，缝「縫う」，改「変える」，盖「覆いかぶせる」，赶「追いかける」，灌「注ぎ込む」，花「消費する」，画「描く」，混「混ぜる」，挤「押し合う」，记「書き留める」，夹「はさむ」，加「合わせる」，建「建てる」，卡「押さえる」，烂「やわらかくなるまで煮る」，粘糊「貼る」，埋「埋める」，挪「動かす」，扑「（力などを）注ぐ」，睡「眠る」，锁「かぎをかける」，贴「貼り付ける」，停「とめる」，停留「とどまる」，托「託する」，压「重みを加える」，压缩「縮める」，噎「つかえる」，砸「壊す」，葬「埋葬する」，扎「刺す」，支「支える」，撞「ぶつかる」，攥「握る」，掺「混ぜる」，掺杂「混ぜる」，泡「漬ける」，碰「ぶつかる」，铺「敷く」，扔「捨てる」，融合「解け合う」，设「設ける」，集中「集める」

目次ページに戻る。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

“EVENT１+弄得+EVENT２”における“弄”のプロファイル機能

山根　史子

（東京外国語大学大学院博士前期課程）

概要

現代中国語には，代動詞機能を果たすと一般的に認識されている“弄”という動詞がある。しかし，“EVENT１+V 得+EVENT２”に代表される文において“V”として生起する“弄”は，他の特定の動詞を代行しているとはみなせず，異なる機能を果たしていると考えられる（例えば“他擦着火柴却不点蜡，只往自己手中那个射出光芒的手电筒上点，弄得一屋子人全笑了”)。本論は，この種の“弄”が“EVENT１”全体を原因事象としてプロファイルし，結果事象である“EVENT２”へ繋げるという機能語に似た役割を果たしていると指摘した。そして“弄”はその意味の漂白性から，“V”として生起する動詞の中でプロトタイプ的な動詞であると仮定し，約 2500 万字のコーパスデータを対象に分析を行った。その結果，“弄”のプロトタイプ性を支持すると思われる結果を得た。また，“弄”がプロトタイプとなる背景について，カテゴリーの階層構造と，Langacker（1987）の提案するネットワークモデルの概念を以って考察することも試みた。

1. 背景
1.1. 問題提起
1.2. 仮説
2. 研究範囲
2.1. 分析対象
2.2. 分析範囲
3. 分析方法
3.1. 仮説を検証するための 3 つのポイント
3.2. “EVENT１+V 得+EVENT２”に該当する形式
3.3. 動詞の漂白性
4. 分析結果
4.1. “V”をつとめる動詞の漂白性
4.2. “EVENT１”の性質
4.2.1. “EVENT１”の形式
4.2.2. “EVENT１”が表す意味の多様性
4.3. “V”をつとめる各動詞の生起数
5. 考察
5.1. “弄”のプロトタイプ性
5.2. 動詞のカテゴリー階層
5.3. “V”のプロファイル機能
5.4. “V”をつとめる動詞の複合ネットワーク
6. 今後の課題

1. 背景

1.1. 問題提起

“弄”は語源である「手に持って遊ぶ，いじる」という意味を表す一方，他の動詞を代行するという，いわゆる代動詞用法を有すると認識されている。例えば『小学館 中日辞典』及び『中日大辞典』では，“弄”について「他の動詞の代わりをつとめる」と説明しており，相原他(1995)では “搞”に対して「“弄”に似た代動詞機能」という説明を与えている（“弄”自体は項目として挙げられていない)。たしかに“弄”は，いくつかの動詞の意味を代行することが可能である。『中日大辞典』はこの種の機能としていくつかの例を挙げている（丸括弧内は本来の動詞）：弄(做)饭 / 这个表坏了，你拿去叫钟表匠弄(修理)好了吧 / 弄(搬)走一推垃圾 / 总要弄(研究)出一个结果来。しかし(1)～(6)における“弄”は，ある特定の動詞の意味を代行しているとはみなし難い。

(1) 老梁没喝，直说胃疼，弄得那个客户不高兴，说你梁主任看不起人啊，就摔了杯子。(谈歌:年底)
(2) 他俩指着那些熟人大声说笑，弄得服务员进屋来提醒，说十二点了，别人要休息。(刘醒龙:农民作家)
(3) 他擦着火柴却不点蜡，只往自己手中那个射出光芒的手电筒上点，弄得一屋子人全笑了。(铁凝:小郑在大楼里)
(4) 邓宇强突然蛮横无比地吼了起来，弄得别人都有些莫名其妙。(叶兆言:路边的月亮)
(5) 孙艳萍坐在他的房间里不走，哭哭啼啼的，弄得赵振涛简直没有办法。(关仁山:风暴潮)
(6) 可是她偏偏对他生活中这件重要的事采取了一种批判的态度，弄得他心里很不痛快。(路遥:黄叶在秋风中飘落)

従って“弄”のこの種の機能は，単に動詞を代行する機能とは異なると考えられる。

1.2. 仮説

(1)～(6)の例文には主語の位置に動作主体を表す要素が存在せず，事象を表す要素（下線部）がその位置を占めている。また，これらの例文はすべて様態補語（刘月华 2001）からなる構文であり，様態補語の部分は主述フレーズ形式によって事象を表している（以下，このような文を“EVENT１+V 得+ EVENT２”と記す。“EVENT”は事象を表し，右下の数字は二つの“EVENT”が異なる事象であることを示す)。李临定（1986）はこの種の文について，ある出来事又はある動作行為が，ある結果を引き起こしたことを表すとして使役性を認めている。使役は働きかける側（X）の働きかけと，働きかけを受ける側（Y）の動作・作用・状態変化という二つの出来事から構成されている（楊凱栄 1989）ことを踏まえて(1)～(6)を観察すると，これらの例文の場合「働きかけ」は“弄”によって表され，「状態変化」は“得”に後続す

る主述フレーズによって表されていることがわかる。しかしこの場合，“弄”自身の意味は漂白的であり「どのような原因事象による働きかけか」については言及しておらず，これについては“弄”に先行する主述フレーズ（下線部）の部分によって示されている。視点を変えれば，“弄”が，先行して生起する主述フレーズ全体を原因事象としてプロファイル[1]し，“得”後方の結果事象へ繋げるという，機能語に似た役割を果たしていると解釈できる。

一方“弄”以外の動詞も“EVENT１+V 得+ EVENT２”の“V”をつとめることが可能である：

(7)　李长柏狠狠地朝他后腰上踢了一脚，踢得他身子向前扑了下去。(梁晓声:钳工王)
(8)　警车嗷嗷叫着，叫得人心里发慌，空气中似乎有一种让人悲愤的声音在滑动。(谈歌:热风)
(9)　“捞渣，我的儿啊！”鲍彦山家里的只得哭了，哭得娘们儿都陪着掉泪。(王安忆:小鲍庄)

しかし“V”は上述したように，機能語に似た役割を果たすことを考慮すると，“踢”“叫”“哭”のような動詞よりも，意味の漂白化[2]した“弄”のような動詞の方が“V”をつとめる動詞としてより典型的であると推測できる。河上（1996）も「…（意味が漂白化することで）機能語としての意味を新しく獲得する…」と述べているように，「意味の漂白化」と「機能語化」とは相対応する関係にあると考えられる。以上から，本論は以下のような仮説を立てる。

仮説	“弄”は“EVENT１+V 得+ EVENT２”の“V”として生起する動詞の中で，プロトタイプ的な動詞である。

2. 研究範囲

2.1. 分析対象

本論が分析の対象として採用したのは，1950 年以降の中国当代小説で，コーパスデータの規模は，総計 2500 万字である[データ源に関する詳細は巻末参照]。

2.2. 分析範囲

本論は，コーパスデータから“弄”の生起状況を記述し，それに対して考察を行うことによって，実際の言語現象における“弄”の機能を明らかにすることを試みる。よって，本論が最終的に示すのは，“弄”の機能の実際とその傾向である。また，分析および考察の

[1] 本論のいう「“EVENT１”を原因事象としてプロファイルする」とは，事象表現(EVENT１)を原因として際立たせるという意味である。
[2] 漂白化(bleaching)とは，名詞や動詞などの内容語が，歴史的な変化によって助詞や前置詞などのような文法的機能を果たす要素へと変化していく文法化の過程のうち，本来の具体的な内容を持つ語彙的意味が抽象化・一般化していく意味変化を指して言う(辻 2002)。

対象としては，“EVENT１+V 得+ EVENT２”を表す各文を最大の単位と定める。

3. 分析方法

3.1. 仮説を検証するための３つのポイント

本論は仮説を検証するために，“弄”が“V”をつとめる他の動詞と比較して，如何に機能語に近い働きをしているのかを明らかにすることを試みる。具体的には，以下の３つのポイントについて調べることとする。

①“弄”の漂白性

②“弄”がプロファイルの対象とする“EVENT１”の多様性

③“弄”の生起数

①を検証のポイントとするのは，上述したように「意味の漂白化」と「機能語化」とは相対応する関係にあるとみなせるからである。②を検証のポイントとするのは，“V”をつとめる動詞は，プロファイルする対象である“EVENT１”が多様であるほど，より機能語的な働きをしていると考えられるからである。③を検証のポイントとするのは，生起数は“EVENT１”の多様性を反映する一つの現象と言えるからである。

3.2. “EVENT１+V 得+EVENT２”に該当する形式

以上の３つのポイントを明らかにするにあたって，まず“EVENT１+V 得+ EVENT２”に該当する形式を定義する必要がある。分析対象のコーパスデータから，“EVENT２”を表す形式はどの用例においても主述フレーズであることが分かった（本論のいう主述フレーズ“NP+VP”とは，単文および複文を含む)。つまり“V 得+ EVENT２”は“V 得+NP+VP”という形式で文中に生起している。また，“EVENT１”を表す形式には，主述フレーズ，動詞句（または形容詞句)，名詞句が存在することも分かった。以上から“EVENT１+V 得+ EVENT２”に該当する文型は大きく分けて“NP+VP+V 得+NP+VP”“VP+V 得+NP+VP”“NP+V 得+NP+VP”の三種であると言える。

(10) 苏羊忘形地叫了起来，惹得服务小姐直翻白眼。(毕淑敏:不宜重逢)

(11) 从省城来了一队女学生，她们在梅城的街头演说演街头剧，搞得这个小城市像赶集一样热闹。(叶兆言:花煞)

(12) 尽管这次参观弄得众人心绪纷乱，但这对他们是必要的。(路遥:平凡的世界)

(13) 这个重大的发现，害得坐立不安的杨群连续几晚上都没睡好觉。(叶兆言:走进夜晚)

(14) 你并不反感这股气味，但她的这种亲热弄得你很窘。(莫言:红树林)

(15) 他们当年革命时肯定都没有料到，这革命竟弄得他们自己也眼睁睁等死，一筹莫展。(高行健:一个人的圣经)

(16) 这番有趣的表演逗得大家大笑不止。(冯骥才:啊！)

(17) 这中间我们一直喝王健林的咖啡，其实我已经有几天没有休息好，连续十几天只睡四五

个小时，这种状况搞得我非常疲乏，头昏脑胀注意力难以集中。(洪峰:中国足球梦难圆)

(18) 林奇在门口看着这些，他还看见袁圆和雅妹为绣书伤心落泪，反复说从没见过天下有这么狠心的父母。这句话说得林奇心里比针扎还疼。(刘醒龙:寂寞歌唱)

(19) 他们前面去接下面的歌词却总是扑个空，原地踏步的歌声搞得我心慌意乱。(张贤亮:习惯死亡)

(20) 他的坦白的态度，倒惹得那些装卸工宽厚地笑了。(陈忠实:十八岁的哥哥)

(10)(11)は“NP+VP+V 得+NP+VP”にあたる用例であり，(12)～(16)は“VP+V 得+NP+VP”にあたる用例である。(15)(16)において主語の中心語をつとめる“革命”“表演”は，一般的な動詞と性質が異なり，他動詞と名詞の性質を兼ね備えた名動詞（朱 1982）である。しかし名動詞も述語性の要素であり，やはり事象を表すと解釈できるため(15)(16)のような例も“EVENT１+V 得+ EVENT２”を表す“VP+V 得+NP+VP”に属すとみなす。また，(17)～(20)は“NP+V 得+NP+VP”にあたる用例である。このうち(17)(18)において主語をつとめる“NP”（下線部）は，先行する文脈において表現された事象を指し示す名詞句である。また(19)(20)において主語をつとめる“NP”は，名詞“歌声”“态度”が述語性の要素“原地踏步的”“他的坦白的”によって修飾を受け構成される名詞句である。よって，これらの名詞句はいずれも事象を表現すると解釈できるため，“EVENT１”を表す“NP”とみなす。

実際の言語現象においては，“EVENT１”にあたる主述フレーズ“NP+VP”が“V”と同じ文中に生起せず，先行する文中に生起する場合がある：

(21) 这件事本不是没有挽回的余地，但是我前妻却大哭起来。引得丈母娘，大姨子都跑来了，问我：你什么意思罢。(王小波:我的阴阳两界)

(22) 赵甲端详他时，他也在端详赵甲。弄得赵甲心中惭愧，仿佛一个犯了错误的孩子不敢面对自己的家长。(莫言:檀香刑)

このような場合においても，下線部の“NP+VP”は“V”のプロファイルの対象であると解釈できる。よって(10)(11)と同様に(21)(22)のような例も，“EVENT１+V 得+ EVENT２”を表す“NP+VP+V 得+NP+VP”に属すとみなす。

本論は，以上の条件を備える用例を “EVENT１+V 得+ EVENT２”に該当するものとみなし，分析の対象とする。

なお，“NP+V 得+NP+VP”の形式にあたるものとして，上述の(17)～(20)以外に(23)～(26)のような例も見られる。しかし，これらの用例において主語をつとめる“NP”は「経験主(Experiencer)」或いは「動作の主体（Agent)」であり事象ではない。よって，この種の用例は“EVENT１+V 得+ EVENT２”には該当しないものとみなす。

(23) 景藩老汉气得嘴唇哆嗦，手脚颤抖，一时间话也说不顺畅了。(陈忠实:初夏)

(24) 当我把自己想的告诉她，她也吓得脸蛋白一阵青一阵，嘴里咝咝地说："真险啊。"（余华:活着）
(25) 赵国强急得嘴角上起了泡。（何申:多彩的乡村）
(26) 他害得咱们白追了他半天！（梁晓声:尾巴）

3.3. 動詞の漂白性

仮説を検証するための第一のポイントとして，"弄"の漂白性を挙げた。この点を明らかにするためには，先ず"EVENT１+V 得+EVENT２"の"V"として生起する動詞を調べた上で，それらの動詞の漂白性を比較する必要がある。本論は，動詞の漂白性を「意味が漂白的な動詞」と「意味が非漂白的な動詞」の二つのレベルに分けて定義し，"V"として生起する動詞を分類することとする：

①意味が漂白的な動詞　―　様態を表さない動詞。つまり，具体的な動作行為が概念に直接結びついていない動詞。例えば"害""吓""逼"など。

②意味が非漂白的な動詞　―　様態を表す動詞。つまり，直接的に知覚できる具体的な動作行為を表す動詞。例えば"笑""哭""看"など。

4. 分析結果

4.1. "V"をつとめる動詞の漂白性

分析の結果，"EVENT１+V 得+ EVENT２"の"V"として以下のような動詞が生起することが分かった："弄""吓""惹""气""搞""害""逼""引""逗""惊""吹""笑""叫""哭""吃""吵""喝""踢""骂""问""搅""压""看""闹""说""打"（計 26 個）[3]。これらの動詞を「意味が漂白的な動詞」と「意味が非漂白的な動詞」の二つのレベルで分類すると以下のようになる：

① 意味が漂白的な動詞　―　"弄""搞""吓""惹""气""害""逼""引""逗""惊"
② 意味が非漂白的な動詞　―"吹""笑""叫""哭""吃""吵""喝""踢""骂""问""搅""压""看""闹""说""打"

しかし，"弄""搞"は個々の文脈によって表す意味が異なり，「意味が漂白的な動詞」に属する動詞の中でも，特に漂白性が高いと考えられる。従って，"V"として生起する 26 個の動詞は，漂白性の違いによって以下のように三段階（①ａ，①ｂ，②）に分類することが可能であると言える：

[3] 生起数が 20 個未満の動詞は，分析の対象外とした。

図 1　“V”をつとめる動詞の漂白性

①意味の漂白的な動詞→ a.“弄”“搞”
b.“吓”“惹”“气”“害”“逼”“引”“逗”“惊”

②意味の非漂白的な動詞→ “吹”“笑”“叫”“哭”“吃”“吵”“喝”“踢”
“骂”“问”“搅”“压”“看”“闹”“说”“打”

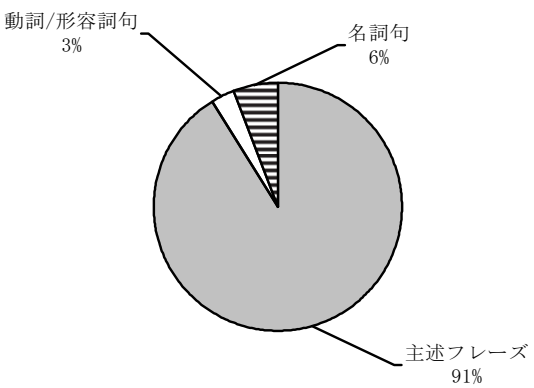
（高）
漂白性
（低）

4.2. “EVENT 1”の性質

4.2.1. “EVENT 1”の形式

いずれの動詞が“V”をつとめる場合も，共起する“EVENT 1”の形式は主述フレーズである比率が最も高い[4]。それに対して名詞句または動詞句（或いは形容詞句）である比率は低い。また，名詞句と動詞句（或いは形容詞句）とを比較すると，名詞句の比率の方が若干高いという傾向がみられた[分析結果の詳細は巻末の資料 1 を参照]。

図2　“EVENT 1”の形式の比率(“V”が“弄”の場合)



4.2.2. “EVENT 1”が表す意味の多様性

各用例を観察した結果，“EVENT 1”はある事象がどのように行われたのかを具体的に叙述すること，また“V”をつとめる動詞の漂白性の違いによって，共起する“EVENT 1”の多様性も異なることが分かった。まず，意味の漂白性が最も高い“弄”“搞”が“V”をつ

[4] ただし“吹”だけは例外であり，“吹”と共起する“EVENT 1”の形式は，名詞句である比率が最も高いという結果であった。

とめる場合，“EVENT 1”の叙述内容は多様であり顕著な傾向は見られなかった。これに対し，“弄”“搞”以外の意味が漂白的な動詞“吓”“惹”“气”“害”“逼”“引”“逗”“惊”が“V”をつとめる場合には，“EVENT 1”の叙述内容は「“V”がどのように行われたのか」に限られることが分かった。そして，意味が非漂白的な動詞が“V”をつとめる場合，“EVENT 1”には主に以下の 2 つの傾向が見られた。

[1]“V”として生起する動詞と同一の動詞が述語の構成要素となり，状語からの修飾を受けたり，或いは補語を伴う：

(27) 二喜听后嗯了一声，也不说话，翘着个肩膀在屋里看来看去，看得我心里七上八下。(余华:活着)

(28) 玉芬和玉玲互相看看，突然禁不住捂着嘴笑起来，笑得眼泪都出来了。(何申:多彩的乡村)

(29) 不知从哪儿又冒出了两个家伙，他们一并用穿着皮鞋的脚踢他，踢得他刚从地上支撑起身又倒下去，刚从地上支撑起身又倒下去……。(梁晓声:疲惫的人)

(27)～(29)において“V”をつとめる動詞は，“看”“笑”“踢”である。そして“EVENT 1”中の述語を構成する動詞も同じく“看”“笑”“踢”である。

[2]“V”として生起する動詞に対して下位語にあたる動詞が，述語の構成要素になる：

(30) 他忽然冷笑起来，笑得我内心发毛。(梁晓声:尾巴)

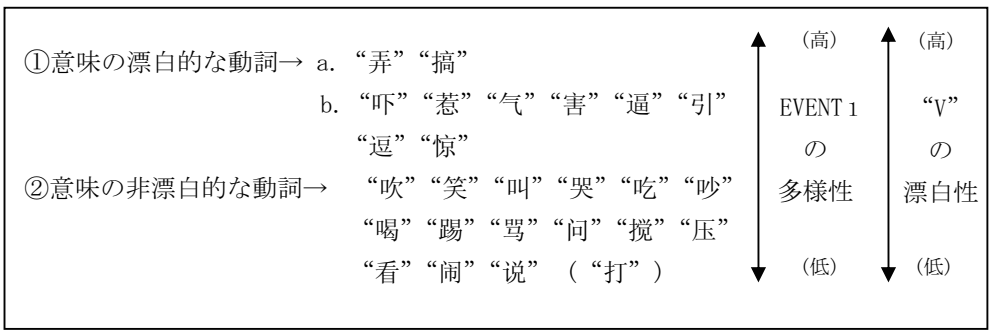
(31) 分局长冷漠地凝视着瘦高侦查员，直看得他不自在起来，把眼睛移向别处。(王朔:人莫予毒)

(32) 掌柜的让人把小伙计捆起来，放在酒缸边，饭不给他吃，水不给他喝，只是让人不停地搅动酒缸里的酒，搅得酒香四溢，馋得小伙计哀哭嚎叫，遍地打滚。(莫言:酒神)

(30)～(32)において，“V”は “笑”“看”“搅”である。そして“EVENT 1”の述語を構成する“冷笑”“凝视”“搅动”は，それぞれ“笑”“看”“搅”の下位語にあたる。

以上の結果を以下のようにまとめることができる：

図 3 “V”の漂白性と“EVENT 1”の多様性



つまり“V”の漂白性が高いほど共起する“EVENT 1”の多様性も高く，逆に“V”の漂白性が低いほど共起する“EVENT 1”の多様性も低いという傾向がみられる。

例外として，“打”は具体的な様態を表す動詞にも関わらず，共起する“EVENT 1”の多様性が高い。例えば“EVENT 1”の内容が(33)(34)のように「(人を) 殴る」という行為を叙述する用例もあれば，(35)～(38)のように「(雨が) 降る」「(空気) を入れる」「(弓などを) 射る」「(打撃) を与える」などの行為を叙述する用例も存在する。

(33) 他们听到我这样说，一下子都不笑了，都睁着眼睛看我，看了一会儿，穿花衬衣的人走过来，举起手来，一巴掌打下来，打得我的耳朵嗡嗡直响。(余华:我没有自己的名字)

(34) 有时不知哪位心情就突然不好了，上来二话不说，直接就扇马锐大耳刮子，打得他涕泪交流，到了学校脸上还留着手印子。(王朔:我是你爸爸)

(35) 雨越下越大，越下越紧，打得行人喘不过气，大街小巷也就路断行人。(刘绍棠:老侠金钟罩)

(36) 一个战士用自行车打气筒挨个给流光了血的猪打气,气嘴插进伤口的皮下,一下接一下,打得每只猪浑身发涨，饱满夸张，…。(王朔:看上去很美)

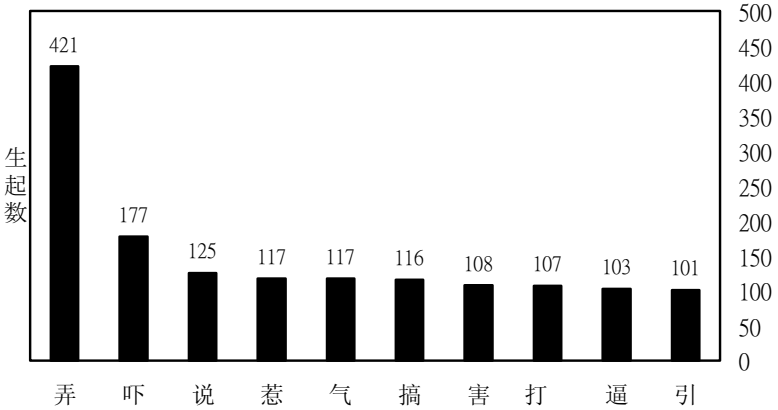
(37) 对付躲在铁网下的哨兵，我就射过去一个广口玻璃瓶，里面盛满了罗丝钉，打得那人在网子后面噢噢叫唤。(王小波:革命时期的爱情)

(38) 这样，我就被打成现行反革命，狗胆包天反对毛主席。批我，打我，打得我受不了时，我跑回村躲起来。(冯骥才:一百个人的十年)

4.3. “V”をつとめる各動詞の生起数

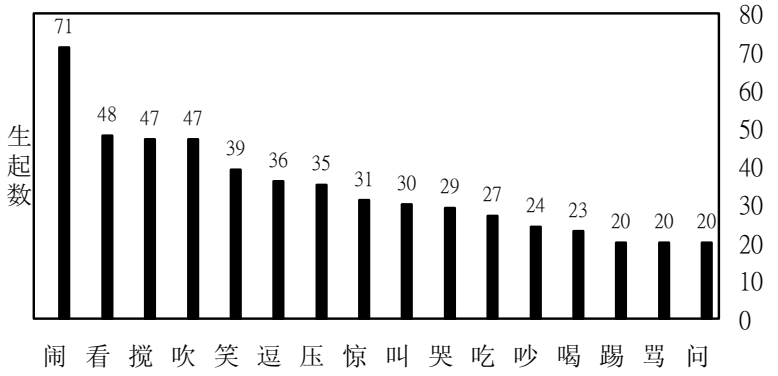
“V”として生起する動詞の中で，生起数が 100 以上の動詞は計 10 個である：“弄”“吓”“说”“惹”“气”“搞”“害”“打”“逼”“引”。そしてこれら 10 個の動詞のうち 8 つの動詞“弄”“吓”“惹”“气”“搞”“害”“逼”“引”は様態を表さない，つまり意味の漂白的な動詞である。また，“弄”はその中でも生起数が突出して多い。例外として，“说”“打”は非漂白的な動詞にも関わらず生起数が多く，それぞれ上位 3 位，8 位を占める（図 4 参照)。

図4　“V”をつとめる各動詞の生起数(1位～10位)



一方，生起数が 11 位～26 位の動詞 16 個中，14 個は意味が非漂白的な動詞である：“闹”“看”“搅”“吹”“笑”“压”“叫”“哭”“吃”“吵”“喝”“踢”“骂”“问”。その他 2 つの動詞“逗”“惊”は意味が漂白的である（図 5 参照)。

図5　“V”をつとめる各動詞の生起数(11位～26位)



5. 考察

5.1. “弄”のプロトタイプ性

以上の分析結果から「“V”の漂白性」「“EVENT 1”の多様性」「“V”の生起数」は，互いに相関する傾向にあることが分かった。そして“弄”は，“V”をつとめる動詞の中で漂白性が最も高いグループに属し，プロファイルの対象とする“EVENT 1”の多様性も高く，また生起数は最多であることが明らかになった。これらの結果は，“弄”が“V”として生起する動詞の中で，最も機能語に近い働きをしていることを示しており“弄”のプロトタイプ性を支持するものと考えられる。従って，本論の仮説は証明されたと言える。

5.2. 動詞のカテゴリー階層

また，分析結果から“EVENT 1”は“V”がどのように行われたのかを具体的に叙述することが分かった。よって“EVENT 1”の構成要素である述語は，“V”の下位概念に当たる意味を表すと言える。この関係をカテゴリー階層[5]の概念を以って捉えると，“EVENT 1”の述語は“V”の下位カテゴリー，つまり“V”に包含される事例と言える。図 6 は，Taylor (1995) が動詞のカテゴリーの類別をカテゴリー階層によって示したものである[日本語の解説は，辻(1996)による訳を用いた]。

図 6　カテゴリー化の二つの軸(動詞のカテゴリー)

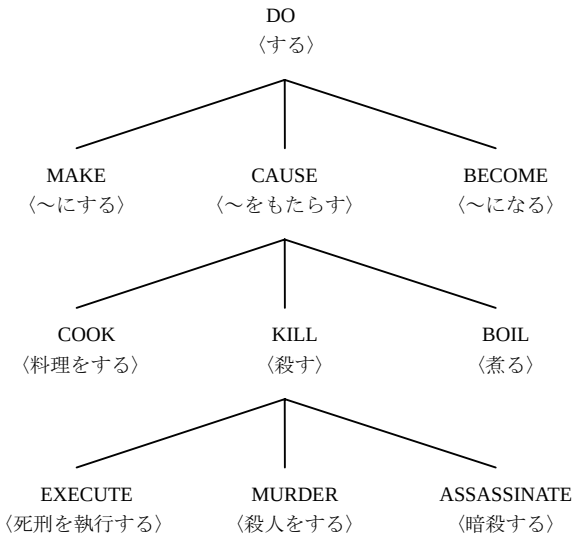


図 6 から分かるように，上位カテゴリーに属す動詞は，それよりも下位のカテゴリーに属す動詞をさらに抽象化，一般化したカテゴリーである。それに対して，より下位に属する動詞であるほど，その上位階層の構成メンバーよりも属性の数が多くなり（吉村 1995）より具体的である。また，階層構造において上位であるほど包含する下位成員は多く，下位であるほど少ないと言える。“V”の漂白性と“EVENT 1”の多様性が相関関係にあるのは，“V”は漂白性が高いほどカテゴリー階層の上位に位置し“EVENT 1”の述語となりうる下位成員を多数包含し，逆に漂白性が低いほどカテゴリー階層の下位に位置し，包含する下位成員も少ないためであると考えられる。“打”は意味が非漂白的な動詞に属するにも関わらず，共起する“EVENT 1”の多様性が高いという現象がみられるのは，この動詞が多義語

[5] 吉村(1995)は，「カテゴリー階層というのは事例間の関係を『縦から見た（paradigmatic)』カテゴリー観と捉えることができるかもしれない」と述べている。

であり[6]（赵杰 2001）包含する下位成員が比較的多いためであると思われる。“弄”は“V”として生起する動詞の中で意味の漂白性が最も高いグループに属すため，“V”をつとめる動詞の中でカテゴリー階層の最上位に位置し，最も多くの下位成員を包含すると考えられる。共起する“EVENT１”の多様性が高く，且つ“V”としての生起数が最多であるのは，“弄”のこの性質が反映された結果であると解釈できる。

5.3. “V”のプロファイル機能

上述したように，“V”は“EVENT１”の述語を事例として包含する関係にあるため，“V”は「類」，それに対して“EVENT１”の述語は「種」に相当すると言える。よって“V”が“EVENT１”の述語を指すということは，上位概念である「類」が下位概念である「種」を指すことになり，この関係はシネクドキー（synecdoche）[7]に相当するとみなせる。そして，このシネクドキーの関係が成り立つことで“V”が“EVENT１”をプロファイルすることが可能になると言える。すでに述べたように，意味の抽象度の極めて高い“弄”は，多くの下位成員を包含しているとみなせる。よって“弄”は，多様な動詞（句）との間にシネクドキーの関係を成り立たせることが可能であると考えられる。一方，分析結果が示すように“EVENT１”の主な形式は主述フレーズである。単独の動詞である“V”が，“V”に対して「種」に相当する動詞（句）を述語とする主述フレーズ全体をプロファイルするということは，シネクドキーの関係に加えて，部分が全体を指すメトニミー（metonymy）[8]の関係が成り立っていると解釈できる。したがって“V”が“EVENT１”をプロファイルする機能は，シネクドキーとメトニミーという二種類の比喩が二重に働くことで実現すると考えられる。

5.4. “V”をつとめる動詞の複合ネットワーク

以上の考察を踏まえて，“EVENT１+V 得+ EVENT２”の“V”として生起する動詞のプロファイル機能を総合すると，図７のような複合ネットワーク[9]を構成していると考えられる。

---

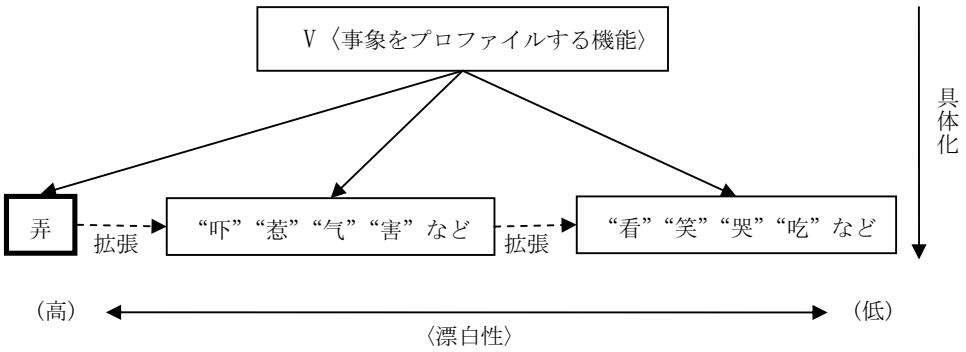
[6] 赵杰(2001)は，多義語の例として“打”を挙げている。また“打”は≪现代汉语词典≫において 25 種の意味項目が挙げられていることを指摘している。

[7] シネクドキー(提喩)は，包含関係(類と種の関係)に基づいて転義(意味のズレ)が起こる比喩で，上位概念で下位概念を指したり，下位概念で上位概念を指すものを言う(辻 2002)。

[8] 籾山(1997)は，メトニミー(換喩)について以下のように定義している：二つの事物の外界における隣接性，あるいは二つの事物・概念の思考内，概念上の関連性に基づいて，一方の事物・概念を表す形式を用いて，他方の事物・概念を表すという比喩。

[9] この複合ネットワークは，Langacker(1987)の提案するネットワークモデルの概念に基づき構築したものである。

図 7　複合ネットワーク



“弄”は，“EVENT１+V 得+ EVENT２”の“V”として生起し，“EVENT１”をプロファイルする機能を果たす動詞の一種である。図 7 の“V〈事象をプロファイルする機能〉”は，このような機能を有する動詞の，一般的なスキーマを示している。そして，四角で囲まれている動詞は，抽象的概念であるスキーマを具体化（instantiation）したものであり，すべてカテゴリーの成員である。その中でも“弄”は最も機能語に近い働きをする動詞と言え“V”をつとめる動詞のプロトタイプとみなされるため，太線の四角でマークされている。図下の「漂白性」は，カテゴリーの成員の意味の漂白性を示す。

“弄”と“吓”“惹”“气”“害”などの動詞は，意味が漂白的である点で類似している。しかし，“弄”は個々の文脈によって表す意味が異なる動詞であるが，“吓”“惹”“气”“害”などの動詞はこのような特徴を有さない。よって，両者は局部的に類似しているが同時に局部的に相違していると言える。また“看”“笑”“哭”“吃”などの動詞は意味が非漂白的な動詞であるため，この点では“吓”“惹”“气”“害”などの動詞と相違しているが，両者とも下位成員にあたる動詞（句）を有する点では類似している。したがって，両者も局部的に類似している一方で，局部的に相違していると言える。山梨（2000）は語彙の意味カテゴリーについて，「カテゴリーの成員は，すべてが同等の資格でそのカテゴリーに帰属するのではなく，そのカテゴリーの中心的な成員から周辺的な成員まで段階的なグレディエンスをもって分布している。カテゴリーの成員は，類似性のリンクを介してプロトタイプとしての典型的な成員まで段階的に関連付けられている」と述べている。この見方に基づくと，“弄”“吓”“惹”“气”“害”“看”“笑”“哭”“吃”は，プロトタイプである“弄”を中心に，“吓”“惹”“气”“害”から周辺的な“看”“笑”“哭”“吃”へと段階的に，類似性による連鎖を成して拡張していると言える。そしてこれらの動詞は，「“EVENT１”をプロファイルする機能を果たす動詞」というスキーマをもとに一つのカテゴリーを成し複合ネットワークを構成しているとみなすことができる。

6. 今後の課題

分析結果から，“搞”は“弄”と同様に，“V”をつとめる動詞の中で漂白性が最も高いグループに属し，且つ共起する“EVENT１”の多様性も高いことが分かった。しかし，生起数は“弄”よりも顕著に少ないという結果であった。これには，以下の二つの可能性が考えられる：

① 動詞のカテゴリーの階層構造において，“搞”は“弄”に包含される下位成員である。

② “搞”と“弄”は機能上住み分けをしており，“搞”が包含する下位成員のほうが“弄”の下位成員よりも少ない。

今回の分析からは，以上二つの可能性のうちいずれが現実の言語現象を正確に捉えるものであるかを検証することはできなかった。この点を解明することは，今後の課題であると言える。

また，“说”は意味が非漂白的な動詞であるにも関わらず，生起数が高く 3 位であった。“EVENT１”の形式が主述フレーズである用例について，“说”と共起する“EVENT１”の述語を観察すると，その殆どが“说”或いは“说”の下位語で構成されるものであった：

(39) 他第一次请我，就说“感觉真好”，说得我有点脸红心跳。(赵凝:眨眼睛的圣诞树)

(40) 而后，添枝加叶，把“文儿”上怎么说的，要搞什么运动了，风风雨雨描述一番，说得赫家老夫妇战战兢兢，如惊弓之鸟。(陈建功:辘轳把儿胡同九号)

また“EVENT１”の形式が名詞句である場合，その名詞句はすべて“这话”“这句话”“一番话”“一席话”など，先行する文脈において表現された発話，あるいは発話した行為を指し示すものであった：

(41) 万爷却问：“里院屋中那和尚是谁？”这话说得大伙全糊涂。(冯骥才:阴阳八卦)

(42) “别孤立我闪小雨呀，孩子嘛，心灵和友谊都是纯洁的，这会儿就分等，伤心呐。你不让小芳和小雨玩，我们小雨回去都哭成泪人了。”一席话说得在座的几位都挺尴尬。(王朔:刘慧芳)

このように“说”が“V”をつとめる場合，共起する“EVENT１”が表す意味の多様性は低いと言える。それにも関わらず“说”の生起数が他の非漂白的な動詞よりも顕著に高いのは，実際の文脈や状況において，“EVENT１+说得+ EVENT２”が表す「ある発話の行為の結果，ある状態変化が引き起こされた」という表現が高頻度で出現するためであると考えられる。従って“说”の生起数の多さは，その漂白性や共起する“EVENT１”の多様性を反映しているのではなく，語用論的な要素が強く影響していると思われる。以上から，プロトタイプ性を考えるとき，“V”をつとめる動詞によっては生起数がそのプロトタイプ性を判断する要素とはならない点に留意する必要があると言える。

目次ページに戻る。

参考文献

相原茂，荒川清秀，大川完三郎，杉村博文編 1995『中国語類義語のニュアンス』東方書店.

河上誓作 1996『認知言語学の基礎』研究社.

籾山洋介 1997「慣用句の体系的分類－隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に－」,『名古屋大学国語国文学』名古屋大学国語国文学会.

籾山洋介 2001「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」,『認知言語学論考』ひつじ書房.

山梨正明 2000『認知言語学原理』くろしお出版.

吉村公宏 1995『認知意味論の方法－経験と動機の言語学』人文書院.

ジョン・R.テイラー著, 辻幸夫訳 1996『認知言語学のための 14 章』紀伊國屋書店.

李临定 1986『现代汉语句型』商务印书馆.

刘月华等 2001『实用现代汉语语法(增订本)』商务印书馆.

楊凱栄 1989『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』くろしお出版.

赵杰 2001『汉语语言学』朝华出版社.

朱德熙 1982『语法讲义』商务印书馆.

Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. Ⅰ. Stanford: Stanford University Press.

Taylor, John R. 1995. *(Second Edition) Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory.* Oxford: Oxford University Press.

愛知大学中日大辞典編纂処編 1996『中日大辞典　増訂第二版』大修館書店.

辻幸夫編 2002『認知言語学キーワード辞典』研究社.

北京･商務印書館／小学館－共同編集 2002『中日辞典　第 2 版』小学館.

使用電子テキスト

- 阿城：闲话闲说/良娼/威尼斯日记/刘先生/艺术与催眠/戒台寺/阿城说侯孝贤/棋王
- 池莉：你是一条河/来来往往/让梦穿越你的心/云破处/热也好冷也好活着就好
- 王安忆：小鲍庄/妹头/我爱比尔/长恨歌/冬天的聚会/隐居的时代/喜宴
- 王芫：口红/各就各位/姜片/暧昧的瞬间/头发/北京人/投资时代的叙事/欺骗/旗袍
- 王朔：一半是火焰一半是海水/人莫予毒/千万别把我当人/我是你爸爸/玩得就是心跳/看上去很美/美人赠我蒙汗药/浮出海面/橡皮人/动物凶猛/过把瘾就死/顽主/一点正经没有/永失我爱/你不是一个俗人/我是“狼”/枉然不供/空中小姐/痴人/懵然无知/刘慧芳/无人喝采/给我顶住/许爷
- 王小波：2015/未来世界/我自己/夜行记/歌仙/寻找无双/杂文集/黄金时代/万寿寺/白银时代/我的阴阳两界/革命时期的爱情/变形记/战福/红拂夜奔
- 汪曾祺：羊舍一夕/小学校的钟声/徙/水母 葵 雍故事的食物/王全/拟故事两篇/七里茶坊
- 王兆军：绿帽子/且道兵法/遥远的思念
- 王蒙：十字架上/白先生的梦/神鸟/来劲/满涨的靓汤/他来/白衣服与黑衣服/致爱丽丝/焰火/没有/组接/郑重的故事
- 贾平凹：丑石/天马/冬景/古土罐/平凹作画记/吃烟/在米脂/好读书/佛事/听来的故事/坐佛/我的老师/我是农民——乡下五年记忆/李相虎/李广瑞/男人眼中的女人/怀念金铮/制造声音/延安街市记/拓片闲记/朋友/治病救人/致李珖/致穆涛书/致萧云儒书/笑口常开/茶杯/商州初录之小白菜/商州初录之摸鱼捉鳖的人/祭父/陶俑/答人问奖/腊月・正月(梗概)感谢混沌佛像/敲门/壁画/乡党王盛华/关于父子/动物安祥/变铅字的时候/孙存蝶/对月/树佛/残佛/秃顶/记五块藏石/说话/读书示小妹十八生日书/辞宴书/进山东/闲人——以此文献给我商州的那些朋友/风雨/龙柏树
- 何申：多彩的乡村/年前年后/热河大兵/穷县
- 叶兆言：只坏一点点/走进夜晚/花煞/花影/重见阳光的日子/路边的月亮/枣树的故事/烛光舞会/小杜向往的浪漫生活/非法买卖/不娶我你后悔一辈子/哭泣的小猫
- 韩少华：少管家前传
- 韓少功：暗示/老狼阿毛/强奸的学术/胡思乱想/文学的根/爸爸爸/岁末恒河/性而上的迷失/呀哇嘴巴/时间的作品
- 关仁山：风暴潮/天壤
- 谌容：懒得离婚/梦中的河
- 邱华栋：哭泣游戏/在我们的时代里/黑暗河流上的闪光/公关人/豹子的花纹/电话人
- 高行健：一个人的圣经/灵山/有只鸽子叫红唇儿/绝对信号/车站/读王蒙的《杂色》/为了自救而写作
- 浩然：夏青苗求师/新媳妇
- 洪峰：中国足球梦难圆/苦界/瀚海
- 残雪：灵魂的城堡——理解卡夫卡/天空里的蓝光/激情通道/山上的小屋/追求者

- 史铁生：务虚笔记/死国幻记/我的遥远的清平湾/秋天的怀念/理想的当代文学批评/写作四谈/有关庙的回忆/我与地坛/姻缘/病隙碎笔/答自己问
- 徐坤 :春天的二十二个夜晚/一间自己的屋子/女球迷/甲 A 甲 A/网上有人/我爱机器/海狮海牛，半斤八两/悲哉，中国球迷/遭遇爱情/从语言到躯体/厨房/热狗/“伊妹儿”是个好东西/也说网络文学/女娲/白话/含情脉脉水悠悠/沈阳啊沈阳/球迷不转会/期望爆出冷门从艺之道/关于网上侵权之我见/戏剧性的中土之战/诗可以怨球可以射
- 徐小斌：出错的纸牌/玄机之死
- 苏叔阳：旋转餐厅/榆棠院的罗曼斯/老舍之死/老少木匠/我是一个零/旅途
- 苏童：１９３４年的逃亡/一个叫板墟的地方/八月日记/女孩为什么哭泣/井中男孩/木壳收音机/与哑巴结婚/另一种妇女生活/平静如水/死无葬身之地/你好，养蜂人/美人失踪/祖母的季节/祭奠红马/妇女生活/来自草原/樱　桃/环绕我们的房子/罂粟之家/饲养公鸡的人/一朵云/一个朋友在路上/十九间房/小莫/什么是爱情/水神诞生/他母亲的儿子/外乡人父子/民丰里/肉联厂的春天/妻妾成群/桂花树之歌/逃/徽州女人/暧昧的关系/桥边茶馆/烧伤/纸/飞越我的枫杨树故乡
- 谈歌：年初/大厂/《大厂》续篇/天下大事/天下荒年/年底/的爷/城市行为/城市热风/雪崩/热风/车间/大忙年/山问/天下匆匆/天下滔滔/官司/城市/城市警察/秦琼卖马/意外/绝士
- 张炜：怀念黑潭中的黑鱼/美妙雨夜
- 赵凝：眨眼睛的圣诞树/城市梦游者/跳楼的少女琼/两只麻木的苹果
- 张贤亮：土牢情话/河的子孙/绿化树/我为什么不买日本货/男人的一半是女人/习惯死亡/边缘小品/浪漫的黑炮/灵与肉
- 张抗抗：北极光/牡丹的拒绝/埃菲尔塔沉思/走过冬天，走过你自己
- 张承志：心灵史/荒芜英雄路/九座宫殿/西省暗杀考/北方的河/黑骏马/大坂/北望长城外/雪路/春天/美丽瞬间
- 张辛欣：在同一地平线上/All man Brothers(人皆兄弟)/我在哪儿错过了你？
- 陈建功：放生/耍叉/北京滋味/平民北京探访录/消费再记/辘轳把儿胡同九号/前科/四合院的悲戚与文学的可能性/找乐/消费六记/飘逝的花头巾
- 陈忠实：白鹿原/四妹子/梆子老太/失重/十八岁的哥哥/夭折/康家小院/最后一次收获/丁字路口/七爷/土地——母亲/小河边/山洪/尤代表轶事/心事重重/毛茸茸的酸杏儿/打字机嗒嗒响/田园/石头记/石狮子/立身篇/回首往事/地窖/早晨/兔老汉/到老白杨树背后去/夜之随想曲/幸福/征服/初夏/信任/南北寨/珍珠/害羞/徐家园三老汉/旅伴/送你一束山楂花/鬼秧子乐/蚕儿/第一刀/舔碗/霞光灿烂的早晨/两个朋友/乡村/枣林曲/桥/灯笼/猪的喜剧/窝囊/绿地/轱辘子客/马罗大叔
- 陈染：私人生活/无处告别/破开
- 铁凝 :午后悬崖/B 城夫妻/小郑在大楼里/世界/永远有多远/省长日记/寂寞嫦娥/嫦娥/树下/闲话做人/棉花垛/小格拉西莫夫/小黄米的故事/四季歌/安德烈的晚上/哦，香雪/第十二夜/对面/门外观球

- 邓友梅：《铁笼山》一曲谢知音/我们的军长/邵氏兄弟/据点/那五/追赶队伍的女兵们/烟壶
- 莫言：拇指铐/酒神/透明的红萝卜/檀香刑/红蝗/红树林/儿子的敌人/三十年前的一次长跑比赛/牛/我的朋友王树增/蝗虫奇谈/师傅越来越幽默/难忘那带着口罩接吻的爱
- 毕淑敏：生命/翻浆/不宜重逢/血玲珑/红处方
- 冯骥才：一百个人的十年/啊！/铺花的岐路/雾中人/走进暴风雨/爱之上/阴阳八卦/斗寒图/市井人物/石头说话/末日夏娃/到底有没有罪？/高女人和她的矮丈夫/崇拜的代价
- 毛志成：京郊小镇风情/落花时节又逢君/聪明误/初渡/哗变杀遂
- 余华：在细雨中呼喊/许三观卖血记/一个地主的死/世事如烟/古典爱情/此文献给少女杨柳/我能否相信自己/命中注定/河边的错误/祖先/蹦蹦跳跳的游戏/战栗/现实一种/鲜血梅花/活着/一九八六年/十八岁出门远行/他们的儿子/四月三日事件/死亡叙述/我没有自己的名字/往事与刑罚/夏季台风/偶然事件/两个人的历史/爱情故事/难逃劫数
- 陆涛：造化/我爱我爸
- 刘恒：白涡/黑的雪/狗日的粮食/贫嘴张大民的幸福生活
- 刘绍棠：二度梅/蒲柳人家/狼烟/运河的桨声/水边人的哀乐故事/花街/蒲剑/渔火/鱼菱风景/老侠金钟罩/我的四十婚庆/孤村/蛾眉/蛾眉/笔耕农
- 刘心武：人生一瞬/抱猫闲话/佩尔森与公主/灯下拾豆/立体交叉桥/栖凤楼/第八棵馒头柳/话堵话
- 刘醒龙：城市眼影/寂寞歌唱/秋风醉了/农民作家/十八婶/孔雀绿/我们香港见/冒牌城市四题/清流醉了/暮时课诵/小小无锡景/去老地方/村支书/大路朝天/活着真好/送葬的警示/现实主义与“现时主义”
- 刘索拉：混沌加哩咯楞/你别无选择/狐皮
- 梁晓声：尾巴/冉之父/我的大学/泯灭/狡猾是一种冒险/感觉日本/北京人速写之一/激杀/这是一片神奇的土地/京华闻见录/表弟/疲惫的人/父亲/母亲/蜻蜓发卡/讹诈/钳工王
- 林白：玻璃虫/同心爱者不能分手/瓶中之水/时尚四愿
- 霍达：穆斯林的葬礼/补天裂/沉浮/年轮/魂归何处/国殇/不要忘记她/京韵第一鼓/故人情/秦台夜月/猫婆/罢宴/红尘/万家忧乐/保姆/革面/追日者/绝症/马拉松宴会
- 路遥：人生/平凡的世界/夏/在困难的日子里/我和五叔的六次相遇/黄叶在秋风中飘落/小镇上/匆匆过客/我为我心爱的人儿/姐姐/医院里/风雪腊梅/你怎么也想不到/惊心动魄的一幕/一生中最高兴的一天/月夜静悄悄/早晨从中午开始/杏树下/青松与小红花/痛苦/卖猪

以上のコーパスデータは以下のホームページよりダウンロードしたものである：
http://www.easysea.com/xiandai/index.htm http://www.millionbook.com/index.html
http://www.shuku.net:8082/novels/cnovel.html

目次ページに戻る。

資料１　　分析結果表

順位（生起数）	“V”として生起する動詞	“EVENT1”の形式			生起数総計
		主述フレーズ	動詞句/形容詞句	名詞句	
1	弄	383	13	25	421
2	吓	169	4	4	177
3	说	79	0	46	125
4	惹	103	0	14	117
5	气	114	0	3	117
6	搞	101	0	15	116
7	害	98	1	9	108
8	打	86	0	21	107
9	逼	95	0	8	103
10	引	78	4	19	101
11	闹	63	2	6	71
12	看	46	0	2	48
13	搅	28	0	19	47
14	吹	16	0	31	47
15	笑	39	0	0	39
16	逗	25	2	9	36
17	压	22	3	10	35
18	惊	24	1	6	31
19	叫	25	2	3	30
20	哭	29	0	0	29
21	吃	27	0	0	27
22	吵	17	0	7	24
23	喝	21	0	2	23
24	踢	20	0	0	20
25	骂	19	0	1	20
26	问	13	0	7	20

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

“被”と自然受身文に関する一考察

伊藤　大輔
（東京外国語大学大学院博士前期課程）

0. はじめに

（1） a. The door was opened （by him）.
b. The door opened.

open は，それぞれ（1a）では受動態，（1b）では自動詞として用いられている。

興味深いことに，*open* に対応する中国語の動詞“打开”の例を検索すると，やはり次のような二つの形式に用いられた例を見つけることができる。以下特に注記のない場合，例文の日本語訳は本稿筆者による。

（2） a. 门被（他）打开了（ドアが（彼に）開けられた）
b. 门打开了（ドアが開いた）

（2a）（2b）は一見，それぞれ（1a）（1b）に似ている。（2a）は被動文[1]で，patient（以下「受事」とする）が主語位置に繰り上げられ，かつ agent（以下「施事」とする）が付加詞的に表されている点において，（1a）に類似する。また，括弧で示してある通り，施事が頻繁に現れなくなる点においても，両者は共通する。（2b）は自然受身文，ないし意味上の受身文などと呼ばれるものであるが，受身の明示的な標識を伴わず，かつ受事のみが主語位置に現れている点において（1b）に類似する。

（2a）と（2b）は受事を文頭位置に置くという点で共通するが，両者が共存する以上，何らかの意味的・機能的差異が存在する可能性は安易に否定できない。以下本稿第 1 節では，先行研究におけるこの差異に関する言及を取り上げ，第 2 節では被動文の持つ「不如意」の意味合いに対する本稿の立場を明らかにする。第 3 節以降では，被動文と自然受身文の差異について，筆者のコーパスから見つかった用例を通じ新たな説明を試みる。

1. 先行研究に見る被動文と自然被動文の差異

1-1.

刘他（2001:753-54）は，まず中国語には「話題―説明」（topic-comment と捉えてよいと思われる）という形式の文があり，その話題が受事であることが少なくないと述べる。それが（2b）のような自然受身文に相当する。続いて被動文の主要な意味について「受事がある動作行為の影響により変化を受ける」と規定している。典型的には，話者にとって不

[1] 以下本稿で被動文と言う場合は，“被”の用いられたもののみを指すことにする。

愉快であったり，話者が損害を受けたり何かを失くしたりといった状況に用いられるが，一部にはそういった意味合いを帯びないものもあるという。また，文脈上施事と受事の関係を明確にするためだけに“被”が用いられることもあるという。

1-2.

楊（1989:329-30）は，被動文について「事態を引き起こした主体が意識にある」と述べる一方，自然受身文については「事態が引き起こされた結果にしか関心がない」と指摘する。被動文は「明らかに受身の意味しか表さない」（すなわち文頭の名詞は客体としか解釈できない）という。自然受身文は文頭の名詞を主体とも客体ともみなしうるが「どちらであるかは必ずしも明白ではない」，とも述べている。

1-3.

吕（1987:179）によれば，被動文と自然被動文の違いは「强调被动的程度不同（被動を強調する程度の違い）」および「感情色彩的差异（感情的色彩の違い）」であるという。被動文が受身の意味を強調しており，多くは望ましくない感情的色彩を含むのに対し，自然受身文は受身の意味が希薄で，感情的な色彩を帯びない中性の表現であるという。

1-4.

大河内（1982:331）には，「中国人にとって，『被字句』以外の受事主語文は一向に受身という意識がない」とある。なお，「対格の主題化は容易に成立するが，これらは主語との格関係からいえば受身文である」（同 323 頁）ともある。すなわち対格の主題化と自然受身文を同一のものとみなしており，それを「題述文」と結論づける。

1-5.

井出（1990）は，同じ動詞が被動文と自然受身文の両方に用いられ得るケースに言及し，被動文の“被”の持つ意味を次のようにまとめている。すなわち，①自分の思うままにならないことを強調する，②客観的態度を示す，③動作のもたらした結果を強調する，の三点である。しかしそれで解釈できない例があることも認めており，それらについては「単に外国語の受け身の影響で，特別な意味のないもの」としている。

2. 「不如意」の受け手

1-3 における吕の「望ましくない感情的色彩」，また 1-5 における井出の「思うままにならない」の他，「不如意」，「被害，迷惑」など，研究者によって用語はまちまちであるが，被動句が何らかのネガティヴな意味合いを表すというのは定説である。そこで問題となるのが，マイナスの影響を受けるのが誰なのか，ということである。本節では，データの解釈に先立ち，その点に対する本稿の立場を明らかにしておく。

刘他（2001:754）は，「不愉快，損失」が受事または話者にとってのものであると述べ，“门被撞开了”（ドアはぶつけられて開いてしまった）を前者の例としているが，ドアが不愉快さを感じると捉える解釈には疑問の余地がある。

ところで，動詞の語彙的意味自体に好ましくないものやニュートラルなものがあるとする議論が見受けられる。例えば楊（1989）は，次の（3ab）の適格性の差を，“推翻”（倒す）が好ましくない事態であるのに対し，“建立”（打ち立てる）が好ましい事態であるという点に帰す。

（3） a. 旧政权被人民推翻了。（旧政権が人民に倒された）

b. *新政权被人民建立了[2]。（新政権が人民に打ち立てられた）

本稿はこの立場をとらない。その理由は，「好ましい/好ましくない」という意味合いはあくまで相対的なものであると考えるからである。たとえば“推翻”という出来事は，それによって被害を受けたと感じられる者にとっては好ましくない事態であるが，それに対立する立場の者にとっては好ましい事態かも知れない[3]。「好ましい/好ましくない」という意味合いは，ある特定の立場に視点を置いて初めて生じるものであると考えられる。

さて，杉村（1992:51-52）は次のような例を挙げ，「被動文の伝える遭遇に発する不如意の波及先を受事までで止め話者にまで及ぼさないことの不合理さ」を指摘する。

（4）他那把钳工凳，已经被吕秀梅坐了。

彼の組立工用の椅子はすでに呂秀梅に腰掛けられていた。（原文訳）

これについて杉村は，「『呂秀梅が彼の組立工用の椅子に腰掛けていた』ことの影響が話者にまで波及し，何らかの不愉快・迷惑を与えて不如意な感情を抱かせた結果，話者はその感情の発露を被動文の採用に見出した」と述べるが，本稿は厳密にはそれとも少し解釈を異にする。本稿は，（4）が話者（小説の作者）の完全な創作であれ，話者が実際に現場に居合わせたのであれ，不如意な感情を抱いたのはあくまで文中の誰か（ここではあり得る候補の中から仮に「彼」を挙げておく）であり，話者が不如意の感情を抱いたとは考えない。そうではなく，話者はこの事態を不如意と感じ取っている「彼」の立場から出来事を述べた，と考える[4]。もし仮に「彼」を嫌っている人物が他にいて，「彼」が不如意な状況に陥っているのを小気味よく思っているとしたら，話者はその人物の立場から「呂秀梅が彼の椅子に腰掛けてくれた」などと言うことも可能であろう。（4）において，話者がそう

---

[2] （3）に関連して興味深いのは，李临定（1986:126-27 他）に見られる動詞分類である。彼は動詞を甲類（“脱，揭，关，拆，扔”など除去・閉鎖の意味を表すもの）と乙類（“穿，贴，开，搭，拣”など獲得・開放の意味を表すもの）の二つに分け，前者が“了”を伴って被動文に出現することが可能であるのに対し，後者はそれが不可能であると指摘する。“推翻”は動作以前に働きかけの対象が存在する点で甲類に近いが，“建立”は動作の結果ある事物が出現する点で乙類に近い。この甲類と乙類のコントラストは，「好ましい/好ましくない」という判断基準によって（3ab）の可否を説明することへの一つの代替案となりそうである。

[3] 下地（1999:110-11）は，“专制政权被人民群众推翻了”（専制的な政権が人民に倒された）を挙げ，「主語がマイナスの影響を被っていることを，話し手が逆に喜んでいる」と指摘する。

[4] 話者は，不如意な感情を抱いた者の視点から出来事を述べたからといって，その話者に感情移入しているとは限らない。不如意の感じ手の立場からものを言っていても，その時の話者の心情は様々であろう。たとえば，「奴の椅子が座られてしまっていい気味だ」のように，傍点部で「奴」にとっての不如意さを示しつつ，下線部で話者の愉快な心情を示す，という言い方は可能なのではないか。注 3 参照。

した数ある立場の中から「彼」寄りの立場を選んだということが，被動文という形式の採用に反映されていると本稿は仮定するのである。久野（1978:127-282）の用語に従えば，話し手が「彼」に共感[5]しているということになる。

このように，被動文により表される事象には，その事象そのものにより，自らの思うままにならない，時に望ましくない（後者は前者に含まれると考える）何らかの影響を受ける人物が存在すると考えられる。ここで，このような人物を益岡（1991）に倣って「潜在的受影者[6]」ないし省略して単に「受影者[7]」と呼ぶことにする。潜在的受影者とは，当該の出来事指す。受影者は主語など動詞の項に限られず，あらゆる手段で文中に明示・暗示されるものと考えておく。

まとめると，本稿は話者が潜在的受影者に共感（ないし自己同一視化）し，その視点から事象を述べたものが被動文であると仮定する。“被”は話者がそうした人物の視点に立っていることを示すマーカーである，と言い換えてもよい。

李临定（1980:411）は，被動文の「貶義」を主語にのみ帰することや，動詞の「褒貶義」にのみ帰することを批判するが，上に述べた本稿の解釈はこれと立場を同じくする。

3. コーパス中の用例の検討

以下特に注記のない場合, 例文は全て筆者の手元にあるコーパス[8]より抜粋したものである。

まず，“打开”（開く・開ける）を検索して確認された例から，施事の伴う被動文（5a），施事の伴わない被動文（5b），自然受身文（5c）を各 1 例ずつ示す。

（5） a. 就是那扇门，它突然被谁慢慢地打开了。（そのドアが，突然誰かに開けられた。）

b. 她听到一扇门被打开了，应该是王洪生出现在门口。

（彼女はドアが開けられる音を聞いた。王洪生が戸口に現れたのに違いない。）

c. 卧室的门打开了。（寝室のドアが開いた。）

もっとも，“打开”1125 例のうち，（5c）のような自然受身文が 145 例[9]あるのに対し，（5ab）のような被動文は 9 例にとどまる。その他は主語位置を施事が占める他動詞的用法[10]が大多数を占めるので，数を見る限り受事を主語とする形式の出現頻度は低く，その中でも

---

5 「文中の名詞句 x の施事対照に対する話し手の自己同一視化を共感（Empathy）と呼び，その度合い，即ち共感度を E（x）で表わす。共感度は，値 0（客観描写）から値 1（完全な自己同一視化）迄の連続体である。」（久野 1978:134，傍点は原文による）

6 「『潜在的受影者』とは，受影受動文の表面には現れないけれども，その受動文が叙述している事象から何らかの影響を受ける存在のことである」（益岡 1991:111）。

7 木村（1992）で提案されているような，動詞の項が持つ意味役割としての「受影者」でない点に注意。

8 主としてインターネット上に公開されている小説をランダムに収集しテキストファイル化したもので，東京外国語大学博士後期課程の須藤秀樹氏より御提供頂いたものである。合計 230 編（約 1554 万字）で，苏童 39 編，余华 20 編，张爱玲 11 編を初めとする現代文学の他，金庸の武侠小説 15 編，また海外作品の翻訳 55 編を含む。

9 “打开的杂志”のような例において，“打开”は施事の省略された他動詞的用法か，それとも自然受身であるかの判定がしにくい。このような例は，自然受身文の総数に含めていない。

10 ここでは，直後に目的語を伴うものの他，前置詞“把/将”によって目的語が動詞に前置されたものを含む。

（5ab）のような例は特に稀なものであると言える。

“打开”は，施事の働きかけだけでなく受事の結果状態まで含意する動詞なので，木村（1981）などで指摘されている被動文成立の条件を満たした典型的な例である。それを了解した上，第 2 節に述べたような別の観点から，被動文の特性について説明を試みる。

3-1.

まず，（5ab）のような被動文について検討する。“被”の後に施事が伴うのは，（5a）と次の（6）の 2 例であった。

（6） 成自学从身边取出钥匙，去开石牢之门，那知一转之下，铁锁早已被人打开。他“咦”的一声，只吓得面无人色，心想：“铁锁已开，老疯子已经出来了。”

（成自学は懐から鍵を取り出し，石牢の戸を開けにいった。すると，鉄の錠が既に誰かに開けられているのに気づいた。彼は「えっ」と声を挙げ，驚きのあまり青ざめ，「鉄の錠が開いて老瘋子が出て行ってしまったのだ」と思った。）

“被”の後に施事がある場合とない場合を分けたのは，次のような指摘があるからである。豊嶋（1988:107）は，“被”を用いなければ受事主語文が構成できない場合に限り，“被”が「不本意」の意味を行使せずに用いられることもあると述べる。具体的には次のような例を挙げる。

（7） 不本意な意味なしに“被”文が用いられる場合

①述語が“V 为（做）+賓語～”

现在不是被称为中国通吗？（今は「中国通」と呼ばれているではないか）

入学不久我便被举为学校的皇后。（入学後まもなく私は学校の女王に選ばれた。）

②述語が“V 到+賓語～”

小道静被送到学校里去读书。（小道静は学校に送られ勉強させられた。）

幸而这两位老太太都遵循着自然规律，到时候就被亲友们护送到坟　地里去。

（幸いこれら二人の老婦人は自然の定めに従い，やがて親友たちによって墓へ送られた。）

③述語が心理活動を表すもの

他被信中洋溢着的温柔情意和热烈而又含蓄的告白深深感动了。

（彼は手紙の中の暖かい心遣いと熱く含蓄に富む告白に深く感動させられた。）

人们立刻被那好庄稼吸引住了。（人々はすぐその優れた作物にひきつけられた。）

④情景の描写（自然現象）

月儿忽然被云掩住。（月が突如雲に覆われた。）

河水被晚霞照得有些微红。（川の水は夕日に照らされてほのかに赤い。）

施事が現れている（5a）と（6）から“被”を取り去って“它突然[ ]谁慢慢地打开了”，“铁锁早已[ ]人打开”などとすると，おそらく文法的に許容されないか，少なくとも談話機能上は有標の文になるということがすぐに理解される。このような場合の“被”は，

「不本意」の意味を帯びる場合よりも機能語化しており，単に施事を導入する機能を果たしていると考えることもできよう。

（5a）と（6）はいずれも自然現象ではないが，情景描写という点で④に当てはまる可能性がある。刘他（2001:25-27）によれば，描写とは叙述と対立する概念で，時間軸上のプロセスのない静態の出来事を表すということであるが，（5a）の下線部がそれに当てはまるか否かについて客観的な根拠を提示するのは容易ではない。下線部より前の部分がむしろ付帯状況の描写で，下線部が動的な前景的出来事と考えられるが，（5a）に不本意の意味を読み取る積極的な動機もない。本稿は第 2 節に述べたように，“被”の不如意の意味を重要視する立場にあるが，仮にそうした意味を全く帯びないものがあった場合，（7）のような文法的理由も考慮する必要があるということを，ここで確認しておく。

一方（6）については，“早已”（既に）とあることから静態の情景と捉えることが可能であるが，ここではそれをひとまず措いて，第 2 節で明らかにした立場に則った説明を試みる。（6）は 2 文目の波線部（“吓得面无人色”）から，事態が“成自学”にとって不本意であることが分かる。こうした人物が，2 節で述べた潜在的受影者に当てはまる。そして話者は，その立場に共感する立場から事態を述べていることも文脈から読み取れる。そうした話者の視点が，被動文の使用にも現れているという可能性は，少なくとも（6）については指摘し得る。

3-2.

続いて，“被”の後に施事の伴わない例を見る。

（8）a. 这是自有天地以来存在的永恒宁静，除此之外，我尚有何求？　也不知过了多久，直到大门被打开的声音传来，我们才慌忙分开。

（それは天地が生まれて以来の永遠の静けさだった。これ以外に私は何を求めようか。どれくらいの時が過ぎたろうか，ドアが開けられる音が聞こえてくると，私達はようやく離れた。）

b. 他悚然一惊：仿佛觉得有一扇看不见的门突然被打开了，阴冷的穿堂风从另外一个世界吹进了他寂静的房间。

（彼はぞっとした。まるで目に見えないドアが突然開かれ，別の世界から彼の静かな部屋に冷たい風が吹き込んできたかのような感じだった。）

これらは，“被”の伴う動詞が，潜在的受影者にとって望ましくない事態を表すと考えられる例である。

まず（8a）は，一組の男女が静かに抱き合っていた場面であるが，それを遮るかのようにドアが開かれ慌てて離れている。ここでドアが開いて望ましくない影響を受けているのは，ドアというよりもむしろ抱き合っていた二人である。このような人物が，上に述べた潜在的受影者の定義に当てはまる。また（8b）は，“他”が自らのぞっとするような状況を，ドアが開かれ寒風が吹き込んできた状況になぞらえているが，望ましくない影響を受

けるのはやはり“他”である[11]。このように，前後の文脈から潜在的受影者の存在が容易に理解される場合については，吕（1987）の言う「望ましくない感情的色彩」という指摘は的を射ていると言えそうである。

次は，（8）とは少し状況が異なる。

（9）a. 当他返回招待所的时候，见他房门口停了一辆小轿车，而且他的门也被打开了。他不知发生了什么事，赶忙走前去。

（招待所に帰ってくると，彼は自分の部屋の入り口に一台の車が停まっていて，かつドアが開かれているのが見えた。彼は何事か分からず，慌てて歩いていった。）

b. 门咚地一下被打开了，我还没明白过来发生了什么，就被李秀英拉进了被窝。

（ドアがガタリと開かれ，私は何が起きたか分からぬうちに李秀英に布団の中に引き込まれた。）

c. 但是森林没有料到的是他们两人突然果断地站了起来，接着以同样的果断朝门口走去。门被打开后又被关上。然后他们已经不再存在于屋内，他们已经属于守候在屋外的夜晚。接着那门又被打开又被关上，森林看到那个男孩也出去了。

（しかし森林の予想に反し，二人は迷わず立ち上がり，迷わず入り口へ向かって歩いて行った。ドアが開かれ，閉じられた。そして彼らは部屋からいなくなり，部屋の外で待つ闇の人となってしまった。やがてそのドアが再び開かれ，閉じられ，その男の子が出て行くのも見えた。）

（9a）は，自分の部屋のドアが開いているのを見て取り乱しており，また“不知发生了什么事”（何事か分からず）とあることから，自分の予想していなかった事態に遭遇していることが分かる。また，（9b）は“还没明白过来发生了什么”（何が起きたか分からぬうちに），そして（9c）は“没有料到”（予想に反し）とあることから，“被”を含む部分とその前後の文脈がそれぞれ“我”，“森林”の意図に反する事態であったことが窺われる。これは事態が「望ましくない」と断定できる（8）とはやや性質を異にするが，受影者にとって自らの意図しない出来事を表している点において共通する。これについては，井出（1990）の「自分の思うままにならないことを強調する」という指摘が当てはまるようである。なお，この「思うままにならない」は「望ましくない」よりも緩い規定で，後者は前者の下位分類の一つであると考えることもできる。

もっとも，このような解釈を行う根拠に乏しい例もある。既に挙げた（5b）はそれに当たる。

なお，ここで少し本題からそれるが，“被”の直後の施事の有無という点について触れておきたい。“被”の後に名詞を伴わず，直接動詞が続いている形式については，元々そこにあった名詞が省略されたものと説明されることが多い。たとえば龚（1980:339）は，文の中心的意味が受事に移り，誰が施事かについての関心が薄い場合は，施事名詞を持ち出さなくてもよいと述べる。こうした説明は，施事名詞を省略する理由の説明にはなって

[11] ここは“觉得”（思う）の内容なので，より正確には，「“他”の想像上の“他”自身」ということになる。

いても，施事名詞のみを省略して“被”を残す理由の説明にはなっていない。“被”が施事名詞を導く介詞であるというのなら，その介詞フレーズ全体を省略した自然受身文（NV）のような形式を用いれば済むはずである。にもかかわらず N“被”V という形式があるということは，“被”のある形式とない形式が，何らかの意味的理由により使い分けられていることを示唆しているが，本稿ではこれ以上立ち入らない。以下，施事名詞の有無にはこだわらず，“被”の用いられた文をまとめて被動文として扱う。

3-3.

次に，自然受身文について検討する。

（10） a. 突然铁门向里打开，两人出其不意，一齐摔了进去。

（突然ドアが内側に向かって開くと，二人は不意を突かれ，一緒に倒れ込んだ。）

b. 窗户不知何故复又打开，此刻窗外风雨正猛。

（窓はどういうわけかまた開いた。その時外は暴風雨が吹き荒れていた。）

これらは波線部より，それぞれ事態を思いがけないものと捉える潜在的受影者の存在が見て取れる。これは被動文の状況と基本的に変わらない。しかし，自然受身文には次のような例も見られる。

（11） a. 镇南王和玉虚散人之间本来甚是尴尬，给段誉这么插科打诨，玉虚散人开颜一笑，僵局便打开了。

（鎮南王と玉虚散人は元々気まずい仲だったが，段誉のおどけた仕草に玉虚散人が笑わされ，気まずい雰囲気は破られた。）

b. 石破天大喜，将那人放在一边，拾起起钥匙，便去插入石门上的铁锁孔中，喀喀喀的转了几下，铁锁便即打开。

（石破天は大喜びし，その人を放ったからかしにしてひょいと鍵を拾い，石門の錠の穴に差し込み，ギギッと回すとすぐに錠が開いた。）

波線部から判断できるように，これらは（10）とは逆に，“玉虚散人”，“石破天”にとってそれぞれ望ましい事態である。これは被動文には見られなかった例である。

ただし，自然受身文の中で（10）や（11）のように潜在的受影者の存在を示す明示的な根拠のある例はむしろ例外的であり，実際にはそれを確認するのが困難な例が多数を占める。

（12） a. 屋门打开，出来一个汉子，全身黑漆漆的，挑着一副担子。

（ドアが開き，男が一人出てきた。全身真っ黒で，天秤棒を担いでいた。）

b. 钢琴打开了，大家都准备陶醉一番，玛丽安的歌喉非常优美，在众人的要求下，她演唱了乐谱里最动听的几首歌曲。

（ピアノが開かれ，皆はひとしきり陶酔するつもりでいる。マリアンの歌い声は非常に美しい。彼女は人々の求めに応じて，楽譜の中の最も人を引き付ける歌を何曲か歌った。）

c. 一个世界逐渐在我面前打开，陌生的，新奇的，五颜六色的……我的眼睛从来没有这样明亮过，仿佛被注入了生命。

（一つの世界が徐々に私の目の前で広がった。それは見慣れず，目新しく，色とりどりで……私の目がこれほど明るく光ったことはなく，まるで生命を注入されたかのようだった。）

これらには，「望ましくない」と捉える動機がない。「思うままにならない」は（12a-c）に共通する点として挙げられるかも知れないが，前節で触れた“不知发生了什么事（何事か分からず）”のような明示的な根拠がない。以上のことと，被動文に比べて数が圧倒的に多いことを考え合わせると，自然受身文には被動文のような潜在的受影者に関する制限がないと考えられそうである。

3-4.

ここで，自然受身文の形式的特徴の中で，被動文と対照をなす点にも触れておく。

まず，“打开”の自然受身文で形式上顕著なのは，受事の名詞の偏りである。“门”（84例）とそれに次ぐ“窗（窓）”（20例）で全体の3分の2を越える。その後に“箱”，“盖（ふた）”などが続くが，6-7例にとどまる。“打开”1125例中，“门”が動詞の表す事象の参与者として出現している例が324例であることを考えると，少なくとも他動詞的用法の目的語と自然受身文の間で，主語の選択条件に何らかの差異があると推測される。

また，“打开”の自然受身文において形式上特徴的であったのが，アスペクトマーカー“着/著”の付いた形式である。

（13）a. 他的衣箱打开著，他正在用那旧的手压水泵洗身。

（彼のトランクは開いていた。彼はその古い手押しポンプで体を洗っていた。）

b. 我看见她的钢琴还打开着。

（私には彼女のピアノの蓋がまだ開いているのが見えた。）

c. 窗子打开着，窗帘飘动着，院子里飘来一阵阵大粪的味道。

（窓は開き，カーテンは開いていて，庭に人糞の臭いが漂ってきた。）

d. 舱板上有几个男子的尸首，几只衣箱打开着，到处散满了衣物银两。

（船室の床には何人かの男の死体があり，トランクがいくつか開いていて，いたるところに衣服やお金が散乱していた。）

e. 车厢的窗户打开着，火车疾驰在斜坡地面上，……

（客車の窓は開いていた。列車は斜面を疾走し，……）

f. 那墓穴就这样打开着，没人管了。

（その墓穴は開いたままで誰も気にしない。）

g. 二楼的纸隔扇整个地打开着，我毫不在意地走上去，可是艺人们都还睡在铺垫上。

（二階の襖は完全に開いていたが，私は気にせず上がった。しかし芸人達は布団に寝ていた。）

このような“打开着”の例が自然受身文以外の用法では 1 例も見つからなかったという点は，注目に値しよう。豊嶋（1988）には，被動文に“着”の用いられた例が挙がっているが，数はそれほど多くなかったという。

大河内（1974:5-6）は次のような英語の例を引く。

（14） a. The little girl was hurt by the bully.

b. The little girl was hurt. （Langendoen, *The Study of Syntax*.）

（14a）が行為と解されるのに対し，（14b）は様態の描写と感じられるという。“被”がどちらかというと動態の行為になじむのに対し，自然受身文が結果状態（静態）の描写になじむのだとすれば，“被”はその両者を区別するのに用いられるという機能論的説明が可能になる。

最後に，次のような例が一つ見つかったことを報告しておく。

（15）蜂箱自动打开，所有的蜜蜂都迎着乳黄色太阳飞过去

（蜂の巣箱がひとりでに開き，ミツバチがみな太陽に向かって飛んでいった）

“自动”は受身の意味と矛盾する。本稿で自然受身文と呼んでいるものは，意味的には施事の働きかけを含意しない可能性があり，「自然受身」という捉え方自体の不適切さを示唆する例である（cf. 香坂 1959）。

4. その他“打”+結果補語

4-1.

“打”+結果補語の構造を持ち，施事の働きかけと受事の状態変化を表す動詞には，被動文と自然受身文の両方に用いられるものが多いようである。このような動詞のうち“打开”の次に総数が多かったのが“打死”（死ぬ・殺す，599 例）であった。そのうち被動文が 37 例，自然受身文が 11 例それぞれ見つかった。

“打死”については，以下のように対照的な例がいくつか見られた。

（16） a. 金俊山着急地警告徐治功说：“公社要是不赶快去人，恐怕马上就会有许多人被打死了！”。

（金俊山は慌てて徐治功に警告した。「公社がすぐに人をやらないと，すぐに多くの人が殺されてしまうかもしれない」）

b. 藏在牛家村密室之中，要想送给你爹爹，不幸被宫中侍卫打死。

（牛家村の密室の中に隠し，お前の父さんにあげようとしたら，運悪く宮中の衛兵に殺されてしまった。）

c. 这位老消防队长深知后勤部队生活的好处，总想找个机会离开连队，要不然，说不定什么时候就糊里糊涂被打死了，虽说他又机伶，又会动脑筋，可子弹这玩意儿实在不是好东西。

（この年老いた消防隊長は，後方部隊で勤務することの良さをよく知っていたので，常に機会を見つけて中隊を離れたいと思っていた。さもないと，そのうち訳の分

からぬうちに殺されてしまうかもしれない。彼は機転が利き，頭もよかったが，弾というのはまったく嫌なものだ）

（17） a. 段誉又惊又喜，放下那西夏人的尸身，叫道：“王姑娘，王姑娘，敌人都打死了！”
（段誉は驚き，喜び，西夏人の死体を置いて叫んだ。「王さん，王さん，敵はみな死んだよ！」）

b. 牛教授的确是被“我们”的人打了两枪，可惜没有打死。
（牛教授はきっと「我々」の誰かに二発打たれたのだが，惜しくも死ななかった。）

c. 怕什么，小五子就是和苏联人打仗打死，咱们还有四个儿子呢。
（何を恐れる。小五子がソ連と戦って死んでも，うちにはまだ息子が 4 人いるじゃないか。）

（16a）は，会話文中に“被”が現れているが，“警告”する内容はある潜在的受影者にとって望ましくない状況であるに決まっている。（16b）は波線部“不幸”より，明らかに話者が潜在的受動者（ここでは“曲师哥”）の視点に立っていることが分かる。（16c）は，「連隊を離れたい」，「弾というのはまったく嫌なものだ」ということから，やはり“被打死”が望ましくない結果であることが分かる。

それらとは対照的に，（17ab）は波線部から“被打死”という事態が話者にとって望ましい事態であることが分かる。（17c）の波線部では，死が望ましいとは言っていないが，“小五子”が死んでも話者にとってはさして深刻な事態ではないということが示されている。

ここでは，被動文と自然受身文の差異が明示的に現れている例を特に選んで提示したが，そうした明示的な根拠に乏しい例も無論ある。

（18） a. 于是总有一天他会以一种令人不由得不信的把握宣称：“我马上就要被打死了。”
（それでよく彼は，人に信じさせずにおかないような自信を持って宣言したものだった。「俺はすぐに殺されるよ」と。）

b. 换了我也要这样，打死也不能改口。
（もし私なら，死んでも前言を翻さない。）

4-2.

“打开”，“打死”以外の“打”+結果補語も，被動文と自然受身文の両方の例が見つかった。ここでは，比較的顕著な特徴を持つ被動文の例のみを示す。

（19）主人家请他吃午饭了，于是他的话不得不被打断。
（主人は彼に昼食を勧めたので，彼の話はそこでやむを得ず途切れた。）

（19）は登場人物が自らの意見を述べているところを遮られてしまった場面で，その人物が“打断”の影響を受けていると考えられる。“不得不”（やむを得ず）という表現と“被”が呼応しているように見受けられる。

（20） a. 我开始明白，从前那种秩序尽管严酷无情，但它毕竟维持着火星文明的高速发展。

它本身就是一个庞大的文明机器，我们并非这文明的拥有者，我们仅是机器的一部分，在强硬管制下飞速运转。一旦它被打破，火星文明就将不可避免地走向崩溃，因为它在火星人类的心中根本就从不存在。

（私は理解しはじめた。かつての秩序は過酷で非情であったけれども，火星文明の迅速な発展を維持していたのだ。それ自体が巨大な文明の装置であり，我々はその文明の所有者ではなく，その一部分に過ぎず，強制的な管理の下すばやく動き回っていたのだ。一度それが壊されてしまうと，火星文明は崩壊へと向かわざるを得ない。それが火星人の心の中に完全に存在しなくなってしまうために。）

b. 当时大家只想赶进度，比速度，也不重视安全保护，加之一切合理的规章制度都被打破，上级只是给各个生产队派任务，……

（当時皆は進度を上げ，速度を競うことばかりを考え，安全を重視しなかった。その上一切の合理的な規則・規定は壊され，上役はそれぞれの生産部隊にノルマを与えるばかりで，……）

（20a）は“我”すなわち話者によって語られた箇所で，受影者は話者自身，あるいはそれを含む“我们”であると考えられる。「秩序」が破壊されてしまうことが望ましくないということは，波線部で「過酷で非情であったけれども」と述べていることから読み取れる。（20b）は，「規則・規定」が「合理的」であったとする立場からものを述べていることが分かる。そうした立場にある者にとってやはりこの事態は望ましくなく，こうした者こそ潜在的受影者と呼ぶに相応しい。

（21）我拖地板时一转身，拖把柄将酒盅扫落在地，就这么被打碎了。那个贫困家中唯一的装饰品，破坏时的声响让我经历了长时间的战栗。

（私が床を拭きながらふと身を翻すと，モップの柄を盃に当てて落としてしまった。こうして割れてしまったのであった。あの貧しい家の唯一の装飾品が壊れるときの音は，私に長い間身震いさせた。）

これも波線部より，事態が話者=受影者にとって全く不本意であったことが分かる。

5. 結語

以上，本稿では被動文と自然受身文の差異，とりわけ前者に特徴的な感情的色彩について，話者の視点・立場という観点から新たな説明を試みた。結論としては，被動文に“被”の機能に由来する制限が伴うのに対し，自然受身文にはそうした制限がなさそうであるという点を指摘しておく。そして，“被”の持つ機能の一つとして，「潜在的受影者（第 2 節参照）の視点から出来事を述べたことをマークする機能」を提案する。これは，いわゆる「不如意」の受け手を文の主語や話し手に限定するのが不合理な場合があるため，受け手を文脈上想定しうるあらゆる存在にまで広げて考慮したものである。潜在的受影者の存在を明示する根拠は豊富とは言えないが，“被”を含む文だけでなくその前後の文脈を辿

ることによりある程度推測可能であるという点もまた事実である。以上のことを指摘して，本稿の結びとする。

参考文献

井出静 1990:「从书面语言“被”字句的统计分析看“被”字句的功能和意义」,『中国語学』237:62-70，日本中国語学会.

大河内康憲 1974:「被動が成立する基礎―日本語などとの関連で―」,『中国語学』220:1-12.

―――― 1982:「中国語の受身」，寺村秀夫他編『講座日本語学 10　外国語との対照Ⅰ』319-32，明治書院.

木村英樹 1981:「被動と『結果』」,『日本語と中国語の対照研究』5:27-46，日中語対照研究会.

――― 1992:「BEI 受身文の意味と構造」,『中国語』389:10-15，内山書店.

久野暲 1978:『談話の文法』127-282，大修館書店.

香坂順一 1959:「『自然的被動』というもの」,『人文研究』10/11:1088-1121，大阪市立大学.

下地早智子 1999:「被害受身の日中比較」,『中国語学』246:107-18.

杉村博文 1982:「「被動と『結果』」拾遺」,『日本語と中国語の対照研究』7:58-82.

――― 1992:「遭遇と達成―中国語被動文の感情的色彩―」,『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』，45-63，くろしお出版.

豊嶋裕子 1988:「“被”字句の成立条件にかんして」,『中国語学』235:99-108

益岡隆志 1991:「受動表現と主観性」，仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』105-21，くろしお出版.

楊凱栄 1989:「文法の対照的研究―中国語と日本語―」,『講座日本語と日本語教育 5　日本語の文法・文体（下）』312-40，明治書院.

龚千炎 1980:「现代汉语里的受事主语句」,『中国语文』158:335-44.

李临定 1980:「“被”字句」,『中国语文』159:401-12

――― 1986:『汉语比较变换语法』，中国社会科学出版社，北京.

李珊 1994:『现代汉语被字句研究』，北京大学出版社，北京.

刘月华他 2001:『实用现代汉语语法 增订本』，商务印书馆，北京.

吕文华 1987:「“被”字句和无标记被动句的变换关系」， 中国社会科学院语言研究所现代汉语研究室编:『句型和动词』168-81，语文出版社，北京.

目次ページに戻る。

２．マレーシア語

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

マレーシア語の COD 構文

正保　勇
（東京外国語大学教授）

1. 問題の所在

COD（Complement Object Deletion）構文とここで呼ぶのは，英語の難易構文（tough-constructions）に典型的に見られる様な，主節の主語が形容詞補文中の空所と解釈上同じものとして，同定される様な構文のことである。典型的には，英語の難易構文に当る，マレーシア語の難易構文がその例となるが，これ以外にも，補文中に主節主語と等しい解釈を受ける空所が存在する構文についても考察を行い，難易構文を中心として，その周辺にあるマレーシア語 COD 構文の分類と，その構造分析を行うつもりである。

Shoho, Isamu & Hiroshi Uzawa（2004）において，マレーシア語では，形容詞が補文を従えた構文と，副詞が動詞句の前に現われる構文とが，表面上は区別がつかない場合が多いが，幾つかの統語的な振る舞いを観察することによって，両構文を区別することができるという主張をなした。例えば，次の(1)と(2)は表面上は，同じ構文をしている様に見える。

(1)Ibu pandai memasak kari ayam.
（お母さんはチキンカレーを作るのが上手いです）

(2)Ibu laju memandu keretanya.
（お母さんは車を飛ばした）

しかしながら，(1)における pandai は文頭に移動させることができるのに対して，(2)の laju はそうすることができない。(3)と(4)を比較されたい。

(3)Pandai ibu memasak kari ayam.
（お母さんはチキン・カレーを作るのが上手いです）

(4)*Laju ibu memandu keretanya.
（＊お母さんは車を飛ばした）

(1)と(2)は又，被動者を焦点化して文頭に置く，いわゆる被動者焦点化構文を作れるかどうかに関しても，違いを示す。(1)における被動者である kari ayam を焦点化して文頭に置いた(5)は，話し言葉では認められるとするインフォマントがいない訳ではないが，フォーマルな文では使えない形である。それに対して，(2)における被動者である keretanya を焦点化して，文頭に置いた(6)は文法的な文である。

(5)?Kari ayam pandai dimasak ibu.
（?お母さんはチキン・カレーを作るのが上手いです）

(6)Keretanya laju dipandu ibu.
（お母さんは車を飛ばした）

更に又，(1)の pandai は，dengan pandai という形にして，目的語の後に置く事ができないのに対して，(2)の laju は dengan laju という形で目的語の後に置く事ができる。そして，こういう操作を施した(8)と(2)は同義である。

(7)*Ibu memasak kari ayam dengan pandai.

(8)Ibu memandu kereta dengan laju.

（1）を基にして，kepandaian（腕がいいこと,上手なこと）という抽象名詞を他の要素全てが修飾する(9)の様な形が可能である。それに対して，(2)を基にして，kelajuan（速いこと，スピード）という抽象名詞を他の全ての要素が修飾する(10)の様な形を作ることはできない。

(9)kepandaian ibu memasak kari ayam

（母がチキン・カレーを作る腕の良さ）

(10)*kelajuan ibu memandu kereta

（母が車を運転する速さ）

これまで見てきた様に，pandai と laju は，共に後ろに文を従えた構文を作るが，見かけ上の形態的な類似性にも拘わらず，これら両構文の間には，様々な相違点があった。これら両構文に対して，統語的な操作を加えることで，隠れていた相違点が浮かび上がってきた。Shoho Isamu & Hiroshi Uzawa（2004）で主張した様に，これら両構文の統語的振る舞いの相違は，pandai は形容詞でそれに続く文は形容詞句補文であるのに対して，laju は副詞でそれに続く部分は文ではなく，動詞句であるという構造上の違いの反映である。

ところが，両構文の区別に使われたクライテリアを適用すると，一部は pandai 型との共通点を示すが，一部は laju 型とも共通点を示す語類が見られる。それらの語類に入るものとしては，mudah, sukar, susah がある。今，sukar を例に取って，これに上で適用した 4 つのクライテリオンに関して，どの様な統語的振る舞いを示すかを見てみよう。

先ず，(11)の文における sukar を，をその後の部分と切り離して，(12)の様に，文頭に置くことができるという点では，pandai 型との共通性を示している。

(11)Kita sukar memahami makna tersembunyi syair ini.

（我々がその韻文に秘められた意味を理解するのは難しい）

(12)Sukar kita memahami makna tersembunyi syair ini.

（我々がその韻文に秘められた意味を理解するのは難しい）

しかしながら，sukar 型は，pandai とは異なり，被動者を文頭に移動させた次の様な形が可能である。

(13)Makna tersenbunyi syair ini sukar kita fahami.

（その韻文の意味するところを我々が理解するのは難しい）

又，dengan という前置詞を使ってパラフレイズできないという点では，再び pandai との共通点を示す。(11)を(14)の様に換えると，非文となる。

(14)*Kita memahami makna tersenbunyi syair ini dengan sukar.

更に又，sukar を基にした抽象名詞の kesukaran（困難さ）であとの要素を纏めて(15)の様な名詞句への変換が可能である。この点でも，sukar 型は，pandai 型との共通性を有する。

(15)kesukaran kita memahami makna tersembunyi syair ini

（我々がこの韻文の秘められた意味を理解することの困難さ）

本論では，sukar 型が一つのクライテリオンを除いて，pandai 型との共通点を有しながら，被動者の取り出しという一点に関して，相違を示すのは何故であるかという点に関しても考察を試みるつもりである。

layak という語も上述の４つのクライテリアに関して，pandai 型と同じパラダイムを示す。先ず，(16)における tidak layak を(17)の様に，文頭に移動させることが可能である。

(16)Kita tidak layak menterjemahkan syair seumpama ini.

（この様な韻文を訳すのに我々は適していない）

(17)Tidak layak kita menterjemahkan syair seumpama ini.

（この様な韻文を訳すのに我々は適していない）

第二に，被動者を文頭に出すことが可能である。(18)を参照されたい。

(18)Syair seumpama ini tidak layak kita terjemahkan.

（こんな韻文は我々が訳すに値しないものだ）

第三に，layak に前置詞の dengan を被せた副詞句を使って，(19)の様に書換えることができない。

(19)*Kita tidak menterjemahkan syair seumpama ini dengan layak.

（＊我々はこんな韻文を適切に訳さない）

第四に，kelayakan（適切さ）という抽象名詞で他の要素全てを括った表現に変換が可能である。次例を参照されたい。

(20)kelayakan kita menterjemahkan syair seumpama ini

（この様な韻文を我々が訳す適格性）

以上観てきた様に，４つのクライテリアに関して，layak 型は，sukar 型とその統語的な振る舞いの分布が重なり合う。しかしながら，この二つの型が示すパラダイム間の意味の異同にまで踏み込んでみると，新たな相違点が浮び上がってくる。次に掲げる 2 つの文は，sukar 型の所で扱ったものであるが，この両文は知的意味を等しくする。

(21)=(11)Kita sukar memahami makna tersembunyi syair ini.

（われわれがこの韻文に秘められた意味を理解することは難しい）

(22)=(13)Makna tersenbunyi syair ini sukar kita fahami.

（この韻文に秘められた意味を我々が理解することは難しい）

これに対して，layak の所で扱った次の 2 文は，その意味を異にする。

(23)=(16)Kita tidak layak menterjemahkan syair seumpama ini.

（この様な韻文を訳すのに我々は適していない）

(24)=(18)Syair seumpama ini tidak layak kita terjemahkan.

（こんな韻文は我々が訳すに値しないものだ）

(23)と(24)の各文に与えられた訳によって分かる様に，(23)では tidak layak（不適である）という属性の所有者は kita（我々）であるのに対して，(24)では tidak layak（不適である）という属性の所有者は，今度は，kita （我々）ではなくて，syair seumpama ini（こ

んな韻文）の方なのである。layak 型と sukar 型の間に見られるこの様な相違は何によって齎されるのかについても考察を試みる心算である。

又，sibuk，malu，malas は，それに続く補文中の被動者が文頭に来ている構文が可能である。文頭にある補文中の被動者が，放っておけば，sibuk（忙しい），malu（恥ずかしい），malas（怠けている，億劫にする）と意味的に密接な連関を構成して，おかしな文となる筈なのに，そうはならないのはどうしてなのかという点について筆者なりの主張を行うつもりである。ここで，考察の対象としたコーパスとしては，2002 年 Utusan Malaysia 紙の記事半年分を使用した。引用した記事の掲載日は，邦訳の後に，丸括弧で，日／月／年の様に記してある。

2. マレーシア語の難易構文

前章では，４つのクライテリアの中３つが pandai 型との共通性を示しながら，被動者の文頭への移動に関して，pandai 型との相違を示した mudah，sukar，susah の一群の形容詞（今後これらの形容詞を sukar 型の形容詞と呼ぶ）が認められた。sukar 型が pandai 型と異なる点は，このグループの動詞は，主語が EXE（空の形式代名詞）となる次の様な構文を作ることができる。

(25)Sukar bagi kita untuk menemui harta karun itu.

（我々がその財宝を見つけることは困難だ）

この構文では又，次の様に，述部形容詞の前に adalah が付いた形も見られる。

(26)Adalah mudah bagi mereka untuk memalsukan kad kredit itu.

（そのクレジットカードを偽造することは彼等にとって容易なことである）

(27)は，(28)の様にすると，非文となることから考えて，orang Melayu(マレー人)に続く部分は，解釈上の主語として機能するセンテンスとは考られない。この文は，(29)の構造を成していて，orang Melayu（マレー人）の述部形容詞である，sukar（困難である）が，強調の為前に出た文と考えられる。

(27)…, sukar orang Melayu untuk mempertahankan agama dan kedudukan mereka.

（マレー人が彼らの宗教と現在の地位とを維持するのは難しい）

(UM Online, 9/3/2004)

(28)*Adalah sukar orang Melayu untuk mempertahankan agama dan kedudukan mereka.

(29)[$_{IP}$ sukar [$_{IP}$ [$_{DP}$ orang Melayu] [$_{I'}$ [$_{I}$ ϕ] [$_{AP}$ [$_{A}$ t_i] [$_{CP}$ [$_{C'}$ [$_{C}$ ϕ] [$_{IP}$ [$_{D}$ PRO] [$_{I'}$ [$_{I}$ untuk] [$_{VP}$ [$_{V}$ mempertahankan] [$_{DP}$ agama dan kedudukan mereka]]]]]]]]].

(27)では，untuk は非定形節であることを示す屈折辞として機能している。しかし乍ら，次の様な位置を占める untuk は,どの様に扱えばよいのであろうか。この様な untuk は，補文子の bagi と交換できるところから，(28)の場合とは異なり，補文子として扱うのが適当であろう。

(30) …dan tanpa kefasihan dan kefahaman dalam bahasa itu adalah sukar untuk rakyat negara ini menguasai ilmu dan maklumat yang ada.

（そして，その言語で喋ったり，その言語を理解することができないならば，この国の国民が現在の学問や情報を自ら吸収することは難しいのである）

(UM Online , 4/5/2004)

今(30)の文の adalah sukar untuk rakyat negara ini menguasai ilmu dan maklumat yang ada の部分の構造を示せば,次の様になる。

(31)…[$_{IP}$ [$_{D}$ EXE] [$_{I'}$ [$_{I}$ ϕ] [$_{VP}$ [$_{V}$ adalah] [$_{AP}$ [$_{A}$ sukar] [$_{CP}$ [$_{C'}$ [$_{C}$ untuk] [$_{IP}$ [$_{DP}$ rakyat negara ini] [$_{I'}$ [$_{I}$ ϕ] [$_{VP}$ [$_{V}$ menguasai] [$_{DP}$ ilmu dan maklumat yang ada]]]]]]]]].

上で観てきた様に，sukar 型の形容詞は，主語の位置が EXE である構文を作る。sukar 型形容詞はこれ以外に，形容詞補文中の動作主が主語の位置に現われる構文(31)や，形容詞補文中の被動者が主語の位置に現われる構文(32)を作る。

(32)Orang Melayu sukar untuk mempertahankan kebudayaan mereka.

（マレー人が彼等の文化を維持していくのは難しい）

(33)Kebudayaan Melayu sukar untuk dipertahankan mereka.

（マレー文化をマレー人が維持していくのは難しい）

この(32)や(33)の文はどの様に派生したのであろうか。形容詞補文中の被動者(31)の場合で言えば，kebudayaan mereka 主節の主語の位置を占める場合には，補文中に me-型動詞形が現われる事はない。(33)を(34)と比較されたい。

(34)*Kebudayaan Melayu sukar mempertahankan.

（＊マレー人の文化を維持するのは難しい）

マレーシア語では，me-他動詞の目的語の位置から要素を取り出すことはできないという制約がある。即ち，次の様な文は非文とされる。

(35)*Kebudayaan Melayu mereka akan mempertahankan.

（＊マレー人の文化は維持されるだろう）

これに対して，辞書形に接語代名詞を付加した，人称形と呼ばれる形では，その直後の位置からの要素の取り出しが可能となる。(36)を，非文である(35)と比較されたい。

(36)Kebudayaan Melayu akan dipertahankan mereka.

被動者焦点化構文と呼ばれる(36)の様な形が，(33)の補文においても現われているところから，補文中の人称形の直後の位置から要素の移動が行なわれたということを示していると考えられる。

主節の主語の位置は，θ´位置であるから，kebudayaan Melayu が人称形動詞の直後の位置から移動したと考えても，θ位置から，θ´への移動となるから，θ規準の違反とはならない。しかしながら，(37)の様な構造において，dipertahankan mereka という人称形の直後の位置から，主語の位置に移動が行われたと仮定すると，幾つかの点で，厄介な問題が生ずる。一つは，空範疇 t_i が NP 痕跡となり，統率範疇である非定形節の IP の中で，束縛されないことになり，束縛原理（A）に違反することになる。又，移動された主節の主語の kebudayaan Melayu は補文動詞の dipertahanan と主節の屈折要素(INFL)によって二重に格を付与され格フィルター（Case filter）にも抵触することになる。

(37)Kebudayaan Melayu $_{i}$ sukar [$_{CP}$ [$_{C'}$ [$_{C}$ ϕ] [$_{IP}$ [$_{I}$ untuk] [$_{VP}$ dipertahankan mereka t_i]]]].

この様な問題を回避する為には，英語の難易構文における分析と同様に，補文内で，人称形の後の位置から空演算子が補文の CP の Spec（指定部）の位置へと移動すると考えるのが良いと思われる。そして，主節の主語の kebudayaan Melayu は叙述規則（rule of predication）によって，空演算子と同じ指標が与えられ,主節の主語と補文中の空所との対応関係が成り立つことになる。補文中に空演算子の移動を仮定する根拠は，この難易構文が寄生空所の出現を認可にするという事実を挙げることができる。次は，難易構文と寄生空所が同一文中に現われる例である。寄生空所は[e]で表すことにする。

(38) Buku itu sukar dibeli t_i tanpa membaca [e].

（その本を読まずに買うことは難しい）

寄生空所の出現を許すのは，その前に現われる A´移動の痕跡の存在であると言われている。A´移動が関わってくる典型的な例としては，疑問文，関係節，主題文がある。次の例は，これら３種の文と共に現われる寄生空所の例である。

(39)Apa yang awak beli tanpa membayar ?

（あなたが金を払わずに買ったのは何ですか？）

(40)Inilah buku yang saya beli tanpa membaca.

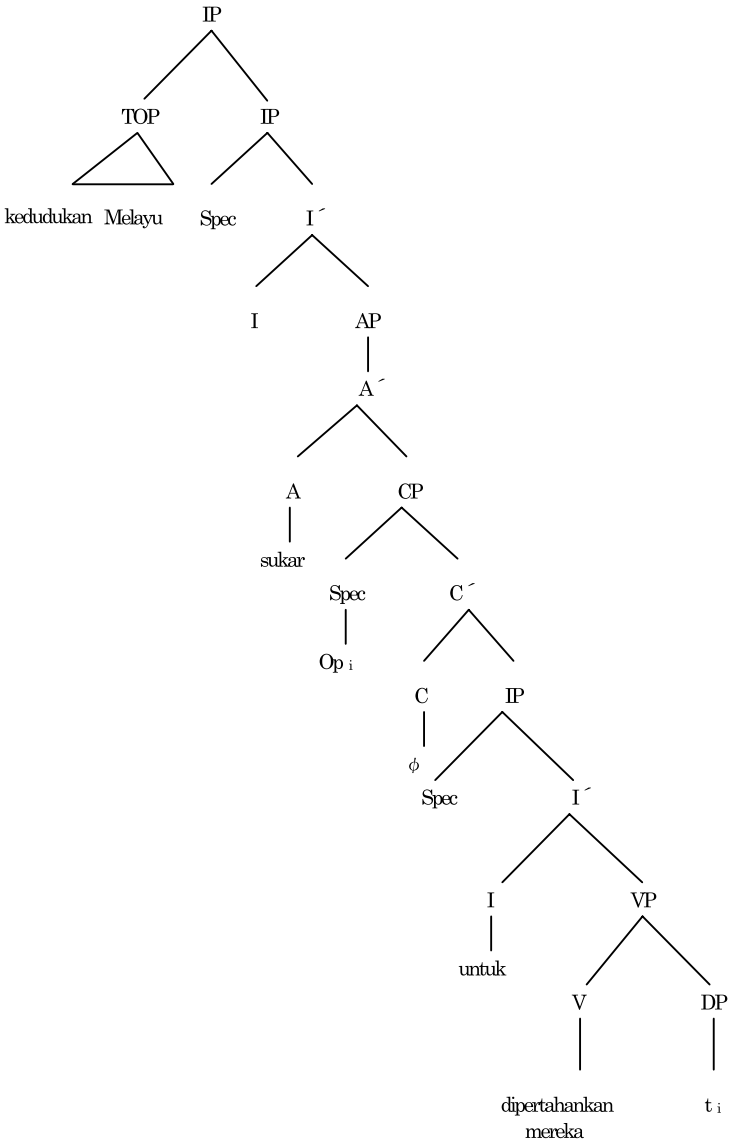
（これが私が読まないで買った本です）

(41)Buku itu sudah direbutnya sebelum saya membaca.

（その本は私が読まないうちに彼に取られてしまった）

(38)の文が寄生空所の出現を許しているのは，それに先行する難易文に，wh 句の移動と同じく，A´移動が絡んでいるからだと考えられる。以上のことを総合して，(33)の派生のプロセスを図示すれば(42)の様になる。

(42)



マレーシア語の難易構文には，次の様に，被動者以外のものが主文の主語となっているものもある。

(43) “…mereka akan sukar untuk meninggalkannya lagi , ” katanya ketika ditemui selepas majlis sambutan Hari Polis di Ibu Pejabat Polis Kontinjen Kelantan di sini hari ini.
（「彼等がそれをもはや手放すことは難しいだろう」と本日当地のクランタン警察本部に於ける警察官の日を祝う式典の後でのインタヴューでその方は述べた）
(UM Online , 26/3/2002)

ではこの(43)の様な，動作主が sukar の主語となっている文はどのような派生のプロセスを経て生まれたのであろうか。今，構造がもう少し単純な(44)の文を参考にして，説明をすることにする。被動者が sukar の主語の位置に現われる場合と同様，ゼロ演算子の移動がこの場合にも関与していると仮定すると，(44)の memahami の直前の主語の位置にあるゼロ演算子が，指定部へと移動し，この指定部へと移ったゼロ演算子はその位置から，即ちＡ´位置から，元あった主語の位置に残された痕跡を束縛することになる。この場合，ゼロ演算子の痕跡は，格が与えられる位置でなくてはならないという制約がある。

(44)Kita sukar [$_{CP}$ Op_i [$_{C'}$ [$_{C}$ ϕ] [$_{IP}$ t_i memahami makna tersembunyi syair ini]]].

しかしながら，補文子が埋まっていない時（(44)の ϕ がそれを表わしている），それに続く IP 中の主語の位置は，格が与えられない位置であると考えられる根拠がある。(45)はその根拠となる例である。

(45)*Sukar rakyat negara ini menguasai ilmu dan maklumat yang ada.

この文は非文であるが，次の文はコーパスに実際現われた文法的な文の例である。

(46)…adalah sukar untuk rakyat negara ini menguasai ilmu dan maklumat yang ada.

(45)には，補文子が埋まっていないが，(46)には untuk という補文子が現われている。次の例では，補文子が埋まっていないが，その代わり，補文中に主語が現われてはいない。mengawal pelajar yang mahu ke negara berkenaan の主語は現われてはいないが，解釈上は，一般の人々である。実際は，主語の位置に何も埋まっていないのではなく，「一般の人々」という意味をその解釈の中の一つとして有する PRO がこの位置にあると考えられる。そして，PRO 定理（PRO theorem）により，PRO は統率されない位置に現われるから，この位置は非統率の位置であるということが分かる。以上，補文子の出現の分布と，有形の主語の出現の分布とを考え合わせて考えると，補文子が埋まっていない時，補文中の主語の位置は統率されない位置であると言える。

(47)Mengulas lanjut, Musa berkata, agak sukar untuk mengawal pelajar yang mahu ke negara berkenaan kerana biasanya mereka pergi secara bersendirian.

（更に続けてムサは言った，その国に行こうとする学生の行動をチェックするのはかなり難しいのです。と言うのは，彼等は通常単独で行動するからです）

(UM Online, 28/1/2002)

以上のことを頭において考えると，次の文の orang Melayu は，sukar の形容詞補文の主語ではなく，sukar の主語であると考えられる。詰まり，この文は主節の形容詞述部である sukar が強調の為に，主節の主語である orang Melayu の前に出た倒置構文なのである。

(48)…kalau UMNO lemah, sukar orang Melayu untuk mempertahankan agama dan kedudukan mereka.

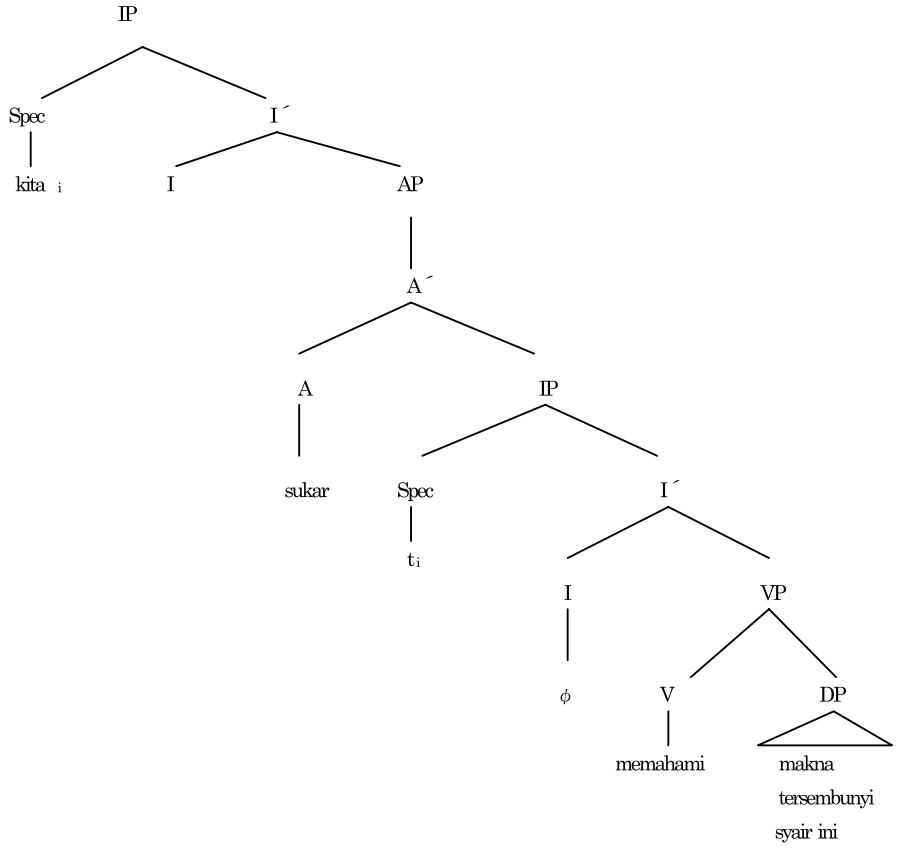
（もし統一マレー国民組織が脆弱だったら，マレー人が自分達の宗教や地位を守るのは難しい）

(UM Online, 9/3/2002)

もし，orang Melayu が sukar 形容詞補文の主語の位置にあると考えると，非定形節においては，INFL は AGR を持っていないので，その主語に格を付与しない。そうなると，

orang Melayu には，格が付与されないことになる。これは，「音形を持つ名詞句は格を持っていなければならない」という格フィルターに抵触するので非文となる筈だからである。もし，(44)における主節の kita が移動によってこの位置を占めたと考えると，名詞句移動の制約により，①格が与えられない位置から，格が付与される位置へ，②θ位置から，θ´位置へという移動のプロセスを守らなくてはならない。主節の主語の位置は，格付与がなされる位置であるから，移動が行なわれた元の位置は，格が付与されない位置でなくてはならない。又，sukar の主節の主語が EXE で現われる構文においては，主節の主語にθ役割が与えられない構文であるから，もし充填されなかったら EXE が最終的には入る位置にθ位置から移動してきた要素が入ると考えれば，この構文を移動が起こる枠組みとなる構文と考えれば良いのではないか。この様な前提に立てば，主節の主語は，形容詞が取る非定形節の補文の主語の位置から移動をしたと考えるのが妥当である。以上を総合して，前述の(44)の文の派生のプロセスを示せば次の様になる。

(49)

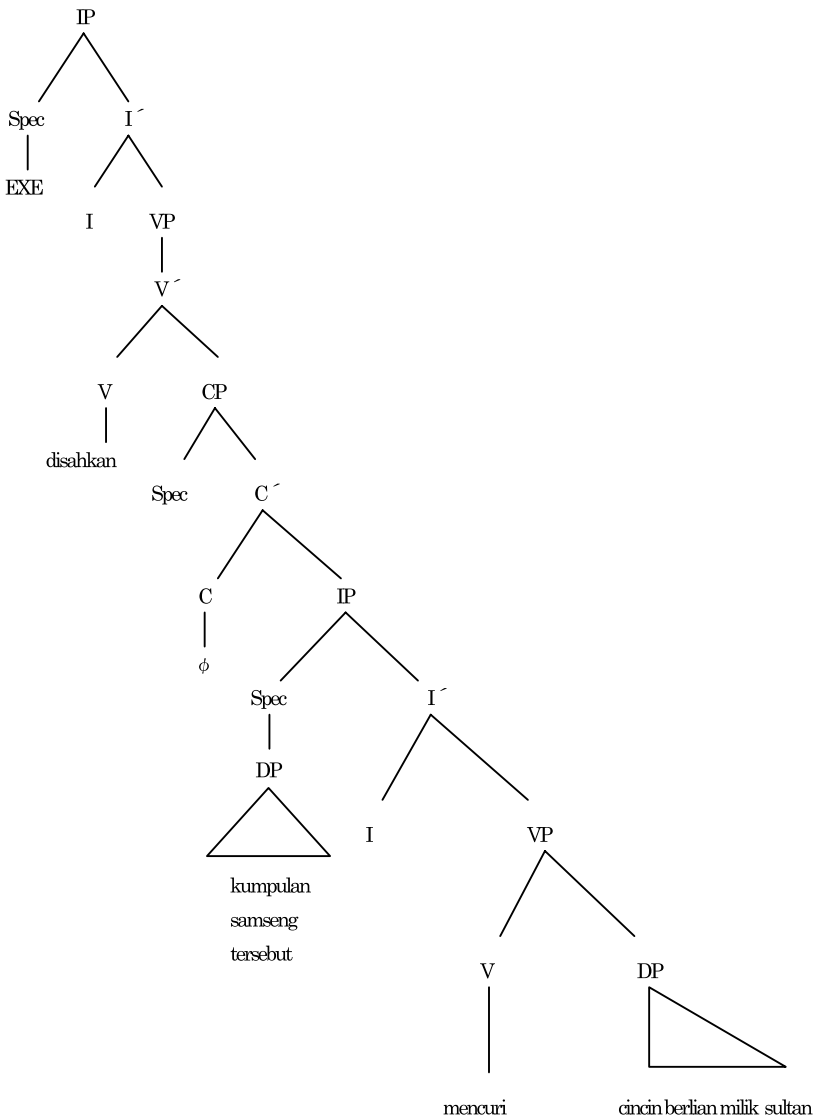


3. 他の EXE を主語に取る構文との比較

sukar と同じく，主語の位置に，EXE を取る構文 disahkan, dimaklumkan, difahamkan, dianggap 等がある。正保勇（1994 -a）で主張した様に，(50)は(51)に示された様な構造であると考えられる。

(50)Disahkan kumpulan samseng tersebut mencuri cincin berlian milik sultan itu.
（そのギャング団は王様所有のダイアモンドの指輪を盗んだとされている）

(51)



(50)は文法的な文であるから，disahkan の後のゼロ補文子に導かれる補文中で，主語である kumpulan samseng（ギャング団）は，この位置で格を得ていると考えられる。それに対して，(52)の文は非文であるので，主節の主語が EXE である場合の sukar の後のゼロ補文子に導かれる補文中で，主語の orang Melayu（マレー人）は格を得ていないと考えられる。その為に，この文は認められない形となっている。

(52)*Adalah sukar orang Melayu mempertahankan agama dan kedudukan mereka.

この文には，adalah が出ているが，これは，述部の強調に使われる小詞なので，この文は，次の文から，sukar が倒置で文頭に出た構造と解釈される可能性を排除する。

(53)Orang Melayu sukar mempertahankan agama dan kedudukan mereka.

（マレー人が彼等の宗教と地位を維持するのは困難である）

前にも述べた所であるが，次の様な文は，文法的であり，この場合，sukar は(50)の文から，強調で前に出た構造として，解釈されるべきものである。

(54)Sukar orang Melayu mempertahankan agama dan kedudukan mereka.

（マレー人が彼等の宗教と地位を維持するのは困難である）

(53)の文の主語は，最初からこの位置にあったのではなく，ゼロ補文子に導かれた補文中から，格を得る必要上この位置に移動したものと考えられる。この点が，disahkan に続く補文と違う点である。(50)の補文中の主語である kumpulan samseng tersebut （件のギャング団）は，既にこの位置で格を得ているので，格を得る為に主節の主語の位置に移動する理由はないのである。それでは(55)の様な文は,どの様な派生のプロセスを経てできたものであろうか。

(55)Kumpulan samseng tersebut disahkan mencuri cincin berlian milik sultan.

（そのギャング団は，王様所有のダイヤの指輪を盗んだとされている）

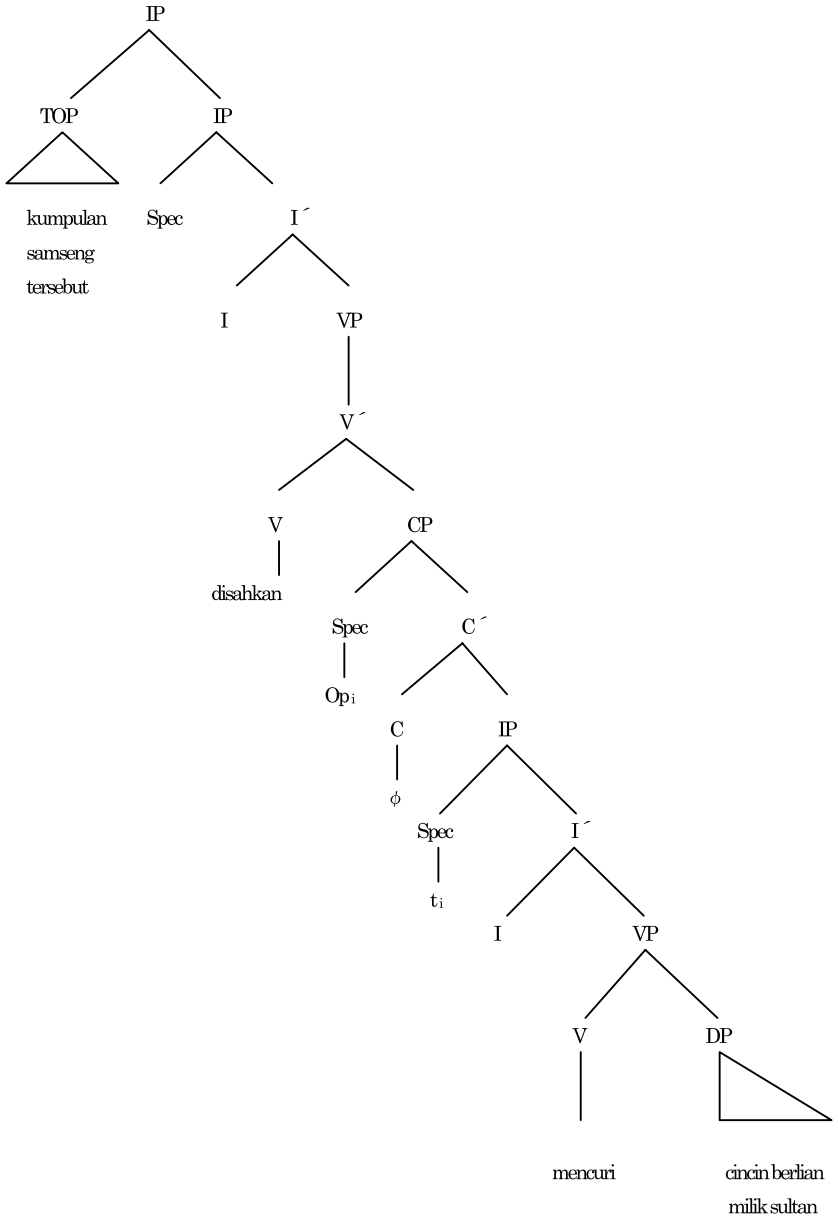
通常のＡ移動であれば，①θ位置からθ′位置へ，②格を与えられない位置から格を付与される位置へという派生のパターンになる。(55)が(51)の構造から派生したと考えると，補文の主語がこの位置から，主文の主語の位置へ動くということになるが，主文の主語の位置は，もし移動が起こらなければ，空の形式主語(EXE)が充填される位置であるから，この位置はθ′であると考えられるので，この移動はθ位置からθ′位置への移動ということになり，Ａ移動のパターンに合致している。(55)の派生のプロセスを，上記の様に考えると，Ａ移動の二番目の特徴である，格を与えられない位置から格を付与される位置へという移動のパターンに合っていないので，この様な派生の可能性は排除される。

この移動の注意すべき点は，移動する要素は，格付与が行なわれる位置から移動するということである。この様な特徴は，Ａ′移動に見られるものであるという点からすると，この移動は，ｗｈ句の移動と同じ性格のものと考えられる。又，次の様な寄生空所の出現を許すところからも，(54)には，Ａ′移動が関与していることを窺わせる。寄生空所の出現可能性は，A′移動が関与しているかどうかを見るための診断基準であるからである。A′移動が関与してはいるが，Wh 句は現われていないので，(55)の派生には，(33)の場合と同様に，ゼロ演算子の移動が関与していると考えることができる。

(56) Kumpulan samseng tersebut disahkan mencuri cincin berlian milik sultan sebelum penjaga keselamatan mencuri [e].
（そのギャング団はガードマンが盗む前に王様所有のダイヤの指輪を盗んだとされている）

以上のことを踏まえて，(55)の派生のプロセスを示せば，(57)の様にである。

(57)



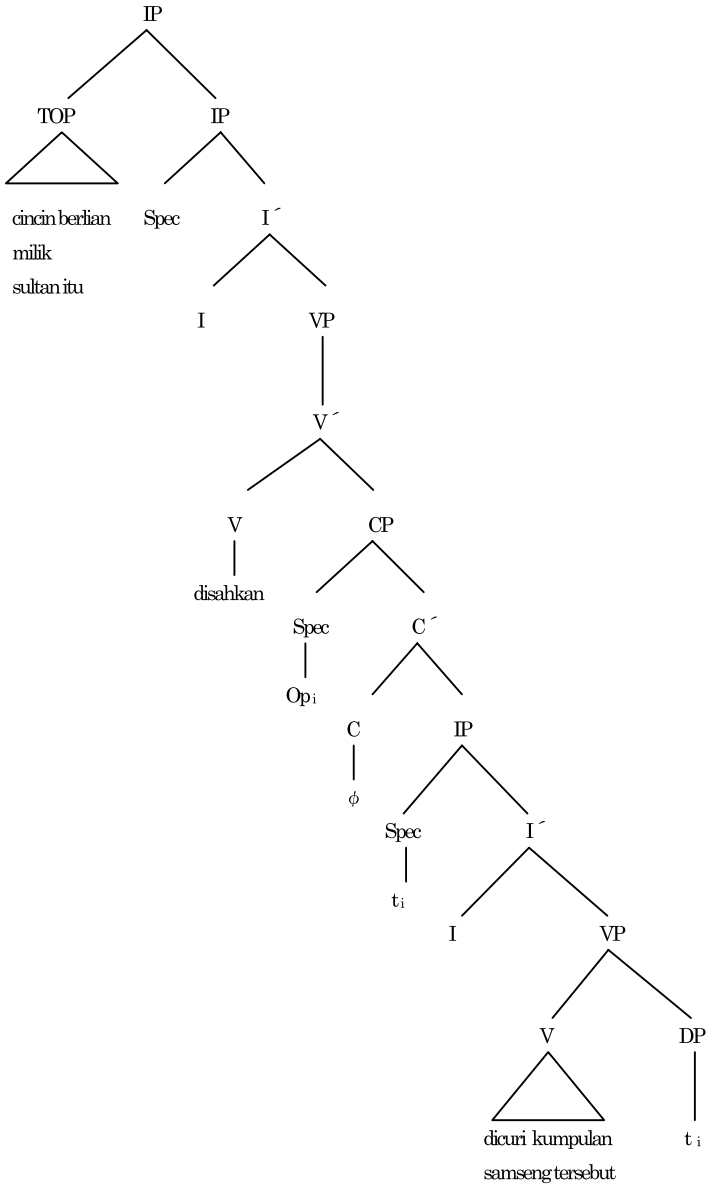
(57)と同様に，次の(58)の派生にも，空演算子の移動が関与していると考えられる。

(58)Cincin berlian milik sultan itu disahkan dicuri kumpulan samseng tersebut.

（その王様所有のダイアモンドの指輪は件のギャング団によって盗まれたとされている）

この文の派生のプロセスを示せば，(59)の様である。

(59)



4. layak 型 COD 構文

layak が補文を取る構文の例をコーパスに当って見ると，主節の主語が動作主であるものと，難易構文と同じく，被動者が主文の主語となっている場合の両方が認められる。各々の例を次に掲げる。

(60)…empat kontraktor utama yang diberikan kontrak, sebenarnya tidak layak mengendalikan projek bernilai RM534 juta tersebut.

（事業を請け負うことになった大手建設業者は，本当は，その５億３千４百万リンギのプロジェクトを行う資格がないのである）

(UM Online, 5/1/2002)

(61)Daripada jumlah itu 2,537 layak diterima masuk tetapi hanya 1,530 pelajar diberikan tempat.

（その中 2537 人が入学の資格を認められたが，実際には 1530 人だけが入学を許可された）

(UM Online, 5/1/2002)

layak が sukar と異なるのは，layak は，主節の主語に EXE を取る構文がないという点である。次の文が非文であることから，このことが分かる。

(62)*Tidak layak untuk kita menterjemahkan syair Parsi ini.

（＊このペルシャ語の詩を我々が翻訳するのは適当ではない）

(63)*Adalah tidak layak kita menterjemahkan syair Parsi ini.

（＊このペルシャ語の詩を我々が翻訳するのは適当ではない）

主節の主語が EXE でないことと関連があるが，次の２文は解釈が異なる。

(64)Kita tidak layak untuk menterjemahkan syair Parsi ini.

（我々はこのペルシャ語の韻文を翻訳するのに適しない人間だ）

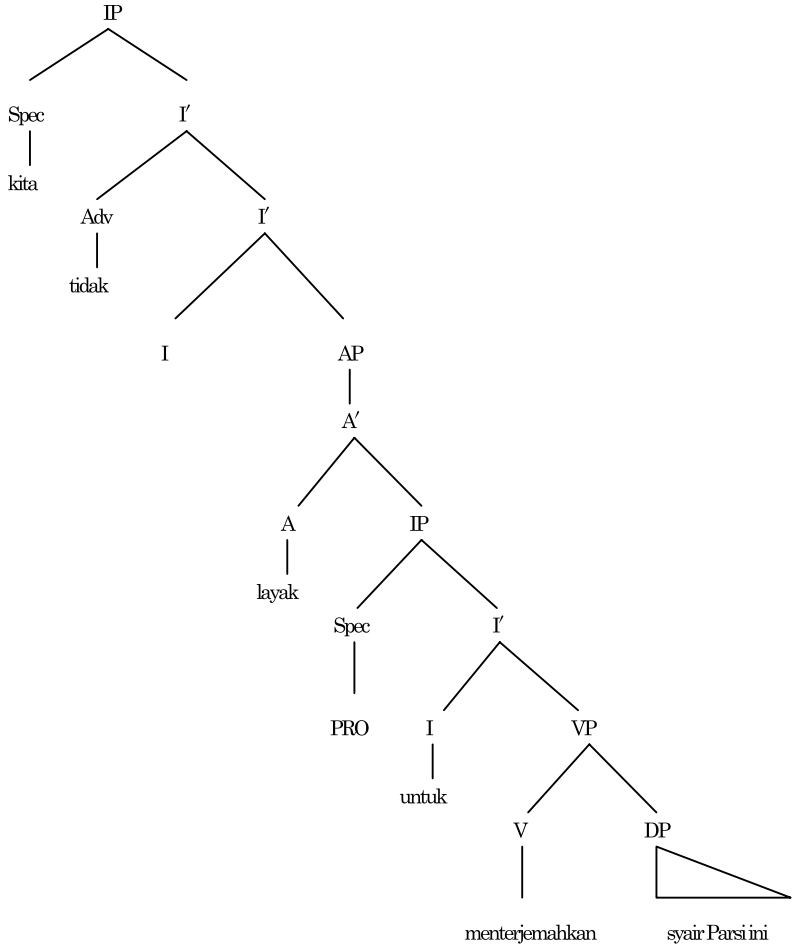
(65)Syair Parsi ini tidak layak untuk kita terjemahkan.

（このペルシャ語の韻文は我々が訳すのに適しないものだ）

(64)は，tidak layak （資格がない，適しない）という属性が帰属するのは，主節の主語である kita（我々）であるのに対して，(65)は，tidak layak（それだけの価値のない，適しない）という属性が帰属するのは，我々ではなくて，syair Parsi ini（このペルシャ語の韻文）である。詰まり，tidak layak の主語に何が現われるかによって，意味解釈が変わってくるので，この構文の主語の位置は，sukar や disahkan の主語の位置とは違って，θ 位置であると考えてよいであろう。このことを踏まえて，(64)，(65)の構造を示せば，夫々，(66)，(67)の様になる。

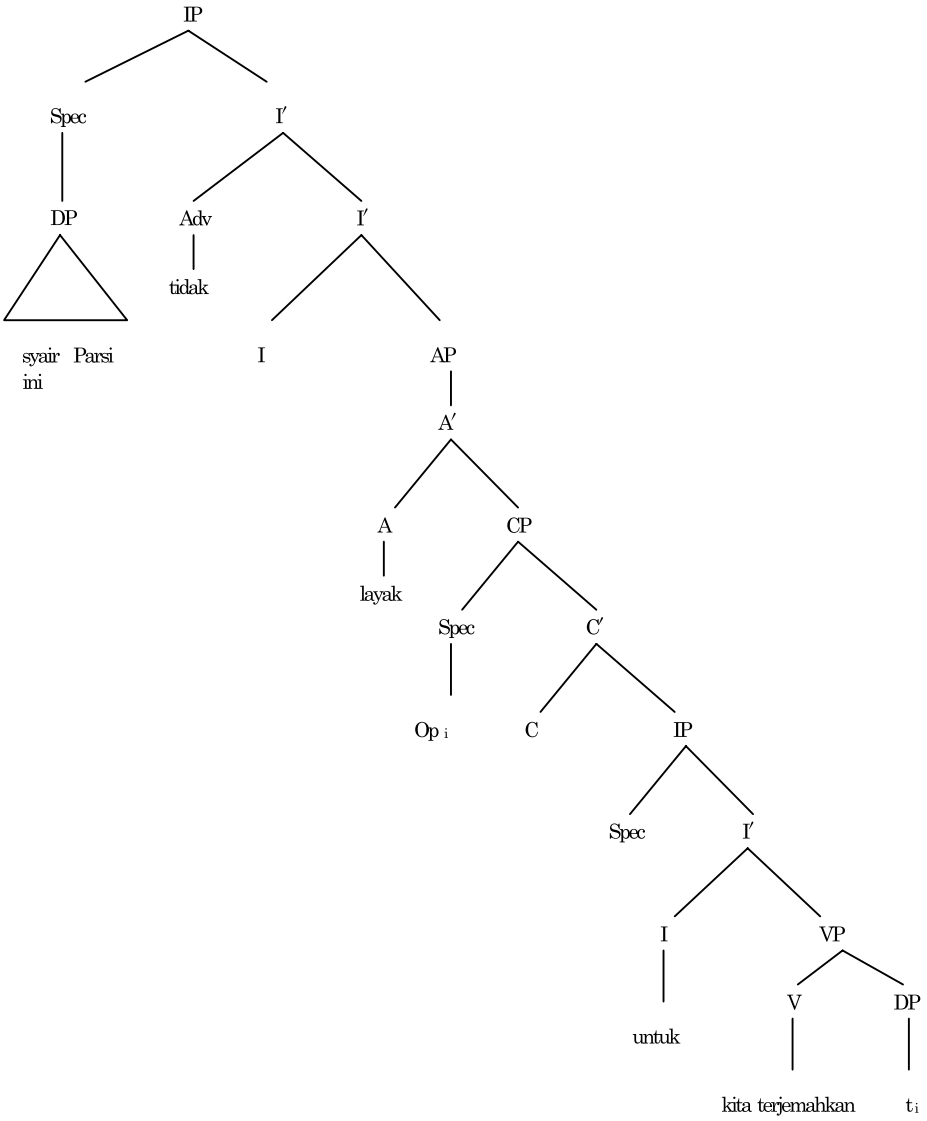
目次ページに戻る。

(66)


IP
Spec
I′
kita
Adv
I′
tidak
I
AP
A′
A
IP
layak
Spec
I′
PRO
I
VP
untuk
V
DP
menterjemahkan
syair Parsi ini

目次ページに戻る。

(67)


IP
Spec
I′
DP
Adv
I′
tidak
syair Parsi ini
I
AP
A′
A
CP
layak
Spec
C′
Op i
C
IP
Spec
I′
I
VP
untuk
V
DP
kita terjemahkan
t i

5. sibuk 型 COD 構文

sibuk は(68)の様に，動作主が主文の主語となっている構文の他に，(69)の様に，補文中の被動者が主文の主語と同じ読みを与えられる構文もある。

(68) “…para jemaah tidak perlu fikirkan bagaimana untuk mendapatkan makanan ketika sibuk mengerjakan haji,” ujarnya.

（巡礼団の人々は巡礼の成就に勤しんでいる時に，どうやって食べ物を調達しようかと言う様なことを考えるには及びません） (UM Online, 2/3/2002)

(69)…kerja-kerja ke arah itu sibuk dilakukan bermula bulan November.

（それを目指して 11 月からその作業が本格的に行われることになる）

(UM Online, 11/11/2002)

この sibuk 型ＣＯＤ構文は，前章で扱った，layak 型 COD 構文と異なり，被動者が主節の主語となっている時に，sibuk という属性が帰属するのは，主語である被動者ではなく，一貫して，補文中の動作主である。この構文では，主節の主語が動作主の場合，補文の主語の位置には PRO が現われ，PRO は，主節の主語と同一の解釈を与えられる。即ち，この構文の場合には，主語に何が来ても，sibuk という属性が帰属するのは，補文中の動作主である。この点が，前章で扱った，layak 型ＣＯＤ構文と異なる。layak 型ＣＯＤ構文の場合には，layak という属性は主語に帰するので，主語が変われば，当然その文の解釈も異なるのは，これまで観てきたところである。

この sibuk 型ＣＯＤ構文と同じ特徴を持った構文を作る形容詞としては，malas（怠ける，サボる），malu（恥ずかしい）がある。malas, malu を使った例を挙げる。

(70)Pinggan mangkuk malas dicuci ibu.

（お母さんは面倒くさがって食器を洗いません）

(71)Baju menjolok mata macam tu malu kupakai.

（そんな人目を惹く服を私は恥ずかしくて着られません）

(70)では，malas（怠ける，サボる）という属性の帰属先は，pinggan mangkuk（食器類）ではなく，自分の母親である。(69)でも，malu（恥ずかしい）という属性の帰属先は主語の baju menjolok mata （人目を惹く服）ではなく，aku（わたし）なのである。詰まり，(70)，(71)は，夫々，(72)，(73)の様に言い換えても，それの意味する所に変更を来たすことはないのである。

(72)Ibu malas mencuci pinggan mangkuk.

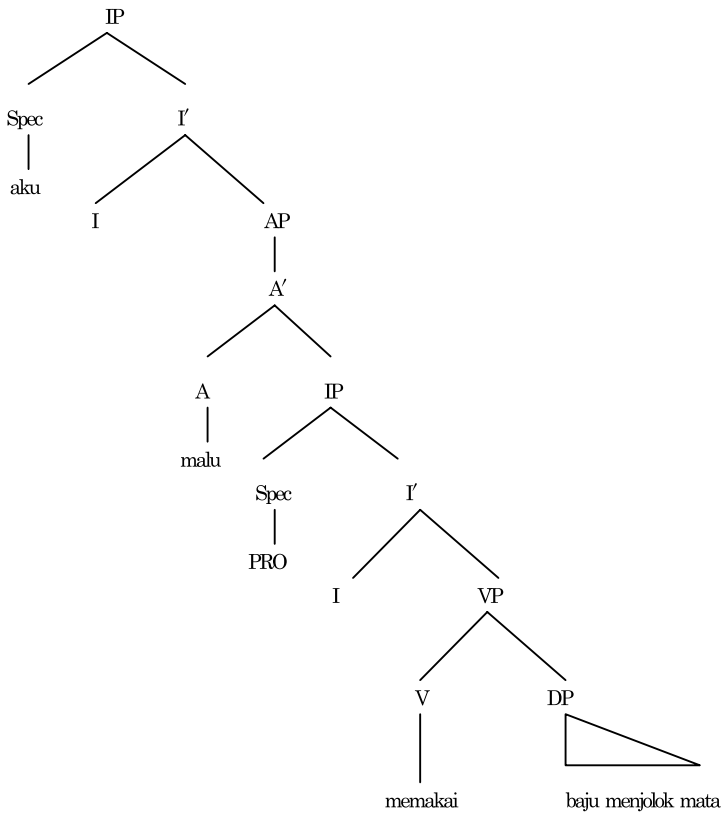
（お母さんは面倒くさがって食器を洗いません）

(73)Aku malu memakai baju menjolok mata macam tu.

（そんな人目を惹く服を私は恥ずかしくて着られません）

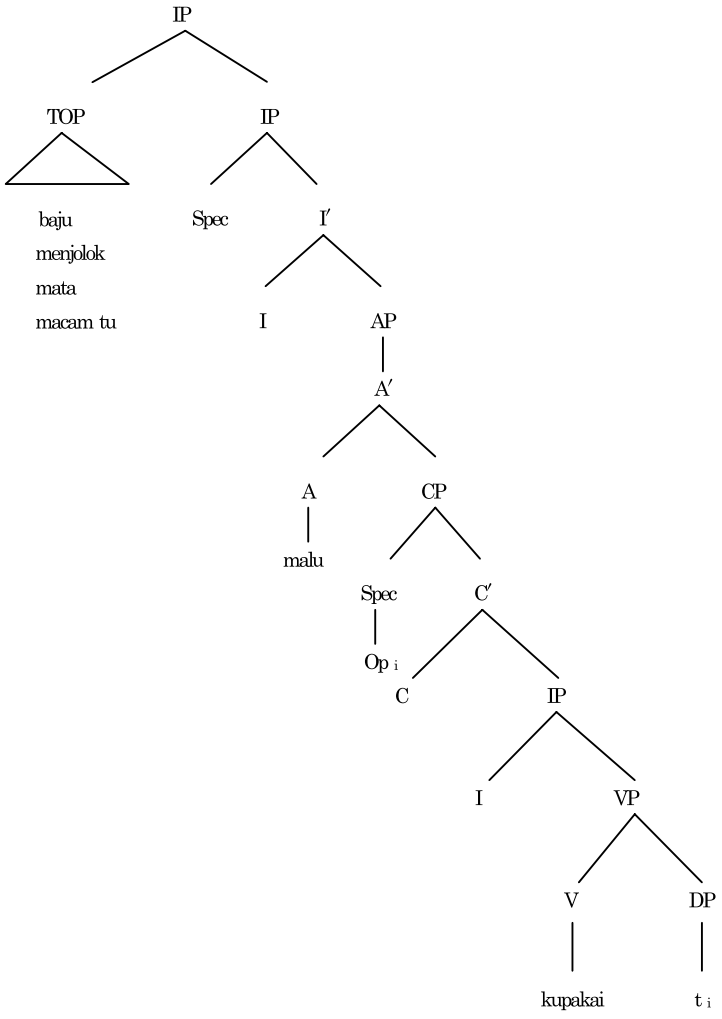
(72)と(73)においては，malas（怠ける，サボる），malu（恥ずかしい）という形容詞は主節の主語の属性を表わしているから，これらの文の構造も，ibu，aku が主節の主語の位置を占めていると考えられる。今，(73)の構造を図示すれば，(74)の様になる。

(74)



一方，(70)や(71)で，主節の主語が，それに続く形容詞の帰属するものであるという解釈がなされないという点から考えると，layak とは丁度反対に，主節の主語とその後の形容詞との間に，隔たりがあると考えられる。この隔たりがあるからこそ，「食器類（pinggan mangkuk）が怠け者（malas）である」，「人目を惹く服（baju mencolok mata）が恥ずかしいと感じる（malu）」といった滑稽な解釈に陥る危険性を考えて思い煩うことはないのだと言える。又，他のＣＯＤ構文と同じく，格を付与される位置，即ち，いわゆる人称形の後方の位置から移動が行われているとすれば，この様な移動は，Ａ´移動であるから，当然移動先は，Ａ´の位置ということになるので，ＣＰの指定部（Spec）となるであろう。そして，(70)で，pinggan mangkuk が占めている位置を，主題の位置と考えれば，pinggan mangkuk と malas という述語形容詞の間には，空の主語の位置が介在するので，両要素の直接の結びつきが阻止されるので，こういう構造を仮定すれば，この文の解釈を反映していると言える。以上のことを踏まえて，(71)の構造を図示すれば，(75)となる。

(75)



(71)の構造が(75)の様であるとすると，malu という形容詞が，移動したゼロ演算子のある位置，即ち malu のＣＰ補文の指定部（Spec）よりも上にあることになる。このままでは，正しい解釈がなされないので，malu をＣＰの内部に移す必要がある。malu は最小投射 X^0，即ち主要部であるから，主要部の移動先は，主要部でなければならないので，移動先の候補としては，ＣとＩがある。malu は kupakai（私が着る）の，ku-（私）と直接的な関わりをもつ事から考えて，kupakai（私は着る）という動詞の直前の位置に置くのが適当と思われる。即ち，malu の移動先としては，kupakai のすぐ左にあるＩの位置が適当であろう。(71)の malu は主節の主語，即ち baju menjolok mata macam tu の属性ではなく，kupakai（私は着る）という動詞中の接語代名詞の部分である ku-の属性という解釈を受けるという点に照らし合わせても，malu がこの位置に動くのは適当であろう。元の位置に

おける malu の地位を，独立した領主の地位に譬えるとすれば，移動した後の malu の地位は，動詞という領地内の郡代とも言うべき，従属的な地位に譬えられる。IP の主要部である I の位置は，動詞に従属する領域であり，ここの位置にあるものは，動詞と共に，動作主と密接な連関を成す。(73)の様に，主節の主語が動作主でもある場合は，当然の事ながら，I の位置にある助動詞は，主節の主語と密接な意味的連関を構成するが，(71)の様に，主節の主語が，被動者となっている場合には，この主節の主語と，密接な意味的連関を構成せず，動作主を表わす，動詞中の接語代名詞と密接に関わりを成すことになる。

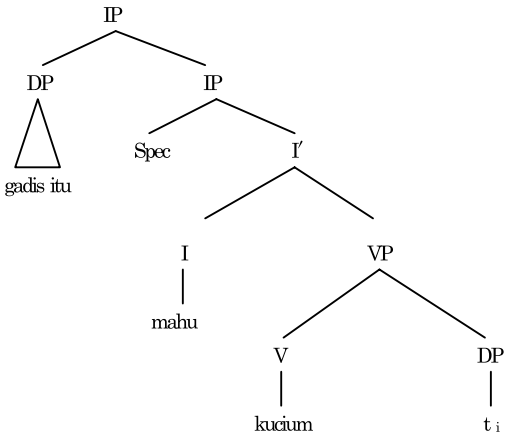
このことを，助動詞が出てくる(76)の例で説明してみよう。(76)の解釈においては，助動詞の mahu（欲する，望む）は，主節の主語である gadis itu（その少女）と意味的な連関を構成するのではなく，動作主を表わす，kucium（僕が接吻する）という動詞中の接語形一人称代名詞と密接な連関を構成している。即ち，この場合，接吻したいと欲している主体は，gadis itu ではなくて，kucium（僕が接吻する）という動詞中の ku-（僕）なのである。

(76)Gadis itu mahu kucium.

（その少女に僕は接吻したい）

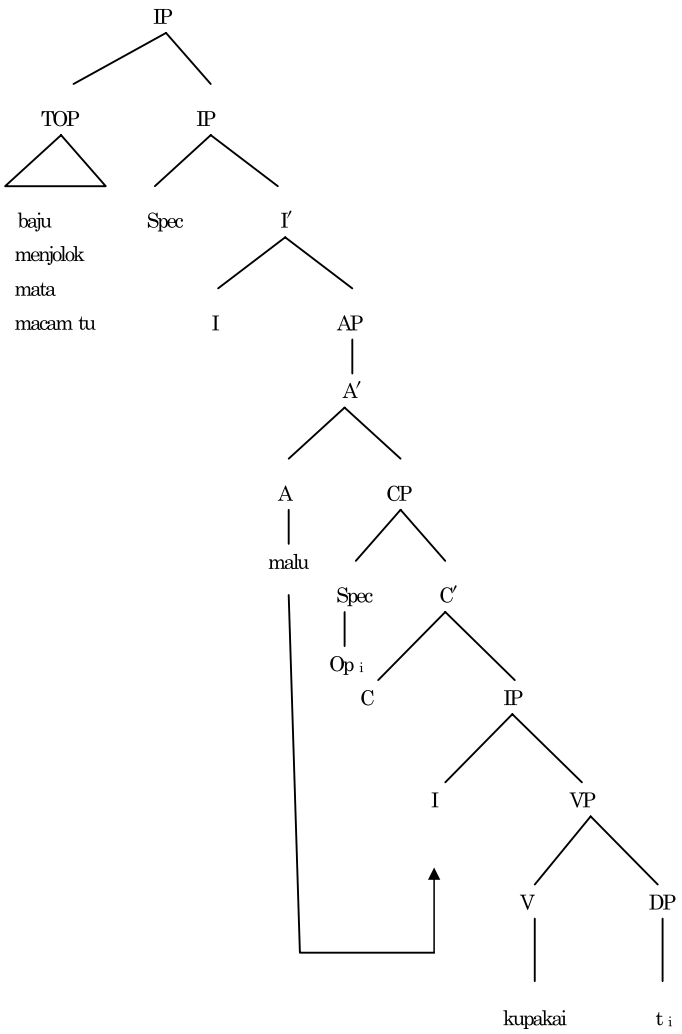
(76)の構造を図示すれば，(77)の様になる。

(77)



この，助動詞の例を参考にして考えると，(74)の malu（恥ずかしい）を，(77)の様に，下方の I の位置に移動させる方式を取るのが妥当な派生方法であろう。この方式（今後この操作を形容詞降下と呼ぶことにする）を取れば，malu は，助動詞と同じく，動作主と密接な意味的連関を構成し，malu は動詞中の ku-の属性と捉えられるので，(78)はこの文の解釈を忠実に反映した構造と言える。

(78)



(71)は，「僕はそんな目立つ服は恥ずかしくて着られない」という解釈があるのみであるが，(79)は，二通りの解釈が成立つ。二つの解釈を，文の下に示す。

(79)Beruk malu kucium.

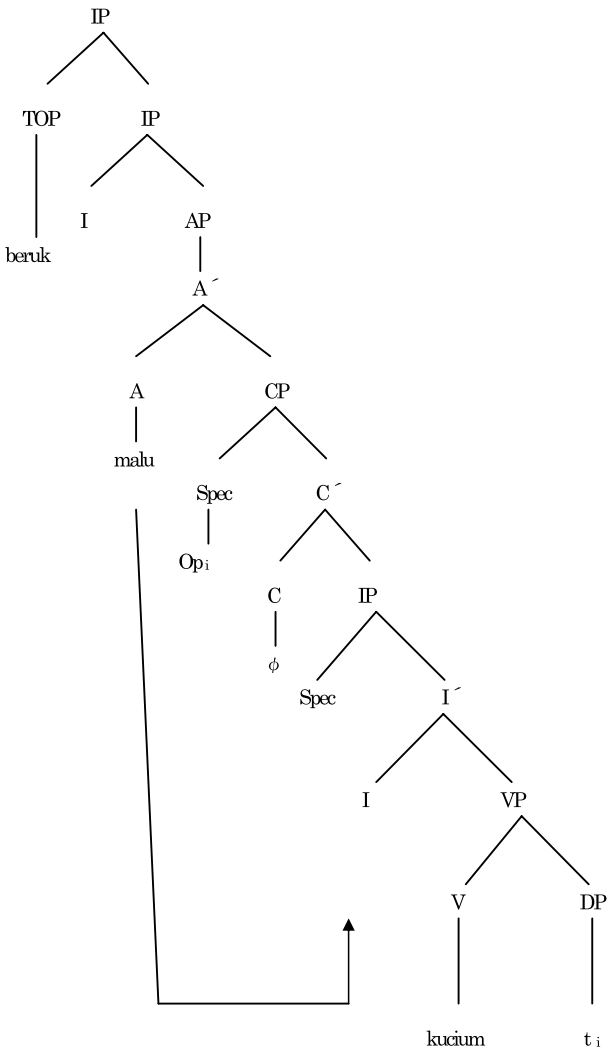
①僕はブルック猿に恥ずかしくて接吻できない。

②ブルック猿は僕に接吻されるのが恥ずかしくて嫌がっている。

(71)では，baju menjolok mata macam tu （そんな目立つ服）は，無生物であるから，無生物がそもそも恥ずかしいという感情を持つことが考えられないので，「そんな目立つ服が僕に着られるのが恥ずかしいと感じた」という解釈は最初から排除されているが，(79)の場合には，知能の高い類人猿であるブルック猿が恥ずかしいという感情を持つことは，確かめられている訳ではないとは言え，不可能なことでもないので，②の様な解釈が可能と

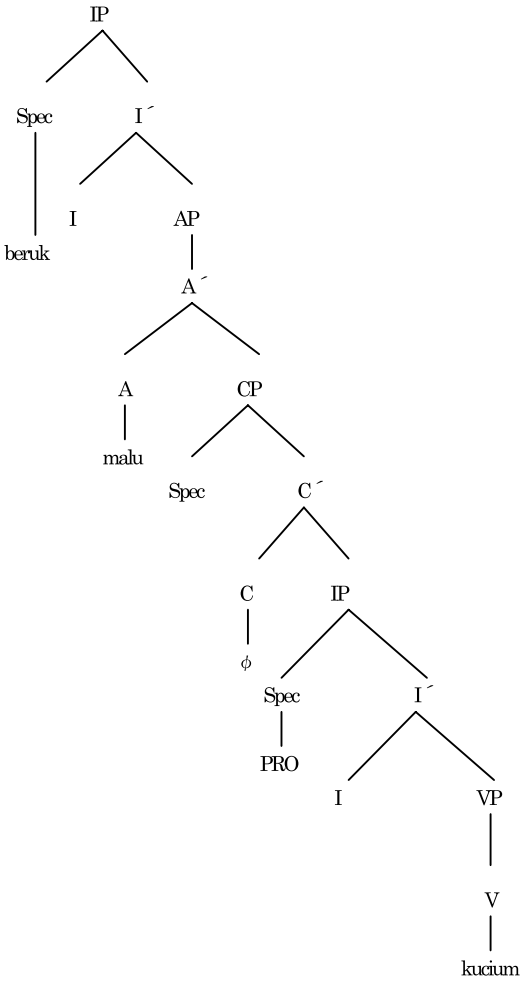
なったと言える。(71)の解釈を生み出す構造は，(78)の様に，形容詞降下という操作が掛かったものと考えた。従って，この文の派生のみを考えている限りでは，主節の主語が被動者の場合，形容詞降下は義務的に掛かると考えるかも知れないが，(79)の文が曖昧であるということも考慮に入れると，この形容詞降下という操作は随意的操作と言わなければならない。即ち，(80)の様に形容詞降下が掛かると， (79)の①の解釈が生まれ，(81)の様に，形容詞降下が掛からなければ，malu（恥ずかしい）という属性は主文の主語である，ブルック猿に帰せられ，(79)の②の解釈が生まれるということになる。

(80)



目次ページに戻る。

(81)


IP
Spec
I´
beruk
I
AP
A´
A
CP
malu
Spec
C´
C
IP
ϕ
Spec
I´
PRO
I
VP
V
kucium

6. 形容詞降下と類似の現象

前章で，形容詞降下という操作が随意的であることを主張した。この操作が随意的であることにより，(78)の文に，二通りの解釈が生じることになる。これと類似の操作は，動詞にも見られる。前に扱った(76)の文（(82)として再掲する）は，もう一つの解釈が成立つ。それは，「その少女は僕に接吻されたいと思っている」という解釈である。即ち，(82)は，(79)同様，次の様に二通りの解釈がある。

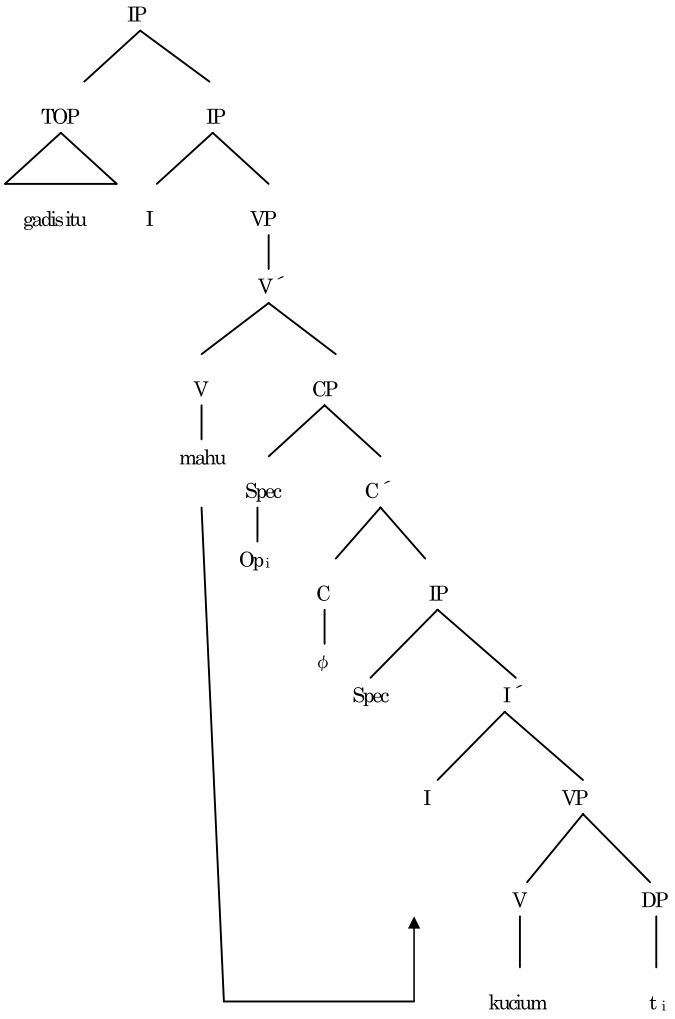
(82)(=76)Gadis itu mahu kucium.

①その少女に僕は接吻したい。

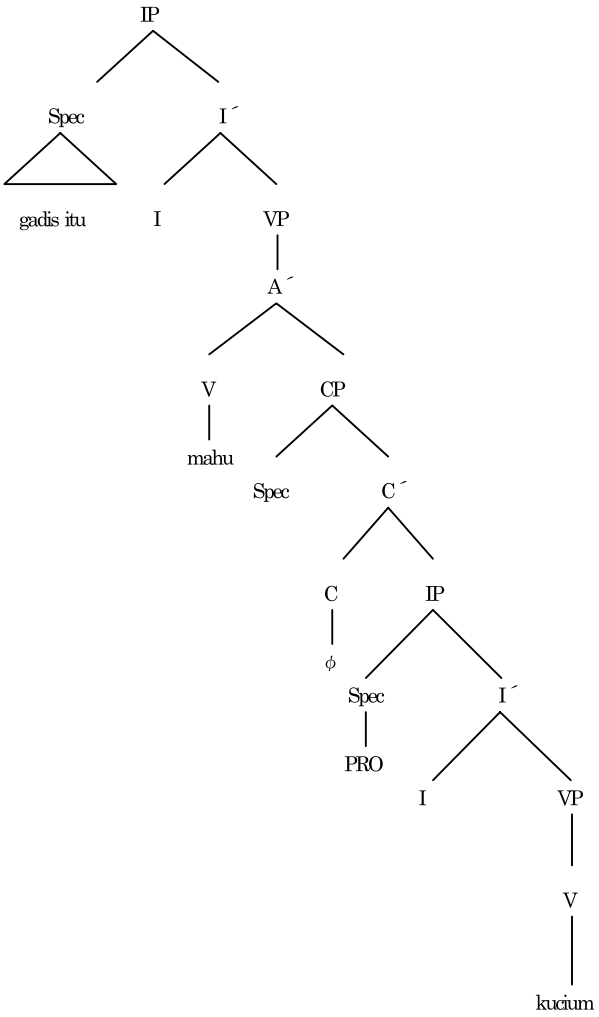
②その少女は僕に接吻されたいと思っている。

筆者は，②の解釈では，mahu は本動詞として使われているのに対して，①の解釈では，mahu は助動詞として使われていると，正保（1995）で主張したが，mahu は本動詞であって，その本動詞が I の位置に降下可能な動詞であると考えることもできる。もし，mahu という動詞が降下しなければ，②の解釈が生じ，本動詞の mahu が I の位置に降下すれば，①の解釈を生じると考えれば，形容詞降下という操作と，並行的に考えることができるので，同じ変形操作として，纏めることができるので，文法記述の簡潔性という面からも好ましい方式であると言える。形容詞降下と同様の操作が，動詞についても適用し得るという前提に立てば，(82)の①の解釈を生み出す基になる構造は，(83)であり，(82)の②の解釈を生み出す基になる構造は，(84)であると考えられる。

(83)


IP
TOP
IP
gadis itu
I
VP
V´
V
CP
mahu
Spec
C´
Op i
C
IP
ϕ
Spec
I´
I
VP
V
DP
kucium
t i

(84)



次の(84)，(85)の解釈においては，lupa, berjaya という自動詞は，主節の主語と意味上密接な連関を構成しているのではなく，動詞中の接語代名詞と，意味上密接な連関を構成している。この事実を，これらの文の構造に反映させるとすれば，動詞を I の位置に降下させる操作を仮定することが考えられる。詰まり，形容詞の場合と同様，自動詞（の一部）が I への降下をすることにより，助動詞の様に，動作主と密接な連関を構成すると考えるのである。そして，この自動詞の降下が適用された構造が(85)，(86)の解釈を導き出す基になっていると考えられる。

(85)Buku itu lupa kubawa.

（僕はその本を持って来るのを忘れた）

(86)Penjenayah itu berjaya ditangkap plolis.

（その犯罪者を警察は捕まえるのに成功した）

lupa, berjaya が降下して，一番下の VP の直前の I の位置に移動することによって，助動詞と同じく，動作主，即ち動詞 ditangkap polis 中の polis と密接な意味的連関を構成し易い位置を占めることになるので，lupa が penjenayah と意味的な連関を構成したり，berjaya が penjenayah と意味的な連関を構成することが避けられることになる。これらの自動詞は，mahu とは異なり，動詞降下が随意的ではなく，被動者が主節の主語になった場合には，義務的であると考えられる。それは，次の様な文が認められないことからも分かる。

(87)*Saya lupa dibawanya dengan kereta ke hospital.

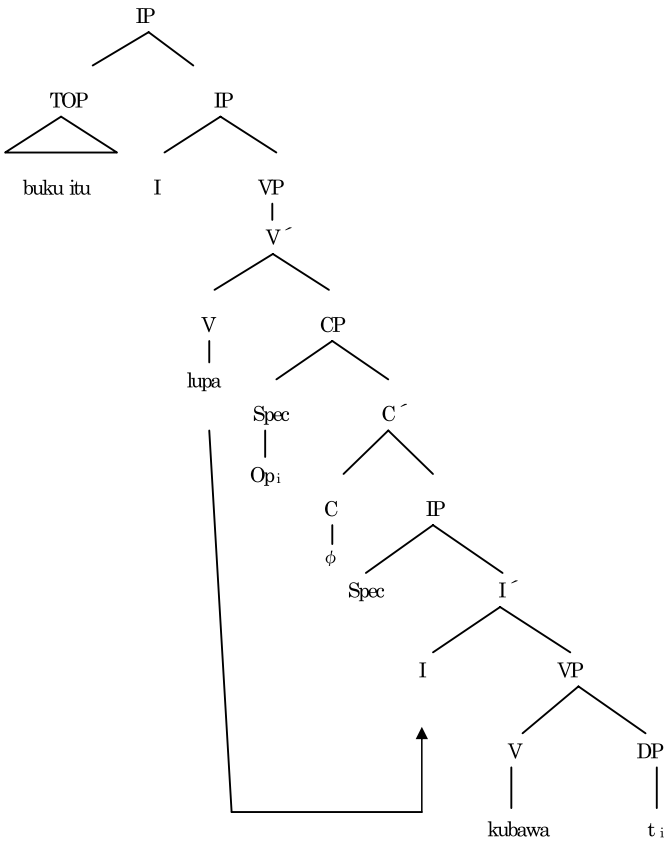
（＊私は彼に車で病院まで連れていって貰うのを忘れてしまった）

(88)*Pesakit itu berjaya dibunuh isterinya.

（＊その病人は自分の妻にうまく殺された）

もし mahu の様に，動詞降下が随意的であるならば，降下が掛からない構造が，(87), (88) の解釈を許す筈だからである。(85)の構造を図示すれば，(89)の様にである。

(89)

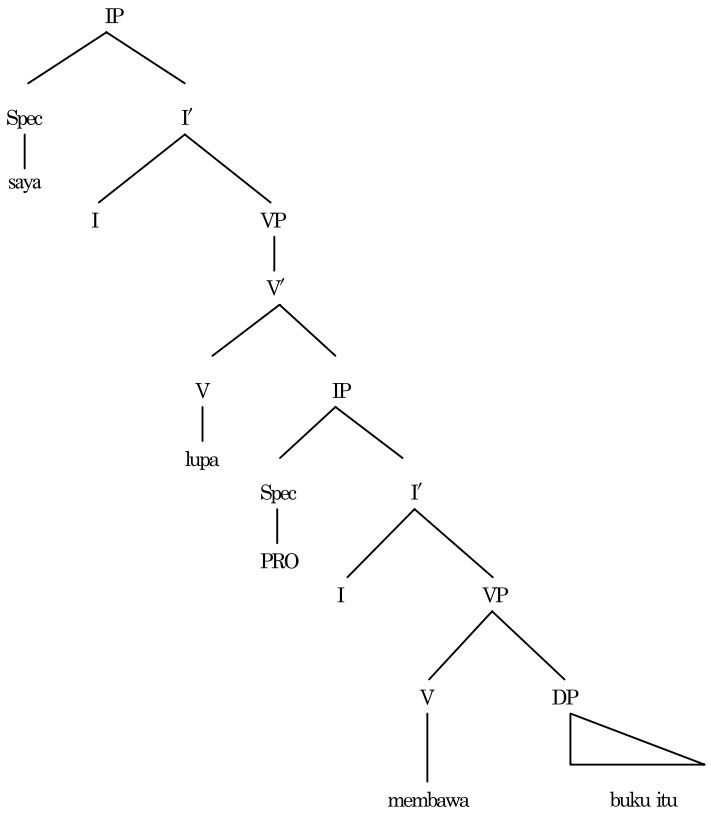


(85)とは逆に，動作主が主節の主語となっている文(90)の構造は(91)の様にである。

(90)Saya lupa membawa buku itu.

（私はその本を持ってくるのを忘れた）

(91)



7. 結語

本論では主節の主語と，形容詞補文中に存在する空所が同一指示的と解釈されるいわゆる COD（Complement Subject Deletion）構文と呼ばれる構文に見らる諸特徴について考察し，その特徴に基づいて，①sukar 型，②layak 型，③sibuk 型に分類した。この中，①の sukar 型は，主語に空の形式代名詞(EXE)を取る次の様な構文が可能であるが，この点が他のパターンと区別される点である。

(92)=(30)Adalah sukar untuk rakyat negara ini menguasai ilmu dan maklumat yang ada.

（この国の国民が現在の学問や情報を吸収するのは難しいことなのである）

次の(93)は，(94)の構造から補文主語の kita を，主節の主語の位置へ移動することにより生じたと考えた。

(93)Kita sukar memahami makna tersembunyi syair ini.

（我々がこの韻文の秘められた意味を理解するのは難しい）

(94)*Sukar kita memahami makna tersembunyi syair ini.

（＊我々がこの韻文の秘められた意味を理解するのは難しい）

(94)は，補文主語の kita が格を付与されないので，このままの位置では非文となる。この kita を主節の主語の位置に移動させることにより，kita はこの主節の主語の位置で格を得られることになる。

②の layak 型が，他のパターンと異なる点は，layak の左に現われる名詞句が，補文中の動作主に対応するものであるか，補文中の被動者に対応するものであるかによって，異なる解釈が生じるという点である。このことは，次の両文の解釈の違いによって明らかである。

(95)Syair Parsi ini tidak layak untuk kita terjemahkan.

（このペルシャの韻文は我々が訳すに値しないものだ）

(96)Kita tidak layak untuk menterjemhakan syair Parsi ini.

（我々はこのペルシャの韻文を訳すのに適していない）

これら両文の解釈の相違は，述部である layak と直接関連を持つ要素に依存していると考えられるので，(95)の syair Parsi ini（このペルシャの韻文），(96)の kita（我々）は述部である layak と密接な関連を構成する位置，即ち主語の位置を占めていると考えれば，これら両文の解釈の相違を自然と説明できる。

③の sibuk 型に入る形容詞には，malas （億劫にする，面倒がってやらない）や malu（恥ずかしがる）がある。このパターンでは，形容詞補文中の被動者が文頭の位置を占める(97)の様な文においては，被動者と述部形容詞は，密接な関係を構成せず，むしろ述部形容詞は，補文中の動詞の一部となっている動作主と密接な関連を構成していると考えられる。(97)の解釈は，それの裏付けとなる。

(97)Baju menjolok mata macam itu malu kupakai.

（そんな目立つ服を私は恥ずかしくて着られない）

この解釈を反映する構造を考えると，baju menjolok mata macam itu（そんな目立つ服）は，述部の malu と直接的な連関を構成する主語の位置ではなく，主題の位置を占めている構造を思いつく。主題の位置にある要素は，述部の形容詞とは距離を置いた位置にあるので，baju menjolok mata macam itu（そんな目立つ服）が述部形容詞である malu（恥ずかしい）と直接的な連関を構成して，「そんな目立つ服が恥ずかしい」という，滑稽な解釈が生ずるのは回避できる。そして，(97)の文の正しい解釈が導き出されるためには，主節の述部形容詞を，解釈上それと密接な連関を構成する，補文中の動詞の一部である動作主に隣接した位置である，補文中の VP と姉妹関係にある I の位置に下降させるという変形操作を仮定することで，(97)の解釈を忠実に反映する構造に辿りつくことができた。形容詞降下が掛からなければ，述部形容詞が，ゼロ演算子の移動先である補文 CP の指定部(specifier)よりも上に位置しており，これでは，ゼロ演算子の領域外にあるので，正しい解釈が出てこない。こういう理由からも，述部形容詞は降下する必要があるのである。述部形容詞の降下先である I は，助動詞が占める位置でもあり，この位置を占める助動詞は解釈上，動作主と密接な連関を構成する。このことは，(98)の文の解釈において，mahu（欲する，～したいと思う）は，動詞 kubunuh（俺は殺す）中の動作主を表わす部分の ku-と密接な意味的連関を構成する。そこから，「俺はお前を殺したい」という解釈が出てくることになる。

(98)Kau mahu kubunuh.

（俺はお前を殺したい）

(98)の例によっても分かる様に，VP と姉妹関係にある I は，動詞句と密接な意味的連関を構成する位置であるから，この位置に述部形容詞を降下させることにより，助動詞の場合と同じく，それと姉妹関係にある VP と密接な意味的連関を構成することが可能となる。

本論で主張した形容詞降下は，sibuk 型の場合，形容詞補文中の被動者が，主題と同一指示的である(99)の様な場合には，義務的である場合が多い。

(99)Beruk malu kucium.

（僕は恥ずかしくてブルック猿に接吻できない）

しかしながら，この文には，「ブルック猿は私に接吻されるのを恥ずかしくて嫌がっている」という解釈も存在する。この解釈を生み出す構造は，前述の(81)の様であり，この解釈では，述部形容詞 malu は，猿の心理と密接に関わってくる語であるから，この解釈では，形容詞の降下は掛かっていないと考えられる。

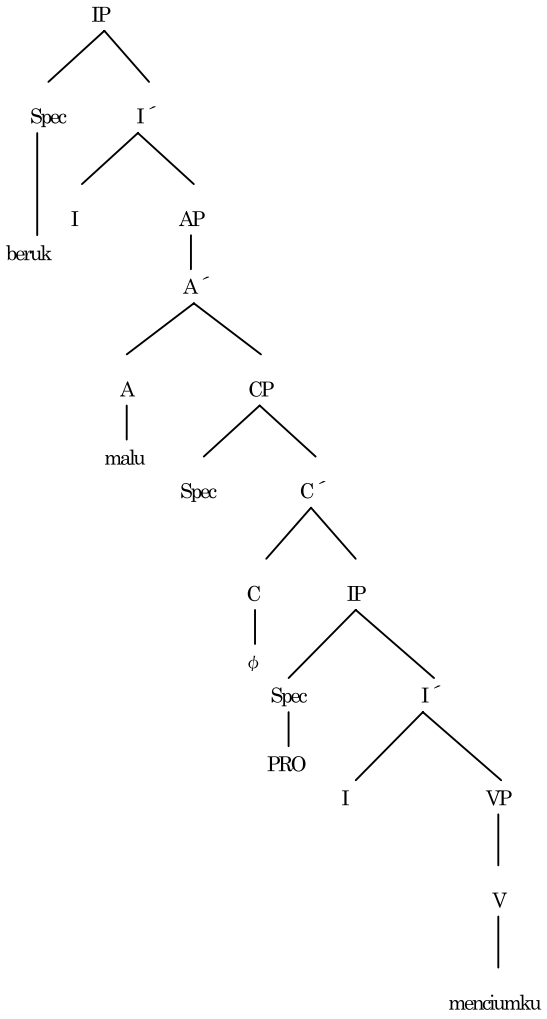
次の(101)の文においても，形容詞 malu の降下は起こっていない。(101)の構造を示せば，(102)の様である。

(101)Beruk malu menciumku.

（ブルック猿は僕に接吻するのが恥ずかしくてできない）

目次ページに戻る。

(102)



目次ページに戻る。

参考文献

正保勇(1994-a)「マレーシア語の述語補文」『東京外国語大学論集　48』. 東京外国語大学.

── (1994-b) 「マレーシア語の変項」『東京外国語大学論集　49』. 東京外国語大学.

── (1995) 「マレーシア語の IP 構造と人称形」『東京外国語大学論集　51』. 東京外国語大学.

Shoho, Isamu and Hiroshi Uzawa (2004) "Patterns of Adjective Phrase Complement Sentences in Malay" in *Corpus-Based Analysis on Sentence Structures . 21 st Century Center of Excellence Program : Usage-Based Linguistic Infomatics.* Tokyo University of Foreign Studies.

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

マレーシア語の状態詞に関する諸問題

鵜沢　洋志
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

0. はじめに

本稿では，マレーシア語の状態詞に関するいくつかの問題点を取り上げ，議論していく。状態詞の統語的機能を十分理解し，活用していくには，未解決な部分が残されているという見解が，研究動機の一つと云える。状態詞と動詞の修飾構造に関する提言，その修飾構造から見た，状態詞の動詞修飾の可否に関する問題，動詞を修飾する際に見られる語句の形態的なバラエティの三点を考察の対象とする。ここでの研究は，述語の内部構造を記述することに役立ち，文型考察などの展開が予想される。

コーパス[1]が新聞記事に限られている点を考慮すると，文例採取に関しても，分量はもとより，限定された文の型になる可能性がある。今後，より広いコーパスをデータ化していく必要がある。

1. 問題提起

1-1. 状態詞

状態詞とは，鵜沢（2003）において立てた，マレーシア語の品詞の一つ[2]である。統語環境を基準とした分類により，状態詞は，単独で述語になりえ[3]，名詞を修飾することも動詞を修飾することもある，としている。

先人のマレーシア語研究では，分類の基準などが明らかにされず，西欧文法の模倣のような品詞分類がなされていた。Abdullah Hassan（2002）も，マレーシアの伝統文法とも云える四つの語類（名詞 kata nama，動詞 kata kerja，形容詞[4]kata sifat，機能詞 kata tugas）を立てているが，そこでは，形容詞が名詞も動詞も修飾しうるという立場から，諸例を挙げているという点で，西欧文法のいわゆる「形容詞」との相違を見せている。

また，正保（2000）では，上のような働きの違いを品詞に反映させ，西欧的ではあるが，

---

1 本稿は，21 世紀 COE（Center of Excellence）プログラム：言語情報学拠点の，研究成果の一つである。同プログラムにおいて，マレーシア語のコーパス作成を，Utusan Malaysia Online（www.utusan.com.my）の 2002 年のヘッドライン記事（Muka Hadapan）から試みた。本稿で用いられている文例は，その内の半年分（奇数月）を基にしたものである。尚，検索ソフトは，フリーウェアの K2editor を利用した。

2 鵜沢（2003）にでは，マレーシア語には，以下の七つの品詞を立てることができるとしている。名詞，動詞，状態詞，叙述詞，接置詞，副詞，感動詞である。

3 単独で述語になりえることは，当然，単独でならなければならないということと，等価ではない。他にも，述語を構成する句の head になるという意味も含むものである。

4 Kata sifat を直訳すると，状態詞（状態語）とも訳せる。

同一の語に対して，形容詞と副詞と「語籍が跨る」ものの立場を支持している。

以下では，状態詞に関係のある幾つかの問題点を指摘し，分析していくことで，この品詞分類の妥当性を検証するとともに，その知見を深めることを目的とする。

1-2. 問題の所在

鵜沢（2003）でも指摘していることだが，状態詞と動詞の差異が，主語になれるか否かという点に依存しているところに，若干，定義の脆弱な面があるように思われる。筆者の記述の通り，確かに，動詞と状態詞とは，連続体の両極のようなものかもしれない。だが，そこで仮にその分類を一つにまとめたとしても，述語の内部構造を記述する際に，構造と機能との間で不適当な記述になることが予測され，結局は下位分類として峻別していく必要性が生じるように推測される。よって，本稿ではひとまず，状態詞と動詞とを，極の存在を代表とするものとして区別していく立場をとる[5]。

本稿で注目する状態詞の問題点は，以下のようなものである。第一に，修飾構造に関する問題，第二に，動詞を修飾できるか否かという問題，そして第三に，動詞を修飾する際の，接置詞との関係である。

まず，「修飾する」とはどういう状態であるか。統語構造や意味解釈を考慮して，その実情を明らかにしていく。次に，動詞を修飾できない状態詞があるという考えを踏まえ，どのようなものがそうであるかを見ていくために，状態詞の持つ意味を仮の基準として観察していくことにする。最後に，動詞を修飾する場合に，単独でできるものや接置詞と結び付いて可能なもの，またはその両方が文例として存在するものなどを概観していく。

2. 考察

2-1. 修飾構造

マレーシア語の修飾構造は，「被修飾語＋修飾語」が一般的であるとされている。だが，「修飾語＋被修飾語」の語順をとるものもいくつか見受けられる。

1） kereta saya / pos laju / bilik mandi
車 私 / 郵便 速い / 部屋 沐浴する
（私の車） （速達郵便） （沐浴室）

1）のように，名詞が被修飾語となる場合は，修飾語は必ず後置する。だが，状態詞などを修飾する一部の副詞は，修飾語が被修飾語の前に来るものや，前後双方の位置に出現可能なものもある。

2） besar sungguh / sungguh besar / paling tinggi
大きい とても / とても 大きい / 最も 高い

副詞 sungguh は，状態詞などの前後双方に出ることが可能であり，そこでの意味の差は特にないとされている。同様の修飾構造を持つものに amat や sangat などもあるが，ある

5 以下，品詞の記述においては，断りのない限り，鵜沢（2003）によるものとする。

ものは，前後のいずれかによって，意味に差が生じることもあると云われるものもある。一方，paling は同じく副詞であるが，被修飾語の前にしか出ない。このような差異は，統語構造を基盤とした品詞レベルで扱うものではなく，語彙レベルの問題である。

ここでの問題である，状態詞の「修飾」構造に話を進める。「修飾語」というのは，従来の文法概念を基にすると，あくまで飾り言葉であるので，句の head になることは出来ないと考えられる。また，それは，文やその構成素であると考えられる「主語」「述語」を構成するのに，不可欠な要素ではないということも意味している。

以下の文例を見てみる[6]。

3）2002.01.31.txt ``Umat Islam boleh *menjadi* **kuat** ….

ムスリム　できる　～になる　強い

（ムスリムは・・・強くなれる）

4）2002.01.24.txt ``Hidup kami sudah *menjadi* **susah** ….

生活　私達　すでに　～になる　難しい

（私たちの生活は，すでに困難になり，・・・）

5）2002.05.04.txt …, ASEAN perlu *bertindak* **cepat**.

アセアン　必要だ　行動する　　速い

（・・・アセアンは，早急に行動することが必要である）

6）2002.09.03.txt Kejayaan boleh *dicapai* **lebih cepat** daripada yang dijangka ….

成功　できる　達成する　より　速い　～より　～の　予想する

（・・・予想よりも速く，成功が達成されるだろう）

それぞれの文例では，動詞の後ろに状態詞が来ている。だが，3），4）と 5），6）では構造が異なると考えられる。前者では，状態詞は動詞の補語として，必須の役割りを演じているのに対して，後者では，文の中心的な構造，いわゆる「主語・述語」から見れば，随意的な付属要素であると云える。ここで対象にしたいのは，後者の用法の状態詞である。この構造が修飾構造であることには，疑いがない。問題は，以下に見るような文例である。

7）2002.09.16.txt ``Pemandu bas **cepat** *bertindak* mengelak ….

運転手　バス　速い　行動する　　避ける

（バスの運転手は，・・・避けようとすばやい行動をとった）

8）2002.09.28.txt …, nanti Angah **cepat** *sembuh*, boleh minum (jus) epal, ….

その後　（名）　速い　　治る　できる　飲む　ジュース　りんご

（・・・その後アンガはすぐに治り，りんごジュースも飲めるようになり，・・・）

9）2002.11.23.txt … jika mereka **pandai** *menggunakan* ilmu.

もし　彼ら　　賢い　　利用する　　学問

（もしも彼らが知恵を活かすのがうまければ・・・）

7），8）では，5），6）と同じ語 cepat が考察の対象となる。違いは，状態詞 cepat の位

6 以下の文例において，対象となる状態詞は太字，動詞は斜字体によって示す。

置が，動詞の前にあるか後ろにあるかという点である。先ほど見た通り，後ろにある場合は，文において中心的な統語的振る舞いをするものではなく，随意的な修飾要素であると云える。問題は，前にある場合が，同様の修飾要素であるか否かということである。

文例 9）での対象語 pandai は，動詞の後ろに現れることはない。そのような用法がない状態詞の一つである。では，この文例はどう分析するのか。7），8）の文例も，それと同じ構造として扱うことになるのだろうか。

9）の文例では，pandai の後ろの動詞句は，状態詞と結び付いて，状態詞の持つ意味に対して補完する働きをしており，いわゆる「補文構造」と呼ばれるもの[7]であると考えられる。補完される動詞句がない場合でも，統語的に非文法的なものとはならない[8]のが特徴の一つとも云える。7）においても，cepat だけでも述語として成立することや，統語構造としての語順を優先的に解釈するとしたならば，やはり後部の動詞句は前の状態詞を意味的に補完していると考えられるので，一見するとここでも同様の補文構造と捉えて差し支えはないかもしれない。

では，5）と 7）では，動詞と状態詞との関係を含んだ意味解釈において差異は生まれないのだろうか。統語構造に違いがあるのなら，若干なりとも差異が生まれてもおかしくはない。例えば，修飾構造をとる場合は，動作に対しての一回性の状態を表すのに対して，補文構造の場合は，主語の持ちうる恒常的な性質などを表すなどの差異である。だが，そうも単純には割り切れそうにないようである。修飾構造の意味解釈についても，補文構造においても，恒常性と一回性，ともに解釈可能であるような場合もあり，いずれと決めかねる。それは，文脈によって判断しわけることや，動詞との意味的な関係，また，状態詞自身の持つ意味に依存しているとも云えそうである。確かに，動作を修飾する場合であれば，一回性であることが見受けやすいかもしれないが，能力などを表すならば，たとえ後ろからの修飾構造であっても，恒常的な性質であろう。

そうすると，具体的には，7）では，やはり一回性の動作を修飾していると考えるのが自然かもしれない。次の例では，しかし，性質的なものを表していると解釈すべきであろう。

10）2002.11.17.txt … dan dia **cepat** *naik* marah," ….

そして　彼女　速い　上がる　怒る

（・・・そして彼女は怒りやすかった，・・・）

まとめると，状態詞が動詞に後続する場合は，動作などを修飾する「修飾構造」であると云え，動詞に対して状態詞が先行する場合は，「補文構造」であると考えられる。だが，一回性の動作を「修飾する」という点では，その構造が前から後ろの動詞を修飾しているという「修飾構造」も，意味解釈がそのように示しているならば，積極的に否定する材料がないとも云える。一見して同一の構造であっても，違うということである。また，恒常

7 「補文構造」に関しては，Shoho and Uzawa（2004）において，分析がある。

8 非文法的にならないということは，ここでは，状態詞が単独で述語になれるということに起因しているだけであり，意味内容を考えれば，補完部がなければやはり不自然であると云える。

的な性質を表したり，一回性の動作を表したりするのは，文脈や語の持つ意味に関する問題である可能性が高いわけだが，これ以上の議論は，今後の主要な課題の一つとする。

先にも出した Abdullah Hassan（2002）では，形容詞が動詞を修飾する場合，前からも後ろからも可能であるとされている[9]が，それ以上の構造についての分析はない。また，どの形容詞に関してもそうであるかに関しての記述もない。

ここでの本稿の立場は，分析の方向性は理に適っているとしても，考察とその結論が充分であるとは云い難いため，文法記述に対する見直しの契機として問題提起しておく。

2-2. 動詞修飾の可否

ここで問題にしている動詞修飾とは，動詞の後ろに出現する状態詞に関するものだけで，前節で結論を保留した，先行する場合に関しては，考察不充分のため，ここでは修飾構造としての考察の対象から外すことにする。

動詞を後ろから修飾するという機能は，状態詞における必須の機能ではないということを考慮し，この節では，いかなる状態詞が動詞修飾できるか，即ち動詞に後続しうるかという点について，考察を進めていく。理論から云えば，補文構造とは別に，前からの修飾を認めたならば，前からだけ，後ろからだけ，前後両方から，という三種類の修飾構造が考えられる。ここでは，前節を踏まえ，後ろから修飾可能か否かということを考察の起点とするため，後二者に限って論を進めることになる。

作業仮説として，状態詞の意味分類を立て，そこでの修飾の可否を見ていくことにする。なぜなら，動作などを表す動詞を修飾する際，意味的に不適となる語もあるであろうと予測されるからである。また，このアプローチは，前節で述べた，恒常性・一回性などにも何らかの示唆を与える可能性があるからである。以下に，考察の基盤とする意味分類[10]と，候補となりうる語を，数例ずつ挙げる。

Ａ．人物評価　pandai, berani, cerdik, bodoh, etc.
Ｂ．行動判断　wajar, mustahak, adil, perlu, etc.
Ｃ．難易能力　mudah, susah, sukar, sanggup, etc.
Ｄ．動作状態　cepat, laju, kuat, pantas, etc.
Ｅ．形状性質　bulat, rendah, panjang, pendek, etc.
Ｆ．知覚感情　sedih, seronok, manis, gemar, etc.

ここに挙げた意味分類は，一つの作業仮説上の枠組みに過ぎない。より細分化することや，別の枠組みを加えることが必要となる可能性があることも，当然，認めるつもりである。現に，一つの状態詞を取り上げてみても，その意義素の示す意味と実際の文例での意味するところとの間には，若干のずれが生じているのが自然であると考えるからである。

以下に，考察のための文例を挙げていく。

---

9 同様の構造を，一部は認めるものとして，正保（2000），Shoho and Uzawa（2004）などがある。

10 従来より，形容詞の意味分類は行われている。例：Nik Safiah Karim（1995）pp.104-107, Abdullah Hassan（2002）pp.185-189.

11）2002.01.23.txt …, kami pun **pandai** juga *gunakan* parti lain.

私達　～も　賢い　　同様に　使う　党　他の

（・・・私たちも，うまく他の党を利用しよう）

12）2002.01.19.txt … orang ramai **berani** *keluar* mengundi.

人　　大勢　　勇敢だ　外出する　投票する

（・・・大衆も，勇気を出して投票しに外出するだろう）

13）2002.11.01.txt … Zaini *bertindak* **berani** menyelamatkan sejumlah RM2.1 juta wang.

（名）　行動する　勇敢だ　　守る　　～の額の　　百万　金

（ザイニは，２１０万リンギットもの大金を守るために，勇敢に行動した）

上の三例は，Ａグループに属する語の文例である。用例中，11）のように，pandai が動詞の前に来るものは多数見受けられたが，動詞に後続する文例は一例もなかった。また，12），13）は，動詞の前と後ろの両方に見られる例である。このグループで，13）のように動詞の後ろに出る例は，今回の採取文例ではほんのわずかであるが，存在し，厳密には，動詞の表す動作をする，その人物の状態を意味している[11]と云える。

次は，Ｂグループに関する文例を見ていく。

14）2002.03.22.txt …, perkataan tersebut tidak **wajar** *digunakan* ….

単語　　上記の　～ない　適する　使う

（・・・その単語は使うのに適していない・・・）

15）2002.01.18.txt …, tapi kita akan cuba *bertindak* **adil**," ….

しかし 私達 ～つもり 試す　行動する　公平だ

（・・・しかし，私たちは公平に振舞うようにするつもりだ，・・・）

14）に出てくる語，wajar などは，動詞の後ろに来て修飾するという構造をとらないものだと，今回の他の検索文例でも示されている。一方，adil は，動詞の後ろに出現し，修飾することが頻繁にある。行動判断というだけに，その際の動詞は，状態などではなく，やはり動作を表している。

16）2002.11.04.txt … calon mereka *menang* **mudah** di sesuatu kawasan.

候補者　彼ら　　勝つ　容易だ ～で　ある　　地域

（・・・彼らの候補者が，ある地域で容易に勝てるよう・・・）

17）2002.11.16.txt Aminah **sukar** *menggerakkan* badan ….

（名）　　難しい　　動かす　　体

（アミナは体を動かすことが困難で・・・）

18）2002.01.19.txt …, Malaysia **sanggup** *menerima* pendatang negara asing ….

マレーシア　～できる　　受ける　　来訪者　　国　　外の

（・・・マレーシアは，外国からの訪問者を受けられる・・・）

11　日本語で意味を考えたとしても，「勇敢な行動」や「賢い選択」などは常識的な範囲で通用する言い回しであると考えられる。本来ならば，「行動」や「選択」自体が「勇敢」であったり「賢」かったりするわけではなく，その行為をとった人物がそうであるのだが，このようなことは自然言語では特別視されないのだろう。

Ｃグループの語では，16）でこそ動詞の後ろに出て修飾しているものの，このような例は稀少で，難易を表す状態詞は，17）のように補文をとる構造がよく見られる。一方，18）に見るような，能力を表す sanggup は，採集文例からは，前にしか出ないと考えられる。

19）2002.01.22.txt …pertumbuhan ekonomi Malaysia *meningkat* **lebih pantas** ….

成長　経済　マレーシア　上昇する　より　速い

（・・・マレーシアの経済成長は，・・・よりも早く成長した）

20）2002.03.20.txt …, jika laporan polis tidak *dilakukan* **segera**, ….

もし　報道　警察　～ない　行う　すぐ

（・・・，もしも警察の報道がすぐに行われなかったなら・・・）

21）2002.07.20.txt … bas *bergerak* **perlahan** di kawasan kemalangan itu, ….

バス　動く　ゆっくり　～で　地域　事故　その

（・・・その事故の地域では，バスはゆっくりと動き・・・）

動作の状態を表す語彙群Ｄグループは，やはり動詞の後ろから修飾することが可能である。同様のものとして，次の例も挙げておく。

22）2002.01.19.txt … rakyat Malaysia perlu *bekerja* **kuat** ….

国民　マレーシア 必要だ　働く　一生懸命

（・・・マレーシア国民は・・・一生懸命働く必要がある）

Ｅのグループの語とＦのグループの語では，コーパスの関係もあり，以下のような数例のみが採取された。

23）2002.07.10.txt Dua helikopter tentera laut Taiwan *terbang* **rendah** ….

２　ヘリコプター　軍　海　台湾　飛ぶ　低い

（２機の台湾海軍のヘリが，・・・低く飛んでいた）

24）2002.05.06.txt … dia dah tak ada," *kata*nya **sedih**.

彼　もう ～ない いる 彼は言う 悲しい

（・・・彼はもういないんだ，と彼は悲しそうに言った）

23）や 24）のような用例は，コーパスを広げることで，より多くの例が採集されると予測される。例えば，料理の本ならば，「薄く切る」という表現に，dipotong nipis という表現が用いられるであろうし，小説などならば，「優しく微笑む」を tersenyum manis と表現するかもしれない[12]。

以上の観察より，二つのことが看取される。一つは，動詞の表している動作の状態を示すものは，容易に後ろからの修飾が可能なものが多い。二つ目は，24）などの例のように，動作をしている人に関する状態を表している場合もある，ということである。

このような修飾構造の可否が見られるのはなぜであろうか。状態詞とは，統語的な基準によって決められた品詞である。同様に，統語構造を基盤として，一つの仮説を立ててみよう。述語を動詞が中心となって構築していく場合，修飾要素は名詞修飾の場合と同様に，

12 これらの表現は，文例の形ではないが，先に挙げた Abdullah Hassan（2002）に掲載されている。
dipotong （切る）nipis（薄い），tersenyum（微笑む）manis（甘い）

「後置修飾」即ち後ろから修飾することになる。動詞の表すものは，大部分が動作であり，その動作状態を意味する状態詞のみが，初めは後ろに置かれていた。その後，動詞の後ろの位置に置くことができるものが拡張されてきた，という考えである。これは，言語変化の一つの鍵となる，「類推」というものを基に創造された仮説である。だから，現在の使用において，動詞修飾の構造をとるものとそうでないものとの散布が見られるとも云える。だが，これはあくまで理論仮説に過ぎず，ここで立証できる問題では，到底ない。

ここでは，問題提起と解決法の示唆に留めておく。なぜなら，通時的な観点を要する問題でもあり，本コーパスのみによって解答の出せる問題ではないからである。今後，この研究を継続していく上で必要となる観点は，第一に，前節と同じように，構造を把握する場合の意味解釈というもの，そして第二に，動詞の意味と状態詞の意味の繋がりにも注意を配る必要があるということが考えられる。

最後に，Ｄグループのものが動詞の前後に同様の場面で出うるという例[13]を挙げる。

25）2002.07.04.txt beliau dan suami sentiasa ingin *pulang* **segera** ke Malaysia …．

その方　～と　夫　いつも　～たい　帰る　　すぐ ～へ マレーシア

（その人と夫は，いつもすぐマレーシア へ帰りたがっていて・・・）

26）2002.07.10.txt … selepas diberitahu oleh Md. Zain agar **segera** *pulang* …．

～の後　　伝える　～よって　（名）～と　すぐ　　帰る

（・・・すぐ帰るよう，ザインに言われた後は・・・）

いずれも，動作を表す動詞 pulang を修飾していると考えるのが自然なのかもしれない。前節のテーマに今一度戻るが，前後双方とも修飾構造とすべきか[14]，前に置かれることが「補文構造」であるというものと同一視すべきか，より多くの文例から，結論を導きたい。

2-3. 接置詞との関係

状態詞は，動詞を修飾することが可能である。これまで例を挙げて見てきたことからもわかる通りである。だが，中には，接置詞と結び付いて，いわゆる接置詞句として修飾することしかできないものや，接置詞とともに出現することも，単独で用いられることもある語などがある[15]。

この節では，そのような語を対象として文例を観察することで，何らかの傾向性や規則があるかどうか，また，そのような混在の状況を説明するための理論的仮説を模索していくことを目的とする。

まず取り上げるのは，前節で扱った意味分類のうち，もっとも動詞を修飾しやすいと考えられた，動作状態を表す状態詞を見ていく。先に云えば，これがもっとも混在が見られ

---

13 26）は，正確には，補文中の要素である。採集した用例では，補文中の中心となる動詞を修飾する場合は，動詞の前に置かれる例が多かった。示唆的な面があるので，付け加えておく。

14 前後双方に「移動可能」なものが副詞的特徴であるとする考えもある。例：正保（2000）など。だが，補文をとる統語的構造も考慮すれば，マレーシア語では，意味解釈が一つの解決策を打ち出すかもしれない。

15 その他にも，接尾辞-nya をつけるものや，cepat-cepat のように，畳語形のものもあるが，形態の変化は別単語であると認識すれば，ここでは考察の対象から外すことになる。

るものでもある。

27）2002.05.03.txt … saya nak *sampai* **cepat** selalu."

私　～たい　着く　速い　いつも

（・・・わたしはいつも早く着きたい）

28）2002.05.18.txt ``Semua langkah ini boleh *dilaksanakan* **dengan cepat** ….

全て　段階　この できる　行う　速く

（この全ての段階がすばやく行われることができ・・・）

29）2002.09.07.txt … isu lain *diselesaikan* **secara lebih cepat**.

問題　他の　解決する　より速く

（・・・他の問題が，すばやく解決された）

30）2002.07.12.txt …, kita perlu *bertindak* **dengan lebih cepat** ….

私達　必要だ　行動する　より速く

（・・・私たちは・・・より早急に行動することが必要だ）

Dグループの語群の一つ，cepat を例にすると，上のような形がある。27）は単独で修飾する例であり，28）では接置詞 dengan と結び付いて修飾するもの，29）は接置詞 secara と共になって修飾するものである。secara の 29）の例では，優等比較を表す lebih が入っているが，同様の形は，文例 6）の lebih cepat や 30）の dengan lebih cepat にも見られるものであり，secara cepat の形も実際用いられる。

では，どのような違いがあるのだろうか。ここでの文例に出た動詞は，いずれも後ろに別の項を必要としていないものである。後ろに必要とする場合はどうなるのか，文例で検証してみる。

31）2002.07.23.txt … negara-negara Islam boleh *mendapat* manfaat **dengan lebih cepat**.

国々　イスラム　できる　得る　利益　より速く

（イスラムの国々が，より早く利益が得られるよう・・・）

上の例において，接置詞 dengan がなかったなら，直前の名詞 manfaat を修飾しているのと，構造的に見分けはつかなくなる。すると，この場合は，動詞に対しての修飾語句であることを際立たせるために，接置詞と結び付いたと考えられるかもしれない。だが，それだけでは，動詞が後ろに項を必要としていない場合に，なぜ接置詞と結び付いているのかという現象を全く説明していない。

一つの解釈としては，やはり「修飾語らしさ」[16]の問題があるかもしれない。または，出現する位置にも関係があるのかもしれない。追って文例を見ていく。

32）2002.09.08.txt … ekonomi rantau Asia Timur akan **dengan cepat** *menjadi* enjin

経済　区域　アジア　東　～だろう　速く　なる　エンジン

penggerak utama kepada ekonomi global.

動力　主要な　～へ　経済　グローバル

16 ここでの「修飾語らしさ」とは，動詞を修飾する構造と，動詞によって補完される補文構造とを区別するために用いた表現である。前者に対してのみ直接関係し，名詞修飾などは考察の対象外に置くとする。

（・・・東アジア区域の経済が，すぐに，世界経済への主要な動力源となるだろう）

32）では，接置詞付きの修飾語が，動詞の前に出てきている。接置詞があるのだから，補文構造を成しているとは云えないだろう。ここでの，cepat が動詞の前に置かれたときに補文構造をとるという考察の視点，即ち本稿の立場である，前からの修飾は一応考えずに論を展開していくという枠組みにおいても，接置詞句は随意的要素と判断するのが妥当であると思われる。だが，前からの修飾というものを仮に認めた場合でも，やはり「修飾語らしさ」という説明原理ほど有用であると考えられるものは，今のところ特にない。

他の語に関する文例も見ていこう。

33）2002.11.08.txt … jika masalah ini tidak *diselesaikan* **segera**, ….

もし　問題　この　～ない　解決する　　すぐ

（・・・もしもこの問題がすぐに解決しなかったら・・・）

34）2002.09.17.txt … pelajar kita dapat *belajar* **dengan segera**," ….

学生　私達　できる　学ぶ　　すぐに

（・・・私たちの生徒が，すぐに学べるように，・・・）

上記二例は，それぞれ文としての切れ目の終わりに出る場合である。共に，動詞は後ろに別の項を必要としないものであるが，以下には別の項を取る文例を挙げる。

35）2002.09.18.txt … Iraq mahu *memulakan* **segera** perbincangan ….

イラク　～たい　始める　　すぐ　　話し合い

（・・・イラクは・・・すぐにでも話し合いを始めたい）

36）2002.03.01.txt … pihak berkuasa Yemen *memaklumkan* **dengan segera** kepada

当局　　イェメン　　知らせる　　すぐに　　～へ

Kedutaan Malaysia ….

大使館　マレーシア

（・・・イェメン当局は，マレーシア大使館へ・・・すぐに知らせた）

37）2002.09.24.txt``Mara akan berusaha untuk *mendapatkan* visa tersebut **dengan segera** ….

（組織名）~つもり 努力する ～ため　手に入れる　ビザ　上記の　　すぐに

（Mara は・・・すぐに当該のビザが入手できるよう尽力するつもりだ）

上の文例では，それぞれの動詞が，後ろに別の項を必要としているのだが，前の二例，35），36）のように，動詞の直後に来る場合はどちらも可能ではあるが，採取した文例中では，35）のように，直後に segera のみの形が多く見られた。一方，他項を取った文末に出る場合，37）のように dengan 付きの接置詞句である文例がほとんどであった。

では，ここから何が云えるだろうか。先の用例では，接置詞と結び付くことで，名詞修飾との峻別や，修飾語らしさが高まるという考えがあったが，37）のような用例ならばその考えもあながち的外れではなくなるが，やはりそれだけでは 35）と 36）などの用例が説明つかないことになる。

別のグループに焦点をあてて見ていこう。難易を表す場合は，あまり例はないものの，16）のように，単独で動詞を修飾する例も見られた。では，接置詞と結び付いたならばど

うであろうか。

38）2002.03.25.txt `Saya lihat masalah ini boleh *selesai* **dengan mudah** ….

私　見る　　問題　この　できる　解決する　　容易に

（私は，この問題が・・・容易に解決されうるのを見た）

39）2002.07.13.txt … ia tidak boleh *diterima* **secara mudah** ….

彼　～ない　できる　受ける　　容易に

（・・・彼はやすやすと受けることができなかった・・・）

40）2002.05.21.txt … organisasi pengganas **dengan mudah** *menggunakan* kegiatan ini,"

組織　　テロリスト　　容易に　　使う　　活動　この

katanya.

彼は言う

（・・・テロ組織は，この活動を容易に利用するだろう，と彼は言った）

41）2002.05.23.txt … mereka akan *mendapat* tempat **dengan lebih mudah** ….

彼ら　～だろう　得る　　場所　　より容易に

（・・・彼らは・・・よりスムーズに場所を得るだろう）

Ｃグループの語である mudah が単独で修飾する例は，本コーパスにおいては数少ない方であった。一方接置詞と共にでる場合は，上の四例に見るように，位置に関しても，様々であり，一般化はしがたい。逆に云えば，位置が散布しうるのは，dengan などがついて，動詞を修飾する修飾語であることが明らかだから可能な振る舞いとも云える。

ここでの結論として，まず，接置詞と結び付くことで「修飾語らしさ」を完全に得るということは云えるであろう。但し，語彙によっては，もとより単独で動詞を修飾することが出来るとされているものもあり，使い分けではなく，「共存」という形で双方が見られる[17]。また，前節と同様に，dengan や secara が生産的である[18]ことから類推され，他のグループの語彙も，このような形をとって修飾語と成るものがあったり，また，やや変わった亜種も見られたりする。

42）2002.01.27.txt … dan boleh *diselesaikan* **dengan baik**, ….

そして　できる　　解決する　　うまく

（・・・そしてうまく解決される・・・）

43）2002.03.09.txt … pihak tertentu yang **dengan berani** *mencabar* hak-hak ….

側　　ある　　～の　　勇敢に　　挑戦する　　権利

（勇敢にも・・・権利をとろうとするある側・・・）

44）2002.01.09.txt … pilihan raya presiden *dikendalikan* **secara tidak adil** ….

総選挙　　大統領　　操る　　不公平に

（・・・大統領総選挙が・・・不公平に操られた）

---

17 但し，本文中で示したとおり，コーパスは極小ながらも，出現位置などある程度の傾向性はあるようである。

18 いずれも，「手段」や「方法」を表す接置詞として，動詞などとも結び付きうる。

45）2002.11.20.txt "Saya *katakan* **dengan cara mudah** jika anda ditanya ….

私　言う　容易に　もし あなた　尋ねる

（もしあなたが・・・尋ねられたなら，私はすぐに口を割っただろう）

46）2002.07.24.txt ``Pasukan ini **dengan secara segera** akan *meminta* pihak ….

グループ　この　すぐに　～だろう　頼む　側

（このグループは，・・・側にすぐに頼むであろう）

42）における修飾語 dengan baik は，このような場合，単独の語 baik だけでは修飾語として機能しないと考えられる。また，43），44）のように，berani や adil は，既に文例として登場したように，単独で用いられる語との「共存」であると云える。

45）の例では，どう考えるべきか。cara は，方法という意味の名詞であり，それを用いた接置詞句である。だが，46）の場合では，いささか過剰なまでの接置詞付与であるとしか云えない。このような例は本コーパスにおいては一例に過ぎなかったが，分析の対象からは外すことはできないだろう。

3. まとめ

3-1. 状態詞の特質

マレーシア語の一品詞，状態詞とは，単独，または後ろに補部などを伴って，文の述語となることができる。加えて，名詞を修飾する働きを必須とし，動詞を修飾したりすることが語彙によって可能であるという特質を持つ品詞である。

動詞を修飾する構造は，基本的には動詞の後ろに状態詞が現れるという構造をとる。但し，動詞の前にある場合であっても，補文構造としてだけではなく，意味解釈において修飾構造と判断すべきものがあるかもしれない。このような，前からの動詞修飾は，本稿では扱ってはいないが，今後見直す必要があると思われる。

状態詞が動詞を修飾できるか否かという問題において，動作状態を表す状態詞を筆頭に，行動の評価や判断を表すものも，それが可能であると云える。また，形状性質や知覚感情の状態詞の一部も可能であるが，それは動詞との意味的な関係が大きく関わっていると考えられる。修飾の意味解釈では，動作の状態を表す場合と，動作主の状態を表している場合の二通りが看取される。

最後に，単独で修飾しうるもの，接置詞と結び付いて可能となるもの，その双方がありうるものの三通りのパターンがあるが，基本的に，接置詞がつく場合は，動詞を修飾する修飾語らしさという点で，単独のものより勝っており，生産的な接置詞の働きも，その例証となると考えられる。また，単独で現れる場合とそうでない場合とでは，位置などに関してそれなりに傾向性があるかもしれない。それは，論稿末部に掲載した，表と参考文例[19]で確認されたい。

「修飾語らしさ」があるとはいえ，なぜそのような「共存」が見られるのだろうか。答

[19] 2-3.で取り上げた用例のうち，cepat, segera, mudah の三例に絞り，出現位置と形態とをまとめたものを表にしている。その後に，そこでの用例の幾つかを付録としてつけておく。

えの証明の一つには，「類推」という概念があてはまると考えられるのではなかろうか。言語は変化していくものである。誤用と目されていたものが，範例とまでは行かずとも，許容されていくことで変化していく場合もある。そのような場合，例えば，ある環境においてある働きを持つ語が出たならば，その類似的働きを持った別の語も，同様に用いても解釈できるとされることも，あながち否定できないはずである。

孤立語など，語の形態的標示が薄弱な言語の場合，虚辞などもそうだが，位置もその文法においてかなりの比重を占めることになる。そうすると，これまで見なかった用法であっても，文法的な転用とし，解釈可能な限りにおいて変化していく可能性がある。もちろん，動詞と状態詞との意味的な結び付きとその位置が，ここでの鍵となるのだろうが，通時的な観察と分析とを必要とするこの問題は，ここでは一つの仮説に留めおく。

3-2. 今後の課題

本研究は，多くの問題提起をしている。文法記述の見直しが，その中心的な問題であると云える。いわゆる「修飾構造」一つをとっても，もう一度考えるべき問題が残されている。そして，約数のように綺麗に割り切れないような混沌とした状況であっても，それを一つ一つ解きほぐして，妥当で有用な記述を与えていく必要がある。

今後の課題として，引き続き状態詞の構造を見ていくだけでなく，動詞との関連性や，解釈におけるつながりと，幅を広げて見ていくことが大事である。またコーパスに関しても，採集する分野やスタイルを変えて，より広い文例にあたることが肝要である。その先には，マレーシア語の述語の内部構造を記述するということからつながる，文型に関する研究などの本流があると云える。

参考文献

Abdullah Hassan（2002）*Tatabahasa Bahasa Melayu*, PTS publications & distributor SDN. BHD.

Asmah Haji Omar, Rama Subbiah（1995）*An Introduction to Malay Grammar*, Dewan Bahasa dan Pustaka.

Nik Safiah Karim（1995）*Malay Grammar for Academics and Professionals*, Dewan Bahasa dan Pustaka.

Nik Safiah Karim (et al.)（1997）*Tatabahasa Dewan －Edisi Baharu*, Dewan Bahasa dan Pustaka.

正保勇（2000）「マレーシア語の副詞」『言語研究Ⅳ』，東京外国語大学　1999 年度教育研究学内特別経費.

Shoho Isamu, Uzawa Hiroshi（2004）”Patterns of Adjective Phrase Complement Sentences”, In *Corpus-Based Analyses on Sentence Structures,* pp.27-70.

鵜沢洋志（2003）『マレーシア語の品詞分類』，東京外国語大学　修士論文.

目次ページに戻る。

研究資料　その１　―表―

表１　**cepat**

	状態詞のみ	接置詞＋状態詞
ＸＸＸ＋Ｖ	（１２）	１
Ｖ＋ＸＸＸ	９	１３
Ｖ＋ＸＸＸ＋α	０	２
Ｖ＋α＋ＸＸＸ	０	５
全体数	２１／４２	２１／４２

＊　ＸＸＸは対象である状態詞，もしくは接置詞＋状態詞を示す

＊　本稿では，単独で動詞の前に出る場合は，「修飾」の扱いとはしていないので，（　）で区別しておく

＊　記号αは，動詞が義務的に要すると考えられる，諸要素を示す

表２　**segera**

	状態詞のみ	接置詞＋状態詞
ＸＸＸ＋Ｖ	（３５）	１
Ｖ＋ＸＸＸ	５２	９
Ｖ＋ＸＸＸ＋α	３３	０
Ｖ＋α＋ＸＸＸ	１	１１
全体数	１２１／１４２	２１／１４２

表３　**mudah**

	状態詞のみ	接置詞＋状態詞
ＸＸＸ＋Ｖ	（３７）	１
Ｖ＋ＸＸＸ	５	１１
Ｖ＋ＸＸＸ＋α	２	０
Ｖ＋α＋ＸＸＸ	０	１０
全体数	４４／６６	２２／６６

研究資料　その２　―文例―

2002.03.28.txt¥0328b.txt(50):Badan dunia itu juga turut mendesak pasukan pengaman antarabangsa di Kabul untuk menyediakan kemudahan helikopter bagi membolehkan penghantaran bantuan dilakukan *dengan lebih cepat*.

2002.03.30.txt¥0330e.txt(54):``Di mana ia menyediakan peruntukan khas bagi kepentingan awam untuk membantu institusi kewangan dengan menyingkirkan aset-aset yang lemah, membantu sektor perniagaan dengan menguruskan *secara cepat* dan cekap syarikat yang mengalami masalah kewangan dan meningkatkan pertumbuhan ekonomi negara dengan menyuntik kecairan dalam sistem kewangan.

2002.05.03.txt¥0503e.txt(51):Sambil melihat pada jam tangannya, Dr. Mahathir berkata: ``Jam dah

11.30 pagi (walaupun waktu sebenar ialah 11.25 pagi). Jam saya cepat daripada orang lain pasal saya nak sampai *cepat* selalu."

2002.05.07.txt¥0507e.txt(51):``Hari ini hanya mereka yang `buta' sahaja yang enggan mengakui bahawa kita telah pulih lebih baik dan *lebih cepat* berbanding mereka yang mengguna pakai kaedah yang disarankan (Tabung Kewangan Antarabangsa)," katanya.

2002.05.08.txt¥0508a.txt(56):Dalam pada itu, peguam Taufik, Duni Nirbayati berkata, pihaknya akan segera mengajukan rayuan memandangkan tertuduh sangat bekerjasama dengan polis sehingga kes berkenaan dapat diselesaikan *dengan cepat*.

2002.05.25.txt¥0525i.txt(42):Perdana Menteri, Datuk Seri Dr. Mahathir Mohamad berkata, Malaysia perlu mencari `rahsia' bagaimana Korea Selatan berjaya melunaskan semua hutangnya sebanyak RM212.8 bilion daripada Dana Kewangan Antarabangsa (IMF) *dengan begitu cepat*.

2002.07.09.txt¥0709h.txt(43):"Kami tetapkan *lebih cepat* lebih baik kerana kami mahu menyelesaikannya," katanya kepada pemberita selepas merasmikan bengkel Bengkel Penentuan Had Luar Pelantar Benua di sini, hari ini.

2002.07.12.txt¥0712g.txt(57):``Secara khususnya, kita perlu bertindak *dengan lebih cepat* dalam membuat keputusan kerana sektor swasta begitu mementingkan masa dan kualiti," katanya.

2002.07.23.txt¥0723c.txt(51):Syed Hamid berkata, kedua-dua negara turut merasakan kesatuan itu perlu disegerakan supaya negara-negara Islam boleh mendapat manfaat *dengan lebih cepat*.

2002.07.31.txt¥0731e.txt(51):Tertuduh, yang kelihatan memaki anggota polis ketika menunggu perbicaraan, juga meminta majistret mengarahkan polis pengiringnya supaya tidak membawa dia *dengan cepat* kerana kakinya sakit.

2002.09.07.txt¥0907f.txt(48):Dr. Mahathir berkata, Singapura wajar menerima syor Malaysia supaya ia dibincangkan secara berasingan bagi membolehkan isu lain diselesaikan *secara lebih cepat*.

2002.09.08.txt¥0908f.txt(44):Menurutnya, dengan gabungan ekonomi Jepun, China, Korea dan negara-negara Asia Tenggara, ekonomi rantau Asia Timur akan *dengan cepat* menjadi enjin penggerak utama kepada ekonomi global.

2002.01.14.txt¥0114c.txt(44):Zainal berkata, MTUC telah memaklumkan kepada Dr. Mahathir bahawa perkara itu telah dibincangkan begitu lama dan sudah tiba masa bagi kerajaan menyelesaikan permintaan itu *dengan segera*.

2002.01.15.txt¥0115a.txt(39):KANGAR 14 Jan. - Beberapa orang pemimpin UMNO mahukan Parti Keadilan Nasional (Keadilan) mendedahkan *segera* kandungan kotak yang didakwanya mengandungi maklumat sulit berhubung penyalahgunaan kuasa oleh beberapa pemimpin kerajaan Barisan Nasional (BN).

2002.01.15.txt¥0115c.txt(50):Disebabkan terdesak untuk bernikah *segera*, bekas naib kadi itu sanggup mengadakan upacara akah nikah di dalam kereta dengan pemandu kepada lelaki yang berada itu bertindak sebagai saksi.

2002.01.17.txt¥0117b.txt(68):Pihaknya juga telah mengarahkan syarikat pemborong kecil projek *segera* membuat siasatan bagi mengenal pasti sebab-sebab sebenar berlakunya kemalangan itu.
2002.01.21.txt¥0121g.txt(40):KOTA KINABALU 20 Jan. - Yayasan Pencegahan Jenayah Malaysia (YPJM) menggesa kerajaan melaksanakan *segera* peraturan mengetatkan pengambilan buruh dari Indonesia bagi membendung kejadian jenayah yang berpunca daripada mereka.
2002.01.21.txt¥0121g.txt(45):``Kejadian rusuhan pekerja Indonesia itu sudah sampai ke tahap serius kerana mereka telah merosakkan kenderaan polis serta memusnahkan kemudahan asas di tempat kerja mereka dan budaya ganas ini perlu dibendung *segera* menerusi tindakan tegas kerajaan," katanya.
2002.01.23.txt¥0123a.txt(40):KUALA TERENGGANU 22 Jan. - Kerajaan akan menggubal undang-undang baru yang membolehkan tindakan keras dan tegas dikenakan *segera* ke atas pekerja asing yang melanggar undang-undang negara ini.
2002.01.23.txt¥0123a.txt(44):``Kedudukan mereka di negara ini dari segi undang-undang perlu diteliti. Kalau undang-undang tidak mencukupi untuk membolehkan kita mengambil tindakan keras dan segera, kita perlu wujudkan undang-undang baru *dengan segera*," ujarnya.
2002.01.23.txt¥0123d.txt(52):Utusan difahamkan kerajaan negeri pada penghujung tahun lalu mengarahkan semua institusi pendidikan yang menerima wang ihsan menyerahkan cek yang diterima kepada pentadbiran negeri *dengan segera*.
2002.01.28.txt¥0128a.txt(55):Menyentuh mengenai penghantaran pulang pendatang tanpa izin yang ditahan di pusat-pusat tahanan, Aseh berkata, tindakan menghantar mereka pulang *dengan segera* telah dilakukan.
2002.01.29.txt¥0129f.txt(46):Disebabkan itu, katanya, Singapura memang sedia maklum mengenai hasrat kerajaan Malaysia untuk menyelesaikan isu itu *dengan segera*.
2002.03.01.txt¥0301b.txt(53):Ditanya kegagalan pihak berkuasa Yemen memaklumkan *dengan segera* kepada Kedutaan Malaysia berhubung penangkapan itu, beliau berkata, mereka menghadapi masalah mengenal pasti kerakyatan pelajar kerana jumlah pelajar yang ditahan adalah ramai.
2002.03.11.txt¥0311i.txt(49):Menjawab pertanyaan pemberita, Abdullah berkata, kerajaan memang berhasrat menyelesaikan *segera* isu pendatang tanpa izin di Sabah tetapi perkara itu bukanlah mudah dilaksanakan.
2002.03.14.txt¥0314d.txt(46):Penyiaran gambar itu menimbulkan kemarahan rakyat sehingga timbul desakan supaya kerajaan menamatkan *segera* pembelian ruang iklan pelancongan mengenai negara dalam Time kerana terus-menerus memburukkan imej Malaysia.
2002.03.15.txt¥0315f.txt(55):``Persidangan seumpama akan membolehkan kita merumuskan takrif keganasan supaya segala tindakan ganas dapat dikenali dan dikutuk *segera*," katanya.
2002.03.19.txt¥0319d.txt(43):Timbalan Perdana Menteri, Datuk Seri Abdullah Ahmad Badawi ketika menyatakan demikian mahukan hasil laporan itu dikemukakan *dengan segera* kepada kerajaan untuk tindakan lanjut.

2002.03.22.txt¥0322b.txt(55):Beliau menasihatkan pendatang tanpa izin mengambil tawaran berkenaan *segera* jika tidak mahu menerima hukuman berat termasuk sebatan apabila akta itu mula dikuatkuasakan nanti.
2002.05.03.txt¥0503f.txt(39):JITRA 2 Mei - Datuk Seri Dr. Mahathir Mohamad hari ini memberi amaran kepada semua pemimpin dan ahli UMNO yang sengaja menghalang kemasukan golongan remaja sebagai ahli Puteri supaya menghentikan *segera* perbuatan mereka.
2002.05.04.txt¥0504a.txt(39):Singapura ajak bincang -- Chok Tong mahu selesai *segera* isu-isu yang masih tertangguh.
2002.09.05.txt¥0905i.txt(72):Bagi Malaysia, seperti yang ditegaskan oleh pemimpin negara berkali-kali, kita mahu isu yang menjadi duri dalam hubungan dua negara berjiran itu diselesaikan seberapa *segera*.
2002.09.06.txt¥0906e.txt(42):KUALA LUMPUR 5 Sept. - Ketua Penaja Puteri UMNO, Azalina Othman Said dan ahli jawatankuasanya perlu menghentikan *segera* perjumpaan dengan para pemimpin parti bagi mengelak sebarang tuduhan atau tersingkir daripada persaingan pemilihan, jika didapati melanggar tataetika parti.
2002.09.07.txt¥0907e.txt(48):Beliau mengulas gesaan Ketua Penerangan UMNO, Tan Sri Megat Junid Megat Ayob semalam supaya Azalina menghentikan *segera* perjumpaan dengan para pemimpin parti bagi mengelak sebarang tuduhan atau tersingkir daripada persaingan pemilihan, jika didapati menyalahi tataetika parti.
2002.09.15.txt¥0915a.txt(41):PERTUBUHAN BANGSA-BANGSA BERSATU (PBB) 14 Sept. - Ancaman Perang Teluk yang kedua kian hampir apabila Iraq menolak secara bulat-bulat tuntutan Presiden Amerika Syarikat (AS), George W. Bush supaya pemeriksa senjata PBB dibenarkan masuk semula ke Baghdad *dengan segera* dan tanpa syarat.
2002.09.15.txt¥0915i.txt(42):BANDAR SERI BEGAWAN 14 Sept. - Malaysia mencadangkan diwujudkan *segera* mekanisme berkesan untuk menyelesaikan masalah-masalah perdagangan yang dihadapi oleh sektor swasta dalam hubungan ekonomi Australia-ASEAN.
2002.09.16.txt¥0916b.txt(43):Ancaman Bush itu dibuat ketika Iraq bertegas menolak tuntutannya supaya pemeriksa senjata PBB dibenarkan masuk semula ke Baghdad *dengan segera* dan tanpa syarat.
2002.09.16.txt¥0916g.txt(45):``Pasukan petugas khas itu perlu ditubuhkan *dengan segera*," kata pelan induk berkenaan yang dirangka oleh Institut Kajian Strategik dan Antarabangsa.
2002.09.17.txt¥0917a.txt(45):``Kita kesal dengan tindakan AS terhadap para pelajar ini dan mudah-mudahan mereka (AS) ambil keputusan cepat supaya pelajar kita dapat belajar *dengan segera*," katanya kepada pemberita di lobi Parlimen di sini hari ini.
2002.09.20.txt¥0920c.txt(60):Yaakob dalam laporannya pula berkata, beliau mahu polis menyiasat *segera* dakwaan serius yang dibuat oleh Abdul Hadi mengenai perkara tersebut.
2002.09.24.txt¥0924b.txt(57):Pembantu Yasser, Nabil Abu Rudeina yang bercakap menerusi

telefon dari bangunan itu menegaskan, Majlis Keselamatan mesti bertindak *segera*.

2002.09.24.txt¥0924h.txt(45):``Mara akan berusaha untuk mendapatkan visa tersebut *dengan segera* tetapi tidak dapat memberi jaminan visa itu diluluskan," katanya.

2002.03.24.txt¥0324f.txt(40):WARSAW 23 Mac - Datuk Seri Dr. Mahathir Mohamad yakin Malaysia boleh mencapai kemajuan setanding negara Eropah sekiranya semua pihak termasuk ahli perniagaan bekerja kuat, amanah dan tidak mengambil kesempatan mengaut keuntungan *secara mudah*.

2002.03.25.txt¥0325c.txt(42):``Saya lihat masalah ini boleh selesai *dengan mudah* kalau dia meminta maaf.

2002.05.03.txt¥0503a.txt(50):Mengenai punca kesesakan, Abdullah berkata, ia sebenarnya berpunca daripada sikap orang ramai mengambil *mudah* saman trafik yang diterima mereka.

2002.05.05.txt¥0505a.txt(52):Dr. Mahathir berkata, ramai yang mengamalkan sikap meminati jurusan sastera dan agama serta yakin *mudah* mencapai kelulusan dalam bidang itu tanpa memikirkan sama ada ia mampu memberikan pekerjaan kepada mereka selepas menamatkan pengajian.

2002.05.05.txt¥0505a.txt(73):Beliau berkata, disebabkan itu ekonomi Amerika Syarikat adalah lebih baik dan *mudah* dipulih berbanding ekonomi negara-negara Eropah.

2002.05.13.txt¥0513c.txt(43):Bekas Naib Canselor Universiti Teknologi Malaysia, Tan Sri Ainuddin Wahid berkata, lebih 29,000 pemegang ijazah yang menganggur di negara ini boleh dilatih untuk menjadi guru bahasa Inggeris *dengan mudah* kerana mereka telah didedahkan kepada bahasa sepanjang pengajian mereka.

2002.05.21.txt¥0521f.txt(63):``Dengan peningkatan pergerakan barangan, modal dan manusia antara sempadan, organisasi pengganas *dengan mudah* menggunakan kegiatan ini," katanya.

2002.05.23.txt¥0523a.txt(47):Bagaimanapun, tegas Abdullah, penambahan bilangan pelajar tidak bermakna mereka akan mendapat tempat *dengan lebih mudah* di IPTA.

2002.07.06.txt¥0706g.txt(49):``Saya bersyukur kerana di Malaysia kita dapat mengadakan politik dengan aman yang mana peralihan kepimpinan dapat dilaksanakan *dengan mudah* dan tanpa masalah," katanya.

2002.07.09.txt¥0709h.txt(41):KUALA LUMPUR 8 Julai - Menteri Luar Datuk Seri Syed Hamid Albar hari ini berkata, penyelesaian isu air dengan Singapura akan membuka ruang untuk menyelesaikan isu-isu dua hala yang tertangguh *dengan mudah*.

2002.07.13.txt¥0713f.txt(51):Mengulas aspek pengakuan dalam hudud, Dr. Paizah menjelaskan ia tidak boleh diterima *secara mudah* sebaliknya masih perlu disiasat terlebih dulu.

2002.11.04.txt¥1104j.txt(44):Jelas beliau, walaupun perbuatan itu tidak menyalahi undang-undang tetapi telah berlaku tipu muslihat oleh pihak tertentu bagi memastikan calon mereka menang *mudah* di sesuatu kawasan.

2002.11.07.txt¥1107h.txt(47):Adik lelaki Bush, Jeb Bush menang *mudah* untuk dipilih semula

sebagai Gabenor Florida dan menjadi pemimpin Republikan pertama mencapai kejayaan seperti itu.

2002.09.19.txt¥0919a.txt(56):Menurutnya, pembedahan plastik bagi menutup bahagian Ahmad yang telah dibedah *lebih mudah* kerana ia tidak memerlukan banyak kulit bagi tujuan penampalan.

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

Pivot Verbs in Malay: A Corpus-Based Study*

Hiroki Nomoto［野元　裕樹］
(Graduate School, Tokyo University of Foreign Studies［東京外国語大学大学院博士前期課程］)

1. Introduction

Malay has a class of verbs that behaves uniquely, which Shoho (1998) calls ‘pivot verbs’. The present paper discusses these verbs. In the remainder of this section, we shall first briefly overview exactly what ‘pivot verbs’ are and what is already known about them (section 1.1). Then, before taking up the main subject, we shall explain briefly the corpus that we used (section 1.2) and our way of sampling from it (section 1.3). In section 2, the samples are examined. Section 3 discusses the findings in section 2 and presents a hypothesis to explain them. Section 4 is the conclusion.

1.1 Pivot verbs

Pivot verbs are basically intransitive. However, they are different from ordinary intransitive verbs in terms of the behaviour of their single argument (i.e. subject). While the subject of ordinary verbs precedes the verb, that of pivot verbs either precedes or follows the verb[1]. In other words, pivot verbs, but not ordinary intransitive verbs, have two possible word orders: SV and VS. Below are all examples from Shoho (1998: 26)[2]. Verbs and their subjects are represented in boldface and italics respectively. (This way of representation will be employed throughout the paper.)

(1) a. Di atas meja **ada** *sebuah buku*.
at on desk exist one-Cl book
‘There is a book on the desk.’

b. *Buku itu* **ada** di atas meja.
book that exist at on desk
‘The book is on the desk.’

* We would like to thank Isamu Shoho, our supervisor, for his useful advice and encouragement. We must also thank Saiful Bahari bin Ahmad, our Malay teacher, for his assistance as our informant/consultant. We are grateful to Yeong Kwong Leong for checking our English. Thanks are also due to Keiko Mochizuki, Masashi Furihata and Keisuke Matsumoto, who provided us with information about other languages.

In this paper the following abbreviations are used. Acc: accusative; ADV: adverbial; C: complementiser; Cl: classifier; I: inflection; N: noun; Neg: negation; Nom: nominative; Op: null operator; P: preposition; Perf: perfective aspect; Pl: plural; S(ubj): subject; Sg: singular; *t*: trace; V: verb; XP: maximal projection of X; 1: first person; 3: third person.

[1] This does not necessarily mean that the subject of ordinary verbs never follows the verb. Inversion, for instance, can give rise to the VS word order. We do not take account of such marked cases. For inversion in Malay, see Shoho (1992). See also section 4.3 below.

[2] Some of the examples are modified with the author’s permission.

(2) a. Di belakang rumahnya **terdapat** juga *pokok buah-buahan*.
at behind house-3Sg exist also tree fruit
'There are also fruit trees behind her house.'

b. *Kupu-kupu jenis ini* **terdapat** di pulau tersebut.
butterfly kind this exist at island mentioned
'Butterflies of this kind exist on the island.'

(3) a. Di pinggir sebuah hutan **tinggal** *dua orang peladang*.
at edge one-Cl forest live two Cl farmer
'Two farmers lived at the edge of the forest.'

b. *Ia* sudah lama **tinggal** di bandar.
3Sg already long live at city
'He has long been in the city.'

(4) a. Saya **nampak** *seekor pak belang*.
1Sg see one-Cl tiger
'I saw a tiger.'

b. *Rumahnya* tidak **nampak** dari sini.
house-3Sg Neg see from here
'His house cannot be seen from here.'

(5) a. Belum sempat dia berkata, **muncul** *sebuah motokar* dari
not.yet have.the.time.to 3Sg speak appear one-Cl motorcar from
muara Lorong Bengkel Dua.
estuary L. B. D.
'Before he could say a word, there appeared a motorcar from Lorong Bengkel Dua.'

b. *Penyanyi terkenal* **muncul** di pentas untuk mendendangkan lagu.
singer famous appear at stage for sing song
'The famous singer appeared on the stage to sing a song.'

(6) a. Di belakang meja itu **duduk** *seorang Melayu yang sudah lewat umurnya*.
at behind desk that sit one-Cl Malay that already over
age-3Sg
'An old Malay was sitting behind the desk.'

b. *Ia* **duduk** bersila di lantai.
3Sg sit cross-legged at floor
'He sat cross-legged on the floor.'

In the (a) examples, the subject follows the verb, whereas in the (b) examples, it precedes the verb.

It looks as if the subjects are pivoted on the verb, hence the name ‘pivot verbs’.

Given the fact that pivot verbs have two possible word orders, one big question arises: what determines the choice between these two word orders? It has been pointed out that definite subjects precede the verb. That is to say, the Definiteness Effect comes into play. This seems to be quite plausible. In (1)-(6) above, none of the subjects in the (a) examples (VS) are definite. On the other hand, some of the subjects in the (b) examples (SV) are obviously definite. For instance, the subject of (1b) contains a demonstrative pronoun *itu* ‘that’ and that of (3b) is a third person pronoun *ia*. The contrast in (7) also supports the validity of the Definiteness Effect account[3].

(7) a. **Ada** *dua naskhah buku (*itu)* di atas meja.
exist two Cl book that at on desk
‘There are (*the) two books on the desk.’

b. *Dua naskhah buku (itu)* **ada** di atas meja.

(7a) is unacceptable when it contains *itu* ‘that’ in the subject. This is because the word *itu* makes the subject definite. The only position for a definite subject *dua naskhah buku itu* ‘the two books’ is the left of the verb as in (7b).

Although the Definiteness Effect allows definite subjects to occur only on the left of the verb, it says nothing about indefinite subjects. Our concern lies here. As far as we know, the behaviour of indefinite subjects in the pivot verb construction has never been studied so far. This paper attempts to find out rules or tendencies that constrain the behaviour of indefinite subjects in the pivot verb construction.

1.2 Corpus

As this study is conducted as part of a programme of our university[4] which focuses on corpus analysis, we need to make a brief note on the corpus that we employ in the present paper. Unlike such languages as English and Spanish, there have been no computerised corpora of modern Malay

---

[3] The contrast in (7) may not be observed in Indonesian. Tjung (2003) shows an example where a definite subject occurs to the right of the verb.

(i) Tidak **ada** *mayat itu* di kuburan tersebut.
Neg exist corpse that at grave mentioned
‘The dead body isn’t in the grave.’

As for Malay, Shoho (1992) claims that the Definiteness Effect does not hold on the basis of the existence of a sentence like (ii), where the subject is definite but in the postverbal position.

(ii) Marilah kita berdoa kepada Allah hubaya-hubaya janganlah **datang** lagi *bala* *itu*.
let 1Pl pray to Allah hoping.that Neg come again misfortune that
‘Let’s pray to Allah hoping that such a misfortune will never come again.’

However, this example does not support his claim since it is quite likely that inversion takes place. For further discussion, see section 4.3.

[4] 21st Century Centre of Excellence Programme: Usage-Based Linguistic Informatics.

available[5]. Therefore, we had to make a corpus from scratch.

The corpus made by the project consists of the front-page (*muka hadapan*) articles of a daily newspaper published in Malaysia, *Utusan Malaysia* (http://www.utusan.com.my/), in 2002. Since the author and an undergraduate at Tokyo University of Foreign Studies, Mutsumi Nakayama, were in charge of the even-numbered months, the immediate corpus for the present study is actually half of the whole corpus made by the project. Our corpus includes 566,844 tokens and 18,137 types. It is true that the style is limited to a journalistic one and the number of words is still small. However, we believe that our attempt is meaningful, for it is one of the few computerised corpora of modern Malay to the best of our knowledge. We hope that it will benefit researchers around the world and contribute to the development of Malay linguistics and the teaching of Malay.

1.3 Samples

The direct data for our investigation is not the entire corpus but only a part of it.

We selected ten verbs, shown in (8), as the target words of our investigation, six of which (8a) are taken from Shoho (1998) (i.e. verbs in (1)-(6) above) and the others (8b) are selected from our own experience. The figure in parentheses refers to the total number of occurrences of the word in the corpus.

(8) a. ada (1,361) ‘to be/to have’, terdapat (289) ‘to be’, tinggal (91) ‘to live/to remain’, nampak (55) ‘to see’, muncul (39) ‘to appear’, duduk (48) ‘to sit’

b. berlaku (518) ‘to happen’, terjadi (17) ‘to occur’, timbul (102) ‘to arise’, wujud (101) ‘to exist’

We further extracted the first twenty relevant instances from the whole instances. By ‘relevant instances’ we mean instances that include at least one overt argument NP. Non-NP subjects (e.g. sentential subjects) and covert NP subjects (e.g. relativised subjects) are precluded. Instances where more than one verb is coordinated are also excluded since they are sometimes analysed as including covert subjects as well. In the same way as they can be analysed, shared arguments in, for example, causatives, are not rejected, for we found their behaviour noteworthy (see section 4.3).

2. Examination

Before proceeding to the analysis, let us recapitulate the issue. The subject of pivot verbs pivots on the verb, surfacing on either the left or right of the verb. The position is partly constrained by the Definiteness Effect. Definite subjects cannot appear in the postverbal position. This can be diagrammed as in (9).

[5] A number of classical Malay texts (e.g. *Sejarah Melayu* and *Hikayat Hang Tuah*) are open to the public on the web: *Malay Manuscript Pages* (http://www.anu.edu/asianstudies/mmp/mmp.html/).

(9) a. S (definite/indefinite) V
b. V S (*definite/indefinite)

It appears from (9) that indefinite subjects are allowed to occur freely. The present paper makes an attempt to reveal some regularity behind their apparent freedom.

We examined the following six things:

(i) the proportion with regard to word order and definiteness (section 2.1);
(ii) the number of words which constitute the subject NP (section 2.2);
(iii) whether or not the subject contains relative clause(s) (section 2.3);
(iv) the meaning of the subject NP (section 2.4);
(v) whether or not there is (are) postverbal adverbial(s) (section 2.5);
(vi) the word order in adverbial clauses (section 2.6).

2.1 Word order preference

We examined the preferences with regard to (a) word order and (b) definiteness.

(a) Word order

Table 1 below shows the relative proportions of SV and VS[6].

---

[6] In some cases prepositions are omitted. We do not consider such cases as SVO. For instance, consider two examples from the samples.

(i) … Alessandro Del Piero **muncul** [Ø] wira Itali dengan gol penyamaan lima minit sebelum tamat perlawanan.
A. D. P. appear hero Italy with goal tie five minute before end game
'Alessandro Del Piero appeared as the hero of Italy making a tying goal five minutes before the end of the game.'
(Utusan Malaysia, 14/06/2002)

(ii) … Arab Saudi mampu **muncul** *sebagai* kuasa besar dunia …
Saudi Arabia can appear as power big world
'Saudi Arabia can appear as a big power of the world'
(Utusan Malaysia, 21/10/2002)

Muncul 'to appear' is used with the same meaning in both instances. However, in (i) the preposition *sebagai* 'as' is omitted, while not in (ii). Omitting prepositions is common in Malay, especially in the colloquial style.

(iii) Apa beza [$Ø_1$] jatuh [$Ø_2$] pokok kelapa dengan jatuh [$Ø_3$] perigi?
what difference fall tree coconut with fall well
'What's the difference between falling from a palm tree and falling into a well?'
(Lawak Online in Utusan Malaysia, 03/01/2004)

At least three prepositions are omitted in (iii). ($Ø_1$ = (*di* 'at') *antara* 'between'; $Ø_2$ = *dari* 'from' (*atas* 'on'); $Ø_3$ = (*ke* 'to') *dalam* 'in')

Table 1. Relative proportions with regard to word order

	SV (%)	VS (%)	others (%)
ada ‘to be/to have’	1 (5.0)	17 (85.0)	2 (10.0)
berlaku ‘to happen’	14 (70.0)	6 (30.0)	0 (0.0)
duduk ‘to sit’	13 (92.9)	0 (0.0)	1 (7.1)
muncul ‘to appear’	14 (70.0)	6 (30.0)	0 (0.0)
nampak ‘to see’	7 (35.0)	0 (0.0)	13 (65.0)
terdapat ‘to be’	0 (0.0)	20 (100.0)	0 (0.0)
terjadi ‘to occur’	4 (66.7)	2 (33.3)	0 (0.0)
timbul ‘to arise’	10 (50.0)	10 (50.0)	0 (0.0)
tinggal ‘to live/to remain’	17 (85.0)	0 (0.0)	3 (15.0)
wujud ‘to exist’	9 (45.0)	11 (55.0)	0 (0.0)
total	89 (49.4)	72 (40.0)	19 (10.6)

(b) Definiteness

Table 2 shows the relative proportions of definite subjects and indefinite ones[7]. Only subjects of the SV and VS word orders are considered.

Table 2. Relative proportions with regard to definiteness

	definite subjects		indefinite subjects	
	SV (%)	VS (%)	SV (%)	VS (%)
ada ‘to be/to have’	1 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	17 (94.4)
berlaku ‘to happen’	10 (50.0)	0 (0.0)	4 (20.0)	6 (30.0)
duduk ‘to sit’	10 (76.9)	0 (0.0)	3 (23.1)	0 (0.0)
muncul ‘to appear’	12 (60.0)	0 (0.0)	2 (10.0)	6 (30.0)
nampak ‘to see’	7 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
terdapat ‘to be’	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	20 (100.0)
terjadi ‘to occur’	2 (33.3)	0 (0.0)	2 (33.3)	2 (33.3)
timbul ‘to arise’	4 (20.0)	0 (0.0)	6 (30.0)	10 (50.0)
tinggal ‘to live/to remain’	9 (52.9)	0 (0.0)	8 (47.1)	0 (0.0)
wujud ‘to exist’	3 (15.0)	0 (0.0)	6 (30.0)	11 (55.0)
total	58 (36.0)	0 (0.0)	31 (19.3)	72 (44.7)

[7] Malay does not have words that correspond to the English words *the* and *a*. This paper treats the following three NPs as being definite: (i) NPs accompanied by referential expressions such as *itu* ‘that’, *ini* ‘this’ or *tersebut* ‘mentioned’, (ii) proper nouns, and (iii) definite pronouns. We do not assume zero determiners here, though admitting the existence of definite NPs without any overt indicator. For zero determiners in Indonesian, see Shoho (1990).

Our concern is the right half of Table 2, which shows the relative proportions of the two positions of indefinite subjects. We can see that there are all sorts of pivot verbs. Although all the verbs meet the definition of pivot verb stated in section 1.1, some prefer SV and others VS, and the extent of preference varies between different verbs. *Terjadi* ‘to occur’ is neutral. *Ada* ‘to be/to have’, *terdapat* ‘to be’, *muncul* ‘to appear’, *wujud* ‘to exist’, *timbul* ‘to arise’ and *berlaku* ‘to happen’ prefer VS to SV. *Duduk* ‘to sit’ and *tinggal* ‘to live’ seem to like SV very much. The different extent of preference can be illustrated as in Figure 1.

SV <——>VS

duduk	**terjadi**	**berlaku**	**timbul**	**wujud**	**muncul**	**ada**
‘to sit’	‘to occur’	‘to happen’	‘to arise’	‘to exist’	‘to appear’	‘to be/to have’
tinggal						**terdapat**
‘to live/to remain’						‘to be’

Figure 1. Preference between SV and VS

2.2 Word count

We examined the number of words that constitute the subject NP. It was found that the subjects of the VS word order were much longer than those of the SV word order. The average word count of the former is 7.1 words, whereas that of the latter is 3.5 words.

2.3 Relative clauses

One factor that makes the subject longer is the relative clause. We examined whether or not the subject contains relative clause(s).

Relative clauses in Malay can be classified based on their syntactic structures.

(11) a. [$_{NP}$ NP [$_{CP}$ Op [$_{C}$ yang/untuk] …]]

[$_{NP}$ pihak [$_{CP}$ Op [$_{C}$ yang] membuat tafsiran mengikut kepentingan
party do interpretation according.to interest
politik]]
political
‘party that interprets (the Koran) according to the political interest’
(Utusan Malaysia, 01/02/2002)

b. [$_{NP}$ NP [$_{CP}$ *wh*- [$_{C}$ Ø] …]]

[$_{NP}$ sebab [$_{CP}$ mengapa [$_{C}$ Ø] ada diskriminasi terhadap murid
reason why exist discrimination to pupil

perempuan Islam]]
female Islam
'reason why there is discrimination against Muslim girls'

(Utusan Malaysia, 01/02/2002)

c. [$_{NP}$ NP [$_{CP}$ Op [$_{C}$ Ø] …]][8]
(ada) [$_{NP}$ kakitangan [$_{CP}$ Op [$_{C}$ Ø] belum berpeluang menjadi
(exist) staff not.yet have.opportunity become
penghuni Putrajaya]]
inhabitant P.
'(there are) staffs who have not yet had an opportunity to be an inhabitant of Putrajaya'

(Utusan Malaysia, 02/02/2002)

d. [$_{NP}$ Ø [$_{CP}$ Op [$_{C}$ yang/untuk] …]]
[$_{NP}$ Ø [$_{CP}$ Op [$_{C}$ yang] menggunakan besi sebagai senjata]]
use iron as weapon
'those who use iron as a weapon'

(Utusan Malaysia, 02/02/2002)

e. [$_{NP}$ Ø [$_{CP}$ *wh*- [$_{C}$ yang/untuk] …]]
[$_{NP}$ Ø [$_{CP}$ Apa [$_{C}$ yang] pasti]]
what certain
'what is certain'

(Utusan Malaysia, 01/04/2002)

---

[8] This type is limited to certain environments. One of them is in the existential expressions such as the *ada* construction. It is worth mentioning that other languages (English (i) and Chamorro (ii) as far as we know) share a phenomenon of the same kind (cf. Quirk et al. 1985; Chung 1987; Nakau 2003).

(i) There's a lot of people don't know that.

(Nakau 2003: (3))

(ii) Guäha lahi ma-ma'nána'gui guini.
exist man teach here
'There's a man teaching here.'

(Chung 1987: (24a))

Chung (1987) calls this type of existential sentences 'complex existential sentences' as opposed to 'minimal existential sentences'. She claims that in Chamorro all the material to the right of the existential predicate (i.e. the indefinite NP and lower predicate) form a single NP. The same analysis applies to Malay complex existential sentences. Moreover, it is conceivable that *wh*-movement is involved in Malay since they are sensitive to the Complex NP Constraint (Ross 1967) as shown in (iii).

(iii) a. Ada seorang lelaki [$_{IP}$ orang percayai *t* membenci judi].
exist one-Cl man people believe hate gambling
'There is a man who people believe that he hates gambling.'
b. * Ada seorang lelaki [$_{IP}$ orang percayai [$_{NP}$ dakwaan *t* membenci judi]].
claim
'There is a man who people believe the claim that he hates gambling.'

For *wh*-movement in Malay, see Cole & Hermon (1997).

Let us now turn to the issue of the correlation between word order and the relative clause. The subjects of the VS word order are far more likely to contain relative clause(s) than those of the SV word order. For the former, 45 instances out of 72 (62.5%) contain relative clause(s). In contrast, for the latter, only 9 instances out of 31 (29.0%) contain them.

2.4 Semantics of the subject NP

Some grammatical phenomena have been analysed in terms of the meaning of NPs. For example, Silverstein (1976) proposed a hierarchy to explain the split case-marking patterns in Australian aboriginal languages. The nominative-accusative pattern spreads from the top (left) of the hierarchy down to the bottom (right) and the ergative-absolutive pattern spreads in the opposite way. This can be represented as in Figure 2.

pronoun common noun
first > second > third > kin term, proper name > human > animal > inanimate
——————————————> <——————————————
nominative-accusative ergative-absolutive

Figure 2. Silverstein's NP Hierarchy

Hoping to see some connection, we tried to analyse our present problem in terms of the meaning of the NP, but nothing turned up.

(12) a. … *orang swasta yang gagal*, **tinggal** di rumah besar …
people private that fail live at house big
'private citizens who failed (in business) live in a big house'
(Utusan Malaysia, 02/04/2002)

b. Takkan tidak **ada** *orang hendak ambil alih tugas itu* …
impossible Neg exist people will take.over duty that
'It is impossible that no one will take over the duty'
(Utusan Malaysia, 02/02/2002)

(13) a. *Isu lebihan bekalan air* tidak **timbul** …
issue excess supply water Neg arise
'The issue of excessive water supply does not arise'
(Utusan Malaysia, 08/04/2002)

b. Sebenarnya tidak **timbul** *isu ulama tidak boleh dikritik* …
actually Neg arise issue ulama Neg can be.criticised
'Actually the issue that ulamas cannot be criticised does not arise'
(Utusan Malaysia, 27/02/2002)

In (12) the head of the subject NPs is *orang* ‘person’, a human noun. In (13) it is *isu* ‘issue’, an abstract noun. Both, regardless of their inherent meaning, occur on both sides of the verb. It is clear that semantics of the subject NP has no relevance to word order decision.

2.5 Adverbials within the construction

Three parameters taken up in sections 2.2 through 2.4 are all about the subject. We need to expand our horizons and look outside of it. Other than the subject and the verb, the pivot verb construction can also contain adverbial(s) optionally. We focused on them and examined whether or not they appear after the verb.

The structures in question and examples of them are shown in (14).

(14) a. S V ADV

… *kumpulan* *pelampau* **wujud** [$_{PP}$ dalam semua agama].
group extremist exist in all religion
‘extremist groups exist in all religions.’

(Utusan Malaysia, 01/04/2002)

b. V S ADV

Hasrat untuk melihat **muncul** *sebuah* *negara* *Islam* [$_{PP}$ sebagai satu
desire for see appear one-Cl country Islam as one
kuasa dunia] …
power world
‘desire to see a Muslim country emerge as a world power’

(Utusan Malaysia, 13/06/2002)

Sometimes it is difficult to tell a PP within a subject from one functioning as an adverbial or adjunct. This brings about ambiguity. Consider (15) below.

(15) … **timbul** [$_{N}$ perbalahan] [$_{PP}$ dengan Malaysia] [$_{VP}$[9] berhubung projek penambakan
arise dispute with Malaysia concerning project reclamation
laut dekat sempadan laut kedua-dua negara].
sea near border sea both country
‘a dispute arises with Malaysia concerning the reclamation project of the sea near the border between both countries.’

(Utusan Malaysia, 01/04/2002)

[9] This phrase might be analysed as a PP if one considers *berhubung* ‘concerning’ as a preposition which has developed from the verbal use. But we assume the omission of the preposition *dengan* ‘with’ and regard this phrase as a VP. For the omission

There are three possible readings depending on as many syntactic structures.

(16) a. V [$_{Subj}$ N] PP VP
b. V [$_{Subj}$ N PP] VP
c. V [$_{Subj}$ N PP VP]

In such ambiguous cases, the smallest subject is chosen. For example, the subject of (15) is *perbalahan* ‘dispute’. Note that the smallest subjects increase the total number of occurrences of the structure ‘V S ADV’ shown in (14b). Therefore, if the presence of adverbials had nothing to do with the word order, the rate of ‘V S ADV’ (= (14b)) should have been higher than that of ‘S V ADV’ (= (14a)).

In spite of this partiality for ‘V S ADV’, the truth is that the rate of ‘S V ADV’ is more than twice as high as that of ‘V S ADV’. The former is 83.9 % (26 instances out of 31), whereas the latter is only 27.8% (20 instances out of 72). This means that the existence of adverbials affects the word order. If there is at least one adverbial after the verb, the word order tends to be SV, and if there is not, VS.

2.6 Word order in adverbial clauses

The whole pivot verb construction can be a part of an adverbial clause. We also examined the word order in this environment.

Both SV and VS word orders are observed.

(17) a. … supaya *rakyat yang miskin* dapat **tinggal** di rumah yang lebih
so.that people that poor can live at house that more
selesa.
comfortable
‘so that poor people can live in more comfortable houses.’
(Utusan Malaysia, 25/02/2002)

b. … supaya tidak **terdapat** *kesamaran* dalam mengenal pasti siapa
so.that Neg exist dimness in identify who
sebenarnya pengganas dan perbuatan apa yang boleh dikira
really terrorist and activity what that can be.considered
keganasan.
terrorism
‘so that there is no ambiguity in identifying who a real terrorist is and what activity can be considered to be terrorism.’
(Utusan Malaysia, 06/02/2002)

---

of prepositions, see footnote 6.

Supaya ‘so that’ is a complementiser that introduces a purposive clause. In (17a) the subject precedes the verb (i.e. SV), and in (17b) it follows the verb (i.e. VS).

Although there are two possible word orders in theory, in actual usage the VS order is in the majority. It accounts for 93.1% (27 instances out of 29). Incidentally, the ratio of SV and VS in other environments is about 2 to 3 (29 SVs and 45 VSs). It is concluded that in adverbial clauses the VS word order is preferred.

2.7 Summary

Thus far we have seen that four factors turned out to be relevant to the position of the indefinite subject in the pivot verb construction. Table 3 summarises the results.

Table 3. Four factors relevant to word order

	SV	VS
average word count (§2.2)	3.5 words	7.1 words
inclusion of relative clause (§2.3)	29.0%	62.5%
inclusion of adverbials (§2.5)	83.9%	27.8%
in adverbial clauses (§2.6)	6.9%	93.1%

Based on our findings, we have demonstrated the six following points.

(18)
- a. Each verb has its own preference for either SV or VS as shown in Figure 1 (section 2.1).
- b. The longer the subject is, the more likely it is to occur after the verb (section 2.2).
- c. Relative clauses lengthen the subject and hence allow it to occur after the verb (section 2.3).
- d. Semantics of the subject NP does not affect the word order (section 2.4).
- e. Postverbal adverbials appear more often in the SV word order than in the VS word order (section 2.5).
- f. In most adverbial clauses the word order is VS rather than SV (section 2.6).

3. Discussion

In this section we shall discuss how the findings in the previous section can be accounted for. There are four problems that need to be asked:

(i) Why do some verbs prefer one word order rather than the other? In other words, what makes the preference scale (Figure 1) as it is? (cf. (18a))

(ii) Why is it that in most adverbial clauses the word order is VS, not SV? (cf. (18f))

(iii) Why are longer subjects more likely to occur after the verb? (cf. (18b, c))

(iv) Why do postverbal adverbials appear more often in the SV word order than in the VS word order? (cf. (18e))

Unfortunately, the first two problems are so challenging that we have not come up with any plausible explanation at the moment. Needless to say, these call for further research (see section 4.2). In what follows the other two problems will be discussed. We propose that heaviness (section 3.1) and topicality (section 3.2) and their interaction (section 3.3) can account for these problems.

3.1 Heaviness

If a phrase is long, it can be described as 'heavy'. We can now paraphrase (18b) as follows: heavy subjects tend to occur after the verb. The accurate definition of the concept of heaviness is still controversial, but the intuitive idea is clear (cf. Wasow 1997). Why do heavy subjects follow the verb rather than precede it?

It has been reported that heaviness affects the syntactic shape in many languages, including Malay. For instance, Ramli (1989) mentions the Heavy NP Shift in connection with the adjacency requirement in Case assignment.

(19) a. Aminah memandu [kereta] dengan perlahan.
A. drive car with slow
'Aminah drives the car slowly.'

b. * Aminah memandu dengan perlahan [kereta].

(20) a. Saya menyepak [bola yang dia campak kepada saya] dengan kuat.
1Sg kick ball that 3Sg throw to 1Sg with hard
'I kicked the ball that s/he threw to me hard.'

b. Saya menyepak dengan kuat [bola yang dia campak kepada saya].

(Ramli 1989: 90-91)

In (19) the object, which is bracketed, is *kereta* 'car' and is not heavy at all. In (20) the object *bola yang dia campak kepada saya* 'the ball that s/he threw to me' is obviously heavy. Only the object NP of (20) can move to the right.

Can the Heavy NP Shift also resolve our problems? It is true that heaviness is a very possible explanation, but the Heavy NP Shift is not the sole possible scenario. There is another scenario: heavy NPs, in our case heavy subjects, are too heavy to move an inch and have no choice but to remain where they are. Let us call this scenario 'the Heavy NP Stay'. Which of these two postulations, the Heavy NP Shift and the Heavy NP Stay, is correct depends on the underlying structure and the course of derivation of the pivot verb construction. Actually both have their own flaws.

3.1.1 Heavy NP Shift

Suppose that the underlying structure is SV. All the subjects of pivot verbs precede the verb at the underlying structure. And then, at a later stage of derivation, heavy subjects move rightward to the postverbal position.

The assumption that the underlying structure is SV is problematic. There are too many instances that are short but appear after the verb. As long as there is no other rule that moves NPs obligatorily, including short ones, to the postverbal position, we cannot but assume that the underlying structure is not SV but VS and abandon the Heavy NP Shift account.

The assumption that the underlying structure of the pivot verb construction is VS is supported by the Unaccusative Hypothesis (Perlmutter 1978). According to Perlmutter (1978) and Burzio (1986), the single argument of unaccusative verbs is base-generated as the complement to V. In Malay, the complement to V follows its head. If pivot verbs are unaccusative verbs, the underlying structure is VS. We have two reasons to consider pivot verbs to be unaccusative verbs. First, their meanings are typical of unaccusative verbs, namely, existence and appearance. Second, most of them do not have the predicted *peN-* nominal form (21a), or even if they have, the meaning is different from the predicted one (21b).

(21) a. *pengada (<ada), *pemberlaku (<berlaku), *pemuncul (<muncul), *penampak (<nampak), *penterdapat (<terdapat), *penterjadi (<terjadi), *pewujud (<wujud)

b. penduduk (<duduk) ‘*sitter (person who sits)’, penimbul (<timbul) ‘*ariser (someone or something that arises)’, peninggal (<tinggal) ‘*liver (person who lives in a certain place; inhabitant)’

Nomoto (2003) suggests that unaccusative verbs cannot undergo *peN-* nominalisation since the meaning of *peN-* nominals refers to the external argument, which unaccusative verbs lack. A similar phenomenon is also found in English *-er* nominals. The suffix *-er* does not attach to unaccusative verbs, which lack an external argument (Levin & Rappaport 1988; Rappaport Hovav & Levin 1992). For example, we cannot say **appearer*, **disappearer*, **happener* or **exister*. Therefore, the underlying structure of the pivot verb construction is VS, not SV.

3.1.2 Heavy NP Stay

We will now take a look at the other scenario, the Heavy NP Stay. As mentioned above, the underlying structure of the pivot verb construction is VS. All the subjects, regardless of their definiteness and heaviness, are base-generated as the complement to V. At a later stage of derivation, some of them move to the left to a preverbal position due to some reasons. One of those reasons is the Definiteness Effect (cf. section 1.1). Definite subjects are not allowed to remain in their original position and must move to the suitable position, hence the SV word order. Heavy subjects cannot

rise to the position because of overweight. What about the other subjects, which are neither definite nor heavy enough? There is one more reason for which a subject is moved. It is topicality, which will be discussed in the next section.

Heavy NP Stay seems rather plausible. However, it has one theoretical problem—Case[10]. Unaccusative verbs are considered unable to assign the Accusative Case. This can be confirmed through the behaviour of the third person enclitic *-nya*. One of its various uses is as the pro-form of the third person object of active verbs and prepositions, where the Accusative Case is assigned.

(22) a. Isteri tua membunuh dia kerana cemburu.
first wife kill 3Sg because jealousy
'The first wife killed her because of jealousy.'
b. Isteri tua membunuh*nya* kerana cemburu.

(23) a. Saya menghantar surat kepada dia.
1Sg send letter to 3Sg
'I sent a letter to him.'
b. Saya menghantar surat kepada*nya*.

However, the postverbal NPs in the pivot verb construction are not interchangeable with this form[11].

(24) a. Keadaan di Indonesia huru-hara semasa **berlaku** *krisis kewangan*.
situation at Indonesia chaotic when happen crisis finance
'The situation in Indonesia was chaotic when the financial crisis happened.'
b. *Keadaan di Indonesia huru-hara semasa **berlaku***nya*.

Thus the postverbal subject is not in the position where the Accusative Case is assigned. Nevertheless the subject does appear there overtly.

As is commonly known, other languages as well as Malay share this problem and many studies have been made about it. Some propose that the Nominative Case can be assigned in some way (Burzio 1986 among others), others suggest the Partitive Case (Belletti 1988), and yet others the Absolutive Case (Shoho 1993). In any event one of the proposals will work. Therefore it is

---

[10] The term 'Case' is not used in its traditional sense, but as a terminology of the Government and Binding Theory. For this notion, see Haegeman (1994), for example.

[11] This does not mean that there is no instance of 'pivot verb + *-nya*'. On the contrary, one can find such instances quite easily. But note that such instances never refer to an NP in the preceding discourse.

(i) Keadaan di Indonesia huru-hara semasa berlaku*nya* krisis kewangan. (cf. (24))
(ii) Nampak*nya* dia tidak datang hari ini.
apparently 3Sg Neg come today
'It seems that he is not coming today.'

In (i) another NP *krisis kewangan* 'financial crisis' follows, which is the direct subject of the verb *berlaku* 'to happen'. In (ii) *nampaknya* 'apparently' is used adverbially.

reasonable to conclude that the Heavy NP Stay account is more plausible than the Heavy NP Shift account.

Finally we can give an answer to question (iii) above (repeated below for convenience).

(25) Q: Why are longer subjects more likely to occur after the verb?
A: Heavy subjects tend to occur after the verb since they are too heavy to move.

3.1.3 Heaviness of adverbials

Recall that there is another problem unsolved: why do postverbal adverbials appear more often in the SV word order than in the VS word order?

Heaviness is not involved this time. We examined both absolute and relative heaviness. In our case, the former is the heaviness of adverbials themselves, and the latter is the difference of heaviness between adverbials and subjects, that is, the value of the subtraction 'adverbial – subject'. The average absolute heaviness of the SV word order is 7.7 words, while that of the VS word order is 8.3 words. The average relative heaviness of the SV word order is 3.7 words, while that of the VS word order is 5.3 words. These results predict the wrong situation: postverbal adverbials appear more often in the VS word order since they are usually heavier in the VS order than in the SV order.

3.2 Topicality

In addition to heaviness, topicality is also a factor that affects the word order. In Malay, like many other languages, topics usually precede comments[12]. A part of the Definiteness Effect also results from this principle, for definite pronouns and referential expressions such as *tersebut* 'mentioned' indicate high degree of topicality.

Let us look at other consequences of the topicality principle. It accounts for the position of both subjects and adverbials.

As mentioned in section 3.1.2 above, some of the subjects which are neither definite nor heavy enough move to the left due to high topicality. There are 18 instances whose subjects are indefinite and made up of only one word, ten of them being SV and the other eight being VS. None of the latter has the same word in the preceding discourse. Meanwhile, six of the former have the same word in the preceding discourse, one has a related word (the subject is *wartawan* 'journalist' and *pihak media* 'the media' appears in the previous sentence), and two are specific following in-depth descriptions as illustrated in (26).

(26) KUALA LUMPUR 13 Jun – Seorang kanak-kanak lelaki, anak penyanyi Kumpulan Elite, Norwati Sadali atau Watie mati setelah terjatuh dari tingkat 11 sebuah kondominium mewah di Taman Sri Intan, Jalan Ipoh di sini hari ini.

[12] Arnold et al. (2000) puts together a variety of terms that have been proposed to account for informational distinctions of this kind as follows: 'topics/themes/presuppositions/old information tend to precede comments/rhemes/foci/new

Adam Raslan, 18 bulan, meninggal dunia di tempat kejadian setelah mengalami kecederaan parah di kepala.
Semasa kejadian, *mangsa* **tinggal** bersama pengasuh.
'KUALA LUMPUR 13 June – A boy, who is a child of a singer of the band Kumpulan Elite, Norwati Sadali, also known as Watie, died after falling from the eleventh floor of a luxury condominium at Taman Sri Intan, Jalan Ipoh today.
Adam Raslan, 18 months, passed away at the scene of the accident, being seriously injured in the head.
At the time of the accident, the victim was with his nanny.'

(Utusan Malaysia, 14/06/2002)

The preceding description gives much information about the subject in question *mangsa* 'victim'. Therefore, the subject is no doubt high in topicality.

The principle of topicality holds in general, not only for arguments but for adjuncts. If so, topicality should be able to account for the position of adverbials too. Consider the question (27) and two answers to it in (28).

(27) Kerusi yang mana Siti duduk?
chair that which S. sit
'Which chair does Siti sit on?'

(28) a. Siti duduk di kerusi itu.
S. sit at chair that
'Siti sits on that chair.'

b. * Kerusi itu diduduki Siti.
chair that be.sat.on S.
'That chair is sat on by Siti.'

(28b) is not adequate as an answer to the question (27). An answer to a question must be the comment, not the topic. In (28a) the answer is expressed as a postverbal adverbial, while in (28b) it is expressed as a subject and hence unacceptable. From this it follows that the principle of topicality is true in general and that subjects are more topical than postverbal adverbials.

Suppose that there are three constituents, namely the subject (S), the verb (V) and an adverbial (ADV) and that either the subject or the adverbial is more topical. Two word orders are possible: (i) S V ADV when the subject is more topical and (ii) ADV V S when the adverbial is more topical. Logically, it is in the SV word order that a postverbal adverbial occurs. This is why postverbal adverbials appear more often in the SV word order than in the VS word order. Note that adverbials do appear after the subject too. This is because of the way we analyse adverbials. Recall that in

---

information.'

section 2.5 we decided to choose the smallest subject when we are confronted with structurally ambiguous cases. Almost all the instances of adverbials after the subject are the result of such an analysis, and those adverbials have very close relationships with their subjects. If we had taken another line of analysis, the largest subject for example, there would have been few instances of postverbal adverbials.

3.3 Competition: heaviness vs. topicality

In this section we present a model that explains the interaction between heaviness and topicality. As we have seen, heaviness hinders NPs from moving to the left and topicality triggers the leftward movement[13] of constituents. It is evident that two principles are in conflict. Heaviness and topicality are, as it were, competing for constituents. Logically there are three results: (i) when heaviness defeats topicality, the word order is VS; (ii) when topicality defeats heaviness, the word order is SV; and (iii) when the competition ends in a draw, the word order is VS since it is the canonical word order of the pivot verb construction (cf. section 3.1.1). This can be diagrammed as in (29), where H(x) and T(x) stand for the heaviness and the topicality of a constituent x respectively.

(29) a. H(S) ∅T(S) → VS
b. H(S) { T(S) → SV

What if an adverbial enters the competition? As indicated in section 3.1.3, the heaviness of adverbials is not a determinant of its position. Only the topicality is relevant. The result is as in (30) with regard to the relative position of the subject and the adverbial.

(30) a. T(S) ∅T(ADV) → S V ADV
b. T(S) { T(ADV) → ADV V S

Incorporating (30) with (29), we obtain Table 4 below.

Table 4. The resulting word orders after competition

	H(S) ∅T(S)	H(S) { T(S)
no adverbials	VS	SV
T(S) ∅T(ADV)	V S ADV	S V ADV
T(S) { T(ADV)	ADV V S	ADV S V

Each word order in Table 4 is illustrated below.

[13] We use the term ‘movement’ just for convenience’ sake. We are not sure if any movement is really involved, especially in the case of adverbials.

(31) a. **Berlaku** *kekecohan*. (VS)
happen uproar
'It got uproarious.'
b. *Kekecohan* **berlaku**. (SV)
c. **Berlaku** *kekecohan* dalam dewan itu. (V S ADV)
in hall that
'The hall got uproarious.'
d. *Kekecohan* **berlaku** dalam dewan itu. (S V ADV)
e. Dalam dewan itu **berlaku** *kekecohan*. (ADV V S)
f. ?Dalam dewan itu *kekecohan* **berlaku**. (ADV S V)

The existence of all the word orders that our competition model predicts partly justifies its validity[14].

Although the six word orders are all logically possible, 'V S ADV' and 'ADV S V' are few in number and the acceptability of the latter is low. In this connection, Isamu Shoho (p.c.) informed us that (32), a variant of (7), whose word order is 'ADV S V', is unacceptable[15] because of 'lack of balance'.

(32) */? Di atas meja *dua naskhah buku* **ada**.
at on desk two Cl book exist
'Two books are on the desk.'

His idea is to the point. The very small number of 'V S ADV' and 'ADV S V' is also due to phonological imbalance of these two word orders. The pivot verb construction is indeed like a balance. The verb is the pivot phonologically as well as syntactically. Finally, note that both an adverbial and the subject can precede the verb only if the whole construction keeps its balance, though such a case is very rare.

(33) … [$_{ADV1}$ selain persaingan global yang semakin meningkat akibat
other.than competition global that more.and.more grow result
liberalisasi pasaran], *cabaran* juga **muncul** [$_{ADV2}$ dengan kemasukan China
liberalisation market challenge also arise with entry China
ke dalam Pertubuhan Perdagangan Dunia (WTO) serta pelaksanaan Kawasan
to in organisation trade world (WTO) and enforcement area

[14] For a complete justification, the mechanism of how H(x) and T(x) are compared, which is a black box at present, must be investigated.
[15] Our informant told us that (32) is not completely wrong and that verb-final sentences such as (31f) and (32) are more common in Bazaar Malay.

Perdagangan Bebas ASEAN (AFTA)].
trade free ASEAN (AFTA)
'other than the global competition that is heating up as a result of the liberalisation of markets, challenges will also arise with China's entry into the World Trade Organisation (WTO) and the enforcement of the ASEAN Free Trade Area (AFTA).'

(Utusan Malaysia, 08/02/2002)

In (33) another adverbial after the verb (ADV2) prevents a potential peril of imbalance.

4. Conclusion

This section summarises the main argument of this paper (section 4.1) and points out some remaining problems (section 4.2) and related issues (section 4.3).

4.1 Summary

The subjects of pivot verbs have two potential positions: preverbal and postverbal. The Definiteness Effect prevents definite subjects from occurring at the postverbal position. The position of indefinite subjects is determined by two independent principles, namely heaviness and topicality, and their competition. Pivot verbs are unaccusative verbs and the underlying structure of the pivot verb construction is VS. Heavy NPs cannot move to the left because of overweight and continue to stay at their original postverbal position (Heavy NP Stay), hence the VS word order. On the other hand, topical subjects move leftward, hence the SV word order.

We proposed the competition model. Two principles compete with each other. When heaviness wins over topicality, the word order is VS with the subject remaining at its original postverbal position. Conversely, when topicality wins over heaviness, the word order is SV with the subject moving to the left to a preverbal position. When the competition ends in a draw, nothing happens, hence the VS word order. Competition also takes place between constituents. This accounts for the relative position of adverbials with the subject. As for adverbials, it was found that heaviness does not affect its position and topicality is the only determinant. When the topicality of the adverbial is higher than that of the subject, the adverbial precedes the subject, and vice versa when the topicality of the adverbial is lower. Again, when the competition ends in a draw, nothing happens and the adverbial follows the subject since that is the canonical word order. The resulting word orders after the competition are shown in Table 4 above.

The competition model presented here is significant in two points. First, it is very simple but nevertheless predicts the facts and generalisations that have been stated thus far. It is a good example of how several independent components interact with one another. Second, surprisingly, our model seems to be one of the few studies that deal with both heaviness and topicality and their interaction at the same time. According to Arnold et al. (2000), 'Many scholars have claimed that constituent ordering is dependent on either complexity or information structure, but few have tried

to compare the two.' Such attempts other than theirs and ours include Siewierska (1993) and Hawkins (1994).

4.2 Remaining problems

We have three remaining problems, two of which were mentioned in the beginning of section 3. We shall look at them one by one adding somewhat conjectural comments.

(i) Why do some verbs prefer one word order rather than the other? In other words, what makes the preference scale (Figure 1) as it is?

The clue may lie in some semantic properties of the verbs. One of the candidates is volitionality. The preference scale reflects the volitionality of the verbs, with the SV pole being the most volitional and the VS pole the least volitional. A similar phenomenon in Mandarin Chinese is helpful here[16]. There is a class of verbs that has both unergative and unaccusative usage depending upon volitionality.

(34) a. Mingtian wo hui lai. (+volitional → unergative, SV)
tomorrow 1Sg can come
'Tomorrow I will be able to come.'

b. Qianmian lai-le yi-ge ren. (–volitional → unaccusative, VS)
front come-Perf one-Cl person
'From the front came a man.'

In (34a) the verb *lai* 'to come' is volitional, so that it is used as an unergative verb and the word order becomes SV. On the other hand, in (34b) the same verb is not volitional, so that it is used as an unaccusative verb and the word order becomes VS.

(ii) Why is it that in most adverbial clauses the word order is VS, not SV?

Unlike the problem (i) above, not even a clue has been found yet. However, we suspect the involvement of topicality. Again, other languages have a possibly related phenomenon. In German, the main clause and subordinate clause exhibit different word orders.

(35) a. Ich habe morgen Zeit.
1SgNom have tomorrow time
'I will have time tomorrow.'

b. Wenn ich morgen Zeit habe, besuche ich meinen Lehrer.
if visit 1SgNom 1SgAcc teacher
'If I have time tomorrow, I will visit my teacher.'

[16] We owe to Keiko Mochizuki information about Mandarin Chinese, including the examples and the analysis.

Notice the position of the verb *habe* ‘have’. In a main clause (35a) it appears in the second position, which is known as V2, while in a subordinate clause (35b) it appears in the final position of the (subordinate) clause. The problem seems to be rather general: why do different types of clause linkage lead to different word orders? Interestingly enough, in both Malay and German it is the underlying word order that appears in the subordinate clause.

(iii) The membership of pivot verbs

Shoho (1993) states that verbs which he later names ‘pivot verbs’ include (i) intransitive verbs whose meaning is appearance and disappearance, existence, coming and going, arrival and departure, or motion, (ii) part of *ter-* verbals, and (iii) part of *ke-…-an* verbals. It is necessary to elaborate on this description and reveal the mechanism behind it (and, if possible, make a list of as many pivot verbs as possible for the purpose of language education).

4.3 Related issues

Lastly, we would like to touch on two related issues. One is argument sharing and the other is inversion.

(i) Argument sharing and its implication for phrase structure

In the argument sharing structure, the shared NP can be analysed not only as the object of the matrix verb but also as the subject of the verb in the lower clause. When the verb is a pivot verb, the shared NP can appear in two positions like in a non-argument sharing structure.

(36) a. Fenomena ini juga secara umumnya menyebabkan [keadaan
phenomenon this also by.way.of general cause situation
kemarau berpanjangan dan kebakaran kawasan hutan serta belukar]
draught last and fire area forest and thicket
terjadi dengan mudah.
occur with ease
‘This phenomenon also generally causes prolonged draughts and forest and bush fires to occur readily.’

(Utusan Malaysia, 27/02/2002)

b. … mereka tidak menggunakannya bagi mengelakkan **timbul**
3Pl Neg use-3Sg for avoid arise
[suasana yang lebih tegang].
atmosphere that more tense
‘they did not use it for fear of causing more tension.’

(Utusan Malaysia, 01/04/2002)

In (36a) the shared NP, which is bracketed, appears between the matrix verb *menyebabkan* ‘to cause’ and the lower pivot verb *terjadi* ‘to happen’, while in (36b) it appears in a different position, after the lower pivot verb *timbul* ‘to arise’. This implies that the phrase structure of the argument sharing construction in Malay is different from that of English. In English the following analysis is common.

(37) a. V NP [$_{CP}$ PRO V]
b. John persuaded [$_{NP}$ Mary] [$_{CP}$ PRO to trust him].

However, in Malay the position of the shared NP is not fixed but rather flexible. Hence the phrase structure should be as in (38).

(38) a. V [$_{CP(/IP?)}$ NP V] (for (36a))
b. V [$_{CP(/IP?)}$ V NP] (for (36b))

One might argue against this analysis by saying that in (36b) Heavy NP Shift takes place. But note that the shared NP is heavier in (36a) than in (36b).

However, things are not that easy. In spite of repeated efforts, the exact phrase structure is still unknown (cf. Shoho 1996, 1999).

(ii) Inversion and the Definiteness Effect

As mentioned in footnote 3, Shoho (1992) claims that the Definiteness Effect does not hold on the basis of the existence of a sentence like (39a), where the subject is definite but in the postverbal position. However, the example that he shows might have resulted from inversion. He describes in the same paper that the particle -*lah* is a diagnosis of inversion.

(39) a. Marilah kita berdoa kepada Allah hubaya-hubaya jangan<u>lah</u> **datang**
let 1Pl pray to Allah hoping.that Neg come
lagi *bala itu*.
again misfortune that
‘Let’s pray to Allah hoping that such a misfortune will never come again.’
b. *Marilah kita berdoa kepada Allah hubaya-hubaya jangan **datang** lagi *bala itu*.
c. Marilah kita berdoa kepada Allah hubaya-hubaya *bala itu* jangan **datang** lagi.

His example (39a) contains the particle -*lah*. A sentence without -*lah* (39b) is unacceptable. If the definite subject occurs on the left side of the verb, the sentence is rescued (39c). Given that Shoho’s (1992) claim that the particle -*lah* is a diagnosis of inversion is correct, it can be said that the Definiteness Effect holds good in the pivot verb construction in Malay.

In order to make such a conclusive statement, however, further investigation is necessary about the nature of inversion in Malay. One thing that must be examined is the relation between inversion and intonation. According to Masashi Furihata and Keisuke Matsumoto (p.c.), in Indonesian definite subjects can appear after the pivot verb without the particle *-lah* (cf. example (i) in footnote 3), the use of which in Indonesian is far less frequent than in Malay. What is crucial is that the intonation pattern of such instances is characteristic of inversion sentences.

Furthermore, we need to investigate beyond our corpus. Our corpus is still very small and cannot cover all the variations that enable us to make a comprehensive description of the phenomenon. We could find no instance in which a definite subject follows its verb. However, Isamu Shoho (p.c.) informed us that such instances do exist although they are very few in number. We expect that their distribution is limited to certain environments like other languages. For instance, Huang (1987) presents an elaborate description of (in)definiteness in Chinese existential sentences. First, it is necessary to make the corpus larger. The larger a corpus is, the more likely it is for one to encounter infrequent instances. Second, we need to tackle the same problem using a more fundamental method, namely elicitation from native speakers. Although we made most of the corpus in the present study since it must be a corpus-based study, we do not mean to make light of the elicitation method, for it allows one to obtain crucial information that can solve his problems but will never appear in any corpora.

References

Arnold, Jennifer E., Thomas Wasow, Anthony Losongco and Ryan Ginstrom. 2000. 'Heaviness vs. newness: the effects of structural complexity and discourse status on constituent ordering.' *Language* 76: 28-55.

Belletti, Adriana. 1988. 'The Case of unaccusatives.' *Linguistic Inquiry* 19: 1-33.

Burzio, Luigi. 1986. *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Dordrecht: Reidel.

Chung, Sandra. 1987. 'The syntax of Chamorro existential sentences.' In E. J. Reuland and A. G. B. ter Meulen (eds.) *The Representation of (In)definiteness*, 191-225. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Cole, Peter and Gabriella Hermon. 1997. 'The typology of WH movement: WH questions in Malay.' *Syntax* 1: 221-258.

Haegeman, Liliane. 1994. *Introduction to Government and Binding Theory (2nd edition)*. Oxford: Blackwell.

Hawkins, John A. 1994. *A Performance Theory of Order and Constituency*. Cambridge: Cambridge University Press.

Huang, C.-T. James. 1987. 'Existential sentences in Chinese and (in)definiteness.' In E. J. Reuland and A. G. B. ter Meulen (eds.) *The Representation of (In)definiteness*, 226-253. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport. 1988. 'Non-event *-er* nominals: a probe into argument structure.' *Linguistics* 26: 1067-1083.

Nakau, Minoru. 2003. ‘Hakaku kōbun to bunpōka.’ *Ēgo Sēnen*, December 2003: 43-45. Tokyo: Kenkyusha.

Nomoto, Hiroki. 2003. ‘*PeN*- nominals in Malay.’ BA thesis, University of Tokyo.

Perlmutter, David. 1978. ‘Impersonal passives and the unaccusative hypothesis.’ *BLS* 4: 157-189.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Ramli Haji Salleh. 1989. *Fronted Constituent in Malay: Base Structure and Move Alpha in a Configurational Non-Indo European Language*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 1992. ‘*-Er* nominals: implication for the theory of argument structure.’ In T. Stowell and E. Wehrli (eds.) *Syntax and Semantics 26*: *Syntax and the Lexicon*, 127-153. San Diego: Academic Press.

Ross, John R. 1967. ‘Constraints on variables in syntax.’ PhD dissertation, MIT.

Shoho, Isamu. 1990. ‘Indonesiago no tēmēshiku to hutēmēshiku: nihongo tono hikaku o tōshite mita.’ *Kenkyū Hōkokushū* 11 *(Kokuritsu Kokugo Kenkyūjo Hōkoku* 101*)*: 132-168.

———. 1992. ‘Marēshiago no gojun.’ *Gengo Kenkyū II*: 76-97.

———. 1993. ‘Marēshigo no kaku to idō henkē.’ *Gengo Kenkyū III*: 169-189.

———. 1996. ‘Hobun o toru dōshi no ruikē.’ *Gengo Kenkyū VI*: 112-136.

———. 1998. *Marēshiago Kyōtē*. Tokyo University of Foreign Studies.

———. 1999. ‘Penggolongan ayat komplemen frasa kata kerja.’ *Gogaku Kenkyūjo Ronshū* 4: 1-16.

Siewierska, Anna. 1993. ‘Syntactic weight vs. information structure and word order variation in Polish.’ *Journal of Linguistics* 29: 233-265.

Silverstein, Michael. 1976. ‘Hierarchy of features and ergativity.’ In R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

Tjung, Yassir. 2003. ‘Existential sentences in Indonesian and the specificity effect.’ Paper presented at the seventh International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics.

Wasow, Thomas. 1997. ‘Remarks on grammatical weight.’ *Language Variation and Change* 9: 81-105.

目次ページに戻る。

３．英語

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

不変化詞（前置詞・副詞）によるメタファー表現の考察 ―子供のコーパスに基づく認知言語学的視点からの考察―

石井 康毅
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

概要

「メタファー」は言語表現において，きわめて有標な表現としてのみならず，特にメタファーと意識されることのない無標な表現としても非常に広範に使われている。

認知言語学は，身体的な経験が言語の根本的な動機となっていると主張するが，この説明が非常によく当てはまるとされているのが不変化詞によるメタファー表現である。本稿では典型的なメタファーのみならず，語彙の中に吸収されてはいるけれども比喩的な側面を持つ語までを含めて広義の「メタファー」として扱い，不変化詞の持つ具体的な物理的空間に関する中心的な意味と，話者の認知空間の中で拡張された比喩的な意味に焦点を当て，そこに見られるコアと拡張という仮説的な関係が，子供の言語習得のデータによって支持されるのかということを論じる。

認知言語学の立場に基づくと，子供が言語を習得する際には，認知主体である子供が成長するにつれて得る経験を通して，事物の新たな解釈の仕方を習得するということになる。もしそれが確かならば，子供は専らごく具体的な物理的空間に関する用法を見せるはずである。それを，コーパスを用いた子供の不変化詞の使用実態の調査によって確認し，従来から言われてきた，具体的な物理空間に関する意味がコアであるという主張を，理論内的動機からではなく，子供の言語における使用実態から裏付けることを試みる。

1. メタファーとその有標性

通常，(1)のようなものがメタファーとされる。

(1) Cigarettes are time bombs. 「たばこは時限爆弾である。」

メタファーは Lakoff and Johnson (1980: 5)によれば，「あるものを別のものを通して理解すること」(understanding and experiencing one kind of thing in terms of another)であり，Kintsch (1998: 157)によれば，「通常は描写対象とは連想されることのない特徴が描写対象に転移されるようなある種の比較」(some kind of comparison by means of which features are transferred

to the metaphor topic that are not normally associated with it)であり，通常以下の 3 つの特徴を持っていると考えられることが多い。

(i) 2 つ以上の物質・概念の意味（の側面）を対比・同一視する

(ii) 文の字義通りの解釈が不可能な場合に認識される

(iii) 通常の言語使用ではなく，詩や修辞に使われる

(i)はアリストテレス・プラトン・ソクラテスの時代以来の伝統的なメタファーの解釈であり(Levin 1977; Kittay 1987; Way 1991; Ross 1993)，(ii)と(iii)は現代の初期のメタファー研究で主張されたものである。

本稿では「メタファー」を以下の 4 つの定義特徴を持つものとして，伝統的な捉え方よりもゆるやかに捉える。

(I) 基本的・本質的・字義通りの意味が属する領域(domain)[1]とは異なる領域に属する事物を本来的に指す

(II) 言語共同体で共有される百科的・文脈的・経験的知識の参照を必要とする

(III) 内的な体系を持つ

(IV) 連続的な勾配を成す度合いを持つ

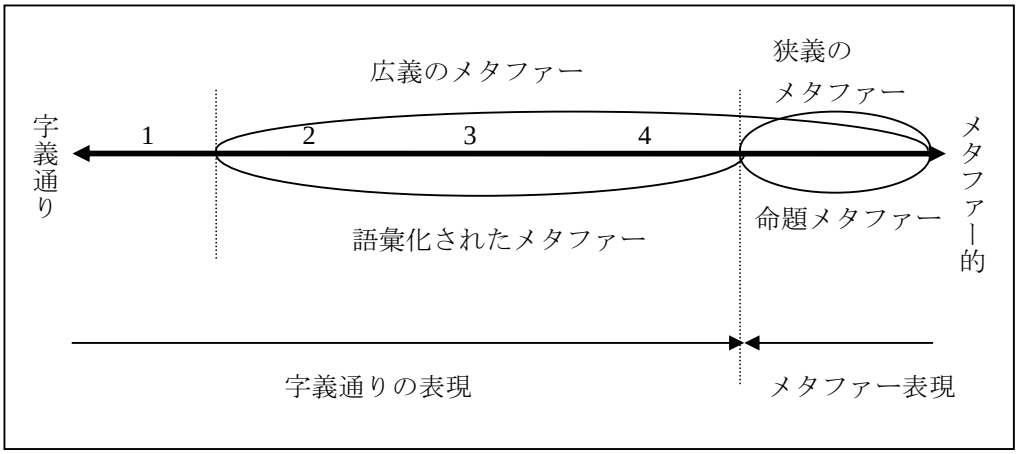
これらは，Lakoff and Johnson (1980)以降の認知言語学の立場による様々なメタファーに対するアプローチに基づいて，著者がメタファーの定義特徴としてまとめたものである。

それではこのような特徴を持つメタファーは有標な，別の言い方をすれば「普通でない」あるいは「特殊な」言語表現なのであろうか。それとも Lakoff and Johnson (1980)が指摘するように，メタファーは人間の生活に遍在していて，関連性理論(Sperber and Wilson 1995: 237)が指摘するように，「言語コミュニケーションで用いられる非常に一般的な能力と手続きの自然な結果である」(a natural outcome of some very general abilities and procedures used in verbal communication)に過ぎない，無標な，別の言い方をすれば「ごく普通の」言語表現なのであろうか。その判断は，何をもって「メタファー」・「有標」とするかによって変わる。

そこで，典型的なメタファーと全くメタファーでない字義通りの表現，そしてその間にある中間的な用法にはどのような関係があるのかを，図 1 に言語表現のメタファーのモデルとして図式化した。

[1] 「領域」は，認知言語学で，概念化の際の基礎となる意味理解の外枠としての視点・観点を指す（辻 2002: 254）。

図 1: 言語表現のメタファー



この図式は，言語表現は経験的な基盤に基づくという認知言語学の主張をもとに著者が行った分類であるが，字義通りの表現とメタファー的な表現は連続的推移(cline)を成しており，どこかで明確に切れるものではないと考えられる。図中の縦方向の破線は説明上の便宜的なものであり，明確な断絶を意図しているわけではないことに注意されたい。

ここからの議論では，本稿の主題である，字義通りの意味も語彙化されたメタファーも表すことができる，不変化詞表現を対象として論じる。なお，本稿では前置詞と副詞を区別せず，「不変化詞」として扱っている。両者を区別する統語的な手段はあるが，語句の省略と考えれば前置詞と扱えるような副詞もあり，意味的には明確に区切れるものではない(Quirk *et al*. 1985; Biber *et al*. 1999)。また，認知言語学的には，同じ状況についてであっても，概してプロセスをプロファイル[2]するものが副詞であり，結果をプロファイルするのが前置詞であると言うことができると著者は考える。このような理由から，本稿では前置詞と副詞をまとめて不変化詞として扱っている。

図 1 中の字義通りの表現は，以下に示す 1 から 4 の下位分類（図中の数字と対応）に分けることができる。ただし，この 4 つが完全な分類であるということを意図しているわけではなく，あくまで認知的な空間把握の視点から特徴的な部分を取り上げているのみである。

1. 物理的知覚場 (physical perceptual field) に関する意味
2. 心的知覚場 (mental perceptual field) に関する意味
3. 特定のランドマーク[3]がある認知場 (cognitive field with a particular landmark) に関する意味
4. 通常の状態がランドマークである認知場 (cognitive field with the normal state as the

[2] 「プロファイル」は，認知言語学で，ある特定の認知領域内で，焦点化され，際立ちが大きい部分で，特定の言語表現が直接指し示す部分を指す(辻 2002: 171, 227, 236)。
[3] 「ランドマーク」は，認知言語学で，関係を表すプロファイルにおいて，最も際立ちの大きい部分（「トラジェクター」）を除く，その他の際立ちの大きい部分を指す（辻 2002: 171）。

landmark) に関する意味

1 の「物理的知覚場に関する意味」とは，客観的に知覚可能な物理的空間に関する客体的(objective)な[4]意味である。(2a-b)の *down* はこの意味で使われており，(2a)の *down* は誰が見てもブラインドが下がっている状態, (2b)の *down* は誰が見ても丘を下りて行く様子を描写している。

(2) a. The blind is *down*. 「ブラインドは下がっている。」

b. walk *down* the hill 「歩いて丘を下りる」

2 の「心的知覚場に関する意味」とは，1 と同じ客観的に知覚可能な物理的空間をベース(base)[5]としながら，客体の移動を伴わず，話者である概念主体の主観的な心的移動のみがあるような意味である。(3)の *across* はこの意味で使われており，(2)の例とは異なり，当然 shop が street を超えて物理的に移動しているわけではなく，概念主体が心の中で道路を挟んで店の向かい側にある基点から店に向かって道路上をたどって移動していった結果をプロファイルしている。これについては 2 節で再度取り上げる。

(3) The shop is *across* the street. 「店は通りの向こう側だ。」

3 の「特定のランドマークがある認知場に関する意味」とは，客体的な空間ではなく，概念主体の心の中で想定される，空間に準ずる場をベースとし，ランドマークが明示的に存在するような意味である。(4a-b)の *in* はこの意味で使われており，(4a)では概念主体の頭の中にある my view という領域内を表しており，(4b)では主語の she が，たとえ全身真っ白の衣服を着ていなくても，衣服の色が白色であるという抽象的領域（概念主体が頭の中で形成する，他の領域と対比される，she が含まれる白色の衣服という空間）に属していると概念主体が認識しているということを表している。

(4) a. *In* my view, ... 「私の考えでは・・・」

b. She is *in* white today. 「彼女は今日は白い服を着ている。」

4 の「通常の状態がランドマークである認知場に関する意味」とは，3 と同じく概念主体の心の中で想定される，空間に準ずる場をベースとしているものの，ランドマークが明示されておらず，代わりに概念主体が「通常」と考える状態がランドマークになっているような意味である。(5a-b)の *down* はこの意味で使われており，(5a)では通常の健康な状態をランドマークとし，そこから健康状態が落ちているということを表しており[6]，(5b)では通常の問題なく電話が使える状態をランドマークとし，そこから利用可能性（あるいは利用価値）が落ちているということを表している。なお，このような「上方向がよい方向で，下方向が悪い方向である」という見方は，「方向のメタファー」(orientational metaphors)として，Lakoff and Johnson (1980: 14-21)が詳しい。

(5) a. I'm *down* with flu. 「風邪で寝込んでいる。」

---

[4] 「客体」は，認知言語学で，知覚者・概念主体の知覚・把握の対象になるものを指す（辻 2002: 104, 129）。

[5] 「ベース」は，認知言語学で，ある特定の認知領域内で際立ちが小さくプロファイルに対する背景として機能する部分を指す（辻 2002: 171, 227, 236）。

[6] 単に立っておらず横になっていると考えることもできる。その場合(5a)は 1 の「物理的知覚場に関する意味」になる。

b. The telephone line is *down*. 「電話が使えなくなっている。」

このように見てくると，物理的なものが字義通りの意味で，抽象的なものがメタファー的な意味であるように思われるかもしれない。しかし，このような字義通り-メタファー的の関係は一般的に言われる物理-抽象の対比的関係とは必ずしも一致しない。例えば，確かに(6a)は 1 の「物理的知覚場に関する意味」に分類でき，(6b)は狭義のメタファーに分類できるため，物理的・具体的な意味が字義通りの意味で，抽象的な意味がメタファー的な意味であると思われるかもしれない。しかし，主語が具体的な物か抽象的なものかという点で(6a) - (6b)と対比的関係にある(7a) - (7b)は共に，（狭義の）メタファーではなく，本稿の分類では 3 の「特定のランドマークのある認知場に関する意味」に該当するものである。

(6) a. The doll is *in the box*. 「人形はその箱の中にある。」

b. Happiness is *in the box*. （手にすると幸せになるようなものが箱の中に入っているという状況で）「幸せがその箱の中にある。」

(7) a. The machine *got out of control*. 「機械が制御不能になった。」

b. My enthusiasm *got out of control*. 「私は熱意を抑えきれなくなった。」

(is) in the box は(6a)のように字義通りにも用いる表現であり，(6b)のように happiness という語がシンタグムに存在することによってメタファー的にも用いることができる表現である[7]。他方，(7a-b)では不変化詞の補部(control)が抽象的な名詞であるため，(7a)では主語が具体的な物であるにもかかわらず，(got) out of control は語彙化されたメタファーであると考えられる[8]。本稿では，(6a-b)の(is) in the box のようなメタファー的にも非メタファー的にも用いることができる不変化詞表現に焦点を当てる。

次にそれぞれの（広義の）メタファー表現の有標性について考えたいが，メタファーの有標性を考える前に，メタファーに限らず言語表現一般の有標性について考える必要があろう。有標性を判断する基準としては，例えば以下のようなものを考えることができるだろう。（ただし，以下のものが有標性を判断する基準として適しているということを意図しているわけではないということに注意されたい。）

相補的意味関係にある表現(complementaries)や同位の下義語(co-hyponyms)などを比較した場合において，

a. 話者・聞き手が普通だと感じるものが無標で，普通でないと感じるものが有標

b. 形態素数が少ないものが無標で，多いものが有標

c. 意味的に「透明」で生産性が高いものが無標で，付加的な意味があるものが有標

d. 通時的に見てより古いものが無標で，後世に拡張や変化により生じたものが

[7] (6b)の文(命題)全体は狭義のメタファーであるが，(is) in the box は語彙化されたメタファーの心的知覚場を表していると考えられる。

[8] 動詞も不変化詞表現がメタファーであるか字義通りの表現であるかを決定する重要な要素であり，動詞が抽象的な関係などを表す場合には，不変化詞表現は通常，語彙化されたメタファーになる。

有標

e. 使用頻度の高いものが無標で，低いものが無標

f. 生成統語論が想定する UG（普遍文法）のパラメーター(parameter)[9]の初期値(default value)のものが無標で，初期値からの変更を要求するものが有標

g. 子供が先に習得するものが無標で，後から習得するものが有標

a の例を挙げると，語のレベルでは，一般の人にとっては，同じ「心臓発作」を指す専門語の“coronary”と一般語の“heart attack”では，“coronary”の方が有標だと感じるだろうし，また語より上のレベルではいわゆる選択制限("selectional restriction")に違反するものを指すものも含まれる。この原則は大方その通りかもしれないが，これでは全く客観的な基準にならない。そもそも，人によって，あるいは場合によって有標だと感じることもあれば，無標だと感じることもあるのである。例えば，I have a slight *headache*.「軽い頭痛がする」と The United States is suffering a lot of domestic political *headaches*.「アメリカは多くの国内の政治問題に頭を抱えている」を比べると，同じ headache という語に対しても，後者が前者に対して「本来頭痛を患うのは人間である」という点で有標であると感じる人もいるだろうし，そのようには全く感じない人もいるだろう。辞書においても[figurative]などのラベルを付しているものもあれば付していないものもあるだろう。b は例えば steward / stewardess のようなものであり，このような例では確かにその通りだが，この基準では応用の範囲は形態素を語に拡張した強調の構文などまでに限られる。c は，それ自体は非常に特定性の低い意味を表し，様々な修飾語を伴って用いることができるという点で応用範囲の広い語句の方が，修飾語を伴わなくても非常に特定性の高い意味を表すような語句と比べて無標であるという考え方である。例えば *working* hours 「勤務時間」 / *working* class「労働者階級」のようなものであり，同じ working という語であっても前者は無標な意味，後者は有標な意味であると言うことができる。文のレベルに適用すれば，文の意味が，個々の語の意味を足し合わせたのが文の意味であるという伝統的な解釈に従って，個々の語の意味の透明性が確保されていれば無標であり，そうして得られた意味が文脈に照らして不適切である場合，それは有標ということになる。d については，例えば OED に掲載されている語義で古いものが基本の無標なものであって，そこから拡張されてより新しく生まれた語義が有標であるという考え方ができる。しかし，ある時代に生まれた人間はその時点に話されている言語を習得するのであって，通時的な変化をたどって習得するわけではない。もちろん通時的な変化に一般的な拡張の方向性を見出すことはできるかもしれないが，それが，人間が母語を習得する際の順番と同じであるという保証は何もない。e については，確かに概して無標な意味や表現は有標なものよりもはるかに頻繁に用いられると言えるだろう。しかし，滅多に使われない固有名などの表現が有標であるとは限らないということを考えると，使用頻度が低いものが有標だというのもおかしな話であり，さらに，頻

[9] 「パラメーター」とは各言語で共通して論じることができる（すなわち個別言語に特有なものを除く）規則や原理を補完するもので，該当言語の性質を指定するようなものを指す。例えば，語順の規則において主要部が補部の右側に来るか左側に来るかを指定するのがパラメーターである。

度が低いから有標なのか，有標だから頻度が低いのかという循環論になってしまう。f については，UG の理論では子供が言語習得過程で見せる発話にパラメーターのデフォルト値が見られると主張しており，これは g とも通じる議論であるが，UG のこの主張は主に統語理論上の前提であり，これについても，パラメーターのデフォルト値であるために子供の言語に見られるのか，子供の言語に見られるためにパラメーターのデフォルト値であるとするのか，という点で循環的だと言うことができる。またそもそも UG が前提とする第一言語習得期の外部刺激の不十分さについては必ずしも十分な検討がなされているわけではなく，認知言語学では UG の存在自体を疑問視している（山梨 2000: 259-261）。g については確かに子供が有標な表現を先に習得するということはなさそうである。しかし，以下に見るように子供が高度に抽象的なことを発話したり理解したりするということはなく，そうすると抽象的なものが有標ということになってしまうが，必ずしもそういうことにもならないはずである。例えば house は専ら建造物を指すのに対して，home は house と同じ建造物を指すこともあるが抽象的な生活空間を指すこと多いという点で，house が home よりも無標であるということは言えないであろう。

メタファーの有標性については，この他に，メタファーの描写対象以外の概念を参照するという性質から，解釈にかかる時間が長いほどその表現は有標であるということが言えるかもしれない。しかし，多くの心理言語学のデータから，高度に比喩的なメタファーを除いて，メタファー表現も字義通りの表現も処理時間に変わりはなく，むしろメタファー表現の方が処理時間が短い場合もあるということが明らかになっている(Gibbs 1994)。

以上の議論を踏まえて，メタファーの有標性について考えてみたい。狭義のメタファーは命題（非常におおまかに言えば文）が表現するメタファーであり，真理条件的に偽である表現であったりして有標である。例えば(1)のような例がこれに当たる。しかしこれが有標だからといって，「特殊」というわけではない。文の意味は，文を構成するより小さな（語句などの）単位が持つ意味を（そして場合によっては構文の意味を）足し合わせたもので単純に成るわけではなく，発話時の文脈において瞬間的にダイナミックに生成・解釈されるものであり，前述のように（狭義の）比喩的な意味も多く使われると考えられる。それに対して，図 1 中の字義通りの表現は文レベルだけでなくそれよりも小さな単位の意味も含み，イディオムもここに含まれると考える。図 1 中の語彙化されたメタファーの部分が文より小さい単位での（広義の）メタファーであり，使用者が通常メタファーとは感じない不変化詞の用法であり，無標のメタファーである。その中には，全くメタファーとは感じられない用法（2 の心的知覚場に関する意味）から，狭義のメタファーに近い，場合によっては有標なメタファーとさえ感じられる用法（4 の通常の状態がランドマークである認知場に関する意味）まで連続的推移を成している。

以上の議論からメタファーの有標性についてまとめると，本稿では，狭義のメタファーは命題レベルで発現し有標性が高いけれども，語彙化されたメタファーはより小さい言語単位でも現れ，無標であると主張する。

認知言語学以外の立場の言語学でも不変化詞の「中心的な」意味は物理空間に関する意

味であるとされ(Quirk *et al*. 1985: 685-687)，認知言語学でもそれは同様である(Langacker 2002; Lee 2001; 松本 2003)。ただし，認知言語学以外で物理空間の意味を「中心」として扱うという立場は，理論上の整合性が要請するものであるなど，主に理論内的動機によるものである。また，認知言語学でも十分な裏付けを伴って物理空間の意味を「中心」と捉えているのではなく，身体経験と外界認知が言語の基盤となるという認知言語学の言語哲学上の前提ゆえに物理的空間に関する意味を放射状ネットワークのコアとして分析している(Lee 2001)。本稿では，子供は図 1 中の字義通りの表現からメタファー的な表現に向かって習得していくという想定の下で，具体的な物理空間の意味が不変化詞の意味の「中心」であるということを，子供の言語の使用実態を見ることで裏付けることを試みる。

2. 認知言語学と母語の習得

認知言語学の根本的な考え方は，多くの概念・言語単位は身体と環境の関わりに端を発する身体基盤に動機付けられているというものである。そしてそこから，認知的要因と経験的基盤に基づいた意味的拡張を見せるという。つまり認知言語学では，言語は人間や人間の経験と不分離であると主張する。

そして言語の意味は客観的なものではなく，発話者である解釈主体の世界の解釈のあり方こそが言語表現の意味であるとされる。ただし，これは，言語の意味は完全に主観的なものであると言っているわけではない。上で身体基盤が言語の動機であると述べたように，解釈主体の主体的(subjective)な[10]事物の把握は客体性を排除するものではない。客体性と主体的な事物の把握が一致している状態が前節の図 1 で挙げた 1 の「物理的知覚場に関する意味」に見られる。ただしこのように客体性が完全に残っている状態というのは少数であり，多くの言語表現では，多かれ少なかれ客体性が失われている。このことがメタファーの観点では重要である。なぜなら，そこが字義通りの表現と（広義の）メタファーの切れ目だからである。完全な客体性が失われ，主体的な事物の把握がより重要になっている状態が前節の図 1 で挙げた 2 の「心的知覚場に関する意味」に見られる。このように，具体的・客観的な意味内容を持つ表現から客体性が失われていく意味の変化を，認知言語学では「主体化」(subjectification)と呼ぶ。Langacker(2002: 326)は不変化詞に見られる主体化の例として次の文を挙げている[11]。

(8)a. Vanessa jumped *across* the table. 「ヴァネッサはテーブルを飛び越えた。」

b. Vanessa is sitting *across* the table from Veronica. 「ヴァネッサはテーブルを挟んでヴェロニカの向かい側に座っている。」

同じ *across* という前置詞が使われているが, (8a)では Vanessa というトラジェクター[12]が the

[10] 「主体」は，認知言語学で，知覚者・概念主体に属するものを指す（辻 2002: 104, 129）。
[11] 強調は著者による。
[12] 「トラジェクター」は，認知言語学で，関係を表すプロファイルにおいて，最も際立ちの大きい部分を指す（辻 2002: 171）。

table というランドマークの上を物理的に移動しているのに対し，(8b)では物理的な移動は存在せず，概念主体が心の中でテーブルを挟んで向かい側に座っている Veronica から Vanessa に向かってテーブルの上を移動していった結果をプロファイルしているのみである。この主体的な（認知的空間における）視線の移動は「心的走査」(mental scanning)と呼ばれ，それによって作られる心的経路の到達点がプロファイルされている（松本 2003: 109-112）。

(8a-b)を，認知言語学の根本原理である身体基盤の観点から見ると，(8a)は物理空間に関する基本的な用法であり，(8b)はそこから拡張され，主体的な把握がより重要な位置を占める用法であると言えそうである。これは前節で挙げた 1 の物理的知覚場に関する意味から 2 の心的知覚場に関する意味への拡張と言うことができ，図 1 における字義通りの非メタファーと広義のメタファーの区分を具現化している。

そこで英語を第一言語として習得する子供はやはり(8a)のような用法を先に習得し，後から(8b)のような用法を習得するのかという考察を本稿では試みたい。

認知言語学における言語習得研究では，子供は文脈において分かりやすく，使用頻度が高く，そして経験に基盤を持つ，プロトタイプとしての中心的なコアである具体的な表現から習得し，後にそこから拡張されたカテゴリーメンバーやその拡張能力そのものを習得していくという理論的展開をすることになる（山梨 2000: 257-259）。

前節のメタファーのモデルと認知言語学のこれらの見解に従うならば，一般に子供が第一言語を習得する際には，経験に根ざした物理的な空間・具体的な場所の意味から習得していき，成長とともに認知能力と言語能力が発達するに従い，抽象的な意味の使用を見せ始めるということが予測されるだろう。

本稿では，場所の意味を本来的な意味として持つ不変化詞の観点から，この考え方の妥当性を確認することを試みる。

以下，第 3 節でこの立場から導かれる仮説を提案し，第 4 節でその仮説の検証方法について説明し，第 5 節で実際に得られたデータの概観と考察を行い，第 6 節でこの研究の今後の課題と展望を述べる。

3. 仮説

前節で論じたように，不変化詞の意味のうち，具体的な物理空間に関する意味が字義通りの意味であるコアであって，発話者の認知空間内での移動や場所に関する意味は，（大人にとっては無標のメタファーである）語彙化されたメタファーであるとすると，子供の不変化詞の用い方に関して，以下の仮説が立てられる。

> 不変化詞は，言語習得の初期においては専ら物理的移動を示す基本的な動詞，物理的・具体的な物・場所を指す名詞とともに用いられ，子供が成長して，言語能力すなわち認知能力が発達するに従い，抽象的な関係や状態を指す動詞・名詞とともにも用いられるようになる。そのため，初期のデータほど，心的走査を伴っ

たりより抽象的であったりする不変化詞の使用例は少なく，具体的な場所・空間・身体経験に関わる語の使用に限られる。

以下，この仮説の妥当性を確認して前節での想定が支持されるものかどうかを検討するために，子供の話し言葉のコーパスを使って検証を行う。

4. 検証方法

子供の話し言葉コーパスを調査する。データ量の多さという利点を生かし，主に数量的な観点から調査対象の不変化詞に先行する動詞，不変化詞の補部名詞句をプログラムを利用して抽出し，それらと不変化詞との共起の頻度に関する大まかな傾向を確認する。さらに一部の構造については文脈に照らして用例を詳細に確認することで，無標のメタファー的な用法も使用が少ないのかどうかということを明らかにする。

子供の言語のコーパスとして，The CHILDES database[13]（以下「CHILDES」）を利用した。CHILDES (CHIld Language Data Exchange System)とは，1984 年に Carnegie Mellon University の Brian MacWhinney と Harvard University の Catherine Snow が中心となって，コンピューターを利用して大量のデータを共有し，分析ツールを提供することで，言語習得研究を発展させようと始めたプロジェクトである。

CHILDES のデータは，言語習得研究に必要な情報を過不足なく柔軟かつ厳密に表記できるようにするために開発された CHAT(Codes for the Human Analysis of Transcripts)というフォーマットに従って記述されている。CHAT には，音声，音韻，形態素，統語構造，誤りなどの自然言語に見られる様々な特徴を表記するための記述方法が用意されている。

具体的には，CHILDES のデータは以下のようになっている(MacWhinney 1988)。

```
@Begin
@Languages: en
@Participants: CHI Ross Child, FAT Brian Father
@ID: en|macwhinney|CHI|2;10.10||||Target_Child||
@ID: en|macwhinney|FAT|35;2.||||Target_Child||
*ROS: why isn't Mommy coming?
%com: Mother usually picks Ross up around 4 PM.
*FAT: don't worry.
*FAT: she'll be here soon.
*CHI: good.
@End
```

また，データによっては，以下のような形態統語論的な情報が含まれる(*Ibid.*)。

```
*MAR: I wanted a toy.
```

[13] http://childes.psy.cmu.edu/。

%mor: PRO|I&1S V|want-PAST DET|a&INDEF N|toy.

本稿の調査で使用したデータは，Normal Monolinguals の

・English - USA

・English - UK

のセクションに含まれるデータのうち，子供の年齢が明記されていて，形態統語論的情報が付記されているものである。子供の年齢の明記は年齢区分ごとにデータを処理するため，形態統語論的情報は品詞情報と見出し語情報の利用のために必要であった。

年齢ごとのデータを 6 ヶ月単位で区切った分布を表 1 に挙げる。年齢の単位は「ヶ月」であり（以下全てのデータで同様），月未満の日は切り捨てて扱った。

表 1: 年齢ごとのデータの分布

年齢（ヶ月）	サンプル数	サンプル数割合	行数	行数割合
-30	681	45.1%	159594	33.5%
-36	239	15.8%	90674	19.0%
-42	177	11.7%	55400	11.6%
-48	130	8.6%	43276	9.1%
-54	94	6.2%	72655	15.2%
-60	62	4.1%	20866	4.7%
-66	49	3.2%	14283	3.0%
-72	9	0.6%	1634	0.3%
73-	68	4.5%	18147	3.8%

表 1 の分布から，今回はサンプル数，発話数とも大体 1/3 ずつに区切れるという理由で，2 歳半まで（11 ヶ月-30 ヶ月）の子供の発話，2 歳半から 3 歳半まで（31 ヶ月-42 ヶ月）の子供の発話, 3 歳半以上 (43 ヶ月-97 ヶ月) の子供の発話の 3 つの区分にコーパスを分けて扱った。

数値データを得るための調査は全て自動で行った。自動的に子供の発話に含まれる調査対象の不変化詞（後述）に先行する動詞と不変化詞の補部名詞句を抽出して集計するプログラムを作成した。このプログラムはコーパスから一文ずつ読み込んでいき，調査対象の不変化詞が含まれる場合には，形態統語論的情報を利用してその先行する動詞と補部名詞句を特定し，それを見出し語化した上で集計を行う。

本稿で調査対象とした不変化詞は *between*, *down*, *from*, *in*, *into*, *on*, *out of*, *over*, *through*, *to*, *under*, *up* の 12 項目で，その選定基準は，BNC（後述）中の度数で不変化詞の上位 30 項目に含まれ，かつ Quirk *et al*. (1985: 686-687)がメタファー拡張のある典型的な空間の前置詞として挙げているものである。

表 2 はそれぞれの年齢期における各調査対象の不変化詞と共起する補部名詞句と動詞の生起数を示している。

表 2: 補部名詞句と動詞の生起数一覧

不変化詞	age	補部名詞句生起数	動詞生起数

between	-30	0	0
	31-42	3	0
	43-	1	0
down	-30	190	984
	31-42	149	622
	43-	131	395
from	-30	70	29
	31-42	149	81
	43-	143	79
in	-30	1759	1206
	31-42	1954	1576
	43-	2160	1740
into	-30	14	4
	31-42	57	42
	43-	113	86
on	-30	1627	790
	31-42	1721	1365
	43-	1456	1551
out of	-30	53	37
	31-42	76	74
	43-	140	149
over	-30	65	170
	31-42	110	293
	43-	96	292
through	-30	7	14
	31-42	23	25
	43-	42	72
to	-30	389	239
	31-42	836	657
	43-	1048	903
under	-30	52	41
	31-42	66	48
	43-	58	62
up	-30	187	460
	31-42	229	581

	43-	271	906

表 2 に挙げた不変化詞と共起する度数が高い補部名詞句・動詞を考察の対象とした。名詞については *in* の補部名詞句を, 動詞については *down* と *in* に先行する動詞を考察の対象として調査を行うこととした。

5. データと考察

以下（表 3-5）に示すデータは全て，各不変化詞の補部名詞句と各不変化詞に先行する動詞を見出し語化した上で，そのうちの上位 20 語に含まれかつ生起度数 10 度以上のものを挙げている。なお，大人の母語話者のデータと比較するため，各データには，BNC(the Second Edition of the British National Corpus)[14]における同様の順位の語のデータを付記した。

5-1. *in*

表 3 は，*in* の補部名詞句を，各年齢期において出現度数の高い順に示したものである。

表 3: *in* の補部名詞句

rank/age	-31		31-42		43-		BNC
1	box	84	house	89	house	72	way
2	house	83	water	76	water	61	case
3	water	71	bag	66	room	57	fact
4	bed	67	bed	66	school	54	year
5	room	52	room	54	car	47	area
6	bag	50	box	48	bed	44	country
7	chair	48	mouth	44	bag	41	world
8	car	47	kitchen	38	back	38	time
9	minute	47	car	36	front	36	Britain
10	zoo	25	hand	29	box	32	London
11	mouth	21	minute	29	morning	32	form
12	cup	20	crib	22	middle	29	place
13	kitchen	20	chair	20	kitchen	28	mind
14	mommy	20	sky	20	mouth	28	life
15	pocket	20	hole	19	hand	26	sense
16	wastebasket	20	corner	18	pocket	24	day
17	air	19	front	17	chair	21	chapter
18	closet	18	trunk	17	minute	21	Europe

[14] 約 1 億語（書き言葉約 9000 万語，話し言葉約 1000 万語）から成る現代イギリス英語のコーパス。

19	hole	18	middle	16	mirror	21	house
20	bath tub	16	pot	16	sky	21	England
21	garage	16	truck	16			term

総じて，子供のデータで挙がっている名詞句はほとんどが物理的な場所を示している。特に年齢が低いほど箱状の，あるいはしっかり区切られた物理的空間を指す語が多い(9-10)[15]。

(9) *FAT: some of her toys are packed ?
*CHI: yeah .
*FAT: in what ?
*FAT: what are they in ?
*CHI: *in* um [//] *in* big **box** .
*MOT: that's right .
(Bellinger and Gleason (1982); dinner¥patricia.ch; 29 ヶ月)

(10) *CHI: I going *in* another **house** xxx .
(Suppes (1974); nina38.cha; 34 ヶ月)

年齢が上がると少し拡張された例が見られるようになる(11-12)。

(11) *CHI: xxx what that ?
*MOT: that's the band_aid .
*CHI: no that thing *in* the **middle** of the band_aid .
%com: nina points to the gauze pad in the center of the band-aid .
*MOT: that's the part of the band_aid that you put over the hurt .
(Suppes (1974); nina36.cha; 34 ヶ月)

(12) *CHI: does dis have a door *in* **back** of it ?
(Brown (1973); adam¥adam40.cha; 47 ヶ月)

BNC で最も頻度の高い way，case の使用例(13-14)[16]が，子供のデータに見られないのも注目すべき点である。

(13) It is stressed *in* two specific **ways**. (EFT-1608)

(14) I believe that it is important *in* most **cases** for each language to have parity; ... (FA3-1324)

これらの例は物理的なランドマークのない抽象度の高い用法であり，子供の発話にはまだ見られない。

これらの事実は，子供の生活が物理的な次元で行われているので当然ではないかと考えることもできる。しかし，それだけでこれらの事実を説明するのに十分なのであろうか。

[15] CHILDES のデータの斜体とボールドは著者による。その他の表記は元のデータのままである。また，末尾の括弧内には，引用した文が含まれるコーパスに関する文献（文献がない場合はデータ収集者名）・データ収録ファイル名・子供の年齢を付している。以下の CHILDES のデータについても同様。

[16] BNC のデータの斜体とボールドは著者による。文が長い場合には省略している場合もある。また，末尾の括弧内には，引用した文の ID を付している。以下の BNC のデータについても同様。

当然，狭義のメタファーは子供の生活現場では発せられることがほとんどないと考えられるが，語彙化されたメタファーに該当する意味を持つ表現や事物の関係は，子供が生まれた時からその周囲に遍在している。それにもかかわらず，子供が物理的知覚場に関する意味の発話ばかりを見せるというのであれば，それは有意味な傾向であると言える。また，(6-8)の例で見たように，文全体を見ないと不変化詞部分が字義通りの意味なのかメタファー的な意味なのかが分からない部分があるのは確かであり，このように補部名詞句のみを切り離して結論付けていては問題があることも事実である。これについては，以下で見る詳細な文脈に基づいた用例の確認をもとに再度論じる。

表 4 は, *in* に先行する動詞を, 各年齢期において出現度数の高い順に示したものである。

表 4: *in* に先行する動詞

rank/age	-31		31-42		43-		BNC
1	go	428	go	449	be	572	be
2	be	283	be	382	go	333	come
3	put	108	come	107	get	143	live
4	get	55	get	107	come	92	go
5	sit	46	put	76	put	51	work
6	come	40	fit	49	look	43	find
7	fit	38	sit	46	live	42	use
8	look	20	live	37	stay	39	do
9	sleep	15	sleep	35	sit	32	result
10			look	30	fit	28	read
11			stay	20	fall	22	see
12			play	17	play	15	get
13			fall	16	sleep	15	hold
14			ride	11	stick	14	set
15			color	10	do	13	sit
16					color	11	make
17					have	10	lie
18					jump	10	appear
19					run	10	have
20					talk	10	show

ここでもやはり年齢が低いうちはトラジェクターの物理空間中の移動を表す用法がほとんどである(15-16)。

(15) *CHI: let's **go** *in* there .

(MacWhinney (1988); boys08a-in.cha; 17 ヶ月)

(16) *CHI: you **put** it *in* a pocket ?

(Brown (1973); adam¥adam11.cha; 32.ヶ月)

年齢が高くなるにつれて，拡張された例も見られるようになる(17-18)。（第 1 節で述べた語彙化されたメタファーの下位分類に当てはめれば，(17)の *in* は 2 の心的知覚場に関する意味に，(18)の *in* は 3 の特定のランドマークがある認知場に関する意味に分類される。）

(17) *CHI: **look** *in* nat [: that] winduh [: window] **look** *in* na [: the] window # .

(Hall *et al*. (1984), Hall *et al*. (1981), and Hall and Tirre (1979); blackwor¥pag.cha; 54 ヶ月)

(18) *CHI: they all have to **stay** *in* order .

(Bliss (1988); norwilli.cha; 73 ヶ月)

しかし，子供の年齢が高くなるにつれて語彙化されたメタファーも使うようになることはあっても，BNC で見られる result や read のような抽象的な場所・状態を表す語とともに用いる例(19-20)は子供のデータには見られない。（同様に語彙化されたメタファーの下位分類に当てはめれば，(19)の *in* は 2 の心的知覚場に関する意味に分類されるが，第 1 節で述べたように，語彙化されたメタファーの 4 つの下位分類は完全な分類としてあげたものではないので, (20)の *in* が分類されるべき適当な枠は 4 つの下位分類の中にはない。ただし，ゆるやかに考えれば 3 の特定のランドマークがある認知場に関する意味に分類されると考えることは十分可能である。）

(19) It suddenly seemed important to keep the conversation as close as possible to something you might have **read** *in* an old book. (GUU-137)

(20) A gas leak in the gas discharge cooler in the gas compression module then **resulted** *in* the general alarm sounding. (K5D-10793)

以上大まかなデータを見てきたが，ここで，詳細な文脈の中での意味を確認し，語彙化されたメタファーに該当する意味を持つ表現や事物の関係は，子供が生まれた時からその周囲に遍在しているにもかかわらず，子供は語彙化されたメタファーの使用を見せずに物理的知覚場に関する意味の発話ばかりを見せるということがあるのかという点について検討する。

be+in の 3 歳半から 4 歳半まで（43 ヶ月-54 ヶ月）の子供の用例 329 例を確認した。結果，そのうちの 2 の心的知覚場に関する意味の例(21)が 11 例，3 の特定のランドマークがある認知場に関する意味の例(22)が 15 例，4 の通常の状態がランドマークである認知場に関する意味の例(23)が 1 例あり，一部の判断不可能なものを除いて他の残り全ては物理的に「何かの中に」という 1 の物理的知覚場に関する意味を持つ用法であった。

(21) *CHI: she **was** *in* the other &uhm tape .

(Hall *et al*. (1984), Hall *et al*. (1981), and Hall and Tirre (1979); blackwor¥anl.cha; 54 ヶ月)

(22) *CHI: he'**s** *in* work now .

(Henry (1995), Wilson and Henry (1998); mich12.cha; 47 ヶ月)

(23) *CHI: fire'**s** not *in* yet, it's sposta [: supposed to] blow up .

(Van Kleeck; ben1.cha; 44 ヶ月)

(21)-(23)のようなごくわずかの例を除いてほとんどが物理的知覚場の意味を持つ用法であったということから，be 動詞という非常に汎用性の広いごく基本的な繋辞を伴う場合でも，子供は不変化詞 *in* を専ら物理的知覚場に関する意味で用いるということが明らかになった。*in* が語彙化されたメタファーの用法を多く持ち，そのような表現は言語習得期の子供の周りにあふれているにもかかわらず，子供は具体的な物理空間に関する意味ばかりを用いるということは，これが *in* のコアであり，これを子供が最初に習得するゆえであると考えられる。

5-2. *down*

表 5 は，*down* に先行する動詞を，各年齢期において出現度数の高い順に示したものである。

表 5: *down* に先行する動詞

rank/age	-31		31-42		43-		BNC
1	fall	367	fall	211	fall	80	go
2	sit	211	sit	108	go	70	sit
3	lie	128	go	86	sit	44	come
4	get	79	get	50	be	30	be
5	go	55	lie	29	come	25	look
6	lay	43	come	20	get	24	break
7	come	13	be	15	lay	16	put
8	slide	13	lay	12	stay	11	lie
9	put	11	put	11			run
10			knock	10			turn
11			slide	10			settle

子供のデータでは 3 つの年齢期全てを通じて fall が最も高頻度であること(24-25)は大きな注目に値する。

(24) *CHI: him cup **fall** *down* .

%com: nina is referring to the plastic cups that she was playing with earlier .

(Suppes (1974); nina29.cha; 29 ヶ月)

(25) *CHI: what keeps making it **fall** *down* ?

*CHI: Mommy # make it stay under dere .

*MOT: does it really belong under there ?

(Brown (1973); adam¥adam43.cha; 49 ヶ月)

BNC で見られる(26-27)のような例は子供のデータには見られない。

(26) I’ve seen the toughest soldiers **break** *down* and weep. (CEC-2684)

(27) It was just sitting there with its headlights on and the battery was **running** *down*. (CBG-761)

子供のデータではほとんどの動詞が物理的移動を表現するものであり，*down* に見られる拡張は相当後の段階で習得されるものであることが示唆される。

down についても詳細な文脈の中での意味を確認するために, fall+down の 43 ヶ月以上の子供の全ての用例を確認したが，全て物理的に「下に落ちる」という 1 の物理的知覚場に関する意味であった。また sit+down の 43 ヶ月以上の子供の全ての用例も確認したが，全て物理的に「座る」という 1 の物理的知覚場に関する意味であった。頻度が高く基本的であると考えられる動詞に伴われた場合でもこのように子供は物理的知覚場に関する意味しか用いないというのは，これが子供にとっての *down* の中心的なコアの意味であることを強く示唆していると考えられる。

5-3. 総括

仮説で予測した通り，子供は，特に年齢が低い子供ほど，不変化詞を基本的な動詞，物理的・具体的な物・場所を指す名詞とともに用い，心的走査を伴う，またはさらに抽象的な認知空間に関する意味での不変化詞の使用例は少なく，専らトラジェクターの物理的移動を示す，場所・空間・身体経験に関わる不変化詞の用法を見せるということが明らかになった。またデータの概観からは，年齢が高くなるにつれて，不変化詞を抽象的な関係や状態を指す動詞・名詞とともにも用いる事例が見られるようになる。これは，子供が成長して言語能力が発達するにつれて，心的走査を伴う，またはさらに抽象的な不変化詞の使用ができるようになったことを反映していると考えられる。

また，Jespersen(1964: 138)は，入浴中の子供が"I will wash you in a moment"と言う母親に対して"No, you must wash me in the bath"と答えたという事例を紹介している。

以上のデータは，認知言語学で唱えられている，身体的経験が言語の基盤となるという主張への支持を示唆するものであると言えよう。

しかしながら，だからといって，2 節で論じたように，空間領域に関する意味が大人の言語においても無標であり，拡張された抽象的な意味が有標だということにはならないということにも注意する必要がある。2 節で挙げたように，認知言語学における言語習得研究では，日常生活における習得対象単位の頻度の高さが子供の言語習得の順番にとって重要な要素なのであり（山梨 2000: 257-259），大人の発話でよく使われるものは，たとえ身体基盤から拡張された意味・用法（語彙化されたメタファー）であったとしても，子供にとっては特に有標なものではないと考えられるからである。例えば，3 つの年齢期の全て

の *in* の補部名詞の上位項目に含まれる minute がその明らかな例として挙げられるだろう。また Jespersen(1964: 138)も，子供が最初に使うようになる前置詞は"go to school"，"go to pieces"，"lie in bed"，"at dinner"などの成句の中に含まれるものであると主張している。

以上，子供の不変化詞の言語習得のデータは，身体基盤と認知能力が言語の基盤になっているとする認知言語学の主張に抵触しないことを示した。しかしこれまでに見てきたデータはそれ以上のものではなく，言語習得に関する他の理論，例えば UG の考え方を否定するものではないという点も注意する必要がある。

6. 今後の課題と展望

子供は不変化詞については経験的な基盤を持つ物理空間に関する意味から習得するということをさらに明白に示すためには，子供の発話に特有の現象をより適切に扱う必要がある。例えば，子供が見せる自分の発話の繰り返しは数値的にはそのまま集計しては問題があり，大人の発話の繰り返しも純粋に子供の発話として見ることには問題があり，発話が断片的であったり言い淀みの間投詞があったりするがゆえに適切に検索されない文もある。また，そもそも子供の発話では語彙が限られており，大人と同じ基準でデータを見るのではなく，使用されている語彙の偏りを差し引いた上で考察を行うこともきわめて重要である。それに加えて，子供に対して周囲の大人がどれだけの語彙化されたメタファーを含む発話をしているのかということを検証する必要もある。これは頻度が子供の言語習得に大きな影響を与えるという認知言語学の視点から見て重要な問題である。さらに，今回は子供のデータとして一括りに扱ったが，幼児期は成長著しい時期であり，また成長の早さも個人差が大きい時期であることから，子供の年齢の区分を精緻化したり，特定の子供の見せる，長期間にわたる成長に伴う変化を詳細に観察することも重要である。これについては，CHILDES には同じ子供の長期間にわたるデータもあるため，そういったものを利用して，常に大人の（特に話し言葉の）データへの連続やそれとの関わりということを念頭に置きながら取り組むべき課題と言える。

学習者のコーパスを対象として，第二言語習得の場合も同様に語彙化されたメタファーを最初はうまく習得できないのかということも調査し，さらに教授の際に意味のメタファー拡張まで教えるべきかどうかということも検討したい。ただし，学習者は，例えば *about* であれば，「～に関して」のように盲目的に覚えるということも十分ありえるので，そういったことには注意しなくてはならない。さらに，第二言語習得の場合には学習者の年齢も大きな影響を持つということも視野に入れておく必要がある。

不変化詞は当然ながら物理的な空間表現にばかり使われるわけではない。不変化詞は物理的意味を中心として持ちながら，容易に拡張され，メタファーとして意識されることなく使われることが非常に多く，これが他の内容語よりも広い意味を持つ不変化詞の特色になっていて，話者の解釈をコード化する際に非常に重要な役割を果たしていると考えられる。例えば不変化詞には of や about などの空間性の弱い前置詞や，構文と密接な関連を持

つ間接目的を示す前置詞なども含まれており，これら意味の物理的意味からの拡張過程や習得のされ方についても検討する必要がある。このような不変化詞の意味において，物理空間の意味が様々な拡張の基礎を成すプロトタイプであるということを，理論内的な動機による所与のものとしての扱いで済ませずに，子供のコーパス・大人の母語話者のコーパス・学習者のコーパスを総合的に利用して，実際のデータの面から確認し，そして言語表現がいかにメタファー的に意味を拡張し，どのような意味を獲得するのか，さらに文の構成要素がいかに文全体のメタファーに組み上げられていくのかという言語表現における一般性を追求していきたい。

参照文献

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Pearson Education.

Gibbs, R. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge University Press.

Jespersen, O. 1964. *Language: Its Nature, Development, and Origin*. Norton.

Kintsch, W. 1998. *Comprehension: A Paradigm for Cognition*. Cambridge University Press.

Kittay, E. F. 1987. *Metaphor: Its Cognitive Force and Linguistic Structure.* Clarendon Press.

Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.

Langacker, R. W. 2002. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Second Edition. Mouton de Gruyter.

Lee, D. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford University Press.

Levin, S. R. 1977. *The Semantics of Metaphor*. Johns Hopkins University Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Ross, D. 1993. *Metaphor, Meaning and Cognition.* Peter Lang Publishing.

Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition. Blackwell.

Way, E. C. 1991. *Knowledge Representation and Metaphor*. Kluwer Academic Publishers.

辻幸夫（編）. 2002. 『認知言語学キーワード辞典』 研究社.

松本曜（編）. 2003. 『シリーズ認知言語学入門 第 3 巻 認知意味論』 大修館書店.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 くろしお出版.

[CHILDES 関連]

Bellinger, D. and J. Gleason. 1982. “Sex Differences in Parental Directives to Young Children.” In *Journal of Sex Roles, 8*, pp. 1123–1139.

Bliss, L. 1988. “The Development of Modals.” In *The Journal of Applied Developmental*

Psychology, *9*, pp. 253–261.

Bloom, L., L. Hood and P. Lightbown. 1974. “Imitation in Language Development: If, When and Why.” In *Cognitive Psychology*, *6*, pp. 380–420.

Bloom, L., P. Lightbown and L. Hood. 1975. “Structure and Variation in Child Language.” In *Monographs of the Society for Research in Child Development*, *40*, Serial No. 160.

Brown, R. 1973. *A First Language: The Early Stages*. Harvard University Press.

Hall, W. S., W. E. Nagy and R. Linn. 1984. *Spoken Words: Effects of Situation and Social Group on Oral Word Usage and Frequency*. Erlbaum.

Hall, W. S., W. E. Nagy and G. Nottenburg. 1981. *Situational Variation in the Use of Internal State Words*. University of Illinois.

Hall, W. S. and W. C. Tirre. 1979. *The Communicative Environment of Young Children: Social Class, Ethnic and Situational Differences*. University of Illinois.

Henry, A. 1995. *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*. Oxford University Press.

MacWhinney, B. 1988. *CHAT Manual* (Manual for use of the CHAT transcription coding system of the child language data exchange system). Department of Psychology, Carnegie Mellon University. Available on-line at http://childes.psy.cmu.edu/manuals/CHAT.pdf.

Suppes, P. 1974. “The Semantics of Children’s Language.” In *American Psychologist*, *29*, pp. 103–114.

Wilson, J. and A. Henry. 1998. “Parameter Setting within a Socially Realistic Linguistics.” In *Language in Society*, *27*, pp. 1–21.

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

初期近代英語における命令的仮定法
―Shakespeare の場合―

浅井　千紗子
（東京外国語大学大学院博士前期課程）

1.　序

命令・勧告・懇願などを表す動詞・名詞・形容詞は，古英語期には主に that 節を従え，また that 節内の動詞は，仮定法現在をとることが多かった。このような仮定法現在は命令的仮定法(mandative subjunctive)と呼ばれる。

古英語の例

(1) ic đe bebeode…Þæt đu đæt nænegum men *cyđe*, ne *secge*

(=I *charge* thee …that thou *make* it known to no one, nor tell it)　　(*Bede* 266, 28) [1]

現代英語の例[2]

(2) They recommend that this tax *be* abolished.

(3) It is appropriate that this tax *be* abolished.

(4) We were faced with the demand that this tax *be* abolished.

しかし，中英語，近代英語と時代を経るにしたがって，古英語期には存在した仮定法現在の屈折語尾が次第に消失し，直説法との区別ができなくなった。そのため，直説法と法性を区別するために，次第に法助動詞構文を that 節内で用いることが多くなる。

(5) I *commanded* the sleeves *should* be cut out, and sew'd up again,

(Shakespeare, *The Taming of the Shrew* 4.3.145-148)

また同時に直説法もこの環境で用いられ始める。

英語史の流れを見ると，命令的仮定法は次第にこれらの表現にとって代わられ，衰退の一途を辿っていたという見方もできる。しかし，実際は現在もアメリカ英語を中心に生産的に用いられ，アメリカ英語のメディア等の影響でイギリス英語でもふえる傾向にある。命令的仮定法が，イギリス英語では一時衰退したのに対し，アメリカ英語では保持された理由として，英語がアメリカ大陸にもたらされたのが初期近代英語期(1500-1750)であり，当時の英語の特徴がアメリカでは保たれたからであるとする説もある。本稿では，アメリカに英語がもたらされた時代，すなわち初期近代英語期のイギリス英語において命令的仮

1　小野・中尾 (1980: 395-396)

2　Quirk *et al* (1985: 156)

定法が用いられる環境を考察する。命令的仮定法がどのような環境で用いられていたかを観察するため，命令的仮定法をとりうる動詞・名詞・形容詞を意味別に分類し，それぞれの環境でどの程度, 命令的仮定法, またはその代替表現が用いられていたのかを考察する。用例は，Shakespeare (1564-1616)の戯曲 20 作品から収集する。中英語(15 世紀以前)との比較も若干試み，中英語から初期近代英語期にかけての英語史上の流れを概観する。

また，命令・勧告・懇願などを表す動詞・名詞・形容詞は，that 節の他に，不定詞付対格（Accusative cum infinitive, 以下 ACI 構文；e.g. I ask *him to go*.）をとることもある。ACI 構文は，中英語から初期近代英語にかけてふえたと言われており，現代英語ではかなり高い頻度で用いられる。Quirk *et al* (1985: 157)は，ACI 構文も法助動詞構文や直説法とともに命令的仮定法の代替可能表現であるとし，次の例を提示している。

(6) We ask *that the Government be circumspect*.

(7) We ask the Government *to be circumspect*.[3]

本稿では，Shakespeare 劇のテキストを綿密に調査し，①that 節（仮定法現在，直説法現在，法助動詞）をとる動詞，②不定詞付対格をとる動詞（to を伴うもの，伴わないもの）の例を集め，特に動詞・名詞・形容詞の意味的特徴に焦点をあてることで，初期近代英語期の特徴を明らかにする。

2. 先行研究

古英語では，仮定法現在は直説法現在とははっきりと異なる屈折をしていた。しかし，古英語期に見られた仮定法現在の屈折語尾-e, -en は，次第に用いられなくなり，初期近代英語では完全に消えてしまっている。伝統的には，中英語期に，強勢をもたない最終音節が水平化されたことにより，音韻的に直説法と区別がつかなくなってしまったことが原因のひとつとして考えられている[4] 。

Harsh(1968)は，英訳聖書に見られる仮定法現在とその代替表現を調査し，仮定法現在をとり得る環境が急激にかつ連続的に減少してきていることを報告している[5]。仮定法現在は, Shakespeare と同時代の欽定訳聖書(1611)において一時増加するが，これは欽定訳聖書が故意に古風な言語を用いたためである。1923 年の Godspeed 訳では仮定法現在は全く使用されていない。そして以下の Fowler(1926: 574)からの引用に示されるように，現代英語において，仮定法現在はかなり衰退し消滅しかかっているように見えた時期もあった。

About the subjunctive, so delimited, the important general facts are:

I. that it is moribund except in a few easily specified uses;

II. that, owing to the capricious influence of the much analysed classical upon the less studied

---

[3] ACI 構文と仮定法現在が，同一文中で並列して用いられる例も観察される。
Karzai has *asked* several times for more peacekeeping troops *to be* sent to Afghanistan and that they *be* spread to other major cities. (USA TODAY, May 1, 2002)

[4] Jespersen(1924: 318)が述べているように，仮定法と直説法がよく似た環境で用いられるようになったこと，つまり，仮定法現在の意味の曖昧さが原因であるとする説もある。

[5] Harsh(1968)は，命令的仮定法だけでなく副詞節における仮定法現在なども調査対象としている。

native moods, it probably never would have been possible to draw up a satisfactory table of the English subjunctive uses;

III. that assuredly no-one will ever find it either possible or worth while to do so now that the subjunctive is dying;

IV. that subjunctives met with today, outside the few truly living uses, are either deliberate revivals by poets for legitimate enough archaic effect, or antiquated survivals as in pretentious journalism, infecting their context with dullness, or new arrivals possible only in an age to which the grammar of the subjunctive is not natural but artificial.

しかしながら, 仮定法現在と直説法現在の間に形態的・音韻的違いは見られないものの, 現代英語の中で命令的仮定法が用いられることは決して珍しいことではない。しかも，意図的に古風な表現を用いる場合のみならず，新聞記事や口語表現などにおいても見られる（Harsh, 1968: 12）。また，命令的仮定法は，イギリス英語よりもアメリカ英語において多く見られ，イギリス英語でもアメリカ英語の影響を受けて再び用いられ始めている（Quirk *et al*, 1985: 157）。

現代英語において，従属名詞節における命令的仮定法には，他に２つの代替形，つまり法助動詞構文と直説法現在が可能である。

(8) The employees have demanded that the manager *resign*. <esp AmE>

(9) The employees have demanded that the manager *should resign*. <esp BrE>

(10) The employees have demanded that the manager *resigns*. <esp BrE>

Övergaard(1995)は，20 世紀における命令的仮定法について英米のコーパスを分析し，命令的仮定法をとりうる動詞・名詞に関する結果を次のようにまとめている。

表 1 アメリカ英語のコーパス (Övergaard, 1995)

	仮定法現在	直説法現在	法助動詞構文	計
1900	29(36%)	0 (0%)	52(64%)	81
1920	50(66%)	0 (0%)	26(34%)	76
1940	66(86%)	0 (0%)	11(14%)	77
1960	87(89%)	0 (0%)	11(11%)	98
1990	91(99%)	0 (0%)	1(1%)	92

表 2 イギリス英語のコーパス (Övergaard, 1995)

	仮定法現在	直説法	法助動詞構文	計
1900	4(4%)	2(2%)	82(94%)	87
1920	9(12%)	0(0%)	69(88%)	78
1940	12(14%)	0(0%)	76(86%)	88
1960	17(19%)	3(3%)	72(78%)	92

1990	53(57%)	9(10%)	31(33%)	93

表 1, 2 からも読みとれるように，アメリカ英語では仮定法現在が上昇傾向にあり，1990 年にはほぼ 100%近くを占める。逆に法助動詞構文は減少傾向にあり，特にアメリカ英語においては，その傾向が顕著である。イギリス英語でも，アメリカ英語同様，仮定法現在が上昇傾向にあるが，アメリカ英語ほど顕著ではない。また，わずかではあるが，イギリス英語では，直説法の使用が拡大してきている。以下に直説法現在の例をあげる。

(11) …and it is *essential* that the ripening *is* stopped at the correct degree of acidity[…].
(LOB: E33 81)

(12) It is *recommended* that the saline […] techniques *are* used in parallel. (LOB: J13 73)

直説法の使用によって，話者のもつ意思的要素は弱まり，that 節内の内容はコメントあるいは事実にとどまる(Övergaard, 1995:63)。

ACI 構文は，古英語では現代ほど頻繁には見られず，使役を表す動詞（e.g. do, let），知覚を表す動詞（e.g. hear, see）に限られていた。思考動詞（e.g. know, think, deem）や言明動詞（e.g. declare, pronounce）は，古英語期には，主として that 節を従えていたが，中英語期には ACI 構文をもとり始める（Zeitlin, 1908:111）。ACI 構文は，初期中英語で一時衰退したものの，14 世紀以降は主流型となり，15 世紀には that 節とほぼ同じ割合で，16 世紀には that 節を上回って用いられている（Manabe, 1979:167-168）。また，不定詞標識については，古英語では to なし不定詞の方が無標であったが，現代英語では逆である。現代英語では，to なし不定詞は能動態の知覚動詞や使役動詞に続く場合などに限られる。さらに現代英語では，to の有無はほぼ固定しており，同一環境における両者の交替はほとんど見られない。しかし，初期近代英語では現代英語ほど用法が固定されていない[6]。

3. Shakespeare の英語における命令的仮定法とその代替表現

ここでは，Shakespeare 劇からの実際の用例を考察する。考察に用いた戯曲は次の 20 作品である。テキストは，*The Riverside Shakespeare*, 2nd edition (Houghton Mifflin, 1997)を用いた。

Err.=*The Comedy of Errors*, Shr.= *The Taming of the Shrew*, Gent.=*The Two Gentlemen of Verona*, MND=*A Midsummer Night's Dream*, Merch.=*The Merchant of Venice*, Ado.=*Much Ado about Nothing*, Twelf.=*Twelfth Night, or What You Will*, AWW=*All's Well That Ends Well*, R3=*The Tragedy of Richard the Third*, R2=*The Tragedy of Richard the Second*, Rom.=*The Tragedy of Romeo and Juliet*, Caes.=*The Tragedy of Julies Caesar*, Ham.=*The Tragedy of Hamlet, Prince of*

[6] 例えば, entreat と能動態 make が不定詞付き対格名詞句を従える場合，不定詞は現代英語では規則的にそれぞれ TO 付きと TO なしであるが，初期近代英語では規則性ははるかに低かった。
Shakespeare での状況は次のとおりである。（宇賀治, 1976:68）

	TO なし不定詞	TO 付き不定詞
entreat	13	41
make	440	31

Denmark, Oth.=*The Tragedy of Othello, the Moor of Venice*, Lear=*The Tragedy of King Lear*, Macb.=*The Tragedy of Macbeth*, Ant.=*The Tragedy of Antony and Cleopatra*, Cor.=*The Tragedy of Coriolanus*, Per.=*Pericles, Prince of Tyre*, Temp.=*The Tempest*

以下，仮定法現在をとる動詞・名詞・形容詞について考察していくが，動詞については意味別に分類することとし，「懇願」を表す動詞（pray, entreat, beseech, beg），命令を表す動詞（bid, charge, command, take order），「勧告」を表す動詞（look, see, be sure, have a care, take heed），そして以上のどれにも分類できない例を「その他」としてまとめた（say, consent, forbid, hope, wish, prove, swear, think, seem, will is）。個々の動詞を考察する前に，それぞれの意味分野の全般的な傾向を概観するために，それぞれの動詞がとる構文と that 節内の動詞形を表によって提示する。なお，表中の「that 節 or ACI 構文」は，例えば“He prays you stay.”のように you が形態的に主格とも対格とも解釈可能であり，that 節構文あるいは ACI 構文であるのかの判断が容易でない例を示す。また，「動詞形不明」は that 節内の主語が，3 人称単数，2 人称単数(thou)，あるいは動詞が否定形以外の例で，直説法か仮定法現在の区別がつかない例を示す。

3.1 懇願を表す動詞

懇願を表す動詞として pray, beg, beseech, entreat があげられる。表 3 は，それぞれの動詞がとる構文の割合を示す。pray, beg では，that 節をとる割合が ACI 構文を上回るが，entreat, beseech では，ACI 構文が優勢である。

表 3 懇願を表す動詞の構文

	that 節	that 節 or ACI	ACI	計
pray	24	5	8	37
entreat	4	0	22	26
beseech	8	4	25	37
beg	3	0	1	4
計	39	9	56	104
	(37.5%)	(8.7%)	(53.8%)	

次に that 節内の動詞形を見ると，法助動詞構文が仮定法現在をやや上回っている。

表 4　that 節内の動詞形

	仮定法現在	動詞形不明	直説法現在	法助動詞	計
pray	13	2	0	9	24
entreat	2	1	0	1	4

beseech	1	0	0	7	8
beg	0	0	0	3	3
計	16	3	0	20	39
	(41.0%)	(7.7%)	(0%)	(51.3%)	

法助動詞の内訳を示した表 5 によると，may, might, will の 3 種類があり，may の占める割合がかなり高い。may, might といった助動詞は should などに比べ直接的でなく，懇願をより丁寧な表現にするために用いられるものと考えられる。

表 5 助動詞

	may	might	will	計
pray	8	1	0	9
entreat	1	0	0	1
beseech	6	1	0	7
beg	1	0	2	3
計	16	2	2	20
	(80.0%)	(10.0%)	(10.0%)	

ACI 構文内の不定詞標識 to の有無については，次の表のとおりである。どの動詞でも to を伴う形が優勢であり，より現代英語に近い傾向が見られる。

表 6　ACI 構文の to の有無

	+to	-to	計
pray	8	0	8
entreat	17	5	22
beseech	24	1	25
beg	1	0	1
計	50	6	56
	(89.3%)	(10.7%)	

ここからは，個々の動詞について考察し，実際の用例を提示する。

pray[7]

[7] pray の主語が 1 人称，目的語が 2 人称の用例が非常に多く，しかも構文の判断が困難である。例えば，以下の用例(ⅰ)は一見 to を伴わない ACI 構文の用例に見える。しかし，否定辞 not を伴う用例(ⅱ)は, not の位置が動詞の前でなく後にあることから ACI 構文でなく命令文であることが分かる。よって(ⅰ)も同様に命令文である可能性

pray は，懇願を表す他の動詞に比べ，ACI 構文に対する that 節の割合が高い。

仮定法現在[8]

(13) but this I *pray*, / That thou *consent* to marry us today. (Rom. 2.3.61-64)

法助動詞構文

法助動詞 9 例のうち 8 例は may である。

(14) Here, father, take the shadow of this tree / For your good host; *pray* that the right *may* thrive. (Lear 5.2.1-2)

that 節 or ACI 構文

(15) Mistress, your father *prays* you *leave* your books, (Shr. 3.1.83)

ACI 構文

(16) And so I *pray* you all *to think* yourselves. (Shr. 2.1.112-113)

entreat

ACI 構文の割合がかなり高い。

仮定法現在

(17) Thy dukedom, I resign, and do *entreat* / Thou *pardon* my wrongs. (Temp. 5.1.118-119)

法助動詞構文

(18) And, sir, tonight / I do *entreat* that we *may* sup together. (Oth. 4.1.261-262)

ACI 構文

(19) They did *entreat* me *to acquaint* her of it. (Ado 3.1.40)

beseech

entreat と同様，ACI 構文が that 節を上回る。

も考えられる。
(i) Enough of this, I pray thee hold thy peace. (Rom. 1.3.50)
(ii) I pray thee chide me not. (Rom. 2.3.85)
I pray you, I pray thee といった句は please に近い意味で用いられるものと解釈でき，考察対象には含めなかった。

[8] OED の定義にもあるように God, heaven が懇願の対象であることが多い。
Pray God he *keep* his oath! (TN 3.4.310)
Pray heav'n he *prove* so when you come to him! (TGV 2.7.79)

仮定法現在

that 節をとる 8 例中，仮定法現在をとる 1 例は，that 節内に動詞を 2 つ伴う[9]。

(20) I do *beseech* you, / By all the battles wherein we have fought, / By th' blood we have shed together, by th' vows / We have made to endure friends, that you directly / *Set* me against Aufidius and Antiates, / And that you *not delay* the present, but, / Filling the air with swords advanc'd and darts, / We prove this very hour. (Cor. 1.6.55-62)

法助動詞構文

法助動詞をとる 7 例中 6 例は，次の引用例のように may，残り 1 例は might である。

(21) But I *beseech* your Grace that I *may* know / The worst that may befall me in this case, / If I refuse to wed Demetrius.　(MND 1.1.62-64)

ACI 構文

I beseech thee pardon me. のように to なし ACI 構文と判別できる例は以下の 1 例のみである。命令法を従える場合であれば，否定辞は(23)のように動詞の後に続く。

(22) I do *beseech* you, either *not believe* / The envious slanders of her false accusers; / Or, if she be accused in true report, / *Bear* with her weakness, which, I think proceeds / From wayward sickness, and no grounded malice. (R3 1.3.25-29)

(23) I *beseech* thee, youth, / *Put* not another sin upon my head, / By urging me to fury: O be gone! (Rom. 5.3.61-63)

ACI 構文の to の有無に関しては，以下の例のように同じ環境で交替可能である。

(24) But I *beseech* your Grace *pardon* me, (Ado. 2.1.329-330)

(25) I do *beseech* your Grace *to pardon* me. (R2 5.2.60)

beg

that 節の例は全て法助動詞構文で，その内訳は will が 2 例 may が 1 例である。

法助動詞構文

(26) on my knees I *beg* / That you'*ll* vouchsafe me raiment, bed, and food. (Lear 2.4.147-148)

(27) *Beg* that thou *mayst* have leave to hang thyself:　(Merch. 4.1.360)

ACI 構文

(28) I do but *beg* a little changeling boy, / *To be* my henchman. (MND 2.1.120-121)

[9] 2 番目の動詞が否定形であることから仮定法現在と特定することができる。

以上，Shakespeare 劇における「懇願」を表す動詞の用法について見てきたが，that 節をとるもののうち, 命令的仮定法をとる例は pray の 13 例が最も多く, あとは, beseech, entreat にそれぞれ 1 例ずつのみで全体的にそれほど多くはない。また法助動詞構文に関しては, 全体的に may, might が多く用いられており，表現を直接的でない丁寧なものにしている。

ACI 構文は，beseech, entreat では that 節を上回っており，to の有無に関しては，to を伴う形が優勢である。

3.2 命令を表す動詞

bid, charge, command, enjoin の用法について考察していく。take order 以外の動詞では，いずれにおいても，ACI 構文が that 節をかなりの割合で上回る。bid においては，that 節をとる例は例外的といえる。take order の例は 1 例のみで，動詞形は仮定法現在であった。

表 7 命令を表す動詞の構文

	that 節	that 節 or ACI	ACI	計
bid	1	0	182	183
charge	4	0	14	18
command	3	0	12	15
enjoin	0	0	2	2
take order	1	0	0	1
計	9	0	210	219
	(4.1%)	(0%)	(95.9%)	

that 節内の動詞形に関しては，法助動詞構文の割合が最も高く，仮定法現在は 2 例しか見られない。

表 8 that 節内の動詞形

	仮定法現在	動詞形不明	直説法現在	法助動詞	計
bid	0	0	0	1	1
charge	1	2	0	1	4
command	0	0	0	3	3
enjoin	0	0	0	0	0
take order	1	0	0	0	1
計	2	2	0	5	9
	(22.2%)	(22.2%)	(0%)	(55.6%)	

ACI 構文についてみると，charge, command, enjoin では，懇願を表す動詞と同様，to を伴う形が優勢であるが，bid は例外的で to を伴わない形が圧倒的に多い。

表 9 ACI 構文の to の有無

	+to	-to	計
bid	2	180	182
charge	9	5	14
command	6	6	12
enjoin	2	0	2
計	19	191	210
	(9.0%)	(91.0%)	

ここからは，個々の動詞を考察する。

bid

ACI 構文が圧倒的に多いが，例外的に法助動詞構文の例も 1 例観察された。

法助動詞構文

(29) Obedience *bids* I *should* not bid again. (R2 1.1.64)

ACI 構文

(30) *Bid* her *send* me presently a thousand pound. (R2 2.2.91)

to を伴う形の例は，受動態と能動態それぞれ 1 例ずつ見られた。

(31) Well, I perceived he was a wise fellow and had a good discretion that, being *bid to ask* what he would of the king, desired he might know none of his secrets. (Per. 1.3.3-5)

(32) He says he will return incontinent, / And hath commanded me to go to bed, / And *bid* me *to dismiss* you. (Oth. 4.3.12-14)

charge

ACI 構文が that 節を上回っている。that 節については，仮定法現在と法助動詞構文の例が見られた。

仮定法現在

(33) One word more: I *charge* thee / That thou *attend* me. (Temp. 1.2.453-454)

法助動詞構文

(34) For your physicians have expressly *charg'd*, / In peril to incur your former malady, / That I *should* yet absent me from your bed. (Shr. Ind. 2.121-123)

ACI 構文

(35) I *charge* you on your souls *to utter* it. (Ado 4.1.13-14)

command

ACI 構文が優勢である。that 節は 3 例見られ，いずれも法助動詞構文である。

法助動詞構文

(36) I *commanded* the sleeves *should* be cut out, and sew'd up again, and that I'll prove upon thee, though thy little finger be arm'd in a thimble. (Shr. 4.3.145-148)

ACI 構文

(37) necessity / *Commands* me *name* myself. (Cor. 4.5.56-57)

enjoin

全体で 2 例しか観察されないが，いずれも ACI 構文の例であった。

(38) Last night she *enjoin'd* me *to write* some lines to one she loves. (TGV 2.1.87-88)

take order

仮定法現在の例が 1 例のみ見られる。

(39) Some one *take order* Buckingham *be* brought / To Salisbury, the rest march on with me. (R3 4.4.537-538)

命令的仮定法の例は take order の 1 例のみであった。他の動詞は that 節の場合，すべて法助動詞 should を伴う。全体的に ACI 構文が that 節を上回っている。to の有無については，command で同数，charge, enjoin では to を伴う形が優勢である。bid は例が最も多いが，to を伴わない ACI 構文がそのほとんどを占める。

3.3 勧告を表す動詞

ここでは，現代英語の'take care', 'make sure'の意味を表す動詞，あるいは動詞句を扱う。これらの動詞は常に that 節を従え，ACI 構文の例は皆無である。また，いずれも命令文中で用いられた例であり，that 節内の動詞は仮定法現在が多く用いられる。look, see, be sure, have a care, take heed の例が見られる。

表 10　that 節内の動詞形

	仮定法現在	動詞形不明	直説法現在	法助動詞	計
look	8	3	0	0	11
see	3	0	0	0	3
be sure	1	0	0	0	1
have a care	2	0	0	0	2
take heed	3	0	0	0	3
計	17	3	0	0	20
	(85.0%)	(15.0%)	(0%)	(0%)	(100%)

look

仮定法現在

(40) And *look* thou *meet* me ere the first cock crow. (MND 2.1.267)

動詞形不明

(41) For you, fair Hermia, *look* you *arm* yourself / To fit your fancies to your father's will; (MND 1.1.117-118)

以下に，see, be sure, have a care, take heed の例をあげる。

(42) I charge you *see* that he *be* forthcoming. (Shr. 5.1.93)

(43) Villain, *be sure* thou *prove* my love a whore; (Oth. 3.3.359)

(44) only *have a care* that your bills *be* not stol'n. (Ado 3.3.41)

(45) *take heed* he *hear* us not,　(Shr. 3.1.43-44)

現代英語ならば，勧告を表す動詞として，ensure, make sure, see (to it), take care があげられ，これらは通常，直説法現在形をとる（Quirk *et al*, 1985: 1008）。

(46) I'll *see* that nobody *disturbs* you. [also *will disturb*]

(47) *Take care* she *doesn't* fall.

しかしながら，表 10 からも分かるように，Shakespeare の英語では仮定法現在が多く用いられ，that 節内の状態がこれからもたらされるべきであることを示すためであると思われる。

3.4 その他

ここでは，以上のどの意味分野にも該当しない例を考察する。いずれも通常直説法現在をとる動詞で，仮定法現在をとるケースは例外的といえる。まず，say, consent, forbid について仮定法現在の現れる環境とそれに代わる表現についてまとめる。その後，通常は直説法現在をとるが，例外的に仮定法現在の例が数例観察された hope, wish, prove, swear, think, seem, will is の用例をあげる。

say

動詞 say の that 節内で仮定法現在が用いられるのは，常に条件・仮定を意味する場合で，これは，条件を表す if 節が仮定法現在をとりうるのと同じ意味的環境といえる。以下の例が観察された。

(48) *Say* that she *rail*, why then I'll tell her plain / She sings as sweetly as a nightingale; / *Say* that she *frown*, I'll say she looks as clear / As morning roses newly wash'd with dew; / *Say* that she *be* mute, and will not a speak a word, / Then I'll commend her volubility. / And say she utterth piercing eloquence; (Shr. 2.1.170-176)

(49) *Say* that she *be*; yet Valentine thy friend / Survives; (TGV 4.2.108-9)

consent

consent は，動詞，名詞ともに that 節を従える。動詞において仮定法現在が 1 例観察された。不定詞を伴う例も多い。

表 10　consent (*v*.) の構文

that 節	ACI	that 節 or ACI	consent + to V
4	0	0	7

表 11 that 節内の動詞形

仮定法現在	直説法現在	法助動詞	動詞形不明
1	0	3	0

仮定法現在

(50) Do not *consent* / That Antony *speak* in his funeral. (JC 3.1.232-233)

法助動詞構文

全て法助動詞 shall が用いられている。

(51) Do not *consent* we *shall* acquaint him with it, / As needful in our loves, fitting out duty? (Ham. 1.1.172-173)

名詞の場合，that 節を伴う 2 例と不定詞を伴う 3 例が観察された。

表 12　consent (*n*.) の構文

that 節	consent + to V
2	3

that 節は，法助動詞 should, shall が 1 例ずつ観察された。

(52) They would have stol'n away, they would, Demetrius, / Thereby to have defeated you and me: / You of your wife, and me of my consent, / of my *consent* that she *should* be your wife. (MND 4.1.156-159)

(53) Say, have I thy *consent* that they *shall* die? (R3 4.2.23)

forbid

表 14 からも分かるように that 節を従える場合，法助動詞構文をとる例が最も多い。法助動詞は，全て should の例である。

表 13 動詞 forbid の構文

that 節	ACI	that 節 or ACI	forbid + to V
9	4	0	1

表 14 that 節の動詞形

仮定法現在	直説法現在	法助動詞	動詞形不明
1	0	7	1

仮定法現在

(54) Fortune *forbid* my outside *have* not charm'd her! (TN 2.1.18)

法助動詞構文

(55) God *forbid* it *should* be so. (Ado 1.1.217)

不定詞

(56) *Forbid* the sun *to enter*,　(Ado 3.1.9)

ここからは，prove, swear, think の用例をあげる。いずれも仮定法現在を伴うのは稀なケースで，数例しか観察されない。

prove

仮定法現在の例は 3 例で，そのうち 2 例は命令文の中で用いられている。(57), (58)において仮定法現在をとるのは，prove の意味的性質というよりは，むしろ命令文であるためではないかと推測される。

(57) Make me to see't; or (at least) so *prove* it / That the probation *bear* no hinge nor loop / To hang a doubt on; (Oth. 3.3.364-365)

(58) O, *prove* true, / That I, dear brother, *be* now ta'en for you! (TN 2.2.18)

(59) If it be *proved* against an alien, / That by direct or indirect attempts / He *seek* the life of any citizen, / The party 'gainst the which he doth contrive / Shall seize one half his goods; (Merch. 4.1.349-353)

swear

仮定法現在は，*The Merchant of Venice* からの以下の 用例(60)においてのみ観察された。Shakespeare 作品において動詞 swear が that 節を従える例は多く観察されるが，that 節内の動詞は通常直説法現在をとる。本例において仮定法現在が用いられるのは，swear のもつ意味的性質のためとは考えにくく，むしろ though を伴う譲歩節内にあり，動詞 swear 自体が仮定法現在であるためではないかと考えられる。

(60) And other of such vinegar aspect / That they'll not show their teeth in way of smile / Though Nestor *swear* the jest *be* laughable. (Merch. 1.1.52-56)

think

think が that 節をとる例はかなり多くあるが，仮定法現在をとるものは 8 例に限られる。仮定法・直説法・法助動詞構文の意味による使い分けは見られない。しかし，以下の *The Tragedy of Othello, the Moor of Venice* からの引用は，仮定法と直説法のもつ意味を効果的に対比させた例である。仮定法は迷いや疑いを，直説法は確信を表し，(61)は両者を並列させることで，Othello が妻 Desdemona の不貞を疑う心の葛藤を表現している。

(61) I *think* my wife *be* honest, and think she *is* not; (Oth. 3.3.384)

ここからは，通常は直説法現在をとる動詞であるが，例外的に仮定法現在の例が数例観察された hope, wish, seem, will is の用例をあげておく。

hope

(62) I *hope* he *be* in love. (Ado 3.2.17)

wish

(63) I do *wish* / That your good beauty *be* the happy cause / Of Hamlet's wildness. (Ham. 3.1.37-39)

(64) Say that I *wish* he never *find* more cause / To change a master. (Ant. 4.3.15-16)

seem

(65) Me *seemth* good that, with some little train, / Forthwith from Ludlow the young Prince *be* fet (=fetched) / Hither to London, to be crown'd our king.　(R3 2.2.120-122)

will is

(66) Our *will* is Antony *be* took alive; / Make it so known. (Ant. 4.6.2-3)

3.5 形容詞が従える節

better, best, fit, meet が that 節を従える場合の動詞形は以下の比率を示す。

表 15 形容詞が従える that 節内の動詞形

	仮定法現在	動詞形不明	法助動詞構文	計
better	1	0	0	1
best	1	1	0	2
fit	2	0	0	2
meet	2	3	3	8
計	6	4	3	13
	(46.2%)	(30.8%)	(23.0%)	

表 15 からも分かるように，全体としては仮定法現在の割合が高い。直説法現在は，better において 2 例見られた。法助動詞構文は，meet においてのみ観察され，法助動詞は 3 例とも should である。

仮定法現在

(67) *'Tis better* that the enemy *seek* us; (JC 4.3.199)

法助動詞構文

(68) In such a time as this it is not *meet* / That every nice offence *should* bear his comment. (JC 4.3.7-8)

that 節を伴う形容詞節の中で，主観的態度，評価，感情を表すものは，現代英語では常に法助動詞 should を伴い, Huddleston and Pullum (2002: 1001)は,「態度を表す should (attitudinal *should*)」，Jespersen (1933: 287)は，「感情の should (emotional *should*)」と名づけている。

(69) It is wrong that a judge *should* sit while his conduct is under investigation.

この用法の should は現代英語では，通常仮定法現在と交替できないが，本調査では仮定法現在を伴う例が 1 例観察された。次の dangerous の例を参照されたい。

It's dangerous

(70) Now, sir, her father counts it *dangerous* / *That* she *do* give her sorrow so much sway; (Rom. 4.1.9-10)

3.6 中英語との比較

ここでは，特に例が多く観察された懇願・命令を表す動詞について，若干ながら後期中英語における傾向を概観する。Kenneth Sisam により編集された 14 世紀の詩文選 *Fourteenth Century Verse & Prose* (Oxford University Press, 1921)を資料として用いて，パイロットスタディーを行った[10]。

3.6.1 懇願を表す動詞

懇願を表す動詞として，pray, beseech が観察された。

表 16 動詞形（懇願を表す動詞）

	仮定法現在	動詞形不明	直説法現在	法助動詞	ACI 構文	小計
pray	2	0	0	1	0	3
beseech	0	0	0	2	0	2
計	2	0	0	3	0	5

いずれの動詞も例が少ないが，pray は，仮定法現在・法助動詞構文・命令法が，beseech は，法助動詞構文が観察された。用いられている法助動詞は，should が 1 例，would が 2 例である。may, might が目立った初期近代英語とは違った傾向が観察された。

(71) Y *pray* þat þou me *telle* now.　(Or. 534)　[仮定法現在]

(72) 'ich *biseche* þe / þatow *woldest* ȝiue me / þat ich leuedi, briȝt on ble,　(Or. 453-5)　[法助動詞構文]

3.6.2 命令を表す動詞

[10]調査したテクストは，同詩文選に収められた以下の作品からの抜粋である。
Or. =*Sir Orfeo*, Rich. = *Richerd Rolle of Hampole*, (*The Nature of the Bee*, *The Seven Gifts of the Holy Ghost*), GGK=*Sir Gawayne and the Grene Knight*, Pearl=*The Pearl*, Wiclif=*John Wiclif* (A=*The Translation of the Bible*, B=*Of Feigned Contemplative Life*), Gower=John Gower (A=*Ceix and Alceone*, B=*Adrian and Bardus*), Poem=*Miscellaneous Pieces in Verse* (*Now springs the spray*, *Spring*, *Alysoun*, *The Irish Dancer*, *The Maid of the Moor*, *The Virgin's Song*, *Judas*, *The Blacksmith*, *Rats away*), H.H.=*The York Play of Harrowing of Hell*, Noah=*The Towneley Play of Noah*

命令を表す動詞として bid, command, charge, ordain が観察された。

表 17 動詞形（命令を表す動詞）

	仮定法現在	動詞形不明	直説法現在	法助動詞	ACI 構文	小計
bid	2	1	0	2	7	12
command	1	1	0	0	2	4
ordain	0	0	0	2	0	2
charge	0	0	0	0	4	4
計	3	2	0	4	13	22

bid が最も多く観察され，ACI 構文をとる割合が高い。charge は ACI 構文のみ，ordain は法助動詞構文のみが観察されている。法助動詞は，shall が 1 例，should が 3 例用いられている。命令を表す動詞においては，初期近代英語と似た傾向が観察された。

(73) Noe, My freend, I thee *commaunde*, from cares the to keyle, / A ship that thou *ordand* of nayle and bord ful wele. (Noah. 118-19) [仮定法現在]

(74) Sche *bad* Yris hir messagere / To Slepes hous that <sc>he *schal* wende, / And *bidde* him that he *make* an ende, (Gower A 46-48) [仮定法現在と法助動詞構文の並列]

(75) Also þes blynde ypocritis alleggen þat Crist *biddiþ* vs *preie* euermore, and Poul *biddiþ* þat we *preie* wiþoute lettynge, and þan we prestis may not preche, as þei feynen falsly.
(Wiclif B 79-81) [ACI 構文と that 節（動詞形不明）の並列]

(76) And Deuyll, I *commaunde* Þe *go* doune / Into thy selle where Þou schalte sitte.
(H.H. 341-342) [ACI 構文]

４．結び

Shakespeare の英語において, 命令的仮定法を最も高い確率でとるのは, look, see, take heed などをはじめとする「勧告」を表す動詞であった。命令的仮定法を用いることにより，ある状態がもたらされるべきであることをより強く表現していると考えられる。「懇願」を表す動詞においても，命令的仮定法は見られたが，同様に法助動詞構文の例も多かった。法助動詞は may, might がほとんどであり，懇願を直接的な表現にすることを避け，語調を和らげているものと推測される。「命令」を表す動詞では, ACI 構文が that 節より優勢である。that 節をとる場合は，命令的仮定法の例は稀で，法助動詞構文が目立った。

法助動詞について見ると,「懇願」を表す動詞では, may, might が優勢であったのに対し,「命令」を表す動詞では should が優勢であった。

目次ページに戻る。

参考文献

Ando, S. 1976. *A Descriptive Syntax of Christopher Marlowe's Language.* Tokyo: University of Tokyo Press.

Fowler, H.W. 1926. *A Dictionary of Modern English Usage.* Oxford: Clarendon Press.

---. 1996. *A Dictionary of Modern English Usage,* 3rd ed. Revised by R.W.Burchfield Oxford: Clarendon Press.

Harsh, W. 1968. *The Subjunctive in English.* Alabama Linguistic & Philological Series 14. Alabama: University of Alabama Press.

Huddleston, R. and G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

James, F. 1986. *Semantics of the English Subjunctive.* Vancouver: University of British.

Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar.* London: G.Allen & Unwin.

---. 1933. *Essentials of English Grammar.* London: G.Allen & Unwin.

---. 1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles.* vol. 7. London: G. Allen & Unwin.

Manabe, K. 1989. *The Syntactic and Stylistic Development of the Infinitive in Middle English.* Fukuoka: Kyushu University Press.

Mustanoja, T. F. 1960. *A Middle English Syntax.* Pt. 1. Parts of Speech. Helsinki: Société Néophilologique.

OED=*The Oxford English Dictionary,* 2nd ed. Oxford: Clarendon Press.

Övergaard, G. 1995. *The Mandative Subjunctive in American and British English in the 20th Century.* Uppsala: Uppsala University Press.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Ukaji, M. 1976. "Deletion of the complementizer *to* in Early Modern English." SEL 4, 67-77.

Visser, F. Th. 1963-73. *An Historical Syntax of the English Language.* 4vols. Leiden: E. j. Brill.

Zeitlin, J. 1908. *The Accusative with Infinitive and some Kindred Constructions in English.* New York: Columbia University Press.

小野茂・中尾俊夫『英語史 I』＜英語学大系第 8 巻＞（大修館書店，1980）

小野茂・中尾俊夫『英語史 II』＜英語学大系第 9 巻＞（大修館書店，1972）

荒木一雄・宇賀治正朋『英語史 IIIA』＜英語学大系第 10 巻＞（大修館書店，1984）

目次ページに戻る。

４．ロシア語

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

「нельзя не＋動詞不定詞」という構文における動詞について
― 既存コーパスからのデータに基づいた再解釈 ―

阿出川　修嘉
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

0. はじめに

現代ロシア語においては，アスペクトの意味的カテゴリーが高度に文法化されており，その意味を担う「体」という文法的カテゴリーを全ての動詞が持っている。このことは，常にこのカテゴリーが他の文法的カテゴリーと相互に影響し合うということを意味している。

そして，この文法的カテゴリーは，動詞が不定詞[1]の形態の場合にも保持される性質のものである。この性質のために言語使用に際して問題となってくるのは，特定の述語と動詞不定詞が結びつく場合の体の形態の選択である。

一般に，述語[2]нельзя は，「否定辞 не＋動詞不定詞」の形態と結びつき，「～せざるをえない」，「～しないわけにはいかない」，「～しないではいられない」というモダリティの意味を表わす。その際の動詞不定詞の「体」の形態に関して，完了体が多いということが Forsyth によって指摘されている（Forsyth 1970: 262-263）。

彼によれば，『非常にしばしば，不可避の現象というのは一回の動作なので，完了体の動詞が不完了体の動詞よりも普通（Very frequently the unavoidable phenomenon is a single action, so that perfective verbs are more common than imperfective verbs,…【後略筆者】）』であるが，それは常にではなく，『持続する状態や反復動作の場合には，不完了体動詞不定詞も用いられる（In the case of continuous states or repeated actions the imperfective infinitive is used）』のであるという（Forsyth 1970: 262）。

しかし，この Forsyth による「定式化」は，より多くの実例を踏まえての数量的な

[1] 原語の‘инфинитив’に対しては，ロシア語学においては「不定形」という術語が通常採用されているが，本稿ではより一般的であると思われる「不定詞」という術語を用いている。
[2] これはロシア語学ではいわゆる「無人称述語」という術語で呼ばれているものだが，本稿で対象としているのは全て無人称文であるため，単に「述語」としている。

裏付けという観点からすると不足のあるものとなっており，また‘нельзя не’と結びつく動詞不定詞の語彙という観点からの考察も欠けている。

本稿は，既存のコーパスからのデータを用いて，この Forsyth の定式化が，実際の言語使用を見る上でどの程度説明力があるものなのかを確かめ，また同時に，異なった角度からこの構文に関する再解釈を試みるものである。

1. 現代ロシア語における文法的カテゴリーとしての「体」

1.1. 文法的カテゴリーとしての「体」

現代ロシア語においては，動詞は「体（вид）」という文法的カテゴリーを持ち，全ての動詞が「完了体（совершенный вид）」あるいは「不完了体（несовершенный вид）」のどちらかに属しているとされる。

この「体」というカテゴリーは，『ある状況の内的な時間構造の様々な把握の仕方（differnt ways of viewing the internal temporal constituency of a situation）』（Comrie 1976: 3）という，「アスペクト」の意味カテゴリーが，動詞の形態的特徴を伴って表わされる，ロシア語（及び多くのスラブ語）に特有の文法現象として広く知られるところである。

多くの場合，完了相（Perfective）の意味は完了体が担っており，一回の動作，単一の出来事を提示する際には，通常完了体が用いられる。それに対して，未完了相（Imperfective）の意味は不完了体が担っている。したがって，動作の過程や反復する動作などは多くの場合不完了体を用いて表わされる。

具体的な例を見てみよう：

a. Он <u>открыл</u>【完了体・過去形・単数】окно.

b. Он <u>открывал</u>【不完了体・過去形・単数】окно.

a.の例では，完了体が用いられており，これは過去のある一時点において，「開ける」という動作が一回完了したことを示す（訳：「彼は窓を開けた」）。

それに対して，b.の例では，複数の解釈が可能となる。過去のある一時点において当該動作が進行中であるという，「過程」を表わしているという解釈（「彼は【その時】窓を開けるところだった」）や，あるいはまた，過去のある一定期間における反復する動作を表わしているという解釈も出来（「彼は【何度も】窓を開けていた」），これは更に文脈によっては過去における習慣的動作を表わすことにもなる。

そして，この動詞の体の形態は，今回の考察の対象となる不定詞の場合にも保持され，上記の動詞の場合にはそれぞれ不定詞の形態は‘открыть（完了体）’，‘открывать（不完了体）’となる。

1.2. 動詞の語彙的意味，アスペクトの意味，「体のペア」

このように，現代ロシア語においてはアスペクトという意味カテゴリーが高度に文法化し動詞形態論にまで浸透している。そのため，伝統的なロシア語アスペクト論では，動詞の意味を考える際には，動詞の「語彙的意味（лексическое значение）」と，「アスペクト」を表わす文法的意味としての「体の意味（видовое значение）」とを便宜的に分けて考える[3]。ロシア語の動詞の意味は，語彙的意味と体の意味の双方からなっていると考えられるのである。

そして更に，語彙的意味は同一で，体の意味に関してのみ差異がある，二つの形態は，「体のペア（видовая пара）」という概念の下にまとめられる。この「ペア」という概念は，辞典中の動詞の項目の記述に際しても，対応する体を持つ動詞が見出し語と並べて記述されるほど，ロシア語文法の中では定着している。

例えば，上の例で用いた，‘открыть’と‘открывать’という形態は，語彙的意味（「開ケル」）は共通で，アスペクト的意味のみが異なっていると考えられるので，通常体のペアとして認められる[4]。

この「体のペア」として組み合わされる二つの形態は，この‘открыть – открывать’のような形態論的な共通性を有しているものが主だが，‘взять – брать（取ル）’や‘сказать – говорить（話ス，言ウ）’などのように補充法（супплетивизм）により体のペアが設定されている場合もある。

1.3. Vendler の動詞分類と体の形態との関係

Vendler（1967）の動詞分類によって提示され，その後ロシア語のアスペクト論にも大きな影響を与えた，「活動」，「達成」，「到達」，「状態」といった語彙的アスペクトとロシア語動詞の体のカテゴリーとの関係を簡潔に述べておこう。

この動詞分類のロシア語動詞との比較，適用については，Гловинская（2001），Падучева（1990, 1996, 1998）などによる研究において詳細に検討がなされている。

ここではГловинская（2001）にならって，語彙的アスペクトと体の形態との関係について述べることにする。

１）『活動[5]（activity）』

---

[3] Гловинская（1982）は，動詞の語彙的意味と体の意味とは融け合っていると主張し（cf. 1982: 47-54），ここで述べた従来の立場とは一線を画している。

[4] ここでは典型的な例を用いて最も基本的な説明を行なっている。しかしながら，この２つの形態が同一の語の変化形とみなすのか（つまり語形変化的なものなのか），異なる語であるとみなすのか（つまり語分類的なものなのか）については学者により諸説提案されており，最終的な解決をまだ見ていない。この問題に関する簡潔な解説は Зализняк и Шмелев（2000: 14-16）を参照されたい。

[5] それぞれの術語の日本語訳は影山（1996）によっている。同書の Vendler の分類に関する記述も参照（影山 1996: 41-42）。

これは，時の中において進行する「過程」であり，連続する「相（phase）」からなっているものを指す。Vendler（1967）の挙げている例によれば，run, walk, swim, push a cart, drive a car などがそれらを表わす動詞句であるとされる（1967: 107）。また，次の『達成（accomplishment）』とは異なり，「終結点（terminal point）」を持たないとされる。

この「活動」が表わされる場合には，ロシア語では，不完了体動詞が用いられる。писать（書ク）, бежать（走ル）, петь（歌ウ）, купаться（泳グ）, идти(дождь)（雨ガ降ル）, усиливаться（強マル）, увеличиваться（増大スル）, повышаться（高マル）等の動詞がこれに分類される。

また，次に述べる「達成」とは異なり，動作の完遂に要する期間を表わす‘за два часа（２時間で，２時間かけて）’という副詞句表現とは結合できない。

２）『達成（accomplishment）』

これは，それ自体が「終結点」を持っているものであり，Vendler（1967）の挙げている例によれば, paint a picture, make a chair, build a house, write a novel, read a novel, deliver a sermon, give a class, attend a class, play a game of chess, grow up, push a cart to the supermarket, recover from illness, get ready for something（1967: 107）などがこれに該当する。

これはロシア語の場合，動詞の形態は不完了体，完了体の双方によって表わされうる。完了体の形態はこの動作の完遂を表わし，不完了体の形態は，その完遂にいたるプロセスの一部分を表わす。писать – написать письмо（手紙ヲ書ク）, рисовать – нарисовать кружочек（円ヲ描ク）, строить – построить дом（家ヲ建テル）, читать – прочитать письмо（手紙ヲ読ム）, открывать – открыть окно（窓ヲ開ケル）等のような動詞がこの分類に当てはまる（ここで挙げた例ではいずれも，最初の形態が不完了体動詞である）。

また，上の「活動」とは異なり，‘за два часа’という表現と結合できる（例文は Гловинская 2001 より；例文の頭の ＊ は非文を表わす）。

*Я бежал【不完了体・過去形・単数】за два часа.

*Я рисовал【不完了体・過去形・単数】за три минуты.

Я написал【完了体・過去形・単数】письмо за два часа.

私は２時間でその手紙を書き終えた。

Я нарисовал【完了体・過去形・単数】кружок за три минуты.

私は３分で円を描き終えた。

３）『到達（achievement）』

これは，動詞それ自体は，その状況が完遂した場合を提示している。つまり，英語においては現在進行形によって，その状況達成へのプロセスを提示することが出来ない（‘He reached a summit.’に対して‘He is reaching a summit.’は「過程」を表さない)。そして何らかの状態の変化を伴うものである。

この「到達」はロシア語では，完了体動詞によって表わされる。заметить（気付ク）, найти（見ツケル）, прийти（到着スル）, достигнуть（到達スル）といった動詞がこの分類に当てはまる。

これは，次の「状態」とは異なり，‘долго（長く，長いこと)’等の持続期間を表わす副詞句とはともに用いられない。

*Я долго находил【不完了体・過去形・単数】письмо.

*Я два часа приходил【不完了体・過去形・単数】к нему.

その一方で，ある時点を表わす副詞句，例えば‘в тот момент（その時）’，‘в два часа（２時に）’などと結びつくことが出来る。

В три часа я достиг【完了体・過去形・単数】вершины.

３時に私は頂上に到達した。

Я заметил【完了体・過去形・単数】его ровно в два часа.

私はちょうど２時に彼に気付いた。

４）『状態（states)』

これは，不完了体動詞によって表わされる。знать（知ッテイル）, любить（愛シテイル）, верить（信ジテイル）, скучать（寂シク思ウ）, тосковать（塞イデイル）, болеть（痛ム）, висеть（掛カッテイル）, стоять（立ッテイル）, находиться（アル，存在スル）, считать（ミナス，思ウ）などの動詞がこの分類に当てはまる。

これは, долго 等の持続期間を表わす副詞句とはともに用いることが可能である：

Я знала【不完了体・過去形・単数】его два года.

私は２年間彼を知っていた。

Я много лет люблю【不完了体・現在形・単数】его.

私は長年彼のことを愛している。

その一方で，ある時点を表わす副詞句とはともに用いることは出来ない。

*В три часа я знал (любил)【不完了体・過去形・単数】его.

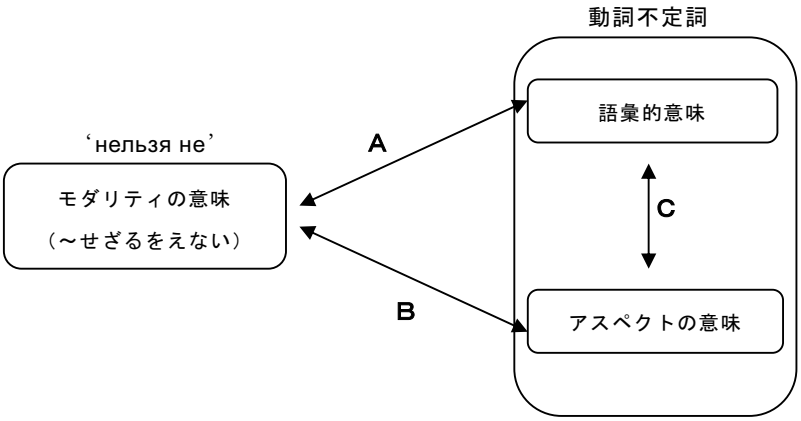
目次ページに戻る。

2. 「нельзя не＋動詞不定詞」構文の意味構造

これらを踏まえた上で，今回対象とする‘нельзя не＋動詞不定詞’という構文の意味構造を考えてみることにしよう。

この構文においてお互いに影響しあっているのは，‘нельзя не’という形式が担っている「～せざるをえない」というモダリティの意味，動詞不定詞の語彙的意味，そして同じく動詞の持つアスペクトの意味（体の意味）の３つであると考えられる。

これらの相関関係を模式的に表わすと以下のようになる。Ａ，Ｂ，Ｃそれぞれの矢印はそれぞれの意味要素がお互いに相関関係にあることを表わしている。



これを見ると，冒頭に引用した Forsyth の記述は，上記の３つの相関関係のうちの，Ｂの関係に注目した説明であるということが分かる。

以下では，コーパスからのデータを用い，Forsyth が言及しなかったＡの関係（モダリティの意味と動詞の語彙的意味との相関関係）とＣの関係（動詞の語彙的意味とアスペクトの意味との相関関係）に注目しながら考察を加えていくことにする。

また，以下本稿ではこの「нельзя не＋動詞不定詞」という結合を‘нельзя не＋Inf’という略記で代表させることにする。

3. 本研究において使用したコーパス及びデータについて

3.1. チュービンゲン大学のコーパスシステム

本研究で資料の収集の為に用いたコーパスは，チュービンゲン大学のサイト内で提供されているもの[6]を利用した。

言語研究において言語資料の総体としてのコーパスの導入が進んでいる英語圏等

[6] 次のＵＲＩを参照されたい：http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html

で提供，活用されているコーパスと比較すると，コーパスのシステムそれ自体としては不備な点が数多くあるが，ロシア語を対象としたもので且つ一般に利用が可能なものとしては，唯一のものと位置付けることが出来る[7]。

このサイトにおいては，その性格ごとに，「現代語コーパス」，「２０世紀文学作品コーパス」，「１９世紀文学作品コーパス」と大まかに分類し提供されており，それぞれを構成するのは以下のコーパスである。

【現代語コーパス】

- ウプサラコーパス：1988～89 年の新聞・科学文献からのテキスト，1960～88 年の文学作品等からのテキスト[8]，総語数 100 万語
- インタヴューコーパス：1996 年から 2002 年の各種インターネット上のサイトのインタヴュー記事からのテキスト，総語数 288423 語
- 「アガニョーク」: 同名雑誌（Огонек）のインターネット版の 1996～2002 年のインターネット上の記事のテキスト

【２０世紀文学作品コーパス】

- 「マリーニナ（А.Маринина）」
- 「ブルガーコフ散文（М. Булгаков: Проза）」
- 「ブルガーコフ選集（М. Булгаков: Собранное）」
- 「ルィバコフ（А.Рыбаков）」
- 「イリフ，ペトロフ（Ильф и Петров）」
- 「ストルガツキイ兄弟（А. & Б. Стругацкие）」
- 「推理小説（Детективы）」

【１９世紀文学作品コーパス】

- 「レフ・トルストイ（Л.Толстой）」
- 「トゥルゲーネフ（И. Тургенев）」
- 「ドストエフスキー（Ф. Достоевский）」
- 「レスコフ（Н. Лесков）」:

いずれのコーパスも文法情報を表わすいわゆる「タグ」が付加されていないため，純粋な文字列検索のみが可能で，文法情報を加えての検索は出来ない。

また，これらのうちいくつかのコーパスには，現時点（2004 年 2 月現在）で不備な

[7] なお，このコーパスの詳細については小林（2003）も参照されたい。
[8] ウプサラコーパス（The Uppsala Russian Corpus）の概要については，ウプサラ大学のホームページ（http://www.slaviska.uu.se/ryska/index.html）からも情報を得ることが出来る。

点があり，データとして使用できないものがある[9]。

3.2. 今回使用したコーパス，データの採集方法

今回の調査では，上記のうち，ウプサラコーパス，インタヴューコーパス，「アガニョーク」コーパス，「マリーニナ」，「ストルガツキイ兄弟」，「推理小説」のそれぞれのコーパスからのデータを採用した。

これは，現在用いられているロシア語を観察するという目的を第一に置いたためであり，そのため今回は２０世紀半ば以降に書かれたと判断できるデータを用いることにした。その基準から１９世紀の文学作品からのデータは採用できないと判断し今回は対象から除外した。またルィバコフとイリフ，ペトロフのデータは上に述べた不備があるため，採用しなかった。

これら５つのコーパスにおいて，‘Nelqzja ne’及び‘nelqzja ne’の文字列を検索し[10]，提示された結果の中から，動詞の不定詞を伴っているものを手作業により抜き出した。

4. 数量的結果

4.1. 得られたサンプル数

上記コーパスにおいて当該文字列を検索した結果，全データ数は 159 例で，そのうち‘нельзя не＋Inf’の構文であるとみなせる例は 157 例見られた[11]。

各コーパスごとのサンプル数は以下の通りである（ウプサラコーパスについては新聞テキストと文学テキストを分けて提示してある）。

【コーパスごとのサンプル数】

コーパス名	サンプル総数

[9] 筆者が確認しているものとして，まず「ルィバコフ」のコーパスでは，データとして出力されるテキストの句読法が正確でないものがある。また「イリフ，ペトロフ」のコーパスでは，検索のヒット数は提示されるが，肝心のテキストデータが表示されない。これらの不具合が筆者の環境に限って発生するものなのかどうかについては現在調査中である。

[10] 今回データを収集する際には入力にラテン文字を用いたが，同サイトではキリル文字を入力することによっても検索が可能である。なお，このコーパスシステムにおいては，キリル文字のラテン文字への転写規則が若干特殊なものとなっている。キリル文字の音とラテン文字との対応表は以下のＵＲＩを参照されたい：

http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/translit.html

[11] 当てはまらなかった２例は次のもの：

- Нельзя не только потому, что не предусмотрено никаким законом.（それができないのは，単にそれがいかなる法によっても規定されていないからばかりではない。）

【ウプサラコーパス（新聞テキスト）】

- Хулиганам можно нападать на одного втроем и вчетвером, а интеллигенту в ответ нельзя не то что ударить, но и сплюнуть кровью.（ごろつき達は３人，４人で一人を攻撃することが出来るが，インテリの方は，殴り返すことだけでなく，血を吐きかけることも出来ない。）

【「アガニョーク」コーパス】

ウプサラコーパス（新聞テキスト）	25 例
ウプサラコーパス（文学テキスト）	4 例
インタヴューコーパス	1 例
「アガニョーク」	83 例
「マリーニナ」	0 例
「ストルガツキイ兄弟」	8 例
「推理小説」	36 例
計	157 例

下表が，構文中の動詞不定詞の「体」の形態の別を加えてデータを整理したものである。コーパスごとのサンプル数とともに示すと，以下の通りになる。

【各コーパスごとのデータ数】

コーパス名	サンプル総数	完了体	不完了体
ウプサラコーパス（新聞テキスト）	25 例	18	7
ウプサラコーパス（文学テキスト）	4 例	1	3
インタヴューコーパス	1 例	1	0
「アガニョーク」	82 例	61	21
「マリーニナ」	0 例	0	0
「ストルガツキイ」	8 例	5	3
「推理小説」	34 例	15	19
計	154 例[12]	101	53

上表の通り，これら 154 例のうち，結合している動詞の不定詞が，完了体のものは 101 例あり，一方，不完了体のものは 53 例あった。

コーパスを用いた本格的な研究を行うためには，今回のデータの数量は絶対的に不足しているということは否めない。しかし，現時点で既存のコーパスから入手できるデータはこれが全てであり，以下ではその数量の少なさを認識しつつも，先行研究とは異なった視点からの観察を行なっていくことにする。

[12] 残りの 3 例は‘быть’であり，これについては「動詞」という枠内では捉えず，今回の対象からは除外した。なお，現れた例では‘быть’はいずれも連辞として機能しており，後に造格形の名詞，あるいは形容詞の造格形を伴っている。

4.2. 動詞語彙のデータ

まず上のデータを，語彙を基準にして整理してみよう。

以下に今回観察の対象とする全 154 例に現れた動詞を，語彙ごとに出現数の多い順に並べて示した。

下表は，左から順に，当該動詞のそれぞれ，「語彙的意味」，「完了体の形態」，「その出現数（便宜的にＡとする）」，「不完了体の形態」，「その出現数（同Ｂ）」，「合計の出現数（ＡとＢの和）」と提示されている。

なお，以下のデータ中には，対応する体の形態を持たない（つまりどちらか一方の体の形態しか持たない）「単体動詞（одновидовой глагол）」は含まれていない[13]。

【語彙のデータ①（出現数２以上）】

語彙的意味	完了体	出現数（Ａ）	不完了体	出現数（Ｂ）	出現数（Ａ＋Ｂ）
～ト言ウ	сказать	16	говорить	1	17
同意スル	согласиться	14	соглашаться	0	14
考慮スル	учесть	0	учитывать	12	12
～デアルト認メル	признать	10	признавать	0	10
～デアルコトニ気付ク，指摘スル	заметить	9	замечать	1	10
指摘スル	отметить	7	отмечать	0	7
見テ取ル，理解スル	увидеть	1	видеть	6	7
愛スル	полюбить	0	любить	7	7
考慮スル	посчитаться	0	считаться	5	5
信ズル	поверить	1	верить	3	4
思イ出ス，想起スル	вспомнить	4	вспоминать	0	4
言及スル	упомянуть	4	упоминать	0	4
感嘆スル	восхититься	1	восхищаться	2	3
到着スル	прийти	2	приходить	0	2
評価スル	отдать(должное)	2	отдавать	0	2
評価スル	оценить	2	ценить оценивать[14]	0 0	2
理解スル	понять	1	понимать	1	2

[13] 今回対象としなかった単体動詞は次の通り（いずれも不完了体）：
бороться, восторгаться, гордиться, знать, курить, повидаться, расти, стремиться

[14] この動詞には不完了体の形態として２つの形態が設定されている。今回のデータではそのどちらも現われていない。

感ズル	почувствовать	2	чувствовать	0	2

また，上記の他に総出現数が１だった動詞は以下のものである。体の形態は，最初に完了体の形態，次に不完了体の形態の順で提示してある。また，下表中太字になっている形態が実際にテキスト内に現われた形態である。

【語彙のデータ②（出現数が１のもの）】

вернуться – возвращаться（戻ル）, **влюбиться** – влюбляться（惚レル）, **внести** – вносить（持チ込ム）, **воспользоваться** – пользоваться（利用スル）, **впасть** – впадать（陥ル）, **выделить** – выделять（区別スル）, **выполнить** – выполнять（遂行スル）, дать – **давать**（与エル）, доверить – **доверять**（信頼スル）, заполнить – **заполнять**（満タス）, **запомнить** – запоминать（記憶スル）, **исполнить** – исполнять（実行スル）, **назвать** – называть（名付ケル）, **напиться** – напиваться（十分飲ム）, **нарушить** – нарушать（壊ス）, **откликнуться** – откликаться（反響スル）, **отчитаться** – отчитываться（報告スル）, **подивиться** – дивиться（驚ク）, подумать – **думать**（考エル）, **поехать** – ехать（出カケル）, **поклониться** – поклоняться（崇拝スル）, **порадоваться** – радоваться（喜ブ）, **поразиться** – поражаться（ヒドク驚ク）, **посмотреть** – смотреть（見ル）, сделать – **делать**（行ナウ）, **содрогаться** – содрогнуться（オノノク）, **усмотреть** – усматривать（見ツケル）, **устать** – уставать（疲レル）

以上が‘нельзя не＋Inf’という構文に現れる動詞語彙である。

これらの動詞語彙は，その意味特徴に応じて次のように大まかに分類が可能である。大部分の動詞は，以下の分類のどれかに属すると考えられる。

１）Vendler の分類の「到達」タイプの動詞
（заметить – замечать, отметить – отмечать, вспомнить – вспоминать, прийти – приходить など）

２）発言，同意や意見などを表わす「発言，態度の表明」に関する動詞
（сказать – говорить, согласиться – соглашаться, признать – признавать, упомянуть – упоминать, отдать – отдавать, оценить – ценить など）

３）Vendler の分類の「状態」タイプの動詞
（полюбить – любить, восхититься – восхищаться, поверить – верить, почувствовать – чувствовать など）

４）考慮，理解などの，知的活動に基づいた「思考」に関する動詞
（увидеть – видеть, учитывать – учить, считаться – посчитаться, понять – понимать など）

さらに，それぞれの分類に属する動詞について，体の形態の出現分布を見ると，あ

る分類の動詞語彙については完了体の形態が専ら用いられ，また別の語彙については不完了体の形態が用いられるという一定の傾向があることが分かる。

次節では，その体の形態の現われについて，頻度数の高かったものを中心にして見て行くことにする。

5. 語彙の分類ごとの特徴

上表を見ても分かるように，特定の動詞の場合には，完了体と不完了体のどちらか一方の体が優先的に現れているのが分かる。

以下では，どちらの体の形態が優勢であるかに応じて，それぞれを検討していくことにする。

5.1. 完了体の形態が優勢な語彙

ここでは，完了体の形態が多く用いられているものを見ていこう。

5.1.1 「到達」タイプの動詞

まず最初に，Vendler の動詞分類のうちの「到達」に分類できると考えられるものである。

【「到達」タイプの動詞】

語彙的意味	完了体	出現数	不完了体	出現数
～デアルコトニ気付ク，指摘スル	заметить	9	замечать	1
指摘スル	отметить	7	отмечать	0
思イ出ス，想起スル	вспомнить	4	вспоминать	0
到着スル	прийти	2	приходить	0

このタイプの動詞グループでは，完了体が圧倒的に優勢である。

唯一不完了体の形態が現われているのは以下の例文である。

> Критиковать, конечно, надо, но **нельзя не** <u>замечать</u> большие перемены в лучшую сторону.　Я, приезжая, замечаю их на каждом шагу.
>
> もちろん批判はしなくてはいけないが，いい方向への大きな変化を認めないわけにはいかない。私は来る度に絶えずそれを目にしている。
>
> 【「アガニョーク」コーパス，2001 年 22 号】

この例では，目的語が‘большие перемены’と複数になっていること，さらに後の

文の副詞句‘на каждом шагу（絶えず，ひっきりなしに）’があることから，当該動作の反復と判断することが出来る。

5.1.2. 「発言，態度の表明」に関する動詞

次に完了体が優勢なのは，何らかの発言，同意，評価などといった，広い意味での何らかの態度の表明と関連するものと考えられるものである。

【「発言，態度の表明」に関する動詞】

語彙的意味	完了体	出現数	不完了体	出現数
～ト言ウ	сказать	16	говорить	1
同意スル	согласиться	14	соглашаться	0
～デアルト認メル	признать	10	признавать	0
言及スル	упомянуть	4	упоминать	0
評価スル	оценить	2	ценить	0
評価スル	отдать (должное)	2	отдавать	0

これらの中で唯一不完了体が用いられている例は以下のものである。

Говоря об РНЕ, **нельзя не** <u>говорить</u> о еврейском вопросе, он основополагающий.

RNE について話す時にはユダヤ人問題について話さないわけには行かない。これは基本的な問題なのだ。　【「アガニョーク」コーパス，1999 年 6 号】

これは，当該動作の反復が意識されているために不完了体が用いられていると解釈できる。

5.2. 不完了体の形態が優勢な語彙

他方，ある一定の動詞語彙では，不完了体が多く現れている。

5.2.1. 「状態」タイプの動詞

まず，Vendler による分類の中の，「状態」タイプ，とりわけ，精神的な状態を表わす動詞群である。

【「状態」タイプの動詞】

語彙的意味	完了体	出現数	不完了体	出現数
愛スル	полюбить	0	любить	7
信ズル	поверить	1	верить	3

感嘆スル	восхититься	1	восхищаться	2
感ズル	почувствовать	2	чувствовать	0

И ее все любят , ее просто **нельзя не** любить, столько в ней доброты и жизнерадостности, хотя она далеко не здоровый человек, болезненно полная, с больными отекшими ногами, а сердце то и дело сдает.

Аркадий Григорьевич Адамов; «Злым ветром.»

彼女は皆に愛されている，愛さずにはいられないのである。彼女には善良さや楽天性がある。とはいえ，彼女は健康的な人間からは程遠く，病的に太っており，足は両足とも病んでむくんでしまっており，心臓はひっきりなしに脈を乱すのである。

【推理小説コーパス】

しかしながら，唯一 почувстововать – чувстововать のペアは振る舞いを異にしており，完了体が専ら用いられている。

Это нам не совсем понятно , но **нельзя не** почувствовать: обнадеживает старик!

これは我々には全く理解できないが，しかしこのことを感じずにはいられない：老人が元気付けているのだ！

【Огонек コーパス 1998 年 51 号】

Когда попадаешь, например, в его кабинет, этого **нельзя не** почувствовать.

例えば彼の書斎に入るとすると，そのことに気づかずにはいられないの。

【Огонек コーパス 2000 年 18 号】

これらは，従来の説明によれば，いわゆる完了体の「例示的意味（наглядно-примерное значение）[15]」が実現している場合であると考えられるが，なぜこの動詞に限りこの意味が実現するのかという問いに対する解を求めることは，本稿の範囲を大きく出るものとなる。ここでは差し当たり例文の提示だけにとどめておくことにする[16]。

[15] 完了体の「例示的意味」は，「生き生きとした描写をするために単一のものとして提示される反復動作」を表わす（cf. Зализняк и Шмелев 2000: 19）。この意味については他に，Бондарко（1971）及び Рассудова（1982）などを参照されたい。

[16] 実際，これらの動詞は，Гловинская（1982, 2001）による体のペアに関する研究において，不完了体が「発話時点においてある状態にあること」を表わし，完了体が「その状態への変化，及び発話時点においてその状態にあること」を表わすとされるⅣ型に分類されているものである（cf. Гловинская 2001: 108-124）。そしてこれらは，彼女の論に従えば体のペアの中でもかなり周辺的なものであると位置付けられているものである。このⅣ型を構成している動詞は，それぞれ意味が少しずつ異なっており，場合によってはこうした意味的な微妙な差異が不定詞の形態での現れ方の差異に影響を与えている可能性もある。

5.2.2. 「思考」に関する動詞

次に不完了体が優勢なのは,「考慮」や「理解」といった思考による活動に関する動詞群である。

【「思考」に関する動詞】

語彙的意味	完了体	出現数	不完了体	出現数
考慮スル	учесть	0	учитывать	12
見テ取ル，理解スル	увидеть[17]	0	видеть	6
考慮スル	посчитаться	0	считаться	5
理解スル	понять	1	понимать	1

ペアをなすと通常みなされている完了体の形態は現れない。

Нельзя не учитывать и общей сложной ситуации в энергетике. Программа строительства АЭС уменьшена, требуется выполнить большой объем работ по повышению их безопасности, осуществить реконструкцию тепловых электростанций, треть которых выработала свой расчетный ресурс.

エネルギー問題における共通する複雑な状況も考慮に入れないわけにはいかない。原子力発電所の建設プランは縮小されており，その安全性の向上に関する作業量を達成すること，その３分の１が定格の資源を生産している，火力発電所の再建を実現することが要求されている。

【ウプサラコーパス（新聞テキスト)】

Таким образом, полоролевая усредненность остается реальностью, с которой **нельзя не** считаться в эпоху научно-технического прогресса.

このようにして，性役割の平均データが現実としてそのまま残っている。これは，この科学技術の進歩の時代に考慮に入れないわけにはいかない。

【ウプサラコーパス（新聞テキスト)】

上の二例を見ても分かるように，これらは特に動作の反復といった文脈が無く，そのため通常なら完了体が予想されるような文脈でも，不完了体の形態が現れている。

これが示唆することは，両形態の差異が，単なるアスペクトの差異だけではなく，語彙としての意味が本質的に異なっているということである。つまり，これらの動詞語彙は，少なくともこの構文で用いられる場合に限って言えば，完了体，不完了体の

[17] データとしては２例検索できるが，双方の例とも,「目で見る」,「気付く」という意味で用いられており，ここでは別の語彙として扱っている。この場合の‘увидеть’は，上に述べた「到達」タイプの動詞に属すと考えられ，事実完了体のみが現れている。

両形態はペアを成していないと考えることが出来る。

5.3. この節のまとめ

この節では，前節で行なった，「到達」タイプ，「発言，態度の表明」に関する動詞，「状態」タイプ，「思考」に関する動詞というそれぞれの分類に応じて，体の形態の現われ方の傾向を見てきた。

「到達」タイプ，及び「発言，態度の表明」に関する動詞は，この構文においては専ら完了体の形態が現われる。不完了体が用いられるのは反復などの文脈が認められる場合である。

一方，「状態」タイプと「思考」に関する動詞は，若干の例外はあるものの，不完了体の形態が用いられることが圧倒的に多い。

この分類に属する動詞は，反復という文脈が特にない場合（したがって完了体が予想される場合）でも，不完了体の形態が現われる。そのため，これらの動詞の２つの形態はアスペクトの意味のみで対立しているのではなく，語彙的意味に関して差異があると考えられ，体のペアを成していると認められないと考えられる。

これらの結果を表の形で簡潔にまとめると以下のようになる。

【動詞の分類と体の形態の相関】

動詞の意味グループ	優勢な体の形態	備考
「到達」タイプ	完了体	不完了体は反復動作を表わす
「発言，態度の表明」に関する動詞	完了体	
「状態」タイプ	不完了体	単一の動作と考えられる場合でも完了体の形態は現われない
「思考」に関する動詞	不完了体	

6. 結論

本稿では，‘нельзя＋не＋Inf’という構文について，既存コーパスのデータを用いて，先行研究の不備を補うべく考察を行なった。

この構文においてお互いに影響を与え合っている意味要素としては，モダリティの意味，動詞の語彙的意味，そして動詞のアスペクトの意味の３つが考えられる。

この構文に関する事実上唯一の先行研究である Forsyth による記述は，ごく一部の事例を扱ったものであり，上記の３つの意味要素の諸関係のうち，モダリティの意味とアスペクトの意味との関係に重点を置いた記述しかなされていない。

まず，この構文のモダリティの意味と動詞の語彙的意味の関係について，コーパスからのデータを用いてこの構文において現われる動詞語彙を調べたところ，特定の意

味特徴をもつ語彙が多く用いられているということが分かった。

これらの動詞語彙は，その意味特徴に応じて大きく４つに分類が可能である。それはすなわち，Vendler の動詞分類のうちの「到達」タイプの動詞（заметить – замечать, отметить – отмечать, прийти – приходить など），「発言，態度の表明」に関する動詞（сказать – говорить, согласиться – соглашаться, признать – признавать, упомянуть – упоминать, оценить – ценить など），Vendler の分類の「状態」タイプの動詞（полюбить – любить, поверить – верить, восхититься – восхищаться など），そして「思考」に関する動詞（учесть – учитывать, посчитаться – считаться, увидеть – видеть）である。

そして，これらの分類に属する動詞の体の形態の現われに注目すると，それぞれの分類でどちらか一方の形態が用いられるという強い傾向があることが明らかになった。

まず,「到達」タイプの動詞，そして「発言，態度の表明」に関する動詞については，完了体がもっぱら用いられる。これらの動詞で不完了体が用いられるのは，当該動作の反復という文脈がある場合である。

次に,「状態」タイプの動詞と,「思考」に関する動詞については，不完了体の形態が優勢である。これらの動詞は，当該動作が単一の動作の場合であっても，あるいは反復の文脈がないと判断できる場合にも，不完了体が用いられる。

従って，この２つの動詞グループについて言えば，一般的にペアを成すとされている２つの形態には，アスペクトの意味の差異による対立ではなく，語彙的意味に関して差異があると考えられ，そのためこの２形態がペアを成していると判断することは困難である。

もちろん，今後更なるデータの補充が必要なことは明らかであるが，今回調査を行なった範囲内での暫定的な結論としては以上のようなものになる。

7. おわりに；今後の課題

本研究における今後の課題としては，次のようなことが挙げられる。

今回データを採取するにあたり，‘нельзя не＋Inf’という結合が分離して現れる場合，つまり「не＋Inf ―― нельзя.」といった語順の場合が含まれていない。こうした語順を取るケースは，文における情報構造が作用しており，多くはないが存在する。今回はコーパスシステムの限界という問題もあり，データに加えることは出来なかった。今後これらのデータを加えた上で考察を続ける必要があろう。

次に，今回扱った‘нельзя не＋Inf’に加えて，同様のモダリティの意味を表わすものに，動詞 мочь が用いられる「не мочь не＋動詞不定詞」という結合がある。

これはロシア語統語論においては，今回対象とした前者が無人称文，後者が人称文と，それぞれ統語論上異なるタイプの文を形成する。この結合の出現頻度数，あるいはこの結合における動詞語彙の特徴，及びその体の現れ方についても考察を加え，今回得られた結果と比較検討することにより，言語使用の上での無人称文と人称文の平

行性に関する検討も可能になるであろう。

また，ロシア語を扱ったコーパス全体に関する最大の問題としては，絶対的な総語数の不足，また話し言葉のデータが少ないという点等が挙げられる。そのため，本稿で提出した結論はあくまでも暫定的な性格を持つにとどまるものとなっている。こうした点は今後ロシア語のコーパス構築に際して重点的に解消を図っていくべき部分であると思われる。

以上のように，今回の研究はいくつかの問題点を抱えたものとなってはいるが，しかしながら，本研究によって，現代ロシア語のアスペクト研究において今後コーパスを用いた研究による補足が必要であるということが多少なりとも示せたのではないかと思われる。

コーパスからのデータを利用することにより，これまでネーティヴスピーカーの直観への依存度が高かったロシア語アスペクト研究を，異なった角度から補完し，修正していく，あるいは改めて裏付けていくといったことが可能になると思われる。

こうした点を踏まえ，今後も今回の対象に対してデータの収集を継続し，更なる考察を加えていく。

引用文献

Бондарко 1971 — *Боднда́рко А.В.* Вид и время русского глагола (значение и употребление). Л., 1971.

Гловинская 1982— *Гловинская М.Я.* Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола. М., 1982.

Гловинская 2001 — *Гловинская М.Я.* Многозначность и синонимия в видо-временной системе русского глагола. М., 2001.

Зализняк и Шмелев 2000 — *Зализняк Анна А., Шмелев А.Д.* Введение в русскую аспектологию. М., 2000.

Падучева 1990 — *Падучева Е.В.* Вид и лексическое значение глагола (от лексического значения глагола к его аспектуальной характеристике). *Russian linguistics* 14. 1-18.

Падучева 1996 — *Падучева Е.В.* Семантические исследования. М., 1996.

Падучева 1998 — *Падучева Е.В.* Опыт систематизации понятий и терминов русской аспектологии. *Russian linguistics* 22. 35-58.

Рассудова 1982 — *Рассудова О.П.* Употребление видов глагола в современном русском языке. М., 1982.

COMRIE, Bernard. 1976. *Aspect. An introduction to the study of verbal aspect and related problems.* Cambridge: Cambridge University Press.

FORSYTH, J. 1970. *A Grammar of Aspect Usage and meaning in the Russian verb.* Cambridge: Cambridge University Press.
VENDLER, Zeno. 1967. "Verbs and times". *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
影山太郎 1996: 「動詞意味論―言語と認知の接点―」, くろしお出版.
小林潔 2003: 「ドイツ・テュービンゲン大学のロシア語コーパス」, ロシア語研究会木二会年報『ロシア語研究』第 16 号.

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

ロシア語男性名詞複数主格・対格形のヴァリアントに関するコーパス研究 ―ウプサラコーパスをデータとして―[1]

秋山　真一
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

はじめに

現代ロシア語は言語類型論の観点から融合的(fusional)または屈折的(flectional)言語に数えられており[2]，名詞も性（男性・女性・中性），数（単数・複数），格（主格・生格・与格・対格・造格・前置格）による変化をすることが知られている。こうした名詞の変化は大半が規則的である。

この名詞変化パラダイムにおいて男性名詞は複数主格・対格において語尾として/-i/（ロシア語の表記上-ы あるいは-и で，ローマ字転写後の表記としては-y あるいは-i で現れる）を有する。例：「工場」завод zavod (Sg.Nom.) ― заводы zavody (Pl.Nom.)[3]

その一方で，ごく一部の男性名詞には複数主格・対格形の語尾として/-a/（ロシア語の表記上-a あるいは-я で，ローマ字転写後の表記としては-a あるいは-ja で現れる）が認められる。例：「都市」город gorod (Sg.Nom.) ― города gorod̲a̲ (Pl.Nom.)

ほとんどの語において複数主格・対格の語尾として/-i/をもつもの，あるいは/-a/をもつものはそれぞれに定まっている。しかし RJE1998 などの指摘によると，複数主格・対格形の形態的なヴァリアントをもつもの，つまり語尾/-i/と語尾/-a/との両方をもつものが一部存在するという[4]。

こうした複数主格・対格のヴァリアントとして語尾/-i/と語尾/-a/との両方を持つ語に関し，それぞれの使用傾向をコーパスデータを用いて分析することが拙稿の目的である。

---

[1] 現代ロシア語では名詞に活動体・不活動体の区別がある。単数では男性名詞の対格形のみが活動体・不活動体の相違に基づく形態的な差異をもつが，複数ではその名詞の性に関わらず対格において活動体・不活動体の相違に基づく形態的な差異が現れる。言い換えれば，不活動体名詞の複数対格形は複数主格形と一致するものの，活動体名詞では複数主格と複数対格の形態が異なる。
拙稿において「主格・対格」という表記は，「主格およびそれと同形の対格」という意味で用いることにする。つまり，活動体名詞の対格形は拙稿で扱わないこととする。

[2] Comrie,B. *Language universals and linguistic typology*, Second edition, Chicago, 1989 pp.44-45

[3] 略号一覧　Sg.:singular 単数，Pl.:plural 複数，Nom.:Nominative 主格

[4] RJE1998:61-64

1. 先行研究

男性名詞の複数主格・対格のヴァリアントである語尾/-i/と語尾/-a/について，データに基づく考察をしたものの代表として GPRR1976 が挙げられる。そこではヴァリアントとしての語尾/-i/と語尾/-a/との両方をもつ語が 300 語以上あると指摘された上で，それらの語について 1960～70 年代の新聞から 1977 例のデータが収集され，その結果として【表 1-1】にあるように語尾/-i/をもつ例が 1758 例，語尾/-a/をもつ例が 219 例あったとされている。百分率も示されており，語尾/-i/をもつ例が 88.92%，語尾/-a/をもつ例が 11.08%となっている（GPRR1976：116-120）。

【表 1-1】GPRR1976 による語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態の比率

語尾/-i/	1758 例	—	219 例	語尾/-a/
	(88.92%)	—	(11.08%)	

また RG1979 によれば，語尾/-a/をもつ形態は文体的な尺度における口語体から中立の位置を占め，語尾/-i/をもつ形態は中立から文語体の位置を占めるとしている（RG1979：473）。

さらに GPRR1976 および RG1980 の指摘によると，語尾のヴァリアントである/-i/と/-a/とについていくつかの類別が可能であるとしている（GPRR1976：116-120 / GPRR2001：160-167 / RG1980：497-498）。GPRR1976 の指摘は，その改訂版である GPRR2001 にも見受けられる。拙稿ではそれらを基に以下の 4 つの基準を設けることにする。

① /-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態の両形態ともに文体的に対等に用いられるもの
　例： бункеры — бункера　bunkery — bunkera　「貯蔵庫・サイロ」(Pl.Nom.)

② /-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態とがヴァリアントの関係にあり，その際に一方の形態が文体的な差異をあらわしているもの
　例： дизели　dizeli　「ディーゼル機関」(Pl.Nom.　文体的に中立的)
　　дизеля　dizelja　「ディーゼル機関」(Pl.Nom.　文体的に専門用語的)

① /-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態とがヴァリアントの関係にあり，その際に一方の形態が意味論的な差異をあらわしているもの
　例： тормозы　tormozy　「障害」(Pl.Nom.)
　　тормоза　tormoza　「ブレーキ」(Pl.Nom.)

② ヴァリアントは認められず，/-a/のみが容認されるもの[5]
　例： города　goroda　「都市」(Pl.Nom.)
　　* городы *gorody[6]

[5]「ヴァリアントは認められない」としているのは，語尾/-i/をもつ形態が誤用だという意味であると思われる。
[6] 慣例に従い，文法的な誤用には語頭に*(asterisk)を付す。

拙稿では，上述の①～④の基準のうち，①および②に該当する語のみを研究の対象とする。なお，現代ロシア語の語彙についてどの語を上述①～④の分類のどれに割り当てるかはそれぞれの先行研究において微妙に異なっている。今回はそれぞれの語について文体的な特徴をもっとも詳細に記述してあるGPRR2001で列挙された語の分類法を採用することにする。

2. コーパスデータ

今回の調査は既存のコーパスデータに基づいて行うものとし，使用するデータとしてはスウェーデンにあるウプサラ大学の現代ロシア語コーパス The Uppsala Corpus of modern Russian（以下，ウプサラコーパス）を用いた。

2-1. ウプサラコーパスについて

このコーパスは同大学のレナート・レングレン(Lennart Lönngren)教授の指示によって作成された。研究目的にのみ利用可能となっており，商業用の利用はできない。フィクションおよびノンフィクションで構成される 600 テキスト，100 万トークン（句読点を含んだ総語数）からなるロシア語コーパスである。形態論・統語論的タグ情報を持たない。ウプサラ大学 HP 上では公開されていないため，オンライン上で検索などの作業を行う場合には 2-2 に挙げるテュービンゲン大学によるコーパス･プロジェクト SFB441 を利用することになる。

2-2. テュービンゲン大学のホームページ内のウプサラコーパス検索サイト

ウプサラコーパスのデータをオンライン上で検索可能にしたものがドイツのテュービンゲン大学(Universität Tübingen)のコーパスプロジェクト SFB441[7]である。ここのホームページにアクセスをすることによりウプサラコーパスをオンラインで検索することが可能になる。

今回の調査はインターネットを通じてこのテュービンゲン大学のサイトからウプサラコーパスのデータを簡易検索(simple query)によって抽出した。抽出方法などの詳細については，小林（2003：79-85）を参照した。

2-3. 検索対象語

第 1 章でも述べたが，拙稿では分析する語の対象を，①語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態の両形態ともに対等に用いられるもの，②語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態とがヴァリアントの関係にあり，その際に一方の形態が文体的な差異をあらわしているもの，とに限定する。また，その分類法は GPRR2001 にある文体的特徴の指摘を基に分類したものとする。

---

7 http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html

分類①および分類②に該当する語として検索を行った語を以下に列挙する。（ローマ字転写は省略する。）

《分類①》（36 語）
альт「アルト歌手」（альты-альта），бункер「貯蔵器・サイロ」（бункеры-бункера），веер「扇」（вееры-веера），вектор「ベクトル」（векторы-вектора），вензель「モノグラム・組み字」（вензели-вензеля），дьякон「輔祭」（дьяконы-дьякона），корректор「校正者」（корректоры-корректора），крендель「クレンデリ（8 の字型パン）」（крендели-кренделя），лекарь「やぶ医者」（лекари-лекаря），месяц「１ヶ月」（месяцы-месяца），невод「漁網」（неводы-невода），откуп「身代金」（откупы-откупа），отпуск「放出」（отпуски-отпуска），пекарь「パン屋」（пекари-пекаря），писарь「書記」（писари-писаря），пойнтер「（犬の）ポインター」（пойнтеры-пойнтера），полутон「半音」（полутоны-полутона），прожектор「プロジェクター」（прожекторы-прожектора），пудель「（犬の）プードル」（пудели-пуделя），редуктор「リダクションギア」（редукторы-редуктора），сектор「扇・部署」（секторы-сектора），стапель「船台」（стапели-стапеля），тендер「炭水車」（тендеры-тендера），тенор「テノール歌手」（теноры-тенора），фельдъегерь「伝書使」（фельдъегери-фельдъегеря），флигель「翼」（флигели-флигеля），хлев「家畜小屋」（хлевы-хлева），цех「作業場」（цехи-цеха），шкипер「船長」（шкиперы-шкипера），шницель「シュニツェル（薄いカツレツ）」（шницели-шницеля），шомпол「洗い矢」（шомполы-шомпола），штепсель「コンセントプラグ」（штепсели-штепселя），шторм「暴風」（штормы-шторма），ястреб「オオタカ」（ястребы-ястреба），ячмень「オオムギ」（ячмени-ячменя）

《分類②-1》（語尾/-a/をもつ形態が文体的に専門用語的である語）[8]（19 語）
боцман「（商船の）水夫長」（боцманы-боцмана），бочок「脇(бок の指小形)」（бочки-бочка），вентиль「バルブ・弁」（вентили-вентиля），вес「重さ・ウェイト」（весы-веса），дизель「ディーゼル機関」（дизели-дизеля），дроссель「絞り弁・スロットル」（дроссели-дросселя），клапан「弁・バルブ」（клапаны-клапана），кожух「羊皮コート」（кожухи-кожуха），конус「円錐」（конусы-конуса），лоцман「水先人」（лоцманы-лоцмана），мичман「准士官」（мичманы-мичмана），пресс「プレス機」（прессы-пресса），промысел「稼業」（промыслы-промысла），рапорт「報告」（рапорты-рапорта），ротор「プロペラ」（роторы-ротора），сахар「砂糖」（сахары-сахара），сеттер「（犬の）セッター」（сеттеры-сеттера），тельфер「テリハ（空中ケーブルカー型貨物運搬車）」（тельферы-тельфера），щёлок「灰汁・アルカリ液」（щёлоки-щелока）

[8] GPRR2001 において医学用語，海洋用語，技術用語とされているものもこの分類に含めた。

《分類②-2》（語尾/-a/をもつ形態が文体的に口語的・俗語的である語）（18 語）
бухгалтер「会計係」（бухгалтеры-бухгалтера），верх「頂上」（верхи-верха），ветер「風」（ветры-ветра），джемпер「ニットの女性用上着」（джемперы-джемпера），диспетчер「工程管理者」（диспетчеры-диспетчера），договор「契約」（договоры-договора），допуск「入場権」（допуски-допуска），инженер「技師」（инженеры-инженера），инструктор「指導員」（инструкторы-инструктора），коллектор「集配機関・収集家」（коллекторы-коллектора），род「氏族・種類」（роды-рода），свитер「セーター」（свитеры-свитера），слесарь「仕上げ工」（слесари-слесаря），соус「ソース」（соусы-соуса），токарь「旋盤工」（токари-токаря），трактор「トラクター」（тракторы-трактора），трюфель「トリュフ」（трюфели-трюфеля），шофёр「運転手」（шофёры-шофера），

《分類②-3》（語尾/-i/をもつ形態が文体的に擬古的である語）（2 語）
директор「長・総裁」（директоры-директора），рог「角・角笛」（роги-рога）

《分類②-4》（特殊な注意書きとともにヴァリアントが指摘されている語）（2 語）
год「年」（годы-года），полюс「極」（полюсы-полюса）

3. 検索結果と分析

第 1 章において掲げた 4 つの語の分類に基づき，ウプサラコーパス検索結果を以下の表に示す。引用数は原則として語単位でカウントした。ただし，語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態とがともに引用数ゼロ(0)であった場合には表から削除した。表中の比率欄はそれぞれの語の語尾別に見た割合を示す。

① /-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態の両形態ともに対等に用いられるもの
【表 3-1】（13 語）

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/		
	形態	引用数	比率	形態	引用数[9]	比率
бункер 貯蔵器	бункеры bunkjery	1	50%	бункера bunkjera	1	50%
лекарь やぶ医者	лекари ljekari	1	100%	лекаря ljekarja	0	0%
месяц １ヶ月	месяцы mjesjatsy	21	100%	месяца mjesjatsa	0	0%

[9] 引用数は語数で数えたが，同一文中に 2 度以上出てくる場合があるため，文単位の引用数を（　）内に入れて表示する。以下，百分率についても同じ。

отпуск 支出・休暇	отпуски otpuski	0	0%	отпуска otpuska	1	100%
пекарь パン屋	пекари pjekari	1	100%	пекаря pjekarja	0	0%
писарь 書記	писари pisari	0	0%	писаря pisarja	1	100%
прожектор ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ	прожекторы prozhjektory	1	100%	прожектора prozhjektora	0	0%
редуктор ﾘﾀﾞｸｼｮﾝｷﾞｱ	редукторы rjeduktory	1	100%	редуктора rjeduktora	0	0%
сектор 扇	секторы sjektory	1	100%	сектора sjektora	0	0%
хлев 家畜小屋	хлевы khljevy	1	100%	хлева khljeva	0	0%
цех 工場	цехи tsjekhi	12	100%	цеха tsjekha	0	0%
шторм 暴風	штормы shtormy	1	16.67%	шторма shtorma	5	83.33%
ястреб オオタカ	ястребы jastrjeby	1	100%	ястреба jastrjeba	0	0%
合計		42	84%		8	16%

データ数が少ないため，わずか 1-0 の対応であっても，語ごとに割合をみてしまうと 100%や 0%という，差の開いた数字になってしまうことは否めない。また，語そのものの頻度数が大きく異なるので（месяц mjesjats「1 ヶ月」などはコーパス全体で 21 回も出現するが，その他の多くの語が 1 回しか出現していない，など），合計欄の比率が語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態の頻度数の実態を正確に表しているとは言いがたい。

そこで，それぞれの語の語尾出現比率（百分率）の平均を取ってみる。比率欄の数字が示す百分率はこの語が 100 回出現したと仮定した場合に，それぞれの語尾の出現回数を意味するものであるため，比率欄の百分率の平均を取れば，語そのものの出現頻度数に影響されることのない，これらの語のグループに該当する任意の語の語尾/-i/と語尾/-a/との出現する比率をもとめる操作であるということができる[10]。またこの方法で求めた比率は，今回検索対象としながらも，ヒット数の結果が語尾/-i/・語尾/-a/共にゼロ(0)で，表には掲載しなかった語についても，語尾/-i/をもつ形態・語尾/-a/をもつ形態それぞれが出現する

[10] 計算方法：各語の比率欄にある百分率の数字を縦方向に総和を求め，その語のグループの語数で割った。

傾向を物語るデータであるということができる。

結果は以下の通りとなる。

【表 3-2】

語尾/-i/をもつ形態の比率 74.36% ― 25.64% 語尾/-a/をもつ形態の比率

これらの語のグループにおける語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態との頻度数の差について言えることは，概ねどの語も語尾/-i/をもつ形態の方が語尾/-a/をもつ形態よりも好まれる傾向にあるということである。例外的に語尾/-a/をもつ形態が好まれる語は，отпуск otpusk「支出・休暇」，писарь pisar'「書記」，шторм shtorm「暴風」である。

これらの語尾/-a/をもつ形態の代表例を挙げる。

（例 отпуска-9）[11]

Ребята ездят на соревнования в каникулы , за свой счет , в **отпуска** , в отгулы - ведь все они учатся или работают . («Советский спорт» 1988-07-03)

「仲間たちは長期休暇，休暇，代休の日になると自費で大会に出かける。というのも彼らはみな学生だったり，働いていたりしているからだ。」

（例 писаря-2）

" В штабе были начальник штаба полка , помощник начальника штаба , **писаря** - целый служебный организм , взаимосвязанный и взаимоподчиненный , - и вот я , ... (Бакланов, Г. «Военные повести» 1981)

「本部にいたのは，連隊本部長，本部長の助手，書記たち，つまり相互に関連し，相互に従属しあう総職場組織と，そして，かの私だった。」

（例 шторма-2）

Видел я и **шторма** здешние - свирепые , но мелководные . (Казаков, Ю. «Избранное» 1985)

「私はここの暴風を体験していた。猛烈ではあるが，波の小さな暴風を。」

отпуск otpusk「支出・休暇」および писарь pisar'「書記」について言えば，これらの語の出現数はわずかに 1 例のみであり，これだけをもって語尾/-a/をもつ形態が好まれると結論付けるのは早計であろう。その一方で，шторм shtorm「暴風」は 5 例出現した。この語については語尾/-a/をもつ形態が好まれるということが言えそうである。しかし，5 例中 3 例が（例 шторма-2）にあげた引用元と同じ文献で出現しており，文献数で対比すると【表 3-1】に挙げた比率ほどには語尾/-a/をもつ形態は好まれないのかもしれない。

[11] 例文の提示では，ローマ字転写を省略する。

②-1 /-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態とがヴァリアントの関係にあり，その際に一方の形態が文体的な差異をあらわしているもの（語尾/-a/をもつ形態が文体的に専門用語的である語）

【表 3-3】（6 語）

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/		
	形態	引用数	比率	形態	引用数	比率
ветер 風	ветры vjetry	11	100%	ветра vjetra	0	0%
слесарь 仕上げ工	слесари sljesari	0	0%	слесаря sljesarja	1	100%
токарь 旋盤工	токари tokari	1	100%	токаря tokarja	0	0%
трактор ﾄﾗｸﾀｰ	тракторы traktory	5	55.56%	трактора traktora	4	44.44%
ход 歩行	ходы khody	1	50%	хода khoda	1	50%
шофёр 運転手	шофёры shofjory	8	88.89%	шофера shofjera	1	11.11%
合計		26	78.79%		7	21.21%

ここでも，各語の語尾出現比率（百分率）の平均を取ってみる。結果は以下の通りとなる。

【表 3-4】

語尾/-i/をもつ形態の比率	65.74%	—	34.26%	語尾/-a/をもつ形態の比率

これらの語のグループにおける語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態との頻度数の差について言えることは，この語のグループでも概ね語尾/-i/をもつ形態の方が語尾/-a/をもつ形態よりも好まれる傾向にあるということである。数字的には①で見た語のグループと10%程度の差が認められるが，それでもおよそ 3 回に 2 回の割合で語尾/-i/をもつ形態が出現していることが分かる。

例外的に語尾/-a/をもつ形態が好まれる語は слесарь sljesar'「仕上げ工」である。語尾/-a/をもつ形態の例を挙げる。

（例 слесаря-1）

В войну и ротами , и батальонами , и полками часто командовали вчерашние учителя , колхозники , **слесаря** . (Бакланов, Г. «Пядь земли» 1970)

「戦争では中隊も大隊もそして連隊までをも昨日までの教師，コルホーズ員，仕上げ工らがしばしば指揮していた。」

結果的に語尾/-a/をもつ形態の比率が 100%になってしまったものの，引用数的にはわずか 0-1 に過ぎず，これだけで男性名詞 слесарь sljesar'「仕上げ工」において語尾/-a/をもつ形態が好まれるとは言い切れないであろう。その意味では男性名詞 трактор traktor「トラクター」の方が比率では語尾/-i/にひけをとるものの，安定して語尾/-a/をもつ形態が使用されており，この語こそむしろ分類②-1 ではなく分類①として扱うべき語であると言えるかもしれない。трактора traktora の例も 1 例挙げる。

（例 трактора-9）

Нужная техника вся уже там , в ожидании и готовности; еще маленько подсохнет почва , обдует ее ветерком - и загудят в окрестном полевом просторе **трактора** , поползут из края в край колхозной земли с культиваторами , сеялками . (Гончаров, Ю. «Шашка командарма» 1983)

「必要な技術はもうすべてそこにあって，使われる準備も整っていた。そよ風が吹きつけ，土地はまだ少し乾燥していた。周りの広大な野原ではトラクターがうなり声をあげてコルホーズの土地の端から端まで除草機や種まき機と共に動き回っていた。」

この例文の引用元は文学作品であり，専門用語が登場しなければならない文体ではないと思われる。

②-2 /-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態とがヴァリアントの関係にあり，その際に一方の形態が文体的な差異をあらわしているもの（語尾/-a/をもつ形態が文体的に口語的・俗語的である語）

【表 3-5】（7 語）

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/		
	形態	引用数	比率	形態	引用数	比率
вес ウェイト	весы vjesy	6	100%	веса vjesa	0	0%
договор 条約・契約	договоры dogovory	6	66.67%	договора dogovora	3	33.33%

инженер 技師	инженеры inzhjenjery	18(17)	100%	инженера inzhjenjera	0	0%
клапан 弁・バルブ	клапаны klapany	1	100%	клапана klapana	0	0%
промысел 稼業	промыслы promysly	1	100%	промысла promysla	0	0%
рапорт 報告	рапорты raporty	1	100%	рапорта raporta	0	0%
ротор プロペラ	роторы rotory	2	100%	ротора rotora	0	0%
合計		35(34)	92.11% (91.89%)		3	7.89% (8.11%)

それぞれの語の語尾出現比率（百分率）の平均は以下の通りとなる。

【表 3-6】

語尾/-i/をもつ形態の比率 95.24% ― 4.76% 語尾/-a/をもつ形態の比率

これらの語のグループではさらに，語尾/-i/をもつ形態の方が語尾/-a/をもつ形態よりも好まれる傾向が強くなっている。しかし，これは対象としたコーパスの特徴を裏付けるものである。ウプサラコーパスのデータは印刷物であり，その中では文体的に口語的である表現が出現する可能性は極めて低いからである。（例外的に，会話を直接引用した場合に口語的な表現が出現する可能性はある。）

唯一語尾/-a/をもつ形態が出現し，ヴァリアントが認められた договор dogovor「条約・契約」の例を挙げる。

（例 договора-1）

Заключенные **договора** срывались , нарушился график перевозки зерна . («Правда» 1988-08-12)

「締結されていた条約は解消され，穀物運搬の計画表は乱れた。」

（例 договора-7）

... ему дали мастерскую и комнату в доме художников , стали его привечать , упоминать в печати , давать ему **договора** и заказы ,... (Трифонов, Ю. «Собрание сочинений в 4-х томах» 1986)

「彼には芸術家の家では，彼に作業場と部屋が与えられ，彼を住まわせ始め，印刷について言及し，彼に契約や注文を与えるようになった。」

（例 договора-12）

Предусмотренные проектом **договора** количества ядерных боеголовок у каждой из сторон (не более 6000) обеспечивают в сложившихся условиях военно-стратегический паритет на более низком уровне . («Московские новости» 1989-06-25)

「計画で見込まれていた，双方の核弾頭の量（6000 以下）に関する条約は，複雑化した諸条件のもと，より低い水準の戦略的な平等を保障しているのだ。」

3 つの例文のうち，2 つまでもが新聞である。これらの例文でなぜ語尾/-a/をもつ形態が用いられたかは不明である。コンテキストからも口語的・俗語的である文体の必要性は感じられない。

しかしながら文体差はともかく，これらの例は 9 例中の 3 例に過ぎず，ヴァリアントが見受けられるものの，全体的な傾向において語尾/-i/をもつ形態の方が好まれるという現象を覆すほどのものではないと思われる。男性名詞 договор dogovor「条約・契約」に限ってみれば，むしろ分類②-2 よりも分類①にすべき語であると言えるかもしれない。

②-3 /-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態とがヴァリアントの関係にあり，その際に一方の形態が文体的な差異をあらわしているもの（語尾/-i/をもつ形態が文体的に擬古的である語）

【表 3-7】（2 語）

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/		
	形態	引用数	比率	形態	引用数	比率
директор 長	директоры dirjektory	1	16.67% (20%)	директора dirjektora	5(4)	83.33% (80%)
рог 角・角笛	роги rogi	0	0%	рога roga	9	100%
合計		1	6.67% (7.24%)		14(13)	93.33% (92.86%)

それぞれの語の語尾出現比率を求めるまでもなく，明らかに語尾/-a/をもつ形態の方が好まれている。念のため，語尾出現比率の平均を以下に掲げる。

【表 3-8】

語尾/-i/をもつ形態の比率 8.335% ― 91.665% 語尾/-a/をもつ形態の比率 (10.00%) ― (90.00%)

これらの語のグループでは一転，語尾/-a/をもつ形態の方が語尾/-i/をもつ形態よりも好まれる傾向が強くなっている。しかしこれについても，コーパスの特徴からすれば当然の

結果とも言える。印刷物において擬古的な表現をする必要性はほとんどないといえよう。（例外的に，古典作品をそのまま引用したりすれば擬古的な表現が出現する可能性はある。）

唯一の語尾/-i/をもつ形態が出現した例として，директоры dirjektory「長」の例文を挙げる。

（例 директоры-1）

Заявление с просьбой " освободить по собственному " директор Омской макаронной фабрики В. Малюга писал , зная почти наверняка , что заменить его некем : кандидаты в **директоры** нынче на дороге не валяются . («Известия» 1988-02-22)

「『本来の意味で自由化して欲しい』という嘆願と共に，オムスクのマカロニ工場長Ｖ・マリューガ(В. Малюга)は声明を発表した。ほぼ確実に誰も自分の代理をつとめる者はいないだろうと知りながらも。今や工場長の候補者などというものはどこにでも転がっているものではなくなったからである。」

この例文も新聞記事である。この例文でなぜ語尾/-i/をもつ形態が用いられたかも不明である。コンテキストからも文体が擬古的であるという感じはしない。しかしながらここでも用いられた比率はわずかに 16.67％と 6 例中の 1 例でしかない。ヴァリアントは見受けられるものの，全体的な傾向を覆すほどのものではないであろう。

②-4　特殊な注意書きとともにヴァリアントが指摘されている語

【表 3-9】

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/			備考
	形態	引用数	比率	形態	引用数	比率	
год 年	годы gody	354	98.88%	года goda	4	1.12 %	語尾/-i/の方がより多い。 *cf.* года годами などの表現[12]

男性名詞 год god は今回のコーパスデータ中で最多の出現数を誇る。形態別の比率を見ても，98.88%が語尾/-i/を持つ形態で登場し，圧倒的な多数を誇る。表中の備考欄にも記したように，もともと GPRR2001 も語尾/-i/の方が好まれることを指摘している。GPRR2001 は語尾/-a/の例として года годами を挙げているが，今回のコーパスデータ中で出現した語尾/-a/の例を挙げる。

[12] GPRR2001:164

（例 года-218）

Тогда , на поминках , незнакомая старушка сказала ему : " Горе твое не навек , пройдут **года** , и прорастет оно солодом " . (Грекова, И. «Кафедра» 1980)

「その時，追悼会の食事の席で，見知らぬ老人が彼に向かって言った。『お前の悲しみは永遠には続かないんだよ。何年も過ぎれば，それは麦芽で覆い隠されるのさ。』」

（例 года-229）

В общем потоке лечу и я , едва отмечая уходящие в прошлое дни , недели , месяцы , **года** ... (Тендряков, В. «Избранные произведения в 2-х томах» 1963)

「同じ気流に乗って，自分も飛んでいるのだった。わずかに過去の日，週，月，年の過ぎ去ったことがらを感じながら。」

（例 года-595）

Да , думал Петр , пройдут **года** , пройдут века . (Абрамов, Ф. «Братия и сестры» 1980)

「ピョートルは考えるのだった。そうさ，何年もの，何世紀もの年月が流れたのさ。」

（例 года-600）

Года мои , конечно , не малые , но топор в руках еще крепко держу . (Гладышев. Н. «Москва» 1988)

「私の年齢はもちろん若くはない。だが，斧は両手にしっかりと握り締めているんだ。」

気をつけたい点は，GPRR2001 が指摘したような года годами goda godami「何年も続けて」という表現は一度も出現しなかったことである。辞書によれば複数主格・対格の形態として語尾/-i/の使用が義務である意味として「～年代」という意味が挙げられている[13]（例：семидесятые **годы** sjemidjesjatyje **gody**「70 年代」）が，それ以外の意味では語尾/-a/の使用を制限していない。

ウプサラコーパスで出現した года goda はすべて，この語の代表的な意味である「年」の複数の意味で用いられているものと考えてよいだろう。上述の「～年代」という意味で用いる場合を除いて語尾/-a/の使用制限はこれといって見当たらないが，データの上からは極端なほどに語尾/-i/をもつ形態の方が好まれるという傾向が伺えた。

引き続き，полюс poljus「極」の例について分析する。

---

[13] *Словарь русского языка в четырёх томах*. 1983. Том I. : 324.
Ожегов 1988: 111

【表 3-10】

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/			備考
	形態	引用数	比率	形態	引用数	比率	
полюс 極	полюсы poljusy	0	0%	полюса poljusa	3	100%	語尾/-a/が用いられるのは転用の場合のみ[14]

GPRR2001 によれば，男性名詞 полюс は転用の場合にのみ語尾/-a/を持つ形態が許容されるという。しかしながら今回のデータから出現したものは 3 例ともに магнитные полюса magnitnyje poljusa「磁極」で用いられていた。例文を挙げる。

（例 полюса-2）

Два коллектива ученых - один из Национального университета Австралии в Канберре , а другой из Управления геологической съемки США в Менло-Парк (Калифорния) - нашли подтверждение гипотезе о том , что магнитные **полюса** Земли в прошлом имели другие " местожительства " , а порой могли даже меняться своими местами . (Силкин, В. «Знание-сила» 1986)

「キャンベラにある国立オーストラリア大学の学者たちと，メンロ・パーク（カリフォルニア州）にあるアメリカ地理写真撮影管理局の学者たちからなる 2 つの学者グループが，地球の磁極は過去に他の「住所」を持っており，時にはお互いの場所を交替することさえ可能であった，とする仮説の立証を行った。」

（例 полюса-3）

Когда произвели датировку таких пород , то выяснилось , что за последние пять миллионов лет магнитные **полюса** Земли менялись местами не менее двадцати пяти раз , то есть в среднем каждые двести тысяч лет ! (Силкин, В. «Знание-сила» 1986)

「こうした類の年代確定が行われていたとすると，この 500 万年の間に地球の磁極は 25 回以上，つまり平均して 20 万年に 1 度の割合で場所を交替していたことが判明する。」

（例 полюса-5）

Такая весьма демократическая модель успокаивает нас : прежде чем магнитные **полюса** Земли решат поменяться местами , природа даст нам заблаговременное предупреждение . (Силкин, В. «Знание-сила» 1986)

[14] GPRR2001:165

「こうしたきわめて民主主義的なモデルは私たちを安心させてくれる。つまり，地球の磁極が場所の交替を決定する前には，自然が事前の予告を私たちに与えてくれるのである。」

執筆者には，この「磁極」の用法が意味的な転用であると思えない。また，複数の辞書が полюс を「磁極」の意味で用いることは転用だと認めていない[15]。だとすると今回の結果は GPRR2001 の指摘の反例であると言えるかもしれないが，（例 полюса-2,3,5）はいずれも同一文献からのデータである点も踏まえると，即断は避けなければならないかもしれない。

4. まとめ

ウプサラコーパスから抽出した，/-i/をもつ形態と/-a/をもつ形態との引用数を比較すると以下のようになる。

【表 4-1】全引用数の比較（30 語）

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/		
	形態	引用数	比率	形態	引用数	比率
合計		458	92.15% (92.34%)		39(38)	7.85% (7.66%)

しかしながら第 3 章の①でも述べたように，このデータは語そのものの頻度数が大きく異なるので，比率が語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態の頻度数の実態を正確に表しているとは言いがたい。そこでそれぞれの語の語尾出現比率（百分率）の平均を取って，語そのものの頻度数によらない，任意の語についての語尾/-i/と語尾/-a/との出現する比率を求めてみる。結果は以下の通りとなる。

【表 4-2】抽出された 30 語中の任意の語でそれぞれの語尾が使用される比率

語尾/-i/をもつ形態の比率 71.44% ― 28.56% 語尾/-a/をもつ形態の比率

また今回の分析では，男性名詞 год god「年」が著しく高い頻度で出現してしまっている。そこで，год god「年」を除いたデータも示してみる。

[15] *Словарь русского языка в четырёх томах*. 1983. Том III. : 278.
Ожегов 1988: 453

【表 4-3】год god「年」を除いた引用数の比較（29 語）

辞書掲載形	語尾/-i/			語尾/-a/		
	形態	引用数	比率	形態	引用数	比率
合計		104	74.82% (75.36%)		35(34)	25.18% (24.64%)

【表 4-4】год god「年」を除いた 29 語中の任意の語でそれぞれの語尾が使用される比率

語尾/-i/をもつ形態の比率	70.50%	―	29.50%	語尾/-a/をもつ形態の比率

【表 4-1】と【表 4-3】との比較から明らかなように，突出したデータがある場合，その実数をそのまま扱うとデータが大きく変動してしまう。それと比較して，【表 4-2】および【表 4-4】における数値はそれほど大きくは変動していない。この数値はあくまでもヴァリアントとして語尾/-i/および語尾/-a/をもつ任意の語において，どちらの語尾が多く用いられるかというデータである。このデータは，今回ウプサラコーパスを検索した結果，ヒットした件数が語尾/-i/・語尾/-a/共にゼロ(0)であった語についても，語尾/-i/をもつ形態と語尾/-a/をもつ形態それぞれが出現する傾向を物語るものであるといえよう。

また，辞書などに文体的な指摘（専門用語的，口語的，俗語的，擬古的など）があった場合，それらをもとに第 3 章で語の分類項目別に見た比率が参考になると思われる。語の分類ごとのデータは反復となるためここでは割愛する。

おわりに

今回の分析ではデータとして既存のコーパスであるウプサラコーパスを用いたが，結果的には各々の語について出現数が少なすぎる語が多く，数値データそのままを鵜呑みには出来ない状況であったことは認めなければならない。今後はより多くのデータを収集して再度分析を試みたいと考えてはいる。しかしながらデータの収集方法ひとつをとっても，何をもってバランスの取れたデータとするかという基準は非常に難しく，ウプサラコーパスとバランスの異なるデータを単純に収集して比較検討してもその分析が意味あるものになるとは限らない。その意味で統計学，計量言語学的な手法についての知識を深めることが現段階での課題ではないかと認識している。

一方コーパスデータについて目を転じると，テュービンゲン大学のコーパスプロジェクト SFB441 ではロシア語インタビューコーパスというものが展開されている。これらのデータを基に，一部の語で口語的・俗語的である表現とされた語尾/-a/をもつ形態の出現比率について分析することは価値があると思われる。これについては近いうちに研究を開始するつもりである。

また，語尾/-i/をもつ形態が一部の語で擬古的であるとされる点についても，ソ連邦崩壊

後のロシア語データなどを収集して，より使用されなくなる傾向があるか否かについて確認してみる必要もあるだろう。

いずれにしてもロシア語関連のコーパス言語学および言語情報学がさらに進展していくためには，タグ情報が付加された大規模なロシア語コーパスの完成が大いに待たれるところである。

参考文献

①辞書

OZHJEGOV, S.I.1988: *Slovar' russkogo jazyka*. 20-th edition. Moscow. (*Ожегов, С.И.*1988: Словарь русского языка. Изд. 20-е, стереотипное. М.)

Slovar' russkogo jazyka v chjetyrjokh tomakh. Second edition. 1983. Moscow. (Словарь русского языка в четырёх томах. Изд. второе. 1983. Академия Наук СССР. М.)

②文献

GRAUDINA, L.K. et al. 1976: *Grammatichjeskaja pravil'nost' russkoj rjechi*, Mosow.［本文中では GPRR 1976 と略記］(*Граудина, Л.К. и др*. 1976: Грамматическая правильность русской речи. М.)

GRAUDINA, L.K. et al. 2001: *Grammatichjeskaja pravil'nost' russkoj rjechi*, Mosow.［本文中では GPRR 2001 と略記］(*Граудина, Л.К. и др*. 2001: Грамматическая правильность русской речи. М.)

KARAULOV, J.N. et al. 1998: *Russkij jazyk. Entsiklopjedija*. Second edition. Moscow. ［本文中では RJE 1998 と略記］(*Караулов, Ю.Н*. (Гл. ред.) 1998: Русский язык. Энциклопедия. Изд. 2-е. М.)

Russkaja grammatika. I. 1980: Akadjemija Nauk USSR, Moscow.［本文中では RG1980 と略記］(Русская грамматика. I. 1980. Академия Наук СССР, М.)

Russkaja grammatika. 1. 1979: Praha.［本文中では RG1979 と略記］(Русская грамматика. 1. 1979. Praha.)

BIBER, Douglas and REPPEN, Randi and CONRAD, Susan（斉藤俊雄・山崎俊次・梅咲敦子・朝尾幸次郎・新井洋一・塚本聡訳）2003:『コーパス言語学』，南雲堂，東京.（原題 *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*, Cambridge U.P. 1998）

COMRIE, Bernard 1989: *Language universals and linguistic typology*, Second edition, Chicago.

小林潔 2003:「ドイツ・テュービンゲン大学のロシア語コーパス」『ロシア語研究』16:64-85

東郷正延・飯田規和・勝田昌二・竹沢浩三郎・戸辺叉方・中本信幸・匹田軍次編 1978:『ロシア・ソビエト　ハンドブック』，三省堂，東京.

鳥居泰彦 1994:『はじめての統計学』，日本経済新聞社，東京.

目次ページに戻る。

③インターネット・ホームページ

http://www.slaviska.uu.se/korpus.htm（ウプサラ大学）

http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html（テュービンゲン大学）

http://calper.la.psu.edu/corpus.php?page=corpora（CALPER: The Center for Advanced Language Proficiency Education and Research）

目次ページに戻る。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

ロシア語の **pora** と共起する動詞不定形の体について－コーパスを用いた数量的考察－

小川　暁道
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

0.はじめに

本稿では，ロシア語における pora と共起する動詞の体について，コーパスを用いて考察する。pora は動詞不定形と結合することによって，「～すべき時」を表す。

無人称文述語 mozhno, nel'zja, neobxodimo, nado....は，動作や状態を実現する可能性，必然性，不可避性，可能，適時性の存在といった主体の状態を表す。[1]このうち pora は動作の時間的な必然性を表す。[2]意味上の主語は与格で表される。

Mne pora jexat'.（私は行かなければならない。）

一般的には不定形として用いられる動詞は不完了体のみ記述されているが，完了体が用いられる場合の意味，この表現における不完了体と完了体の差異について述べられているものは少ない。その中で，用いられる動詞の体による差異については Forsyth(1970)が以下のように述べている。

「述語 pora は不完了体不定形を持つ傾向がある。その理由は不完了体のもつ切迫性であると思われる。pora を含む文は通常，示された動作がすでに存在するプログラムの一部として認められている状況に起こる。それゆえ，動作が完了体的な新しい概念として示す必要は無く，単になされるべき時が来ている動作を名指すのみである。
（中略小川）完了体は主体の意思の積極的，決定的な表明を表す文の中で用いられる。」[3]

本稿ではコーパスを用いて Forsyth(1970)の記述を用例の中で確認し，数量的なアプローチによって不完了体／完了体の出現頻度の分析を行なう。

使用するコーパスは，チュービンゲン大学のロシア語コーパス Russian Corpora[4]で，ウプ

---

1 АН СССР, *Русская грамматика.* т.2, 1980 с.323
2 Галкина-Федорук, Е.М. *Современный русский язык*, ч.2 Морфология. Синтаксис, Москва, 1964 с.428
3 Forsyth, J. *A grammar of aspect. Usage and meaning in Russian verb.* Cambridge, 1970 pp.271-272

サラコーパス（約 600 テクスト，100 万語）[5]とインタビュー記事，雑誌 Ogonek の 1996 年から 2002 年までの記事，20 世紀文学（A. Marinina, M. Bulgakov: Prose works, M. Bulgakov: Sobrannoe, A. Rybakov, Il’f i Petrov, A.& B. Strugackie, Detektive Stories｛様々な作家の推理小説｝），19 世紀文学（L. Tolstoj, Turgenev, Dostoevskij, N. Leskov）からなる。ウプサラコーパスにおけるテキストのうち，新聞・雑誌テキスト(press text)と文学テキスト(literature text)を分けて検索できる。

より多くの用例を収集するにはチュービンゲンコーパスにおける全てのテキストを対象に検索するのが最適であるが，Ogonek 一誌のみで 1996 年から 2002 年までの膨大なテキスト量を有し，新聞・雑誌テキスト内の傾向を探るに当たって突出したデータが生じる恐れがある。

ウプサラコーパスは現存するロシア語コーパスの中で体系的に構成されたコーパスとして最大規模であり，ロシア語の現象を見る際に大まかな傾向をつかむのに十分なまとまりであると考え，ウプサラコーパス内での pora の用例を検索する。

統語構造上名詞的に用いられているものもあるが，結合する動詞の体に注目するため，動詞の不定形と共起しているものすべてを対象とした。

A potom prixodit <u>pora</u> proshchat’sja.[6]

その後別れる時が来る。

Legko li otkryt’ teatr, kogda rezhisser ne poxozh na drugix. "Pravda" 87-09-22 (l.274).

本稿ではまず Forsyth(1970)における記述を実例と照らし合わせることによって裏づける。次に，ウプサラコーパスにおける不完了体／完了体の割合を示し，その検索結果に基づき，新聞雑誌テキストと文学テキストにおける不完了体／完了体の出現数を比較する。あわせて文中に共起する要素による不完了体／完了体の割合も見てゆく。その後意味の違いがテキストのジャンルにどのように反映されるかを観察する。

1. 先行研究の記述

Forsyth(1970)の記述によれば，pora と結合する動詞の体は，不完了体は時間に，完了体は意思に重点が置かれている。つまり，不完了体は時間系列上すでに存在していなければならない動作，完了体は主体の意思が存在を求めている動作である。

---

4 http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html

5 http://www.slaviska.uu.se/ryska/corpus.html

6 コーパスではキリル文字の ь はラテン文字の q に，щ は w に置き換えられているが，本稿では転写の一般的な慣例に従い，ь はアポストロフィーで，щ は shch と記した。

1.1. 不完了体

不完了体によって表される動作は「すでに存在するプログラム」の中で実現されなければならない動作である。起こることが当然予想されている動作を表す不完了体の意味に近いものである。さらに切迫性，および動作の名指しの機能としての不完了体であると述べられている。これは時系列の上で存在すべき動作として捉えられている。

Ne **pora** li obedat’?
（昼食をとる時間ではありませんか？）

Tolstaja, T., Sonja, v kn. "Na zolotom kryl’ce sideli...", M., 1987, str. 136-146 (2.545).

Emu za tridcat’ - **pora** sem’ej obzavodit’sja.
（彼は 30 を過ぎている—そろそろ家族を持ってもいい頃だ。）

Tendrjakov, V., "Podenka - vek korotkij", M., 1967, str. 3-25 (5.002).

I kogda sxlynuli pervye mesjacy s ix radostnym nasyshcheniem drug drugom i **pora** bylo otpravljat’sja v put’, stalo jasno, chto klad’ - svoja u kazhdogo i razdelit’ ee na dvoix - pochti nemyslimaja zadacha.
（そして最初の数ヶ月が互いの満足の飽和とともに跡形もなく過ぎ去って出発の時間になった時，荷物はそれぞれの手に渡り，それを二つに分けることはほとんど思いもよらぬ課題であることが明らかになった。）

Zorin L, Krapivnica, "Novyj mir", 1987:11, str. 95-105 (4.991).

最初の例文では毎日訪れる「昼食の時間」が発話時点において到来している（あるいは近づいている，過ぎてしまっている）ことが示されている。２番目の例文では「妻帯すべき時」が年齢によって示されている。いずれも毎日の食事の時間や結婚適齢期など習慣的な観点からそれが行われるべき時を表し，それがあらかじめ存在するプログラムとなっている。

他に習慣の意味を持たずに不完了体動詞も pora とともに用いられている例もある。３番目の例文ではあらかじめ予定されていた動作が行われるべき時間が到来したことが表されている。

これらの例は単に動作が名指され，ある状況においてすでに行なわれていなければならない動作を表しており，状況が特に説明されてない場面でも現れている。

このような pora＋不完了体動詞によって表される必然性は，特に状況的な必然性と言える。

1.2. 完了体

完了体の用例を以下に挙げ，主体の意思の表明がどのように現れるかを見て行く。

Pedagog s 30-letnim stazhem O. Lesina iz Tashkenta pishet nam : " Shkoly i klassy nuzhny raznye, s matematicheskim, gumanitarnym, ximiko-biologicheskim, trudovym uklonami. V sel'skoj mestnosti neobxodimy klassy s uklonami ". Podytozhivaja mnenija stolichnyx matematikov, uchenyx i uchitelej, professor MGU, predsedatel' sekcii srednix shkol moskovskogo matematicheskogo obshchestva N. Rozov s gorech'ju otmechal, chto bylo vremja, kogda u nas naxodili primer matematicheskoj podgotovki shkol'nikov, teper' nam nado dogonjat' drugix : " I **pora** nazvat' veshchi svoimi imenami.

（勤続 30 年の教師であるレシナ氏は手紙でこう書いている。「学校とクラスは数学，人文科学，生物化学，労働などの専門によって多様である必要がある。農村部においては専門科目のクラスが必要不可欠である。」首都にいる数学者，学者，教師の意見を総括し，モスクワ大学の教授であり，モスクワ数学協会中等学校課のロゾフ氏は残念そうに指摘した。かつては生徒の数学の予習の例を考える時だったが，いまや他の学校に追いつくことで精一杯である。ものごとには独自の名前を付けるべき時だ。）

Ne nizhe srednego... mezhdu shkoloj i vuzom. "Izvestija", 87-08-26 (2.416).

Perestrojka zatragivaet soznanie i psixologiju ljudej, ix interesy, polozhenie v trudovom kollektive. V etix uslovijax ne menee vazhnym delom, chem sovershenstvovanie ekonomicheskogo mexanizma, stanovitsja sovershenstvovanie chelovecheskix otnoshenij. Kak mozhno segodnja sidet' slozha ruki radi spokojstvija, da eshche i mnimogo? Mozhet byt', **pora** sdelat' shag navstrechu drug drugu, podumat' vmeste, kak zhit' dal'she?

（改革は人々に意識や心理，関心，労働集団における地位に影響を及ぼしている。この状況下で経済機構の向上よりも重要な事柄になっているのは，人間関係の向上である。平静，それも仮想の平静のために手をこまねいて座っていることがどうやってできるだろうか？おそらく，互いに歩み寄り，この先どのように生きていくかをともに考えるべき時では？）

Direktor prosit ob otstavke. "Izvestija", 88-02-22 (1.614).

No i sistema obshchestvennogo vospitanija ne svorachivaetsja, v chastnosti postavlena zadacha usilit' rabotu po polovomu vospitaniju v detskix doshkol'nyx i shkol'nyx uchrezhdenijax kak mal'chikov, tak i devochek. Rezul'tatom dolzhna stat' bol'shaja napravlennost' devushek na zhenskij stereotip povedenija - zamuzhestva, rozhdenie i vospitanie rebenka, zabota o muzhe, o dome. Zhenshchina dolzhna byt' podgotovlena k tomu, chto preimushchestvennost' ee social'noj orientacii postepenno smenjaetsja na semejno-brachnuju. A poka social'naja politika gosudarstva

dolzhna vse v bol’shej stepeni uchityvat’ to, chto zhenshchina neobxodima sem’e i poetomu nuzhna ej material’naja podderzhka, a eshche nuzhnej - vremja, svobodnoe ot zanjatosti na proizvodstve. Nam vsem **pora** produmat’, kak luchshe eto sdelat’.

（しかし社会の教育体制は縮小しておらず，男子および女子の就学前と学校機関での性教育を強化する課題が特に出された。嫁入り，出産・育児，夫や家のことに関する気遣いなどといった振る舞いの女性的ステレオタイプへの女子の志向が結果となるはずである。女性は社会的な志向の大部分が徐々に家庭や結婚へと変わりつつあることを覚悟しなければならない。今のところ国家の政治は大部分は女性が家庭には必要不可欠であり，したがって女性には物質的な援助が必要で，さらに必要なのは生産の多忙からの自由な時間であると計算している。我々皆がこのことをいかにうまく実行できるか熟慮する時である。）

Nam vsem pora podumat’ i produmat’, N. Simakova, "Sputnik", 1988:10, str. 78-80 (1.047).

最初の例文では教育システムの現状について述べられ，学校やクラスの専門による区分について述べられている。概念を整理し適切な名称を与えることによって複雑化した現状に対応したシステムが得られるという話者の考えが述べられている。2 番目の例文では社会的な現状が述べられ，今まで重要であった事柄に変わって人間関係が重要になっているという内容である。話者はその人間関係の向上のための第一歩として必要な事は何かという問題提起をしている。最後の例文でもまず現状が述べられ，それについての意識を高めるようにという問題提起である。

完了体動詞が用いられている例文の多くは，まず状況が説明され，その現状を改善するために必要な動作が必要であるという主張が込められている。完了体は動作の着手という点において不完了体と異なっているのではなく，主体の意思が介在するかどうかにおいてのみである。完了体によって表される必然性は，意思的な必然性と言える。

1. 3. 不完了体／完了体の差異

不完了体はすでに存在するプログラムの中で動作を名指し，状況において必然的な動作であり，完了体は主体の意思の上での必然的な動作であることを確認した。しかし，「積極的な」表明と Forsyth(1970)も述べているように，この対立は隔絶性を持つものではなく，主体の意思の表明に関して無標であるのが不完了体，有標であるのが完了体である。

ここで確認した記述をもとに不完了体／完了体の出現数のデータにおけるテキストのジャンルごとの傾向について述べてゆく。

2. コーパス検索による数量的データ

Forsyth(1970)は不完了体が用いられる傾向があると指摘しているが，数値では示されて

いない。そこでウプサラコーパスにおける実際の用例を見てみる。

ウプサラコーパスにおける検索語 pora の総ヒット数は 79 例あった。うち，不定形が出現せず完全に名詞として出現しているものと仮定法の指標である助詞 by が現れているもの（3 例）を除いた。pora by はいずれも新聞・雑誌テキスト，文学テキストを問わず完了体であった。これについては対立する不完了体の用例が無かったため，また pora と共起する動詞の傾向とは別の傾向が観察される可能性があるため，今回は調査の対象としない。

2.1. 不完了体／完了体の出現頻度

pora と共起している動詞不定形の体は不完了体 19 例，完了体 27 例，述語のみで動詞不定形の無いものが 7 例あった（表 1）。動詞不定形の体の割合はウプサラコーパス全体では不完了体 41.3%，完了体 58.7%であるが，この数字は Forsyth(1970)の「pora は不完了体不定形を持つ傾向がある」という記述とは異なる。そこで，テキスト別の出現頻度を見てみると，以下のように新聞・雑誌テキストにおける不完了体と完了体の割合は 8：23，文学テキストでは 11：4 であった（表 2）。また，述語のみの例は 7 例あり，これらは全て文学テキストにのみ現われ，新聞・雑誌テキストには無かった。

動詞不定形の体の割合は新聞・雑誌テキストでは不完了体 25.8%，完了体 74.２%，文学テキストでは不完了体 73.3%，完了体 26.7%であった。Forsyth(1970)で用例として挙げられている例文は全て文学作品からのものであり，またその数量的データは辞典類を除いては文学作品内に現れる用例数に基づいている。Forsyth(1970)の言う「不完了体の傾向」が我々の調査で得られた文学テキストのデータにのみ当てはまるのは以上の理由によるものであると考えられる。それに対して新聞・雑誌テキストにおいては全く逆の割合で完了体が多く現れている。

表 1 ：ウプサラコーパス全体

	用例数	動詞不定形の体の割合（%）
総数	79	100
不完了体	19	41.3
完了体	27	58.7

表 2：テキスト別の動詞不定形の体の割合

	新聞・雑誌テキスト	動詞不定形の体の割合（%）	文学テキスト	動詞不定形の体の割合（%）
不定形総数	31	100	15	100

不完了体	8	25.8	11	73.3
完了体	23	74.2	4	26.7

2.2. 他のテキストにおける頻度差

ウプサラコーパスにおける 79 例という用例数は決して多いとはいえないが，以下に挙げるチュービンゲンコーパスの他のテキストの検索結果における不完了体／完了体の出現頻度数を見ても，新聞・雑誌テキストと文学テキストそれぞれにおける割合の傾向は裏付けられる。

チュービンゲンコーパスの 20 世紀文学作品における不完了体と完了体の割合は次の通りである。A. Marinina では全体で 19 例。不完了体 12 例（85.7%），完了体 2 例（14.3%）で，述語のみの例が 5 つあった（表 3)。他の 2 人の作家も同様に，A. Rybakov では全体で 13 例，うち不完了体 7 例（77.8%），完了体 2 例（22.２%）（表 4)，A. & B. Strugackie では全体で 52 例，不完了体 29 例（80.6%），完了体 7 例（19.6%）であった（表 5)。ただし，インタビュー記事では総数 8 例のうち，不完了体 4 例，完了体 4 例であった（表 6)。

これらの作家による文学作品おける不完了体／完了体の出現頻度は，ウプサラコーパスの文学テキストにおける不完了体／完了体の出現頻度の傾向とほぼ一致する。

表 3：A. Marinina

	用例数	動詞不定形の体の割合（%）
総数	19	100
不完了体	12	85.7
完了体	2	14.3

表 4：A. Rybakov

	用例数	動詞不定形の体の割合（%）
総数	13	100
不完了体	7	77.8
完了体	2	22.2

表 5：A. & B. Strugackie

	用例数	動詞不定形の体の割合（%）
総数	52	100
不完了体	29	80.6
完了体	7	19.4

表 6：インタビュー記事

	用例数	動詞不定形の体の割合（%）
総数	8	100
不完了体	4	50.0
完了体	4	50.0

2.3. pora＋不完了体／完了体動詞と共起するその他の指標

不定形を伴っていながらも名詞的に用いられているもののうち，動詞が述語となっている文はウプサラコーパスの新聞・雑誌テキストでは 7 例あった。prixodit（動詞 prixodit'の現在形 3 人称単数），prishla（動詞 prijti の過去形），nastala（動詞 nastat'の過去形），nazrela（動詞 nazret'の過去形）などのこれらの動詞は prishla pora「～すべき時が来た」のように pora とともに時の訪れを表す。また，一致定語 samaja（定代名詞 samyj「まさにその」の女性形）と結合しているものは 1 例あった。それに対して文学テキストでは 0 例であった。新聞・雑誌テキスト内における内訳は不完了体 3 例，完了体 5 例である。動詞の体の出現数の中では不完了体 8 例中 3 例（37.5%），完了体 27 例中 5 例（18.5%）と約 2 倍の差がでた。新聞・雑誌テキストにしか現れていないことが大きな特徴である。

また，否定の助詞 ne および疑問の助詞 li とともに現れた例が 7 例あった。この二つの助詞は「～すべき時ではないか」という婉曲表現である（1.1.例文参照）。内訳は新聞・雑誌テキストの不完了体 8 例のうち 1 例（12.5%），完了体 23 例のうち 4 例（17.3%），文学テキストの不完了体 4 例のうち 1 例（25.0%），完了体 11 例のうち 1 例（9.0%）である。新聞・雑誌テキストの不完了体／完了体それぞれにおける ne pora li の出現頻度は大きな違いはないが，文学テキストにおいては約 3 倍の差で ne pora li＋不完了体の頻度が高い。

時の訪れという状況的な要素や婉曲表現と意思との関係は興味深いものであるが，今回の調査では出現数が少なく，さらに広い範囲での調査が必要である。ここでは傾向について述べるにとどめる。

表 7：新聞・雑誌テキスト

	ne pora li	ne pora li の出現回数／それぞれの体の出現回数（%）
不完了体	1	12.5
完了体	4	17.3

表 8：文学テキスト

	ne pora li	ne pora li の出現回数／それぞれの体の出現回数（%）
不完了体	1	25.0
完了体	1	9.0

3. テキストのジャンルと不完了体／完了体の分布

新聞・雑誌テキストでは不完了体が約 25%，完了体が 75%の割合で現れ，それに対して文学テキストでは不完了体が約 75%，完了体が 25%とほぼ逆の割合で現れている。この出現頻度数の差は何によるものであろうか。考えられる要因として，テキストのジャンルによる表現内容と手法の違いということが挙げられる。新聞・雑誌テキストの特徴は文章ごとにある話題に沿ったモノローグ，あるいは発言の引用がなされていることであるが，重要なのはそこに話題に対する記者・発言者・被取材者の態度，特に 1.2.で述べたような主張の要素が現れることである。それに対して文学テキストの特徴は，作品を通して世界を作り上げ，そこに登場する状況などを描写することである。描写は地の文でなされる事もあれば，登場人物の発話という形でなされる事もある。

こうした特徴が表現手段の形をとって，不完了体と完了体の頻度の差に現れているのではないだろうか。主張が多く現れる新聞・雑誌テキストに主体の意思を表す pora＋完了体が多く用いられ，状況描写が多く現れる文学テキストでは状況的な必然性を表す pora＋不完了体が多く用いられると考えることができる。

4. おわりに

pora＋動詞不定形の体は，ウプサラコーパスの新聞・雑誌テキストと文学テキストでは異なる分布を示した。新聞・雑誌テキストでは不完了体 25.8%，完了体 74.2%，それに対して文学テキストでは不完了体 73.3%，完了体 26.7%という割合は，テキストジャンルの内容の特徴がその表現方法に現れることによるものであると指摘した。

今回は新聞・雑誌／文学テキスト毎に検索可能という現存するコーパスの機能に基づいた用例収集であったが，以下の点に注目することによって，この現象のより詳細な記述が可能になる。

1)　書きことば，話しことば

テキストごとの検索は出来たが，話しことば・書きことばによるテキストの分類はなされていなかった。インタビュー記事コーパスはあったが，新聞・雑誌テキスト，文学テキスト内におけるこれらの分類はコーパス検索では反映されない。収集された用例を話しことばと書きことばに分ける作業を経た上で，それぞれにおける分布の調査とその分析が必要である。

2)　状況という観点

述べられている状況とその転換に着目する。pora の周辺の状況が説明されているかどうかと，話題の延長線上にあるかどうかということが数値化するうえでの調査項目となる。これには pora を含む一文だけでなく，前後のコンテキストも対象としなければならない。

3)　主体の意思という観点

(1) 婉曲表現 ne pora li

主体の意思が婉曲表現にどのように現れるかに着目した上で，今回の調査では十分な数の用例が得られなかった動詞不定形の不完了体／完了体の分布をさらに広い範囲で調査する。

(2) 与格によって表される意味上の主語

意思を表明する主体という観点から，無人称述語 pora の意味上の主語である与格の名詞ごとに不完了体／完了体の分布を調査する。その際には与格名詞で表される動作の主体に対する発話者の態度を考慮に入れる必要がある。

以上の点に基づいて今後考察を進めて行き，本研究がコーパスを用いた数量的な分析によってアスペクト研究やテキストジャンルごとの文体研究における従来の研究の成果を裏づけ，新たな発見へとつながっていく可能性への一助となれば幸いである。

目次ページに戻る。

文献

Валгина, Н.С. 1973: *Синтаксис современного русского языка*, Москва.

Галкина-Федорук, Е.М. 1964: *Современный русский язык*, ч.2 Морфология. Синтаксис, Москва.

Академия Наук СССР 1980: *Русская грамматика*. Ⅱ., Москва.

Forsyth, J. 1970. *A Grammar of Aspect Usage and meaning in the Russian verb*. Cambridge: Cambridge University Press.

小林潔　2003：「ドイツ・テュービンゲン大学のロシア語コーパス」『ロシア語研究』16：64-85

ホームページ

http://www.slaviska.uu.se/ryska/corpus.html（ウプサラ大学ロシア語コーパス）

http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html（チュービンゲン大学ロシア語コーパス）

目次ページに戻る。

５．フランス語

目次ページに戻る。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

フランス語における構文の種類とその頻度

小藤　紘稔
（東京外国語大学大学院博士前期課程）

はじめに

本稿は，フランス語のテクスト（文の主節のみ）に登場する構文をその構造ごとに分類し，テクスト全体に対する各構文型の出現頻度数の比較により，どのような構文がフランス語においてよく用いられているのかを突き止めようとするものである。第一のアプローチとしてはフランスの新聞 Le Monde の社説 2001 年 1 月 1 日～30 日分を用い，そこに登場する構文の種類と分布を調査する。それによって得られた頻度数の差から，フランス語の中でどの構文が特に重要であり，より多くの考察がなされるべきなのかを知るのが目的である。第二のアプローチとしては動詞 toucher「さわる」をとりあげ，この動詞の取りうる構文型の出現頻度差を調査する。こちらは動詞と目的語の関係に応じて用いられる構文の頻度に差が生じるのかどうかを調査するものである。コーパスとしてはフランスの大規模コーパス Frantext から抽出した, 1980 年～2000 年の間に出版された小説に出現する toucher（とその活用形）を含む 1128 文を用いるが，Frantext では品詞を限定して検索ができない関係で，動詞 toucher の活用形と同じ形をした名詞 touche(f)，toucher(m)もこの中に含まれてしまっている。ここから文の主節の動詞として用いられているものをまず抽出し，構文によって分け，その後後ろに現れている目的語によってさらに下位分類していく。最後に二つのアプローチから考えられることをまとめ，今回の調査の結論とする。

1. Le Monde について

フランス語において，全ての文は次にあげる 10 個の型のいずれかに属していると考えられる。

Ⅰ. Constructions transitives avec un objet direct「直接目的語を伴った他動詞構文」
Ⅱ. Constructions indirectes「間接目的構文」
Ⅲ. Constructions avec *se*「se を伴った構文」
Ⅳ. Construction intransitive「自動詞構文」
Ⅴ. Constructions passives「受動構文」

Ⅵ. Constructions attributives「属詞構文」
Ⅶ. Constructions avec *être*「être を伴った構文」
Ⅷ. Constructions impersonnelles「非人称構文」
Ⅸ. Constructions avec centre syntagmatique「動詞的連辞核を伴った構文」
Ⅹ. Constructions non verbales「非動詞構文」

各構文型について説明すると，動詞が主語を取り，そこから人称と数を与えられている場合，つまり本動詞として用いられている場合をまずⅠ～Ⅷへと分類，それ以外をⅨ，Ⅹに分類した。Ⅰ，Ⅱについてはそれぞれ動詞の直後に目的語を取るか，それとも前置詞を介して目的語を取るかで区別される。ただし動詞の後に前置詞と名詞が続いても，それが明らかに状況補語であり，目的語でないと判断される場合にはⅡとは認めず，またその部分は構文分類において考慮しない。Ⅲは動詞が再帰代名詞 se（およびその活用形）を伴っている構文である。Ⅳは動詞が目的語を取らない（状況補語は認める）構文，Ⅴは受動態の構文である。Ⅵは動詞（être 以外）の後に続く要素が属詞である構文であり，Ⅶは être が文の述部の核となっている構文である。Ⅷは非人称構文であり，非人称主語 il を用いた文以外に，ce を用いた強調構文もここに含まれる。Ⅸは voici， voilà のような要素が核となっている構文である。Ⅹには上記以外のものが含まれる。
これらの型は，動詞の表す経験に参加している項（参加項）の数と品詞や，用いられる前置詞の後の名詞によってその中でさらに下位分類される。その分類の一覧と，それに従って先に述べた Le Monde から検出された構文をあてはめていった結果を表したのが次ページの表である。なお N は名詞，V は動詞，A は形容詞，Ad は副詞，Vinf は不定詞，Vé は過去分詞を表している。右側の数字が出現数であり，またそれぞれの見出しごとに頻度数を合計してある。見出しの横の割合は少数第二位を四捨五入したものである。

目次ページに戻る。

Ⅰ. Constructions transitives avec un objet direct		223(37.7%)
Transitives avec 2 arguments: N-V-Positionnel		181
N-V-N	121(20.4%)	
N-V-Vinf	51	
N-V-de-Vinf	8	
N-V-que-V	41	
Transitives avec 3 arguments		42
N-V-N-N	1	
N-V-N-Vinf	1	
N-V-Vinf-N	1	
N-V-N-A	1	
N-V-N-à-N	14	
N-V-N-à-Vinf	3	
N-V-N-de-N	5	
N-V-N-de-Vinf	4	
N-V-N-comme-N	1	
N-V-N-pour-N	1	
N-V-N-pour-A	1	
N-V-N-dans-N	1	
N-V-N-en-N	1	
N-V-N-sur-N	4	
N-V-N-entre-N	1	
N-V-de-Vinf-à-N	1	
N-V-que-V-à-N	1	
Ⅱ. Constructions indirectes		37(6.3%)
Indirectes avec 2 arguments		36
N-V-à-N	11	
N-V-à-Vinf	7	
N-V-de-N	9	
N-V-de-Vinf	1	
N-V-par-Vinf	1	
N-V-en-N	1	

目次ページに戻る。

N-V-pour-N	1	
N-V-vers-N	1	
N-V-Ad	4	
Indirectes avec 3 arguments		1
N-V-de-N-à-N	1	
Ⅲ. Constructions avec *se*		38(6.4%)
Pronominales avec 2 arguments		18
N-se-V(*se* comme objet direct)	18	
Pronominales avec 3 arguments		20
N-se-V-N	3	
N-se-V-Vinf	1	
N-se-V-A(Vé)	1	
N-se-V-à-N	6	
N-se-V-à-Vinf	1	
N-se-V-de-N	2	
N-se-V-de-Vinf	2	
N-se-V-en-N	1	
N-se-V-dans-N	1	
N-se-V-sur-N	2	
Ⅳ. Construction intransitive		16(2.7%)
N-V	16	
Ⅴ. Constructions passives		34(5.7%)
Passives avec 1 argument : N-être-Vé		13
Passives avec 2 arguments		20
N-être-Vé-A	2	
N-être-Vé-à-N	1	
N-être-Vé-à-Vinf	2	
N-être-Vé-de-N	2	

N-être-Vé-de-Vinf	3	
N-être-Vé-par-N	8	
N-être-Vé-en-N	1	
N-être-Vé-dans-N	1	
Passives avec 3 arguments		1
N-être-Vé-à-Vinf-par-N	1	
Ⅵ. Constructions attributives		21(3.5%)
Constructions attributives avec 2 arguments		18
N-V-N	2	
N-V-Vinf	6	
N-V-A	3	
N-V-Vé	2	
N-V-de-Vinf	2	
N-V-comme-N	3	
Constructions attributives avec 3 arguments		3
N-V-A-à-Vinf	2	
N-V-A-de-Vinf	1	
Ⅶ. Constructions avec *être*		110(18.6%)
Être avec 2 arguments		99
N-être-N	44	
N-être-Vinf	3	
N-être-de-Vinf	2	
N-être-que-V	3	
N-être-A	31	
N-être-Ad	2	
N-être-à-N	2	
N-être-de-N	3	
N-être-en-N	1	
N-être-dans-N	2	
N-être-en train de-Vinf	1	

目次ページに戻る。

N-être-à l’origine de-N	2	
N-être-au cœur de-N	1	
N-être-sur le point de-Vinf	2	
Être avec 3 arguments		11
N-être-pour-N-dans-N	1	
N-être-A-à-N	3	
N-être-A-à-Vinf	1	
N-être-A-de-N	3	
N-être-A-de-Vinf	1	
N-être-A-que-V	1	
N-être-A-dans-N	1	
N-être-Ad-de-Vinf	1	
Ⅷ. Constructions impersonnelles		50(8.4%)
Impersonnelles avec *il*		
Impersonnelles avec un positionnel		
Avec 2 arguments		17
il-V-N	7	
il-V-Vinf	8	
il-V-que-V	2	
Avec 3 arguments		3
il-V-N-à-N	2	
il-V-N-que-V(que = depuis que)	1	
Impersonnelles indirectes		
Avec 3 arguments		3
il-V-de-Vinf-à-N	3	
Impersonnelles avec *se*		

目次ページに戻る。

Avec 3 arguments		4
il-se-V-N	1	
il-se-V-de-N	2	
il-se-V-de-Vinf	1	
Impersonnelles passives		
Avec 2 arguments		1
il-être-Vé-que-V	1	
Impersonnel *être*		
Avec 2 arguments		1
il-être-N	1	
Avec 3 arguments		11
il-être-A-de-Vinf	3	
il-être-A-que-V	3	
il-être-Ad-pour-Vinf	3	
il-être-de-N-de-Vinf	2	
Impersonnelles avec *ce*		10
Avec 2 arguments		1
Ce-être-N	1	
Avec 3 arguments		9
ce-être-N-qui-V	5	
ce-être-N-que-V	2	
ce-être-au sein de-N-que-V	1	
ce-être-grâce à-N-que-V	1	
Ⅸ. Constructions avec centre syantagmatique		0(0%)
Ⅹ. Constructions non verbales		63(10.6%)
Total		592 occurrences(100%)

考察

今回用いた総数 592 の文の中で直接目的語を伴った他動詞構文の頻度数は 223 と圧倒的に高く，構文全体の 4 割近くを占めている。その中でも N-V-N の組み合わせは 121 例と，これだけで全体の 20%を超えており，フランス語における他動詞構文の重要性がうかがい知れよう。N-V-Vinf も 51 例とかなり多いが，この中には pouvoir， vouloir， devoir のように，動詞を目的語として取っているというよりも，半ば助動詞的な役割をしているものも含まれている。役割としては完全に動詞とは言い切れないかもしれないが，今回は本動詞として扱う条件を人称と数を与えられているか否か，としているので，これらも動詞として扱う。3 項を含む構文の中では N-V-N-à-N，N-V-N-à-Vinf，N-V-N-de-N，N-V-N-de-Vinf の 4 つが大半を占め，前置詞 à，de が構文の形成においていかに多用されるかを示している。

間接目的構文（37 例）においても à，de を取るタイプの構文が目立つが，副詞を伴う構文も見受けられる。副詞は元来構文に直接関係ないものだが，この場合の副詞は動詞に密接に結びつき，動詞と一体となって新たな意味を生み出すという半ばイディオムのような関係を持っているので，構文の一参加項として考えるべきであろう。

代名動詞 38 例の中では，N-se-V 型が最も多く，次いで N-se-V-à-N 型の頻度が高くなっている。

自動詞構文は 16 例であるが，元来自動詞であるものの他に，他動詞であるが目的語が省略されているものも入っている。

受動態は 34 例で，その中では動作主を示さない N-être-Vé 型が最も目立つ。受動態の構文で次によく使われるのは動作主を示す par を含むものである。

être 以外の属詞構文は 21 例で，N-V-Vinf 型がやや目立つが，扱う資料をさらに増やしていけばそれ以外の構文も同様に見つかる可能性はある。

être 構文は 110 例とかなり多く，とりわけ N-être-N もしくは N-être-A と，être の後に項を一つ取るものが目立つ。

非人称構文（50 例）には主辞が非人称の il のもの（40 例）と ce のもの（10 例）があるが，後者の中で強調構文が 7 例あり，そのほとんどを占めている。前者においては être を用いるものが目立つが，これは il が仮主語となっているものが大半である。

主辞なしの動詞的連辞核のものは今回の調査では検出されなかった。

非動詞文は 63 例あり，そのいくらかを社説の表題が占めていることを差し引いても，他の構文と比べて意外に多いのではないだろうか。こちらも研究の余地は大いにあると思われる。

592 例というのはやや少ないが，それでもフランス語の動詞構文の分布についていろいろと示唆してくれるところがある。用例をさらに増やしていくことによって，言語研究の資料として役立つのはもちろんだが，研究すべき対象を定めるための道標として用いるこ

ともできるようになるだろう。

2. toucher について

先の Le Monde の分類手法を応用し，ここでは個別の動詞に焦点を当て，動詞 toucher の取りうる構文の比較を行う。その中でも興味深いのは，とりわけよく見受けられる直接目的構文と間接目的構文の比較である。今回の調査は，動詞の toucher に関してはどちらの構文もそこそこの頻度で用いられる（と思われる）が，実際にはどちらの構文の頻度数が高いのか，そして目的語によって構文に差が生じるのかを調べようとするものである。

動詞 toucher の取りうる構文は大きく分けて以下の５通りである。分類基準は Le Monde の分類の際と同様である。

Ⅰ. Constructions transitives avec un objet direct「直接目的語を伴った他動詞構文」
Ⅱ. Constructions indirectes「間接目的構文」
Ⅲ. Constructions avec *se*「se を伴った構文」
Ⅳ. Construction intransitive「自動詞構文」
Ⅴ. Constructions passives「受動構文」

この分類に，今回は目的語の種類によって，定／不定，単数／複数，具体物／抽象物の分類を設け，結果として構文と文の参加項の間に関連があるかどうかを調査する。定／不定とは，目的語が特定のものかそうでないかの区別で，主として冠詞の区別（定冠詞／不定冠詞）によって行われる。また固有名詞は定の部類に含め，部分冠詞や冠詞なしのものは不定の部類に含めた。単数／複数の区別は単数形，複数形の区別はもちろんだが，部分冠詞によって示される不可算名詞は単数形に含めることにした。具体／抽象の区別は，実際に存在しているかどうか，を基準にした。例えば「テーブル」はもちろん具体物であり，また「空気」や「光」も実際に存在しているから具体物と見なす。いっぽう「雰囲気」や「希望」などは実際に存在しているわけではないので抽象物と見なす。なお構文型ⅢおよびⅤにおいては，受動態が直接他動詞構文の変形と考え，他動詞構文に戻した際の直接目的語となる，受動態の主語について上記の分類を行った。
分類の結果は以下の通りである。

目次ページに戻る。

	定	不定	単数	複数	具体	抽象
Ⅰ.Transitive directe(329)(65.28%)						
N-V-N	248	31	219	60	236	43
N-V-N-à-N	21	1	20	2	17	5
N-V-N-de-N	23	2	21	4	21	4
N-V-N-avec-N	2		2		2	
N-V-N-à-N-de-N	1		1		1	
Ⅱ. Transitive indirect(120)(23.8%)						
N-V-à-N	97	16	100	13	46	67
N-V-de-N	5		5		5	
N-V-par-N		1	1		1	
N-V-à-N-de-N	1			1	1	
Ⅲ. *se*(24)(4.77%)						
N-se-V	19		7	12	19	
N-se-V-N	4		1	3	4	
N-se-V-de-N	1		1		1	
Ⅳ. Intransitive(目的語なし)(16)(3.2%)						
N-V	16					
Ⅴ. Passive(15)(3%)						
N-être-Vé	7	1	8		7	1
N-être-Vé-à-N	1		1		1	
N-être-Vé-de-N	3		2	1	2	1
N-être-Vé-de-Vinf	1		1		1	
N-être-Vé-par-N	10	1	9	2	11	
N-être-Vé-que-V	4		4		4	
Total				504 occurrences(100%)		

頻度数全体に関する考察

結果として，能動態を見ただけでも，直接目的語を取る構文は間接目的語を取る構文の３倍近い頻度で現れていることがわかった。さらに受動態はそもそも直接他動詞構文から派生したものであるし, また代名動詞の se が直接目的語となっているものも直接他動詞構文の変形と見ることができるので，実際には３倍を超えている。先の Le Monde の分析と併せて，このような個別の動詞の調査を通じても，（直接）他動詞研究の更なる必要性がうかがえる。

さらに目的語による下位分類の結果を見ていくことにする。

定／不定の分類に関して

直接他動詞構文，間接他動詞構文のいずれにおいても定のものが多かったが，定／不定の比率が直接他動詞構文では 295 : 33，つまりほぼ 9 : 1 であるのに対し，間接他動詞構文では 103 : 17 と，ほぼ 6 : 1 であった。不定のものに対して後者の構文の頻度数がやや高めなのは, toucher à tout という表現が多いのが影響していると思われる。「何にでも手を出す」というこの表現だが，具体的に「その場にある全てのもの」に触る，という意味ではなく，主語となっている人あるいは物の周りの「特に決められていないとにかく全て」あるいは「具体性の弱い不定のもの」に，言い換えれば動作主を取りまく「領域」に手を出す，というニュアンスを表していると考えられる。特に決められていないものを指すというニュアンスゆえに不定のものに分類したが，この表現に限らず，話者にとってもう既に特定されてしまったものではなく，不定のものに手を出す場合には間接目的構文が好まれる傾向があると考えられる。

単数／複数の分類に関して

直接他動詞構文，間接他動詞構文を問わず，単数の名詞が多かった。ただ比率を見てみると, 前者が 263 : 66 でおよそ 4 : 1 の比であるのに対し, 後者は 106 : 14, つまりおよそ 7 : 1 と，特に単数の名詞の多さが目立った。これは通常単数形で用いられる抽象名詞がこちらに集中したのが原因と考えられる。逆に直接他動詞構文では，名詞に本当に「接触」するため，複数形を取れる具体物が主にこちらに分類され，その結果複数名詞の頻度が若干上がったのではないだろうか。なお名詞の具体性／抽象性については次でさらに詳細に説明する。

具体／抽象の分類に関して

最も大きな違いが出たのはこの区分であろう。直接他動詞構文の代表格である N-V-N と間接他動詞構文の代表格である N-V-à-N を比べただけでも，前者では 236 : 43 と具体物が多いのに対して，後者では 46 : 67 と抽象物のほうが多くなっている。これは具体物に対しては直接他動詞構文が，抽象物に対しては間接他動詞構文の方が相性がいいということを表していると考えられる。la fin や la perfection のような抽象物が間接他動詞構文でしか用いられていないのがその好例である。またたとえ具体物が目的語となっても，間接目的構文の場合は多少なりとも抽象的な意味合いを帯びることが，toucher を扱った VANDELOISE Claude の論文《LA PRÉPOSITION *à* PÂLIT-ELLE DERRIÈRE *toucher*?》で述べられているが，今回の調査はそれを裏付ける結果になった。抽象的な意味合いを帯びる場合としては，次のような例があげられる。

Il n’avait pas touché à son déjeuner.
「彼は昼食に手をつけないでいたのだった。」

「昼食」は具体物であるが，この場合実際に料理に「触る」のではなく，先の定／不定の分析でも述べた「手を出す」というニュアンスで用いられている。次の例ではさらにその傾向が強くなっている。

Et il a crié : « Celui qui touche à ce gosse aura affaire à moi! »
「そして「この子に手を出す奴には相手になるぞ！」と彼は叫んだ。」

訳出した通り，専ら「手を出す」という意味に特化している。具体物に対して実際に「接触」する（できる）場合には直接他動詞構文が，実際には触れられない抽象物に対して，あるいは具体物でも，否定形の場合，あるいは実際に触るのではなく，やや距離を置いて，対象に向けて「手を出す」という意味を表す場合には間接他動詞構文が用いられる傾向があると考えてよいであろう。

結論

Le Monde の分析，toucher の分析とも，500 例程度であったが，構文によって頻度が著しく異なっており，特に他動詞構文の重要性が確認された。全ての情報が同列に書かれている辞書を引いただけではわからない構文の重要度を示唆するには十分な成果をあげられたであろう。この手法をさらに大量のコーパスに用いるならば，構文の重要性の分析はさらに精度を上げられるであろうし，また個別の語の取る構文の比較研究前にこの分析を行えば，真に比較に値する構文なのかを判断することもできるであろう。今後のさらなる研究が期待されるところである。

目次ページに戻る。

引用元

Le Monde(2001 年 1 月 1 日～31 日)
http://atilf.atilf.fr/frantext.htm

参考文献

VANDELOISE Claude :《LA PRÉPOSITION *à* PÂLIT-ELLE DERRIÈRE *toucher*?》, *Langages* 110, 1993, p. 107-127.

関連研究目録

1939 年から 1998 年まで各年の BIBLIOGRAPHIE LINGUISTIQUE DE L'ANNEE（SPECTRUM UTRECHT-ANVERS）に収められた研究の中で，ロマンス諸語の章，現代フランス語の grammaire, sémantique, syntaxe の項目より，今回の研究と深く関係すると思われるものを抜粋した。その際にキーワードとして用いた語句とは「間接目的補語」「直接目的補語」「与格」「目的語」「移行の動詞」「前置詞」「à」「場所」「他動詞性」「自動詞性」である。

なお雑誌名の略号は以下の通りである。

BIG=Bibliothèque de l'Information grammaticale.
BL=Bibliographie linguistique, le Comité International Permanent des Linguistes.
BSRLR=Bulletin de la Société Roumaine de Linguistique Romane (S. R. L. R.).
CdG=Cahiers de Grammaire.
CFS=Cahiers Ferdinand de Saussure.
Clex=Cahiers de lexicologe : revue internationale de lexicologie et de lexicograhie.
CognL=Cognitive linguistics.
DAb=Dissertation Abstracts International. Abstracts of dissertations available on microfilm or as xerographic reproductions. A. The Humanities and Social Sciences. Ann Arbor, MI.
EFOu=Études finno-ougriennes.
ELF=Étude de la langue française.
ESCOL=Proceedings of the...Eastern states conference on linguistics.
FB=Het Franse Boek.
FM=Le Français Moderne.
FR=The French Review.
FS=French Studies.

HFM=Historisk-filosofiske meddelelser udgivet af Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab.
HFYW=Hsi-fang Yü-wen(Western languages and literatures).
IG=L'Information Grammaticale.
KNf=Kwartalnik Neofilologiczny.
LB=Leuvense bijdragen : tijdschrift voor Germaanse filologie.
LFr=Langue Française.
Lg=Language. Journal of the Linguistic Society of America.
LI=Linguistic inquiry.
Linv=Lingvisticae Investigationes. Revue Internationale de Linguistique Française et de Linguistique Générale.
Lrev=The linguistic review.
LSil=Linguistica Silesiana.
LSRL=Linguistic Symposium on Romance Language.
MLN=Modern Language Notes.
MLR=The Modern Language Review.
MSpråk=Moderna Språk.
Nph=Neophilologus.
OYon=Ŏhak Yŏn'gu=Language Research.
PICL=Proceedings of the…international congress of linguists.
Probus=Probus : an international journal of Latin and Romance linguistics.
PSCL=Papers and studies in contrastive linguistics.
RF=Romanische Forschungen. Vierteljahrsschrift für romanische Sprachen und Literaturen.
RFRG=Revista de Filologie Romanică şi Germanica.
RLaR=Revue des Langues Romanes.
RLiR=Revue de Linguistique Romane, la Société de Linguistique Romane.
RomPh=Romance philology.
RomW=Romanica Wratislaviensia.
RQL=Revue Québécoise de linguistique, Trois Rivières.
Rrom=Revue Romane.
SNPh=Studia Neophilologica. A journal of Germanic and Romanic Philology.
StUBB=Studia Universitatis Babeş – Bolyai, Series Philologica Cluj.
TdL=Travaux de linguistique : revue internationale de linguistique française.
TLL=Travaux de Linguistique et de Littérature, le Centre de Philologie et Littératures romanes de l'Université de Strasbourg.
TraLiPhi=Travaux de linguistique et de philologie.

VR=Vox Romanica. Annales Helvetici explorandis linguis Romanicis destinati.
ZFSL=Zeitschrift für französische Sprache und Literatur.
ZRPh=Zeitschrift für romanische Philologie.

1939-47

L. BERGH, *L'idée de direction exprimée par un adverbe ou par une préposition en suédois, par un verbe et une préposition en français*: SNPh XII 1939-40, 66-90.

1948

M. COHEN, *changements dans l'ordre des mots en français contemporain* : FM XVI 1948, 11-18| (1) Permutation de complément direct et complément indirect. (2) Déplacements d'adverbes. (3) Dissociation du groupe du nom et de son complément. (4) Déplacement du sujet.

1949

C. H. BISSELL, *Prepositions in French and English* : New York, R. R. Simth 1947, xiv-561p.|MLR XLIV 1949, 573-574 J. Marks.

1950

C. H. BISSELL, *Prepositions in French and English* : New York, R. R. Smith 1947, xiv-561p.| MLN LXV 1950, 359-360 H. F. Muller.

B. POTTIER, *Prépositions et conjonctions en français*: Documents pédagogique, suppl. au n°21 de, L'éducation nationale"; Paris 1950, 8p.

1958

COHEN, Marcel, *Compléments de verbe et dictionnaires* : Omagiu Iordan(cf. Mélanges), 173-181.

JAEGGI, Adolphe, *Le rôle de la préposition....dans les rapports abstraits en français moderne* : Romanica Helvetica 58 ; Berne 1956, 188p.| Cf. BL 1956, 134.| MLR LIII 1958, 256T. B. W. Reid| RLaR LXXII 1957-58, 420-421 C. Camproux| FM XXVI 1958, 136-138 G. Moignet.

SHIMAOKA, Shigeru, *Sur le complément d'objet du verbe*[en jap. avec rés. Fr.]: ELF 1958, N°18, 16-18.

1959

JAEGGI, Adolphe, *Le rôle de la préposition....dans les rapports abstraits en français moderne* : Romanica Helvetica 58 ; Berne 1956, 188p.| Cf. BL 1956, 134.| ZRPh LXXVI 1960, 144-148 C. Th. Gossen.

1961

BLINKENBERG, Andreas, *Le problème de la transitivité en français moderne* : HFM 38, 1 ; København 1960| 159.| Lg XXXVII 1961, 287-289 R. L. Politzer | FM XXIX 1961, 309-312 G. Gougenheim| CFS XVIII 1961, 87-89 F. Kahn| FS XVI 1962, 164-166 T. B. W. Reid| Romania LXXXIII 1962, 272-275 R. L. Wagner| RFRG V 1961, 131-133 T. Cristea.

1962

BLINKENBERG, Andreas, *Le problème de la transitivité en français moderne* . —HFM 38, 1 ; København 1960| Cf. BL 1960, 159.| ZFSL LXXII 1962, 96-100 H. Bihler | *MSpråk* LVI 1962, 350-354 S. Anderson.

1963

BLINKENBERG, Andreas, *Le problème de la transitivité en français moderne* . —HFM 38, 1 ; København 1960| Cf. BL 1960, 159.| *RF* LXXV 1963, 145-153 G. Hilty.

CRISTEA, Teodora, & TĂNASE, Aurelian : O nouă clasificare a complementelor verbului (cu aplicare la limba franceză). — *RFRG* VII 1963, 17-24| Une nouv. Classification des compléments du verbe(avec application à la langue fr.). Rés. Russe et fr.

SANDMANN, Manfred: Zur Frage der Transitivität. — *ZRPh* LXXIX 1963, 567-592| A propos de l'ouvrage de BLINKENBERG, *Le problème de la transitivité en fr. mod*.

1964

ARRIVÉ Michel: Attribut et complément d'objet en français moderne. — *FM* XXXII 1964, 241-258.

DELATTRE, Pierre : Le jeu des prépositions dans l'enchaînement des verbes en français. — *FR* XXXVIII 1964, 1-26.

KUO, Lin-ko : Hsien-tai Fa-yü chung chieh-tz'u *à* yü *de* te yung-fa(I; II). — HFYW I 1957,

46-53 ; 189-197| Sur l'emploi des prépositions *à* et *de* dans la langue fr.

1965

GESCHIERE, L. : Le problème de la transitivité en français moderne. — *Nph* XLIX 1965, 220-222| A propos de l'ouvrage de Andreas BLINKENBERG, *Le problème de la transitivité*…, 1960(cf. BL 1960, 159).

TOCONITA, M. J. : The defining of transitive verbs : French lexicographical practice.

1969

ROTHEMBERG, Mira: *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*. —Thèse Paris...., 355, 129 p.(ronéotypée)| *FM* 37, 1969, 254-255 G. Gougenheim.

RUWET, Nicolas : A propos des prépositions de lieu en français.— Mélanges Fohalle, 115-135.

ZWANENBURG, W.: Les compléments du verbe en français moderne.— FB 39, 1969, 59-70.

1971

ROTHEMBERG, Mira: *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*. —Thèse Paris, sans date| Cf. BL 1969, 4086.| *VR* 30, 1971, 181-190 Theodor Ebneter|*BSL* 65, 1970/2 (1971), 82-84 R. L. Wagner.

1974

MOIGNET, Gérard : Sur la "transitivité indirecte" en français. — *TLL* 12, 1974/1, 281-299.

ROTHEMBERG, Mira: *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*. — JanL, Series practica 215 ; The Hague : Mouton, 1974, x, 335 p| Thèse Paris 1968 ; cf. BL 1969, 4086.| *RLiR* 38, 1974, 594-596 Jean Bourguignon |*RRom* 9, 1974, 316 Knud Togeby.

1975

BOGACKI, B. Krzysztof : Des verbes à complément circonstanciel de lieu.— *KNf* 22, 1975, 3-19.

MOIGNET, Gérard: Incidence et attribut du complément d'objet.— *TLL* 13, 1975/1, 253-270.

1978

LECLÈRE, Christian: Sur une classe de verbes datifs.— *LFr* 39, 1978, 66-75

ROTHEMBERG, Mira: *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*. — The Hague: 1974| BL 1974, 5323.| *KNf* 25, 1978, 103-107 G. Sławińska.

VÖLGYES, Gyöngyvér: Totalité du complément d'objet et aspect verbal.— *EFOu*II, 1974(1976), 275-284| français. et hongrois.

1980

BARNES, Betsy K. : The notion of 'dative' in linguistic theory and the grammar of French.— *LInv* 4, 1980, 245-292| Indiana Univ. diss. With same title, 1979, 309 p. (*DAb* 40/10, 1980, 5422-A).

KALIK, A.: L'infinitif complément d'objet.— *BSRLR* 13, 1978, 319-325.

1983

HUFFMAN, Alan : 'Government of the dative' in French.— *Lingua* 60/3, 1983, 283-309.

LAMIROY, B.: *Les verbes de mouvement en fr. Et en esp*....— 6072.

POHL, Jacques : Le "C. O. D.".—, 135-145| = "complément d'objet direct".

1984

HONG, C.-S. : La classe des verbes de mouvement en coréen et en fr..

PORTE, Marie-Dominique : A propos de Mira ROTHENBERG : *Les verbes à la fois transitives et intransitifs en français contemporain*.— IG7, 1980, 18-26| Cf. BL 1974, 5322.

1985

JANASOWA, Janina ; WIDŁA, Halina : Le modèle sémantique des verbes de mouvement français et polonais.— *LSil* 7, 1985, 137-144.

1987

BOONS, Jean-Paul: Des verbes ou compléments locatifs "Hamlet" à l'effet du même nom. –RQL 15/2, 1986, 57-90|Rés. fr. & angl.

GUILLET, Alain: Prépositions de lieu et verbes supports. –RQL 13/2, 1984, 59-93.

HÉRIAU, Michel: Verve impersonnel et transitives. –Tétralogiques1, 1984, 95-127.

LÉTOUBLON, Françoise: Il vient de pleuvoir, il va faire beau: verbes de mouvement et auxiliaries. –ZFSL 94/1, 1984, 25-41.

LINDGRÉN, L.: Quelques problèmes contrastifs de l'ordre des constituants…

SEELBACH, Dieter: A propos d'un à-datif en français. 133-168.

VANDELOISE, Claude: L'espace en français. –Travaux Linguistiques; Paris: Seuil, 1986, 245p.|RliR51(201-202), 1987, 237-240 G. Kleiber.

1988

FLOREA, Ligia Stela : Transitif vs intransitif, une division dichotomique en français ? –St UBB 33/2, 1988, 26-36|E. sum.

JUNKER, Marie-Odile: Transitive, intransitive and reflexive uses of adjectival verbs in French. –LSRL 16, 1986(1988), 189-199.

LAMIROY Béatrice: Les verbes de mouvement en français et en espagnol...-Amsterdam: 1983|BL1983, 6082|ZFSL 96/2, 1986, 219-220 H. Berschin.

VANDELOISE, Claude: L'espace en français...-Paris: 1986|BL1987, 7495|Lg64/4, 1988, 833-834 M. E. Winters.

1989

ROORYCK, Johan: Critères formels pour le datif non lexical en français. –SNph 60/1, 1988, 97-107.

BAT-ZEEV SHYLDKROT, Hava: Les compléments de temps et de lieu sont-ils toujours des compléments circonstanciels? –FoL 21/2-4, 1987, 229-247.

HERSLUND, Michael: Le datif en français. –BIG 14; Louvain: Peeters, 1988, 360p.|Biblio., 331-344; Dan. summ. 357-360.

LAMIROY, Béatrice ; Les verbes de mouvement: emplois figurés et extensions métaphoriques. –LFr 76, 1987, 41-58.

SIKORA, Edmund: La sémantique des verbes de mouvement à orientation déictique en français moderne: essai d'analyse et de formalisation: approche stratificationnelle. –RomW 30(AUW1064), 1989, 185-197.

VANDELOISE, Claude: L'espace en français…-Paris: 1986|BL1987, 7495|FR61/6, 1988, 971-972 H. J. Siskin.

VANDELOISE, Claude: La préposition à et le principe d'anticipation. –LFr 76, 1987, 77-111.

1990

GUILLET, Alain : Une classification des verbes transitifs locatifs. –Linv 14/2, 1990, 430-433|Ab. of the author’s 1990 paris 7 Univ. diss.

HERSLUND, Michael : le datif en français. –Louvain: 1988|BL1989, 8714|Lg 66/4, 1990, 871 J. E. Joseph.

LE FLEM, Daniel C. : Syntaxe générale des prépositions en psychomécanique. –PICL 14/1, 1987(1990), 771-779.

CADIOT, Pierre: La préposition interprétation par codage et interprétation par inférénce. –CdG 14, 1989(1990), 23-50.

VANDELOISE, Claude: Les frontières entre les prépositions sur et à. –CdG15, 1990, 157-184.

VANDELOISE, Claude : Les usages spatiaux de la préposition à. –Clex 53, 1988(1989), 119-148|E. Summ.

1991

AUTHIER, Jean-Marc ; REED, Lisa : Ergative predicates and dative cliticization in French causatives. –LI 22/1, 1991, 197-205.

HERSLUND, Michael : Le datif en français. –Louvain: 1988|BL1989, 8714|ZrP 107/1-2, 1991, 234-238 H. Kleineidam.

CADIOT, Pierre: La préposition interprétation par codage et interprétation par inférénce. –CdG 14, 1989(1990), 23-50.

1992

AUTHIER, J.-Marc; REED, Lisa: On the syntactic status of French affected datives. –Lrev9/4, 1992, 295-311.

HERSLUND, Michael: Le datif en français. –Louvain:1988|BL1989, 8714|RliR56(221-222), 1992, 271-276 M. Riegel|Rrom 25/1, 1990, 122-126 E.Spang-Hanssen; 126-128 author’s reply; 128-133 C. Vikner; 133-135, 1991, 73-74G. Boysen.

KÜBLER, Natalie: Verbes de transfert en français et en anglais. –Linv 16/1, 1992, 267-315|E. ab.

LABELLE, Marie: La structure argumentale des verbes locatifs à base nominale. –Linv 16/2, 1992, 267-315|E. ab.

MELIS, Ludo: Prépositions en alternance ou rencontre fortuite, le cas de à et de pour en concurrence avec lui comme expression du “datif” en français. –LB 81/1-3, 1992, 311-326.

1993

BORILLO, Andrée :Le lexique de l’espace :prépositions et locutions prépositionnelles de lieu en français. 176-190.

CUYCKENS, Hubert: Spatial prepositions in French revisited: rev. art. on Claude Vandeloise: Spatial prepositions: a case study from French.-CognL, 4/3, 1993, 291-310|Cf. 10009. DARDEL, Robert DE: Distinction lexicale des sexes…

TASMOWSKI-DE RYCK, Liliane: Le verbe transitif sans complement. 407-427.

VANDELOISE, Claude: Spatial prepositions: a case study from French / Transl. By Anna R. K. BOSCH. -Chicago, IL: Chicago UP, 1991 –x, 265p.|Transl. Of BL1987, 7495|Probus 4/2, 1992, 183-185 Martin HIETBRINK|Cf. 9949.

1994

BORILLO, Andrée: Prépositions de lieu et anaphore, Langages 110, 1993, 27-46.

CADIOT Pierre: Contrôle anaphorique et prepositions, Langages 97, 1990, 8-23.

DEVOS, Filip; MARTENS, L. MUYNCK, Rik DE: “Object” problems in contrastive analysis, PSCL28, 1993, 21-38, Evidence from Fr. & E.

PIJNENBURG, Johannes, A. M.: Datives in French - Datieven in het Frans, Amsterdam: [sine nomine] 1991, 146p. |Du. ab| Amsterdam Univ. diss.

SACHS, Hilary: The dative “orphan-preposition” construction in French, ESCOL 10, 1993, 312-323.

SACHS, Hilary: French indirect object cliticization and the thematic role hierarchy, ESCOL 6, 1989(1990), 229-239.

SACHS, Hilary: Thematic roles and French dative clitics: lui vs y –ESCOL 7, 1990(1991), 240-248.

TASMOWSKI – DE RYCK Liliane: Le verbe transitif sans complement – TraLiPhi 30, 1992, 157-170.

HOTTENROTH, Priska-Monika: Prepositions and object concepts: a contribution to cognitive semantics 442, 179-219.

Prépositions, representations reference /[Ed. Par] Anne Marie BERTHONNEAU: Pierre CADIOT –Paris: Larousse, 1991, 124p. –(LFr; 91, 1991)|Special issue.

VOGELEER, Svelana: L’accès perceptuel à l’information à propos des expressions un homme arrive – on voit arriver un homme.-LFr.102, 1994, 69-83|E.ab.

VOORST, Jan VAN: Un modèle localiste de la transitivité –LFr.100, 1993, 31-48|E.ab.

1995

GROSS, Maurice: La notion de lieu argument du verbe, 173-200.

HERSLUND, Michael: Le datif en français, Louvain, 1998 |BL1989, 8714| RomPh 47/1, 1993, 83-87, Betsy K. Barnes.

1996

CANAE MARQUIS, Réjean: The distribution of à and de in tough constructions in French, LSRL25, 1995(1996), 35-46.

HUFFMAN Alan: The categories of grammar: French lui and le.

MELIS Ludo: The dative in Modern French.

1997

BORILLO, Andrée: Quand le complément direct d'objet est un ''lieu''.— *TdL* 35, 1997, 51-65| Fr. & E. Ab.

CAFFAREL, Alice : Models of transitivity in French : a systemic-functional interpretation, 249-296.

GAATONE, David : L'objet direct comme notion formelle dans la formulation des règles syantaxiques.— *TdL* 35, 1997, 13-20| Evidence from French| Fr. & E. Ab.

SARDA, Laure : Éléments pour une typologie des verbes de déplacement transitifs directs du français.— *CdG* 21, 1996(1997), 95-123.

[BOGACKI, Krzysztof] BOGACKI, Christophe : Locativité et temporalité dans les verbes polysémiques, 253-266.

CLAS, André; GROSS, Gaston: Les classes d'objets et la désambigüisation des synonymes.— *CLex* 1997/1 (70), 27-40| Object classes and the disambiguation of synonyms.

FLORCZAK, Jacek : Relations sémantiques entre les verbes de mouvement et de position du polonais et du français.

VANDELOISE, Claude: *Touching*: a minimal transmission of energy, 541-566.

1998

LARJAVAARA, Meri : *Les villes embouteillent* et *On rivalise autrui* : la transitivité vacillante, 65-73.

LECLÈRE, Christian: Sur une restructuration dative.— *OYon* 31/1, 1995, 179-198| E. ab.| On dative restructuration.

BORILLO, Andrée : *L'espace et son expression en français*.— Gap : Ophrys, 1998.— vi,

目次ページに戻る。

６．スペイン語

目次ページに戻る。

『言語情報学研究報告』No.3（2004）

より効率的な言語研究を目的としたスペイン語コーパス開発

結城　健太郎
（東京外国語大学大学院博士後期課程）
木越　勉
（東京外国語大学大学院博士後期課程）
須藤　武文
（東京外国語大学外国語学部）

1. はじめに

本稿ではスペイン語研究の現状を踏まえ，語学研究で使用するコーパスの問題点とその解決策を提案し，その効果性の検証を行う。本稿で扱われる開発は 21 世紀 COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の言語学班研究グループ「スペイン語コーパスの構築と関連ツール開発によるスペイン語研究の高度化」内で行われた。最初にこのグループの研究の概要を紹介し，その後に形態素付与プログラムの使用とプログラムの分析ミスのチェックシステムの設計を扱う。さらに言語データに対する XML (eXtensible Markup Language) 技術の応用を紹介し，最後にそれらが言語研究でどれほど効果的かを検証する。

2. 研究グループの概要

研究グループ「スペイン語コーパスの構築と関連ツール開発によるスペイン語研究の高度化」は，東京外国語大学の高垣敏博教授を中心に，神戸市外国語大学の宮本正美教授，大家正人氏，そして東京外国語大学大学院の木越勉，結城健太郎，東京外国語大学外国語学部の須藤武文が参加した。従来のスペイン語研究をより効率的で高度なものとすべく，言語データの収集と ICT(Information and Communication Technology)の応用により電子化コーパスとその処理ツールの開発を行うことを目的としている。

この研究は次のようなステップで行われた。(1)言語データの入手，(2)既存の問題の解決方法の検討，(3)開発方法の確立，(4)開発作業，(5)スペイン語研究におけるその成果の使用である。(1)については入手した言語データのリストを最後に掲載する。(2)と(3)は本稿の 3 章と 4 章で扱われる。(4)については SAMPER *et al.*(1998)による *Macrocorpus de la norma lingüística culta de las principales ciudades del mundo hispánico* の電子化された版についてのみ行われており，今後は既に手に入れた言語データにその開発手法をあてはめていくことになる。(5)については木越(2004)では特定の形容詞を含む文の抽出に，結城(2004)では特

定の移動動詞を含む文の抽出において本研究で開発されたコーパスが使用されている。また本開発の途中経過については結城・須藤(2003)[1]で，3 章でとりあげられる形態素情報修正システムの紹介については須藤(2004)で扱われている。

3-1. 従来のコーパスの問題点

他の多くの言語と同じく，スペイン語研究においても電子化されたコーパスが使われる場合がある。しかし，スペイン語研究者が個別に作成した電子化コーパスについては次の五点の課題を現状では抱えている。

最初の問題点は見出し語（タイプ）での検索が難しい点である。ワープロソフトに付加されている単純な検索機能を使用すると，検索対象の語の活用形について一つずつ検索を行っていく必要がある。例えばある動詞を検索する場合は，法や時制，人称や数などを限定しなければ，一つの動詞についてかなりの回数の検索を行う必要がある。プログラムを作成し，一つの動詞の見出し語について一回の操作で全ての活用形を検索した場合でも，最初に活用形をデータとして与えなければならず，そのデータを準備するのに手間がかかる。

二つ目の問題点は，品詞を検索や分析の対象にするのが難しい点である。代名詞のように品詞に属する語が限定される場合は，それらの語をリスト化しまとめて検索することも可能である。しかし名詞や動詞，形容詞など品詞に属する語の数が限定されていない場合は，何らかの条件を設定して品詞に属する語を限定する必要がある。

三つ目の問題点は，動詞なら法や時制，人称や数，また名詞や形容詞なら性や数といった属性についての検索や分析が難しい点である。活用語尾など特定の形態要素に注目して検索することも可能だが，不規則な活用をするものなどを含めていくと複雑な作業になる場合がある。

四つ目の問題点は次のようなものである。今までの三つの問題を解決するためにはタグ付与プログラムの使用が有効であるが，そのプログラムが付与する形態素情報を間違える場合がある。間違った形態素情報を頼りに検索を行った場合，検索結果として適切なものが検索結果から漏れたり，逆に検索結果として不適切なものが検索結果に含められてしまったりする場合などがある。

そして最後の問題点はコーパスの再利用性や汎用性である。あるコーパスが特定のパソコンの機種やプログラムの環境においてのみ表示・使用が可能である場合がある。また複数のコーパスを同じ条件で検索・分析したり，それらのコーパスを統合したりする場合に，付加されている情報やその形式に違いがあることが原因で，変換作業が必要になる場合がある。

---

[1] この発表は Seminario de lingüística española de Japón 2003 で行われたが，その場での貴重なご意見・ご批判に厚く感謝申し上げたい。

3-2. 本開発における解決策

本開発では次の二つの方法でこれらの課題の解決を試みた。まず見出し語・品詞・各種属性単位での検索・分析については，形態素解析・形態素タグ付与プログラムの使用で解決を目指す。このタグ付与プログラムのミスの修正作業についてはそのシステムを開発して，人間が目で見ながら修正を行う。またコーパスの汎用性や再利用性の問題についてはSGML(Standard Generalized Markup Language)と XML に準拠した TEI(Text Encoding Initiative)の規格を採用することにより解決を目指している。さらに XSLT(eXtensible Stylesheet Language Transformations)と CSS(Cascading Style Sheet)を用いて可読性の向上と検索機能の付加を行っている。

3-3. 使用した電子テキスト

上で述べたとおり，本開発の出発点となる電子化テキストは SAMPER *et al.*による *Macrocorpus de la norma lingüística culta de las principales ciudades del mundo hispánico* (1998)である。これはスペイン語圏の 12 の都市 México，Caracas，Santiago de Chile，Santafé de Bogotá，Buenos Aires，Lima，San Juan de Puerto Rico，La Paz，San José de Costa Rica，Madrid, Sevilla そして Las Palmas de Gran Canaria における 84 時間分の会話の記録である。全編がインタビュアーとインフォーマントの対話の形式である。インフォーマントの年齢・性別は様々であるが，知的職業にたずさわる人物が選ばれている。

3-4. 形態素解析プログラム

「形態素解析プログラム」とは浅原(2003:146-153)によれば文を単語（言語によっては形態素）単位に分割し品詞情報を付与するプログラムのことである。本開発で使用した形態素解析プログラムは MACO+と RELAX である。両者ともカタルーニャ工科大学とバルセロナ大学の共同研究で開発された。MACO+は文を入力すると出力として各トークン（テキストにあらわれる形）に形態素情報の候補とそれに対応するタイプ（見出し語）の候補を一つ以上付加する。RELAX は MACO+によってあげられたタイプ（見出し語）と形態素情報の候補が複数ある場合にその中から一つを選び，それをトークン（テキストにあらわれる形），タイプ（見出し語），形態素情報の一覧にして出力する。本稿末尾のデータ例 1 は入力データ，データ例 2 は出力データの例である。データ例 2 では一行ごとに一単語が分析され，左からトークン（テキストにあらわれる形），タイプ（見出し語），形態素情報の順番で並べられている。形態素情報は次に説明する EAGLES(Expert Advisory Group on Language Engineering Standards)のコードを使用している。

3-5. 付加される情報

MACO+の形態素解析は EAGLES というグループが設定した形態素情報のコード化の規格に沿って行われる。このグループは大規模コーパス・分析ツール・言語資源の評価に関

する規格の作成を目的としている。品詞ごとに様々な属性の情報が用意されているが，動詞についていえば動詞の種類（スペイン語では助動詞として haber，ser とその他の動詞に分類される），法，時制，人称，数，性に関する情報が用意されている。

例としてスペイン語の動詞 IR の活用形 voy に加えられる形態素情報を説明する。これに与えられる情報は VMIP1S0 である。左から一桁目は品詞を示し，V は動詞である。二桁目は品詞内での種類を示し，M は助動詞でない動詞である。三桁目は法を示し，I は直説法である。四桁目は時制を示し，P は現在時制である。五桁目は人称を示し，1 は一人称である。六桁目は数を示し，S は単数である。七桁目は性を示すが，スペイン語の動詞には性の区別はないので 0 になっている。

3-6. 間違いの修正

MACO+と RELAX は優秀なプログラムであるが，ミスをおかさないわけではない。例えば名詞として文中にあらわれている COMIDA が動詞 COMER（の一活用形）として示されるなどの「同音異義語」が問題になるケースや，SE など解釈が難しい語などに多く見られる。こうした間違いは人間が確認して修正する必要があるが，本開発ではその修正システムの設計も行われている。

MACO+があげた複数の形態素情報候補から RELAX が適切と判断しているものを選んでいるため，その結果が間違っている場合には MACO+の出力結果までさかのぼって情報を集め，それを提示したうえで訂正候補を選ぶ必要がある。選ぶ作業を行うのは人間である。次のようなステップで修正作業を行う。(1)最初の出力結果のデータファイルを HTML 形式に変換しサーバ上に置き，(2)その HTML ファイルを Web ブラウザに読み込み，(3)単語をクリックすると，(3)形態素情報の候補が表示され，そこから適切なものを人間が目視で判断して選び，(4)必要な語をチェックしたら送信ボタンを押しサーバ上でデータを保存するのである。

この方法は次のような利点がある。まずサーバで一括管理することにより，チェック担当者がデータを分担してローカルの PC で扱う必要がない点である。また Web ブラウザを使用しているため，環境を選ばずに複雑な修正作業が可能になっている。さらに重要な点として，人間が目視で情報をチェックしているため，スペイン語を理解している人間がチェックを行うなら正確な情報を選択することが可能になっているのである。

4-1. XML 技術の応用

MACO+と RELAX によって作られたデータは，データ例 2 に見られるように語彙が縦に続くため可読性が著しく低く，このデータを使用したプログラム処理も複雑になる。さらに 3-1 であげた再利用性・汎用性の課題も解決されていない。これらの課題を解決するために本開発では TEI によって提唱されている規格を採用した。この規格は XML の規格に準拠しているため，その説明をまず行う。

XML は HTML(Hypertext Markup Language)と同じく SGML から派生したマークアップ言語であり，データ記述を主な目的としている。これに準拠したものを電子化コーパスに使用することには次のような利点がある。まず高い汎用性である。XML はテキストベースであるため異なるプラットフォーム上や機種でのやりとりが容易になり，再利用や複数のコーパスの統合が行いやすくなる。同時にデータの編集の環境も選ばず，テキストエディタやワープロソフトで編集が可能になる。表示も多くのインターネットブラウザで可能になっている。つまり，XML 型のデータであれば自分の手元にあるパソコンで何がしかの利用が可能になるのである。

また，タグ設定の自由度が高い点も有益である。これによりコーパスの使用目的に合わせたタグの設定が可能になる一方，マークアップされたデータが何を示しているのかわかりやすくなるという利点がある。そして，データの構造化が可能であるという点も重要である。この階層化されたデータ構造を用いて，より多様で柔軟な検索や分析を言語データに対して行うことができる。さらに，XML 型のデータは他のデータベースの形式に比べて言語データのような可変長データを扱うのに適しており，この点も電子化コーパスに XML を利用する理由となる。この XML に本開発で使用した TEI の規格は準拠している。

この XML 準拠のデータに変換するために，本開発ではデータ例 2 のようなデータをいったん CSV(Comma-Separated Value)形式に変換し，その後それを XML 準拠の形式に変換している。CSV 形式への変換は筆者らの自作スクリプトを，そして XML 形式への変換には丸本徹氏による eXconv を使用している（http://www.aparto-soft.com/eXeries/eXconv/）。データ例 3[2]は CSV 形式のデータである。そしてこれを XML 形式に変換したものがデータ例 4 である。この時点ではまだ TEI のタグセットを適用していない。

4-2. TEI

TEI はテキストデータの種類や表記などの情報についての規格を作成することを目指している。TEI のガイドラインは様々なテキストデータを取り扱いの対象にしているが，コーパスの記述に関するもの，言語そのものを分析・解釈の対象とした記述に関するものも網羅している。次のようなものを例としてあげることができる。<p>はパラグラフを，<q>は引用を，<s>は文を，<cl>は節を，<w>は語を，<m>は形態素を示す。本開発ではパラグラフを示す<p>，文的なものを示す<s>，語彙要素を示す<w>，発言者を示す<speaker>を使用している。これを適用したデータがデータ例 5 である。この時点では文とパラグラフの終わりには改行が挿入され，可読性がある程度与えられている。

[2] データ例 3 以降，スペイン語の特殊文字については川上(1997)による EspText が表示に使用されている。その後の議論により，これを使用するよりはむしろ Unicode UTF-8 (UCS Transformation Format 8)を使用するべきであるという結論に達した。

4-4. XSLT と CSS

XSLT は XML から要素や属性を取り出してレイアウトを整え，HTML や PDF(Portable Document Format)の形に変換する言語である。これにより，XML のデータをより可読性の高い形で表示することができる。さらに，要素や属性を取り出す際に何かの条件に合致するものを取り出したり，並べ替えたりすることができるため，XML 型データに検索機能の付加を行うことができる。また CSS は表示の際に色や文字装飾などの効果を加えることを可能にする。次にあげるデータ例 6 は XSLT を使用し，動詞 PASAR を含む文を開発したコーパスから取り出した結果である。出力データは文毎にリスト化され，各文の語数が最後に表示されている[3]。またこの表示を行うために使用した XSLT のファイルデータをデータ例 7 に示す。

5. スペイン語研究の効率化の検証

5-1. 検証例について

このように開発したコーパスにより，スペイン語研究がどの程度効率化されるかを検証する。スペイン語の動詞 PASAR（「通る」,「通り過ぎる」）とその主語の位置関係を観察するために，前述の *Macrocorpus* から PASAR と名詞・代名詞[4]を含む文を抽出する。この作業で，単に電子化されただけのコーパスを用いる場合と，付加情報を含むこのコーパスを用いる場合にどれほどの差が生じるかを観察する。

5-2. PASAR を含む文の抽出

最初に PASAR だけを含む文を抽出する検索について扱う。単に電子化されただけのテキストを印刷もしくはディスプレイ上に表示させ，最初から読んでチェックする場合は全部で 48496 文を読む必要がある。電子化されているという利点を生かし，ワープロソフトなどに付属する単純な文字列検索機能を使って，PASAR の語幹である文字列”pas”を検索したとしても読むべき文は多い。この単純な文字列検索の場合は，検索結果の中に PASAPORTE（「パスポート」）や REPASADOR（「雑巾」）といった語も含まれてしまうため，PASAR を含まない文も多数存在するからである。

検索用のプログラムを利用すればテキスト中のトークンに対して PASAR の活用形の検索を行うことが可能であり, この場合は PASAPORTE や REPASADOR のように文字列”pas”を持つ語を含むだけで PASAR を含まない文は検索結果から除かれる。しかしこの検索の結果には PASAR の直接法現在の三人称単数形”pasa”と同じ形である名詞 PASA（「干しブ

---

[3] この語数にはピリオドやクエスチョンマークなどの記号なども含まれている。これは語として数えられるべきものではないが，今後の改善点として残されている。

[4] スペイン語では主語が文中に明示的に現れない場合があり，この場合は動詞と主語の位置関係を観察することはできない。ゆえに，条件に「主語を含む」を加える必要がある。しかしながらこのコーパスの付加情報には「主語」といった統語的な情報は含まれていないため，「名詞・代名詞を含む」という条件になっている。主語になりうるのは名詞と代名詞だからである。そのため，最終的に抽出された文はその中にある名詞もしくは代名詞が PASAR の主語としてあらわれているかどうかをチェックする必要がある。

ドウ」），また過去分詞形”pasado”と同じ形である形容詞 PASADO（「過去の」）や名詞 PASADO（「過去」），また接続法現在の一人称・三人称単数形”pase”と同じ形である名詞 PASE（「許可」），さらに直接法現在の一人称単数形”paso”と同じ形である名詞 PASO（「歩み」）などの語を含んでしまい PASAR を含まない文も多数存在してしまう。

さらにこの検索を行うにあたっては PASAR の全ての活用形をキーワードとして準備する必要がある。PASAR が属する ar 動詞は，不定形・分詞形・命令形を加えると 53 個の活用形がある。線過去一人称単数”cantaba”と線過去三人称単数”cantaba”のように同じ形のものを除いても合計 46 個の活用形がある[5]。これらについてデータを準備することは可能であるが，面倒な作業になる[6]。

しかし本開発で作成した見出し語（タイプ）の情報が含まれたコーパスを使用すると，”pas”という文字列を含むだけの語や PASAR の活用形と同音異義の語を含むだけで，PASAR の活用形を含まない文は検索結果には含まれないので, これらの文をチェックする必要がなくなる。さらに活用形のデータを作成する手間も省ける。これらは大幅な省力化と言えるだろう。

5-3. 名詞もしくは代名詞を含む文の抽出

二つ目の条件である「名詞もしくは代名詞を含む」も加えると，この付加情報を持つコーパスの利点がさらに明らかになる。スペイン語は代名詞の数は限定されているため，付加情報を持たないコーパスを使用しても，全ての代名詞の全ての活用形をキーワードとして指定しトークンに対して検索を行えば，代名詞を含む文の抽出は可能である。しかし名詞の数は限定されておらず，また名詞を特定の文字列で抽出することはできない。ゆえに付加情報を持たないコーパスを利用する場合, PASAR を含みかつ名詞もしくは代名詞を含む文を抽出することは極めて困難である。しかし本開発で作成したコーパスは品詞の情報も含んでいるため，名詞を含むことを条件にすることも可能である。この付加情報を加えたコーパスを使用し, PASAR を含みかつ名詞もしくは代名詞を含んだ文を検索した結果は 1063 文である。

5-4. 検証のまとめ

PASAR を含みかつ名詞もしくは代名詞を含む文をコーパスから抽出する作業を行う場合, コーパス中の文を単純に一文一文読んでいくと全部で 48496 文読む必要がある。一方，付加情報を含むコーパスとその検索機能を利用すると 1063 文しか読む必要はない。ゆえにこの抽出作業は 1/46 になり大いに効率化されていると言える。さらに付加情報を含むコーパスを使用することにより，付加情報を持たないコーパスを検索する際に行わなければ

---

[5] 動詞 HABER の活用形と過去分詞の組み合わせによって表される複合時制の活用形はこの数には含まれていない。

[6] ただし，語幹と活用語尾に分けてデータを準備すれば今後 PASAR 以外の規則活用の ar 動詞を検索する場合に活用語尾のデータを使用することは可能になる。

ならなかった次のような作業をする必要がなくなる。PASAR の語幹の文字列を一部に含むだけの語（例：PASAPORTE）や PASAR の活用形の同音異義語（例：PASADO）などが含まれるだけで，PASAR を含まない文を一文一文読んで検索結果から除外する作業，また活用形のデータを事前に準備する作業，また名詞もしくは代名詞を含まない文を検索結果から除く作業である。これらの点を考慮すると付加情報を持つ電子化コーパスの使用はスペイン語研究を効率化しているといえる。

6. まとめ

言語研究における電子化コーパスの使用においては，付加情報の不足により語の見出し語（タイプ）や品詞，属性による検索が難しかったり，汎用性・可読性が問題になったりする場合がある。本稿では形態素解析・タグ付与プログラム MACO+RELAX を紹介し，それを利用して既存の言語データに付加的な情報を加える方法と付加情報の修正システムの提案を行った。さらに XML 技術を応用し電子化コーパスの汎用性と可読性を向上する方法についても扱った。最後に「動詞 PASAR を含みかつ名詞もしくは代名詞を含む」という検索条件を例にとり，付加情報を持つ電子化コーパスが言語研究を効率化することを示した。

参考文献

浅原正幸 2003:「コーパス処理用ソフトの使い方」『コーパス言語学 日本語学 臨時増刊号』，明治書院，東京.

BIBER, Douglas, CONRAD, Susan and REPPEN, Randi 1998: *Corpus Linguistic – Investigating language Structure and Use*, Cambridge University Press, Cambridge.

石崎雅人 2003: 「タグ付きコーパスの共有化」『コーパス言語学 日本語学 臨時増刊号』，明治書院，東京.

川上茂信 1997: 「EspText Ver.2」『スペイン語学研究』， 東京スペイン語学研究会，東京.

木越勉 2004: 「スペイン語名詞句内の形容詞の位置」， 東京外国語大学大学院修士論文.

PINO, Marta 1996: *Encoding two large Spanish corpora with the TEI scheme: design and technical aspects of textual markup*, ACM.

須藤武文 2004: 「スペイン語品詞タグつきコーパス構築におけるタグ訂正作業支援ツールの作成」，東京外国語大学卒業論文.

齊藤敏雄・中村純作・赤野一郎編 1998: 『英語コーパス言語学』，研究社，東京.

鷹家秀史・須賀廣 1998: 『実践コーパス言語学』， 桐原書店，東京.

結城健太郎 2004: 「スペイン語の語順-特に移動動詞が含まれる文について-」，東京外国語大学大学院修士論文.

結城健太郎・須藤武文 2003: 「動詞研究における情報付与プログラムと XML 型コーパスの使用」，口頭発表: Seminario de lingüística española de Japón 2003.

入手した言語データのリスト（スペイン語についてのみ，また無償のものを含む）

BERNSTEIN, Jared, GRUNDY, Bill, ROSENFELD, Elizabeth, NAJMI, Amir and MANCOSKI, Psi 1995: *LATINO-40 Spanish Read News* LDC95S28, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

CANAVAN, Alexandra and ZIPPERLEN, George 1996: *CALLFRIEND Spanish-Caribbean Dialect* LDC96S57, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

CANAVAN, Alexandra and ZIPPERLEN, George 1996: *CALLFRIEND Spanish-Non-Caribbean Dialect* LDC96S58, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

CANAVAN, Alexandra and ZIPPERLEN, George 1996: *CALLHOME Spanish Speech* LDC96S35, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

COLE, Ron and MUTHUSAMY, Yeshwant 1994: *OGI Multilanguage Corpus* LDC94S17. Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

FISCUS, Jonathan, GAROFOLO, John, PRZYBOCKI, Mark, FISHER, William, PALLETT, David 1997: *1997 HUB-4 Broadcast News Evaluation Non English Test Material* LDC2001S91, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

FOX, Michelle A. 2001: *Syllable-Final /s/ Lenition* LDC2001T60, Linguistic Data Consortium. Philadelphia.

GARRETT, Susan, MORTON, Tom and MCLEMORE, Cynthia 1996: *CALLHOME Spanish Lexicon* LDC96L16, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

GRAFF, David 1994: *UN Parallel Text* LDC94T4A, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

GRAFF, David and GALLEGOS, Gallegos 1995: *Spanish News Text* LDC95T9, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

GRAFF, David and GALLEGOS, Gallegos 1999: *Spanish Newswire Text, Volume 2* LDC99T41, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

LINGUISTIC DATA CONSORTIUM 1994: *ECI Multilingual Text* LDC94T5, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

MUÑOZ, Elisa, ALABISO, Jennifer and GRAFF, David 1998: *1997 Spanish Broadcast News Speech (Hub-4NE)* LDC98S74, Linguistic Data Consortium., Philadelphia.

MUÑOZ, Elisa, ALABISO, Jennifer and GRAFF, David 1998. *1997 Spanish Broadcast News Transcripts (Hub-4NE)* LDC98T29, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

MUÑOZ, Elisa, ALABISO, Jennifer, MACINTYRE, Robert and GRAFF, David 2002: *1997 HUB5 Spanish Evaluation* LDC2002S25, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

MUÑOZ, Elisa, ALABISO, Jennifer, MACINTYRE, Robert and GRAFF, David 1998: *Hub-5 Spanish Telephone Speech Corpus* LDC98S70, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

MUÑOZ, Elisa, ALABISO, Jennifer, MACINTYRE, Robert and GRAFF, David 2003: *1997 HUB5 Spanish Transcripts* LDC2003T04, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

MUÑOZ, Elisa, ALABISO, Jennifer, MACINTYRE, Robert and GRAFF, David 1998: *Hub-5 Spanish*

Transcripts LDC98T27, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

MUTHUSAMY, Yeshwant K. 1996: *VAHA (POLYPHONE II)* LDC96S41, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

MOLINER, Maria 2002: *Diccionario de Uso del Espanol Maria Moliner*, Editorial Gredos. S.A., Madrid.

REAL ACADEMIA ESPAÑOLA 2003: *Diccionario de la Lengua Española*, Espasa Calpe, Madrid.

ROGERS, Willie 2000: *TREC Spanish* LDC2000T51, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

SAMPER, Pedilla, ANTONIO, José *et al.* 1998. *Macrocorpos De La Norma Linguistica Culta De Las Principales Ciudades Del Mundo Hispanico* ULIPGC, Las Palmas de Gran Canaria.

WAIBEL, Alex, LAVIE, Alon, LEVIN, Lori, RIES, Klaus and VALLE-ARGUETA, Liza 2001: *CALLHOME Spanish Dialogue Act Annotation* LDC2001T61, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

WHEATLEY, Barbara 1996: *CALLHOME Spanish Transcripts* LDC96T17, Linguistic Data Consortium, Philadelphia.

目次ページに戻る。

データ例 1

```
1   BA-1. Hombre de 29 años. Contador público↓
2   ↓
3   ↓
4   ↓
5       Enc.- ¿Un grabador a casete de qué tipo, Philips?↓
6       Inf.- No... Braun es... es la... la marca. Es... japonés. Me lo trajo un amigo de Estados Unidos
    .↓
7       Enc.- ¿Y para qué lo usás, para divertirte nomás?↓
8       Inf.- Sí... simplemente. Ahora, en este momento, la verdad es que... utilidad de... así como par
    a la facultad no... no le veo en forma inmediata. No, tendría que seguir con la facultad, pero tengo
     ganas de descansar un poquito ahora.↓
9       Enc.- ¿Vas a seguir la facultad?↓
10      Inf.- Sí, pienso que sí.↓
11      Enc.- ¿Qué pensás hacer?↓
12      Inf.- Bueno, probablemente el doctorado, aunque con el doctorado hay un inconveniente, que... ti
    ene un plazo, ¿no?, para el plan en el que yo... en el cual estaba inscrito. Y otra carrera que podr
    ía hacer es la licenciatura en Administración que tiene bastante... tiene bastante aplicación y sí..
    . y es bastante práctica.↓
13      Enc.- Sí, tienen mucho el licenciado en Administración.↓
14      Inf.- Sí, sí, es bastante... bastante interesante.↓
15      Enc.- Ahora la gente de las universidades privadas está haciendo mucha licenciatura en Administr
    ación. ¿Qué te parece a vos? ¿Las universidades privadas qué te parecen?↓
16      Inf.- Bueno, no...↓
17      Enc.- ¿Conocés algo?↓
18      Inf.- ...no puedo... no puedo juzgarla porque en realidad no... no conozco, ¿no? Ahora esté... j
    ustamente el otro día estaba hablando con un colega que... así por una vinculación con una persona q
    ue tiene una universidad privada va a tener una ayudantía; y lo acompañé a tomar exámenes y me dijo
     que el nivel de exigencia era bastante... bastante imp... es decir, bastante interesante, ¿no?, el n
    ivel de exigencia.↓
19      Enc.- ¿En cuál universidad?↓
```

データ例 2

```
1  BA-1 ba-1 Z↓
2  . . Fp↓
3  Hombre hombre NCMS000↓
4  de de SPS00↓
5  29 29 Z↓
6  años año NCMP000↓
7  . . Fp↓
8  Contador contador NCMS000↓
9  público público AQ0MS0↓
10 Enc Enc NP00000↓
11 . . Fp↓
12 - - Fg↓
13 ¿ ¿ Fia↓
14 Un uno DI0MS0↓
15 grabador grabador NCMS000↓
16 a a SPS00↓
17 casete casete NCFS000↓
18 de de SPS00↓
19 qué qué DT0CN0↓
20 tipo tipo NCMS000↓
21 , , Fc↓
22 Philips Philips NP00000↓
23 ? ? Fit↓
24 Inf Inf NP00000↓
25 . . Fp↓
26 - - Fg↓
27 No no RN↓
28 ... ... Fs↓
29 Braun Braun NP00000↓
30 es ser VSIP3S0↓
31 ... ... Fs↓
```

目次ページに戻る。

データ例 3

```
98 .,.,Fp↓
99 No,no,RN↓
100 ",",",",Fc↓
101 tendri/a,tener,VMIC3S0↓
102 que,que,CS↓
103 seguir,seguir,VMN0000↓
104 con,con,SPS00↓
105 la,el,DA0FS0↓
106 facultad,facultad,NCFS000↓
107 ",",",",Fc↓
108 pero,pero,CC↓
109 tengo,tener,VMIP1S0↓
110 ganas,gana,NCFP000↓
111 de,de,SPS00↓
112 descansar,descansar,VMN0000↓
113 un,uno,DI0MS0↓
114 poquito,poquito,AQ0MS0↓
115 ahora,ahora,RG↓
116 .,.,Fp↓
117 Enc,Enc,NP00000↓
118 .,.,Fp↓
119 -,-,Fg↓
120 @?,@?,Fia↓
121 Vas,ir,VMIP2S0↓
122 a,a,SPS00↓
123 seguir,seguir,VMN0000↓
124 la,el,DA0FS0↓
125 facultad,facultad,NCFS000↓
126 ?,?,Fit↓
127 Inf,Inf,NP00000↓
128 .,.,Fp↓
129 -,-,Fg↓
130 Si/,si/,RG↓
```

データ例 4

```
100     <go jisho="." joho="Fp">.</go>↓
101     <go jisho="no" joho="RN">No</go>↓
102     <go jisho="," joho="Fc">,</go>↓
103     <go jisho="tener" joho="VMIC3S0">tendri/a</go>↓
104     <go jisho="que" joho="CS">que</go>↓
105     <go jisho="seguir" joho="VMN0000">seguir</go>↓
106     <go jisho="con" joho="SPS00">con</go>↓
107     <go jisho="el" joho="DA0FS0">la</go>↓
108     <go jisho="facultad" joho="NCFS000">facultad</go>↓
109     <go jisho="," joho="Fc">,</go>↓
110     <go jisho="pero" joho="CC">pero</go>↓
111     <go jisho="tener" joho="VMIP1S0">tengo</go>↓
112     <go jisho="gana" joho="NCFP000">ganas</go>↓
113     <go jisho="de" joho="SPS00">de</go>↓
114     <go jisho="descansar" joho="VMN0000">descansar</go>↓
115     <go jisho="uno" joho="DI0MS0">un</go>↓
116     <go jisho="poquito" joho="AQ0MS0">poquito</go>↓
117     <go jisho="ahora" joho="RG">ahora</go>↓
118     <go jisho="." joho="Fp">.</go>↓
119     <go jisho="Enc" joho="NP00000">Enc</go>↓
120     <go jisho="." joho="Fp">.</go>↓
121     <go jisho="-" joho="Fg">-</go>↓
122     <go jisho="@?" joho="Fia">@?</go>↓
123     <go jisho="ir" joho="VMIP2S0">Vas</go>↓
124     <go jisho="a" joho="SPS00">a</go>↓
125     <go jisho="seguir" joho="VMN0000">seguir</go>↓
126     <go jisho="el" joho="DA0FS0">la</go>↓
127     <go jisho="facultad" joho="NCFS000">facultad</go>↓
128     <go jisho="?" joho="Fit">?</go>↓
129     <go jisho="Inf" joho="NP00000">Inf</go>↓
130     <go jisho=" " joho="Fp"> </go>↓
```

目次ページに戻る。

データ例 5

```
on" ana="SPS00">con</w><w lemma="el" ana="DA0FS0">la</w><w lemma="facultad" ana="NCFS000">facultad</
w><w lemma="," ana="Fc">,</w><w lemma="pero" ana="CC">pero</w><w lemma="tener" ana="VMIP1S0">tengo</
w><w lemma="gana" ana="NCFP000">ganas</w><w lemma="de" ana="SPS00">de</w><w lemma="descansar" ana="V
MN0000">descansar</w><w lemma="uno" ana="DI0MS0">un</w><w lemma="poquito" ana="AQ0MS0">poquito</w><w
 lemma="ahora" ana="RG">ahora</w><w lemma="." ana="Fp">.</w></s>↓
</p>↓
<p>↓
<speaker>Enc</speaker>↓
<s id="12"><w lemma="&iquest;" ana="Fia">&iquest;</w><w lemma="ir" ana="VMIP2S0">Vas</w><w lemma="a"
 ana="SPS00">a</w><w lemma="seguir" ana="VMN0000">seguir</w><w lemma="el" ana="DA0FS0">la</w><w lemm
a="facultad" ana="NCFS000">facultad</w><w lemma="?" ana="Fit">?</w></s>↓
</p>↓
<p>↓
<speaker>Inf</speaker>↓
<s id="13"><w lemma="s&iacute;" ana="RG">S&iacute;</w><w lemma="," ana="Fc">,</w><w lemma="pensar" a
na="VMIP1S0">pienso</w><w lemma="que" ana="CS">que</w><w lemma="s&iacute;" ana="RG">s&iacute;</w><w
lemma="." ana="Fp">.</w></s>↓
</p>↓
<p>↓
<speaker>Enc</speaker>↓
<s id="14"><w lemma="&iquest;" ana="Fia">&iquest;</w><w lemma="qu&eacute;" ana="PT0CS000">Qu&eacute;
</w><w lemma="pens&aacute;s" ana="VMI0000">pens&aacute;s</w><w lemma="hacer" ana="VMN0000">hacer</w>
<w lemma="?" ana="Fit">?</w></s>↓
</p>↓
<p>↓
<speaker>Inf</speaker>↓
<s id="15"><w lemma="bueno" ana="I">Bueno</w><w lemma="," ana="Fc">,</w><w lemma="probablemente" ana
="RG">probablemente</w><w lemma="el" ana="DA0MS0">el</w><w lemma="doctorado" ana="NCMS000">doctorado
```

データ例 6

C:¥Documents and Settings¥YUUKI Kentarou¥My Documents¥Study¥高垣研究室¥コーパス構築¥mc¥xmlall¥mc_o_asc_tei - Microsoft Interne...

ファイル(F) 編集(E) 表示(V) お気に入り(A) ツール(T) ヘルプ(H)

48496文中の検索結果

1. [144] Deci/me , @? y que/ te paso/ a vos que hasta los veinticuatro no estudiabas ? (16語の文)
2. [307] Es lo que pasa con el tango , @? no ? (11語の文)
3. [436] Es decir , a veces uno puede pasar . (9語の文)
4. [551] @? Co/mo le gusta pasar el tiempo libre ? (9語の文)
5. [553] ... Bueno , es ... yo pienso que no hay un ideal de pasar el tiempo libre ... para siempre ... todo ... (23語の文)
6. [873] En el viaje de ida ... de ida se paso/ todo el tiempo diciendo que no , que ... en fin ... que no espera/semos nada de ella porque ... estaba vieja . (33語の文)
7. [879] Claro , lo que pasa que haci/a muchos an~os que no ... que no haci/a deporte , que no haci/a esqui/ , eso era y que ... (27語の文)
8. [882] Lo que pasa ... e/ramos ocho ; de las ocho , seis i/bamos a estrenarnos con el esqui/ ... Habi/a una chica ... Valeria ... que ella ... habi/a estado una vez ya en Bariloche , habi/a hecho esqui/ con ... una sen~ora que no me acuerdo , una sen~ora alemana , frau no se/ cua/nto . (57語の文)
9. [910] Y e/l se de ... dedicaba a llevar gente ; por_ejemplo en_lugar_de ... hay personas que en_lugar_de ... cuando son varias en_lugar_de ... usar el se ... el ... los colectivos ... directamente a ... alquilan a esta gente la ... es decir ... ya quedan de acuerdo y entonces ... estas personas pasan a tal hora a la man~ana a buscar ... te pasan por tu casa a buscarte y adema/s como tienen bastante espacio , por_ejemplo , nosotros que e/ramos ocho entra/bamos perfectamente ; entonces el sen~or nos llevaba directamente hasta el Catedral , ahi/ al ... a la cancha misma de esqui/ ... de esqui/ . (109語の文)
10. [954] Eso es lo normal que te pasa ... (8語の文)
11. [1060] Este/ ... entonces ... era gracioso porque adema/s ... en ese entonces ... como pasa ... siem ... por_lo_menos ... durante mu ... no se/ hoy en di/a pero durante muchos an~os pasaba eso , era ti/pico ... En esa e/poca estaba lleno de brasileros que iban a Bariloche : una buscando , porque imagina/te lo que es el verano en

データ例 7

```
<?xml version="1.0" encoding="Shift_JIS" ?>
<xsl:stylesheet xmlns:xsl="http://www.w3.org/1999/XSL/Transform" version="1.0">
	<xsl:output method="html" encoding="Shift_JIS" />
	<xsl:template match="/">
		<html>
		<head>
		<link rel="stylesheet" type="text/css" href="c01.css" />
		</head>
		<xsl:value-of select="count(tei.2/text/body/div/s)"/>文中の検索結果
			<ol>
			<xsl:for-each select="tei.2/text/body/div/s">
			<xsl:choose>
			<xsl:when test="w[@lemma='ir'] and w[contains(@ana,'NC')]">
			<li>
			<xsl:for-each select="w">
			<xsl:choose>
			<xsl:when test="@lemma[.='ir']">
		<span id="03"><xsl:text>[</xsl:text></span>
				<span id="03"><xsl:value-of select="@ana"/></span>
				<xsl:text> </xsl:text>
				<span id="03"><xsl:value-of
select="position()"/></span>
				<span id="03"><xsl:text>]</xsl:text></span>
				<xsl:text> </xsl:text>
				<span id="02"><xsl:value-of select="."/></span>
				<xsl:text> </xsl:text>
			</xsl:when>
			<xsl:otherwise>
				<span id="01"><xsl:text>[</xsl:text></span>
				<span id="01"><xsl:value-of select="@ana"/></span>
				<span id="01"><xsl:text>]</xsl:text></span>
				<xsl:text> </xsl:text>
				<xsl:value-of select="."/>
				<xsl:text> </xsl:text>
			</xsl:otherwise>
```

```
</xsl:choose>
</xsl:for-each>
(<xsl:value-of select="count(w)"/>語の文)
</li>
</xsl:when>
<xsl:when test="w[@lemma='ir'] and w[contains(@ana,'NP')]">
<li>
<xsl:for-each select="w">
<xsl:choose>
<xsl:when test="@lemma[.='ir']">
<span id="03"><xsl:text>[</xsl:text></span>
<span id="03"><xsl:value-of select="@ana"/></span>
<xsl:text> </xsl:text>
<span id="03"><xsl:value-of select="position()"/></span>
<span id="03"><xsl:text>]</xsl:text></span>
<xsl:text> </xsl:text>
<span id="02"><xsl:value-of select="."/></span>
<xsl:text> </xsl:text>
</xsl:when>
<xsl:otherwise>
<span id="01"><xsl:text>[</xsl:text></span>
<span id="01"><xsl:value-of select="@ana"/></span>
<span id="01"><xsl:text>]</xsl:text></span>
<xsl:text> </xsl:text>
<xsl:value-of select="."/>
<xsl:text> </xsl:text>
</xsl:otherwise>
</xsl:choose>
</xsl:for-each>
(<xsl:value-of select="count(w)"/>語の文)
</li>
</xsl:when>
<xsl:when test="w[@lemma='ir'] and w[contains(@ana,'PP')]">
<li>
<xsl:for-each select="w">
```

```
                    <xsl:choose>
                    <xsl:when test="@lemma[.='ir']">
            <span id="03"><xsl:text>[</xsl:text></span>
                        <span id="03"><xsl:value-of select="@ana"/></span>
                        <xsl:text> </xsl:text>
                        <span                    id="03"><xsl:value-of
select="position()"/></span>
                        <span id="03"><xsl:text>]</xsl:text></span>
                        <xsl:text> </xsl:text>
                        <span id="02"><xsl:value-of select="."/></span>
                        <xsl:text> </xsl:text>
                    </xsl:when>
                    <xsl:otherwise>
                        <span id="01"><xsl:text>[</xsl:text></span>
                        <span id="01"><xsl:value-of select="@ana"/></span>
                        <span id="01"><xsl:text>]</xsl:text></span>
                        <xsl:text> </xsl:text>
                        <xsl:value-of select="."/>
                        <xsl:text> </xsl:text>
                    </xsl:otherwise>
                    </xsl:choose>
                    </xsl:for-each>
                    (<xsl:value-of select="count(w)"/>語の文)
                    </li>
                    </xsl:when>
                    <xsl:otherwise>
                    </xsl:otherwise>
                    </xsl:choose>
                    </xsl:for-each>
                    </ol>
            </html>
        </xsl:template>
</xsl:stylesheet>
```

索引

事項

Chinese（中国語） 151, 154
COD（Complement Object Deletion）構文（COD（Complement Object Deletion）construction） 79, 86, 89, 92, 95-96, 107
competition（競合） 148-150
Definiteness Effect（定性効果） 133-134, 144, 146, 150, 153
EXE／虚辞的要素（EXE/expletive element） 82, 87-89, 92, 107
eXtensible Markup Language（XML）271, 274-276, 278
German（ドイツ語） 151, 152
heaviness（重さ） 143-144, 146, 148, 150
Heavy NP Shift（重い名詞句の転移） 143-144, 146, 153
Heavy NP Stay（重い名詞句の不転移） 144-146, 150
Indonesian（インドネシア語） 133, 136, 154
Malay（マレー語，マレーシア語） 79, 82-83, 85, 131, 133, 134-138, 140, 143-146, 149, 152-154
pivot verb（ピボット動詞） 131, 133-134, 137, 141-145, 148-150, 152-154
topicality（話題性） 143, 145-148, 150, 151
unaccusative（verb）（非対格動詞） 144-145, 151
因果連鎖 15, 20, 26
ヴァリアント 219, 220, 221, 223, 226, 227, 228, 229, 230, 234
ウプサラコーパス 219, 221, 223, 228, 231, 233, 234
英語（English） 79, 84
介詞 31, 32, 35, 36, 37, 38
活性化領域 23, 24, 26, 27
活動 201, 202
カテゴリー階層 45, 55, 56
間接他動詞構文 259, 260
間接目的語 259
完了体 199, 200, 202, 203, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 237, 238, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246
寄生空所（parasitic gap） 84, 89, 91
機能語 45, 47, 48, 54, 57
際立ち 21, 24, 26
具体物 257, 260
屈折 219
形態素解析プログラム 273, 278
結果 29, 35, 36, 38, 39, 40, 41
原因 29, 35, 36, 37, 39, 40, 41
検索 272, 273, 276, 277, 278
語彙化されたメタファー 159, 161, 163, 165, 171-175
降下（lowering） 98, 100, 102, 104, 105, 108
古英語 179, 180, 182
時間副詞 29, 31, 32
字義通りの表現 158-159, 161, 163-4
修飾語らしさ 119, 120, 121, 122
主格・対格 219, 220, 231
主題（topic） 85, 90-91, 96, 97, 99, 100, 103, 105, 108
述語 237, 242, 243, 244
主動詞 31, 32, 35
准動詞 31, 32, 35, 36, 37, 38

状態 201, 203, 209, 211, 214, 215
初期近代英語 179, 180, 182, 196
静態 29, 30, 41
空(ゼロ)演算子(null/zero operator) 84, 86, 89, 97, 108
体 199, 200, 207, 209, 210, 215, 237, 238, 242, 243, 244, 245
体のペア 201, 202
達成 201, 202
他動詞構文 249, 256, 257
中英語 179, 180, 182, 195
抽象物 257, 260
直接他動詞構文 257, 259, 260
直接目的語 249, 256, 257, 259
動詞不定形 237, 242, 243, 244, 245
動態 29, 30, 41
到達 201, 202, 203, 209, 213, 214, 215
難易構文 (tough-construction) 79, 82, 84-85, 92
認知言語学 157-160, 163-165, 174-176
汎用性 273-275, 278
漂白化 47, 48
不完了体 201, 214, 237, 238, 239, 241, 242, 243, 244, 245, 246
不変化詞 157, 159, 161, 163-167, 169, 171, 173-176
プロトタイプ 19, 20, 21, 45, 47, 54, 57, 58
プロファイル 23, 24, 45, 47, 48, 49, 54, 56, 57, 159-160, 164-165
補文 (complement clause) 79, 82-84, 86, 89, 92, 95, 97, 107-108
マレーシア語 (Malay) 79, 82-83, 85, 131, 133, 134-138, 140, 143-146, 149, 152-154
無人称文 237
命令的仮定法 179, 180, 181, 187, 189, 196
メタファー 157-161, 163-167, 171-176
メトニミー 21, 22, 23, 24, 25, 26
目的語 249, 250, 256, 257, 259, 260, 261
有標性 157, 161, 163
ランドマーク 159-161, 163, 165, 170, 172
類推 121, 122
類像性 20
ロシア語 219, 221, 234, 235

固有名詞

BIBLIOGRAPHIE LINGUISTIQUE DE L'ANNEE 261
CHILDES 166, 170, 175-176
Comrie, B 219
Expert Advisory Group on Language Engineering Standards (EAGLES) 273
Forsyth, J. 199, 204, 214, 217, 237, 241, 242
Fowler, H. W. 180
Frantext 249
Гловинская, М. Я. 201, 212, 216
Harsh, W. 180, 181
Hassan, A. 111, 115, 117
Karim, N. S. 115
Lakoff, G. and Johnson, M. 157-158, 160, 176
Langacker, R. W. 164, 176
Lönngren, L. 221
MACO+ 273, 274, 278
Ожегов, С. И. 231
Övergaard, G. 181, 182
Quirk, R. *et al* 180, 181, 190
RELAX 273, 274, 278
Text Encoding Initiative (TEI) 273, 275
Vandeloise, C. 260, 261, 267, 268, 269, 270
Vendler, Z. 201, 202, 209, 210, 211, 215, 217
ウプサラコーパス 237, 238, 242, 243, 245
小林潔 221
チュービンゲン（コーパス）237, 238, 243
ラネカー（Langacker）25
レナート・レングレン（Lönngren）221

目次ページに戻る。

資料

目次ページに戻る。

2003 年度言語学班　コーパス言語学プロジェクト一覧

推進者	研究協力者	タイトル
敦賀陽一郎	小藤紘稔	フランス語動詞構文クラスの実例分類・頻度数調査とフランス語動詞構文研究文献調査
高垣敏博 宮本正美 （神戸市立外大）	大家正登 結城健太郎 木越勉 須藤武文	スペイン語コーパスの構築と関連ツール開発によるスペイン語研究の高度化
中澤英彦	阿出川修嘉 秋山真一 小川暁道	「電子コーパス」を利用したロシア語動詞の体の研究
宗宮喜代子	石井康毅 岩倉隆幸 林晋作 林桂賢	コーパスに見る有標構文の諸相
浦田和幸	浅井千紗子	英語の接続法に関する通時的研究
三宅登之	伊藤大輔 山根史子 須藤秀樹	コーパスを利用した中国語動詞構文研究
正保勇	鵜澤洋志 野元裕樹 中山睦美	マレーシア語の文型調査のための コーパス作成
川村大	酒井幸	古代日本語形容詞の格表示に関する データベース作成

目次ページに戻る。

東京外国語大学大学院　２１世紀ＣＯＥプロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」

講演会

2004 年度（2004 年 4 月～2004 年 6 月）

21 世紀 COE 講演会	
日時	6 月 1 日（火）　16：30～18：00
場所	語学研究所　（419 号室）
題目	カナダにおける心理･応用言語学の発展とその一例　：日本語と英語の曖昧性についての比較研究
講演者	ジョゼフ・F・ケス教授 （Joseph F. Kess, University of Victoria, Canada）

2003 年度（2003 年 4 月～2004 年 3 月）

21 世紀 COE 講演会	
日時	10 月 9 日（木）　14：00～16：00
場所	語学研究所　（419 号室）
題目	The Linguistics of Choice
講演者	フロリアン・クルマス教授 （Florian Coulmas, University of Duisburg, Germany）

研究会

2004 年度（2004 年 4 月～2004 年 5 月）

第 4 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	5 月 31 日（月）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語学班（通言語音声研究グループ）2003 年度研究成果報告　Ⅲ
題目	発音モジュール基礎研究：音声・音韻構造の概説　スペイン語
発表者	木越　勉（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	発音モジュール基礎研究：音声・音韻構造の概説　朝鮮語
発表者	呉　文淑（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	発音モジュール基礎研究：音声・音韻構造の概説　ポルトガル語
発表者	牧野　真也（東京外国語大学大学院博士後期課程）

目次ページに戻る。

第 3 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	5 月 27 日（木）　18：15～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語教育学班（第二言語習得（英語）グループ）2003 年度研究成果発表
題目	日本人英語学習者の学習者言語コーパス基礎調査・現状と今後の課題
発表者	植田　恵（東京外国語大学大学院博士前期課程） 西村　惠（東京外国語大学大学院博士前期課程修了）
題目	英語会話モジュール教材附属指導用手引きの開発（理論編） マニュアル作成にあたっての理論的枠組み
発表者	向井　緑（東京外国語大学大学院博士前期課程） 鵜沢　菜摘子（東京外国語大学大学院博士前期課程 加藤　愛（東京外国語大学外国語学部）
題目	英語会話モジュール教材附属指導用手引きの開発（実践編） 練習問題及びマニュアルのデモンストレーション
発表者	向井　緑（東京外国語大学大学院博士前期課程） 鵜沢　菜摘子（東京外国語大学大学院博士前期課程） 加藤　愛（東京外国語大学外国語学部）

第 2 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	5 月 20 日（木）　18：30～20：20
場所	研究講義棟 3 階　（326 号室）
テーマ	言語教育学班（第二言語習得（日本語）グループ）2003 年度研究成果報告
題目	日本人学習者の言語学習ストラテジーとリソース
発表者	菊池　富美子（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	日本人学習者の言語学習ビリーフ
発表者	秋山　佳世（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	第二言語学習ストラテジー／ビリーフハンドブック（資料編）
発表者	野村　愛（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 1 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	4 月 2 日（金）　13：00～14：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語教育学班（評価班）2003 年度研究成果報告
題目	発音モジュールの評価シート分析
発表者	藤原　愛（東京外国語大学博士後期課程）
題目	TUFS 言語能力記述モデル開発のための試み Common European Language Framework の研究
発表者	和田　朋子

目次ページに戻る。

2003 年度（2003 年 4 月～2004 年 3 月）

第 21 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	3 月 16 日（火）　14：00～16：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語学班（通言語音声研究グループ）2003 年度研究成果報告　Ⅱ
題目	朝鮮語ソウル方言における統語的曖昧文と F0 の下降現象
発表者	宇都木　昭（筑波大学大学院博士後期課程）
題目	フランス語の音声と音韻構造－TUFS・P モジュール理論編－
発表者	中田　俊介（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 20 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	2 月 27 日（金）　15：30～18：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語学班（コーパス研究グループ）2003 年度研究成果報告　Ⅲ
題目	ロシア語男性名詞複数主格・対格形のゆれについて―ウプサラ・コーパスをデータとして―
発表者	秋山　真一（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	「nel’zja ne ＋動詞不定詞」という結合における動詞について―既存コーパスからのデータに基づいた再解釈―
発表者	阿出川　修嘉（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	ロシア語の名詞 пора と共起する不定形動詞の体について
発表者	小川　暁道（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第 19 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	2 月 16 日（月）　18：30～20：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語教育学班（談話グループ）2003 年度研究成果報告　Ⅲ 自然会話分析と会話教育－統合モジュール作成への模索－
題目	親しい友人同士のコミュニケーション ―日本人大学生による悪態を中心に―
発表者	関崎　博紀（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	携帯電話の会話における開始部と終結部の日台対照
発表者	黄　瓊芸（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	談話レベルからみた依頼に対する『断り』の言語行動について －日本人大学生と台湾人大学生との比較－
発表者	施　信余（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 18 回研究会	
日時	2 月 13 日（金）　13：00～15：00
場所	フランス語共同研究室　（744 号室）
テーマ	言語学班（コーパス研究グループ）2003 年度研究成果報告　Ⅱ

目次ページに戻る。

題目	マレー語のピボット動詞
発表者	野元　裕樹（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	マレーシア語の状態詞に関する諸問題
発表者	鵜沢　洋志（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	より効率的な言語研究を目的としたスペイン語コーパス開発
発表者	結城　健太郎（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	フランス語のテクストにおける構文の種類とその頻度
発表者	小藤　紘稔（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 17 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	2 月 12 日（木）　18：30～20：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語教育学班（談話グループ）2003 年度研究成果報告　II 自然会話分析と会話教育－統合モジュール作成への模索－
題目	接触場面におけるコミュニケーション調整行動 －日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話より－
発表者	金　銀美（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	教師と学生のインターアクションにおける日本語とポーランド語の言語行動対照分析
発表者	カチマレク　ミロスワバ（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	日本語の雑談における不同意の様相　－会話教育への示唆－
発表者	木山　幸子（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 16 回研究会	
日時	2 月 12 日（金）　13：00～15：00
場所	英語共同研究室　（615 号室）
テーマ	言語学班（コーパス研究グループ）2003 年度研究成果報告　I
題目	初期近代英語における命令仮定法― Shakespeare の場合―
発表者	浅井　千沙子（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	言語学に活用するためのコーパス検索システムの考察と構築－英語前置詞表現の観点からの活用例とともに
発表者	石井　康毅（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	中国語の受身文と自動詞文
発表者	伊藤　大輔（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	“$EVENT_1$＋ 弄得 ＋$EVENT_2$”における”弄”のプロファイル機能－分析結果報告
発表者	山根　史子（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	現代北京語の“把”と“在”の共起関係について―動詞分類からの記述―
発表者	須藤　秀樹（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第 15 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	2 月 5 日（木）　18：30～20：30

目次ページに戻る。

場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語教育学班（談話グループ）2003 年度研究成果報告　I 自然会話分析と会話教育－統合モジュール作成への模索－
題目	台湾人日本語学習者の終助詞「ね」の使用 ―コミュニケーション機能を中心に―
発表者	張　鈞竹（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	台湾人学習者の初対面日本語会話におけるスピーチレベルの使用実態
発表者	林　君玲（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 14 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	11 月 28 日（金）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語学班（通言語音声研究グループ）2003 年度研究成果報告　I
題目	ロシア語の疑問文イントネーション
発表者	五十嵐　陽介（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	韻律的特徴によるフランス語文あいまい性の解消
発表者	中田　俊介（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 13 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	10 月 16 日（木）　18：30～20：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語情報学研究報告　Ⅳ
題目	技能シラバスに基づいた発音練習
発表者	藤原　愛（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	Ｇモジュール：　b サイトコンテンツ設計案報告
発表者	阿部　一哉（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第 12 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	10 月 9 日（木）　18：30～20：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語情報学研究報告　Ⅲ
題目	日本語の話し言葉のコーパスを整備する過程の検討
発表者	木林　理恵他（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	日本語の自然会話データと TUFS-D モジュールにおける談話行動の比較分析 －会話教育教材の開発に示唆すること－
発表者	謝　韞他（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 11 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	10 月 3 日（金）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
	言語情報学研究報告　II
題目	TUFS 言語モジュール　開発と評価－多言語 e-learning 教材開発の場合－

目次ページに戻る。

発表者	阿部　一哉（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	TUFS 言語モジュール－発音モジュールの開発
発表者	木越　勉（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 10 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	9 月 26 日（金）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
	言語情報学研究報告　I
題目	多変量解析を用いたパリ周辺地域の標準語化の研究
発表者	鑓水　兼貴（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	TUFS 言語ダイアログモジュール開発と評価－多言語汎用シラバスと機能シラバスの視点から
発表者	結城　健太郎（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 9 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	7 月 17 日（金）　19：00～20：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	学習者プロファイリングとポートフォリオ評価の基礎概念
発表者	山森　光陽（国立教育政策研究所研究員）

第 8 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	7 月 4 日（水）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語類型論
題目	Johanna Nichols, ‘Head-marking and dependent-marking grammar’
発表者	拝田　清（アジア・アフリカ言語文化研究所研究生）
題目	文法記述のスコープを巡って－支配，依存関係を例に
発表者	峰岸　真琴（アジア・アフリカ言語文化研究所教授）

第 7 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	6 月 4 日（水）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	TUFS 言語モジュール　D モジュール（試作版）
発表者	林　俊成　（東京外国語大学外国語学部講師）
	長沼　君主（清泉女子大学文学部専任講師）
	阿部　一哉（東京外国語大学大学院博士後期課程）
	結城　健太郎（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 6 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	5 月 30 日（金）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）

目次ページに戻る。

テーマ	基本文法プロファイル研究Ⅲ
題目	中国語の基本文法プロファイル
発表者	須藤　秀樹（東京外国語大学大学院博士後期課程）
テーマ	自然言語処理
題目	日本語研究用ソフトウェアとその応用例
発表者	幸松　英恵（東京外国語大学博士前期課程）
	佐野　洋（東京外国語大学外国語学部助教授）

第 5 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	4 月 21 日（月）　18：00～19：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	言語類型論
発表者	森口　恒一（静岡大学人文学部教授）

第 4 回研究会　（共催　語学研究所）	
日時	4 月 18 日（金）　18：00～19：30
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	発音モジュールの評価
発表者	藤原　愛（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第 3 回研究会　（共催　語学研究所，外国語教育学会）	
日時	3 月 19 日（水）　17：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	基本文法プロファイル研究Ⅱ
題目	ロシア語の基本文法プロファイル
発表者	中澤　英彦（東京外国語大学外国語学部教授）
題目	通言語的視点
発表者	拝田　清　（東京外国語大学大学院博士前期課程）
テーマ	基礎語彙研究
題目	基礎語彙と英語
発表者	浅井　千紗子（東京外国語大学博士前期課程）

第 2 回研究会　（共催　語学研究所，外国語教育学会）	
日時	3 月 13 日（木）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	基本文法プロファイル研究Ⅰ
題目	スペイン語の基本文法プロファイル
発表者	宮下　和大（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	日本語の基本文法プロファイル
発表者	志波　彩子（東京外国語大学大学院博士前期課程）

目次ページに戻る。

第 1 回研究会　（共催　語学研究所，外国語教育学会）	
日時	1 月 23 日（木）　18：00～20：00
場所	語学研究所　（419 号室）
テーマ	文法・語彙モジュール開発
題目	文法・語彙モジュールの設計思想・開発スケジュール
発表者	川口　裕司（東京外国語大学外国語学部教授）

2002 年度（2002 年 4 月～2003 年 3 月）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第 6 回）	
月日	10 月 31 日
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 設計最終案
題目	Ｐモジュール最終設計案
発表者	木越　勉（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	D モジュールにおける機能 50 とその分類枠組み
発表者	結城　健太郎（東京外国語大学大学院博士前期課程）
	松本　剛次（東京外国語大学大学院博士前期課程）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第 5 回）	
月日	10 月 30 日
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その 5）モジュール教材開発に向けて： 第二言語習得研究からの示唆
題目	学習者言語分析の変遷：その成果と第二言語指導にむけての示唆
発表者	吉冨　朝子（東京外国語大学外国語学部講師）
題目	学習ストラテジー研究：その成果と第二言語指導にむけての示唆
発表者	海野　多枝（東京外国語大学外国語学部助教授）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第 4 回）	
月日	10 月 25 日
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その 4）
題目	TUFS 言語モジュールにおけるシラバスデザイン
発表者	長沼　君主（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	TUFS　P モジュールにおける音韻構造の導入
発表者	中田　俊介（東京外国語大学大学院博士前期課程）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第 3 回）	
月日	9 月 25 日
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その 3）

目次ページに戻る。

題目	語単位の音習得と他のモジュールとの関連について
発表者	齋木　博（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	TUFS　D モジュール開発　試作版－サイトの構築と他のモジュールとの関連性－
発表者	阿部　一哉（東京外国語大学大学院博士後期課程）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第 2 回）	
月日	8 月 1 日
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その 2）
題目	初級日本語教科書のシラバス分析と D モジュールの設定に関する考察
発表者	松本　剛次（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	言語能力の発達段階の記述について
発表者	長沼　君主（東京外国語大学大学院博士後期課程）
	和田　朋子（東京外国語大学大学院博士後期課程）
	田中　敦英（東京外国語大学大学院博士前期課程）
	鷲見　賢一（東京外国語大学大学院博士前期課程）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第 1 回）	
月日	6 月 26 日
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その 1）
題目	TUFS　P モジュール開発に関する基礎研究
発表者	中田　俊介（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	D モジュール開発のための場面シラバスと機能シラバスに関する基礎調査
発表者	結城　健太郎（東京外国語大学大学院博士前期課程）

目次ページに戻る。

東京外国語大学大学院地域文化研究科

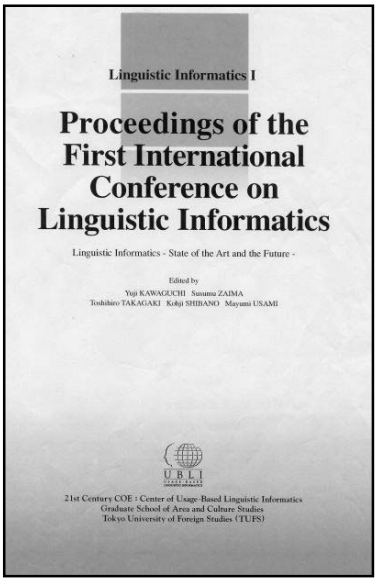
21 世紀 COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」出版物

論文集

言語情報学　I

Proceedings of the First International Conference on Linguistic Informatics

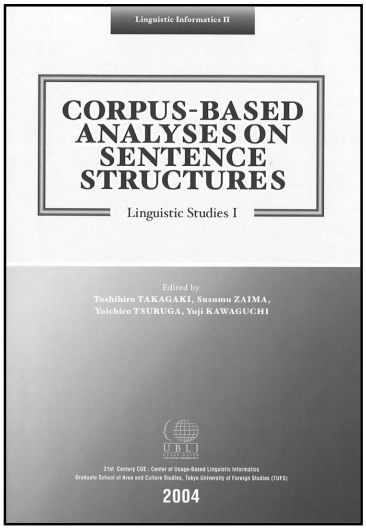
Edited by
Yuji KAWAGUCHI, Susumu ZAIMA,
Toshihiro TAKAGAKI, Kohji SHIBANO,
Mayumi USAMI
2003 年 10 月発行



言語情報学　II

Corpus-Based Analyses on Sentence Structures

Edited by
Toshihiro TAKAGAKI, Susumu ZAIMA,
Yoichiro TSURUGA, Yuji KAWAGUCHI
2004 年 4 月刊行



目次ページに戻る。

研究報告集

言語情報学研究報告　1

TUFS 言語モジュール

川口裕司，芝野耕司，峰岸真琴（編）
2004 年 3 月発行

１．IPA モジュール
２．発音モジュール
３．会話モジュール
４．文法モジュール
５．語彙モジュール

言語情報学研究報告　2

言語学・応用言語学・情報工学

川口裕司，峰岸真琴（編）
2004 年 3 月発行

１．言語学
２．応用言語学
３．情報工学

目次ページに戻る。

言語情報学研究報告　３

コーパス言語学における構文分析

敦賀陽一郎，黒澤直俊，浦田和幸（編）
2004 年 9 月発行

１．中国語
２．マレーシア語
３．英語
４．ロシア語
５．フランス語
６．スペイン語

目次ページに戻る。

言語情報学研究報告　3　　2004 年 9 月 17 日発行

発　　行：　東京外国語大学大学院　地域文化研究科
21 世紀 COE プログラム
「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
編　　者：　敦賀陽一郎，黒澤直俊，浦田和幸
編集・校正：　浅井千紗子
印　　刷：　三鈴印刷株式会社